



南山大学人類学研究所
Anthropological Institute, Nanzan University

ISSN 2434-9577

人類学研究所
研究論集 第13号

なりわいと移動の人類学
—中華圏の研究者との協同から—

張雅・宮脇千絵・張玉玲・藤川美代子 編

南山大学人類学研究所 2025

Research Papers of the Anthropological
Institute Vol.13

なりわいと移動の人類学：中華圏の研究者との協同から

張雅・宮脇千絵・張玉玲・藤川美代子 編

序文

はじめに……………張 雅 1

論文

第一部

中国農村部におけるEC集積地の形成と発展のダイナミズム
—義烏のEC村を事例に— ……李 瑞雪・王 亦菲 6

ポスト場所における領土と統治
—日台のボーダーを越えて暮らす人々の購買行動から— ……藤野 陽平 26

第二部

沖縄出身南洋移民女性の生業と戦争
—ジェンダーの視点から— ……川島 淳 42

アジア・太平洋戦争期の「南進」日本女性文学研究とベトナム地域研究との架橋を目指して
—森三千代の『晴れ渡る仏印』に登場する2人のベトナム人女優を手がかりにして—
……………宮沢 千尋 71

1940年代に南洋へ派遣された女性作家の役割 ……張 雅 87

第三部

若者の「味」
—潮州と深圳から見る中国都市部の若者世代の感覚と社会消費の「品味」—
……………張 靜紅／張 雅（訳）・藤川 美代子（監訳） 102

清末民国初における普洱茶生産について……………西川 和孝 118

**Livelihood and Mability in the Global Economy :
An Anthropological Study**

Edited by Ya ZHANG, Chie MIYAWAKI, Yuling ZHANG and Miyoko FUJIKAWA

Introduction

Introduction	Ya ZHANG	1
--------------------	----------	---

Articles

Part 1

The Formation and Development Dynamics of E-Commerce Clusters in Rural China: Based on A Case Study of Yiwu's E-Commerce Village	Ruixue LI and Yifei WANG	6
---	--------------------------	---

Territory and Governance in the time of post place: From the purchasing behavior of people who live beyond the Japan-Taiwan border	Yohei FUJINO	26
--	--------------	----

Part 2

The Livelihood and War of South Seas Immigrant Women from Okinawa: A Gender Perspective	Jun KAWASHIMA	42
--	---------------	----

Bridging the gap between the Study of Japanese Women's Literature during the Asia-Pacific War and Area Studies for Vietnam: Focusing on Two Vietnamese Actresses Featured in Michiyo Mori's <i>Clear Skies over Indochina (Harewataru Futsuin)</i>	Chihiro MIYAZAWA	71
---	------------------	----

The Roles of Women Writers Dispatched to Southeast Asia	Ya ZHANG	87
--	----------	----

Part 3

Taste of Young: Sensorial and Social Consumption of the Chinese Youth	Jinghong ZHANG / translated by Ya ZHANG and Miyoko FUJIKAWA	102
---	---	-----

Production of Puerh Tea in the Late Qing and Early Min-Kuo Periods	Kazutaka NISHIKAWA	118
---	--------------------	-----

はじめに

張 雅*

本論集は、人類学研究所国際化推進事業(第5期)「なりわいと移動の人類学：中華圏の研究者との協同から」(2022～2024年度)に基づいて開催されたシンポジウム、講演会の成果を総括したものである。

この事業の目的は、アジア諸国、とりわけ中華圏の人類学者と日本の人類学・民俗学者との密接なネットワークを形成し、相互に協同することで、人類社会が直面する現代的諸問題に対して人類学はいかなる貢献を果たすことができるのかを模索することにある。現代社会は戦争や感染症、自然災害、テロ、気候変動などの深刻な国際問題に直面しており、多くの人々が故郷を離れて避難を強いられたり、自宅に閉じこもりやすくなることを余儀なくされている。こうしたグローバルな課題について、人類学の研究者と共に議論を深め、歴史・経済・政治的な視点から国境を越えた人や物の移動の重要性を再考することが求められている。そのため、本事業では、具体的に「なりわいと移動の人類学：中華圏の研究者との協同」というテーマのもと、ローカルなモノの生産や流通がグローバルな人や情報の往来へといかに展開し、他者とのネットワークがどのような形で構築されているのかという共通の課題を策定し、南山大学人類学研究所の所員と中華圏の研究者との間で対話を重ねることを目指すことであった。

南山大学人類学研究所の国際化推進事業(第5期)では、2022年12月3日に公開講演会「寒村で越境 EC ビジネスの集積がなぜ生まれたのか—義烏の物語—」、2024年3月3日には「海を越えて南洋に渡った人たちの体験—戦争とジェンダーの視点から—」をテーマにした公開シンポジウム、2024年7月20日に「中国におけるプーアル茶の流通史と消費の現状」をテーマにした公開シンポジウム、2024年11月23日に公開講演会「越境者の E コマースを用いた購買行動から考え

る新しい領土」を実施した。

本論集は、これらシンポジウムおよび講演会のテーマに基づき、三部構成でまとめている。第一部は、「寒村で越境 EC ビジネスの集積がなぜ生まれたのか—義烏の物語—」講演会と「越境者の E コマースを用いた購買行動から考える新しい領土」講演会(「現代中国における EC サイトの拡大—ひと・もの・情報の移動の新たな展開—」シリーズ)の成果として、グローバル化と E コマースの拡大を背景に、商業集積地の発展をはじめ、物流網・運送技術の拡大と向上、消費者の消費行動、広告発信の変化を見据えながら、ひと・もの・情報の新たな展開と新しい統治のシステムによる領土の定義、境界などについて考察するものである。李瑞雪と王亦菲による共著論文は中国の浙江省義烏の5つの EC 村と1つの EC タウンを事例に、農村部の EC 村という産業集積地の形成と発展において、産業基盤の補助、政策の推進とインフラの整備、人材の確保など様々な要素が総合的に作用するメカニズムを検証している。調査地である義烏の EC 村には移住者が多く、なかでも起業には比較的若く、かつ一流大学出身ではない者が多いという。彼らは重要な人材として EC 村のさらなる発展を推進し、また、EC 村の発展も彼らの人生を一変させたと言えよう。本論文では、越境 EC 市場の発展が商品の販売に関わる多様な職業の創出を促し、都市と農村の格差を縮小させるとともに、さらに地域の活性化の効果にも貢献したことが指摘される。

藤野陽平の論文は、グローバル化と E コマースの拡大を背景に、日本と台湾を行き来する人々の購買行動を事例として取り上げ、情報アクセスや配送時間、料金、言語の壁、地理的な距離などといった具体的な要素を分析することで、サイバーという新たな統治シス

* 大阪大学

テムによる領土の定義の再考を試みたものである。筆者は、異郷の地に足を踏み入れ、他者の営みを観察することを重視してきた人類学のフィールドワークが、コロナ禍以降オンラインという場でも展開されるようになったことに着目する。実際に現地へ赴くフィールドワークとオンライン調査の相違を問い直す中で、デジタルプラットフォームの浸透によって、人々がサイバー空間とリアル空間の両方で、国家とプラットフォームによる統治を受けつつも、それを自身の実践を通じて活用していることを指摘する。このように、国家の統治とビッグデータの囲い込みが避けられない状況において、利用者である私たちがデジタルサービスを活かしながら、アルゴリズムに操作されないために、いかなる工夫が必要なのか、重要な視点を提示してくれる。

第二部は、「海を越えて南洋に渡った人たちの体験—戦争とジェンダーの視点から—」公開シンポジウムの成果として、主に戦時中に南洋に移動した沖縄出身の女性たちや女性作家などに焦点を当てて、戦争とジェンダーの関係性の観点から、戦時中における日本の性別分業がどのように彼女たちの南洋体験に影響を与えていたのかを検討する。川島淳の論文は沖縄出身で南洋群島に移住した女性に注目し、彼女たちの渡航の目的、生業と活動などから沖縄出身の南洋移民女性たちの特徴について理解するための貴重な手がかりを提供してくれるものである。彼女たちは結婚、家族の呼び寄せ、国策による南進の動員などの様々な理由で南洋に渡ったが、戦時中に南洋群島の非常時体制が構築された後に、防災訓練や食糧増産に従事させられ、さらに高齢者や子供の引揚に同伴する役割を担わされていたことが明らかになった。戦時引揚に応じた女性たちのなかには、やむをえず家族が分断されて、沖縄で集団死に追い込まれる人もいたが、船舶の都合や個人の意思で南洋群島に残留している者もいた。しかし、どの選択肢においても、帝国日本の勢力の拡大と崩壊は彼女たちの人生に大きな波乱をもたらしたことは間違いないことが示される。

宮沢千尋の論文は、森三千代の『晴れ渡る仏印』に登場した二人のベトナム人女優、張鳳好と愛蓮の記述を分析し、森三千代のベトナム表象とベトナム女性に対する描き方を考察するものである。筆者は、森三千代が現地で会ったベトナム人の文学者は、植民地当局によって事前に選定され、フランス語での創作活動を行う人々がメインであったことを指摘する。その上で、

森三千代はフランスのフィルターを通してベトナムの文学を理解するため、フランス文学の指導が前提にあったことが窺われる。森三千代は、張鳳好の芝居ではベトナムの女性が儒教的環境で苦しむ姿が生々しく表現されていたことが高く評価されたことにに対し、愛蓮の「西洋モノ」の劇は新鮮味はあるもののそれほどの評価を得られなかったことを本論は考察する。筆者は、ベトナム地域研究の専門家として当時の仏印の出版状況を結びつけ、森三千代のベトナムに関する記述の限界と特色を示すことで、森三千代という作家を理解するための視点を提供する。

張雅の論文は、1940年代に南洋に徴用された女性作家に焦点を当て、派遣時期や服装、活動内容を通じて、女性作家に与えられた役割を明らかにする。特に、フィリピンに徴用された三宅艶子の『比島日記』と川上喜久子の『フィリピン回想』を取り上げ、女性作家の南洋経験が当時の性別分業によってどのようにジェンダー化されたのかを考察する。この分析を通じて、彼女たちが南洋で受けた厚遇の背後に存在している戦場のジェンダーの不平等性を解き明かす。

第三部は、「中国におけるプーアル茶の流通史と消費の現状」公開シンポジウムの成果として、主に歴史的な視点と現地調査に基づき、時代ごとの政治的・社会的な文脈の中で、茶とそれに関連する飲料の生産および消費の実態を考察する。張静紅の論文は、中国の深圳と潮州という二都市の若者の茶と関連する飲料の消費を通じて、若者の感覚と消費に関わる「品位」を社会的・文化的要素から分析するものである。同氏は、近年中国で若者に人気があるミルクティーの消費に注目し、その魅力の核心が「甘味」にあることを明らかにする。ミルクティーの「甘味」は、若者たちにひとときの安らぎとストレス解消の効果をもたらしているという。また、潮州は深圳に比べて地元意識が根強く、家庭で年長者とともに工夫茶（コンフーチャ）を飲む習慣があるため、潮州の若者には工夫茶、コーヒー、ミルクティーを組み合わせると取り入れるという「雑食」的な喫茶の特徴が見られるという。ただ、年長者が好む濃香型と異なり、潮州の若者は香り高い「清香型」の茶を好み、さらに味わいよりも見た目の美しさという視覚的要素を重視する傾向があるという点も、本論文で示される興味深い考察の一つである。

西川和孝の論文は、清末から民国初年にかけての普洱茶生産の要因を豊富な史料に基づき総合的に検証するものである。具体的には、普洱茶の栽培・加工技術

の向上、輸出手段の整備、対外貿易の拡大、新たな物流ルートの構築といった側面から分析を行う。本論文は、従来のハノイ経由での香港への輸出に関する議論を踏まえつつ、英領インド帝国との取引の視点を新たに加える。インド茶をチベットに輸出する過程で交通インフラが整備されたことにより、普洱茶もインド経由でチベットに流入し、その消費拡大に繋がった一方で、インド商人に価格決定権を譲ることとなり、さらに模倣品まで生み出されたという指摘は重要である。

講演会・シンポジウムの記録

公開講演会「寒村で越境 EC ビジネスの集積がなぜ生まれたのか—義烏の物語—」（「現代中国における EC サイトの拡大—ひと・もの・情報の移動の新たな展開—」シリーズ No. 1）

日 時：2022年12月3日（土）、13:30～15:00

会 場：南山大学 G27教室・オンライン（Zoom）

講 師：李瑞雪（法政大学）

使用言語：日本語

プログラム：

13:30-13:35 趣旨説明 張雅（南山大学人類学研究所非常勤研究員）

13:35-14:35 李瑞雪（法政大学教授）講演「寒村で越境 EC ビジネスの集積がなぜ生まれたのか—義烏の物語—」

14:35-14:45 コメント 張玉玲（南山大学人類学研究所／外国語学部アジア学科教授）

14:45-15:00 質疑応答

（司会）張雅（南山大学人類学研究所・プロジェクト研究員）

公開シンポジウム「海を越えて南洋に渡った人たちの体験—戦争とジェンダーの視点から—」

日 時：2024年3月3日（日）、13:30～17:30

会 場：南山大学 G25教室・オンライン（Zoom）

プログラム：

13:30 開会挨拶

13:35-13:45 趣旨説明 張雅（南山大学人類学研究所・プロジェクト研究員）

13:50-14:30 川島淳（沖縄国際大学非常勤講師）「沖縄出身南洋移民女性の生業と戦争—ジェンダーの視点から—」

14:35-15:15 大久保由理（東京大学特任研究員）「フィリピンで「大東亜共栄圏」建設を

目指した青年—ジェンダーの視点から日記を読み直す—」

15:20-16:00 張雅（南山大学人類学研究所・プロジェクト研究員）「1940年代に南洋へ赴く男性作家と女性作家の役割について」

16:15-16:30 コメント 宮沢千尋（南山大学教授）

16:30-16:45 コメント 宮脇千絵（南山大学准教授）

16:45-17:30 質疑応答

（司会）張雅（南山大学人類学研究所・プロジェクト研究員）

公開シンポジウム「中国におけるプーアル茶の流通史と消費の現状」

日 時：2024年7月20日（土）、14:00～17:00

会 場：南山大学 G23教室・オンライン（Zoom）

プログラム：

14:00-14:05 開会挨拶

14:05-14:15 趣旨説明 張雅（南山大学人類学研究所・プロジェクト研究員）

14:15-14:55 西川和孝（明治大学准教授）「清代民国初期のプーアル茶の栽培と流通について」

15:00-16:00 張静紅（南方科技大学准教授）「越陈越香の发明：普洱茶在中国云南和大珠三角之间的流（茶を熟成させるという発明：中国雲南省と珠江デルタ地域で流通するプーアル茶）（通訳・袁夢）」

16:15-16:30 コメント 王曉葵（南方科技大学教授）

16:30-17:00 質疑応答

（司会）張雅（南山大学人類学研究所・プロジェクト研究員）

公開講演会「越境者のEコマースを用いた購買行動から考える新しい領土」（「現代中国における EC サイトの拡大—ひと・もの・情報の移動の新たな展開—」シリーズ No. 2）

日 時：2024年11月23日（土）、15:00～17:15

会 場：南山大学 S65教室・オンライン（Zoom）

プログラム：

15:00～15:15 趣旨説明 張雅（南山大学人類学研究所・プロジェクト研究員）

15:15～16:15 藤野陽平（北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授）「越境者のEコマースを用いた購買行

動から考える新しい領土」

- 16:15～16:30 休憩
- 16:30～16:45 コメント 張玉玲（南山大学人類学
研究所／外国語学部教授）
- 16:45～17:15 質疑応答
（司会）宮脇千絵（南山大学人類学研究所准教授）

謝辞

本研究所の国際化推進事業の遂行にあたり、シンポジウムや講演会の開催をはじめ、この論集の刊行に至るまで、多くの方々にお世話になりました。ご登壇を快諾していただいた先生、コメンテーターを務めてくださった各先生、貴重な論考を寄せていただいた各先生、またさまざまな形で多大なご協力を賜った方々に厚くお礼申し上げます。

第一部

中国農村部における EC 集積地の形成と 発展のダイナミズム

— 義烏の EC 村を事例に —

李 瑞雪*¹ 王 亦菲*²

EC の普及に伴い、中国の農村部ではネット通販を基盤とした「EC 村」という新たな産業集積が形成されている。これらの農村部 EC 事業者は中国国内市場向けにとどまらず、越境 EC にも積極的に参入している。急成長を遂げる EC 村は、農村振興に寄与し、農村経済の発展に大きな影響を与えている。本研究は、越境 EC に取り組む EC 村に焦点を当て、EC 集積の形成と発展のダイナミズムを解明することを目的とする。農村部における EC 集積の形成要素を探求するため、中国浙江省の義烏市にある 5 つの EC 村を対象にフィールド調査を実施した。EC 村の実態を把握したうえで、既存研究の知見を踏まえつつ、農村部 EC 集積の形成メカニズムを分析した。フィールド調査により、EC 集積の生成と発展において、関連産業基盤、基本インフラの重要性が既存研究と一致することが確認された。加えて、利便性とコストパフォーマンスを兼ね備えた物流サービス、EC ビジネスに適したインフラの整備、高度な知識ソースと人材育成の仕組み、起業ハードルを下げるビジネスエコシステムが重要な形成要因として明らかになった。さらに、義烏における商業集積、物流集積、EC ビジネス集積の三者間で生まれるシナジー効果が、地域産業集積の持続的発展を促進する鍵となっていることを示した。

キーワード

E コマース、EC 村、産業集積、中国、農村部、物流

目次

I はじめに	4 EC ビジネスを支える物流集積
II EC 村の形成要因に関する先行研究	5 EC に関連する知識伝播と人材育成
III 研究手法と研究対象	6 インフラの整備と政府の施策
IV 調査からの発見事実	7 EC エコシステムの形成・発展
1 調査地域の概要	V ディスカッション
2 EC 村の主役：域外からの移住者	VI おわりに
3 産業基盤としての商業集積	

*¹ 法政大学

*² (中国) 西南交通大学

I はじめに

21世紀に入ってから、中国では経済高度成長に伴い、電子商取引（以下、EC）が急速に拡大している。国別シェアをみると、世界のEC市場における中国のシェアは51.3%に達し、圧倒的なシェアを誇る世界最大のEC市場となっている（経済産業省 2024: 98）。ここ数年間で、中国国内のEC市場の成長はやや鈍化に転じたものの、他方で越境EC市場の拡大は著しい。多くの中国EC事業者が、AliExpressやTikTok、TEMU、SHEINといった越境ECプラットフォームを活用して、積極的に海外市場へ進出している。このようにECの普及が進む中、中国の農村部ではネット通販を基盤とした「EC村」という新たな産業集積が生成している（Li 2017: 61）。これらの農村部のEC事業者は中国国内市場向けにとどまらず、越境ECにも参入している。急成長を遂げるEC村は、農村振興の一翼を担い、農村経済の発展に大きな影響を与えている

（阿里研究院 2020: 25-33; Lin et al. 2022: 521）。中国経済の研究において、EC村の形成と発展は注目すべき課題の一つである。本研究は、越境ECに取り組むEC村に焦点を当て、EC集積地の形成と発展のダイナミズムを解明することを目的とする。

図1で示されるように、2011年から2023年までの僅か12年間で中国ネット通販小売規模は約20倍に拡大し、2019年末に始まる新型コロナウイルス感染症拡大（以下、コロナ禍）においてもその勢いはさほど衰えを見せず、2023年のネット通販小売総額は15.4兆元に達した。一方、越境EC市場も急速に拡大している。中国商務部の公開データによれば（人民日報 2024-06-04: online）、過去5年間で越境EC取引規模は10倍以上に増加した。さらに、2024年第1四半期には越境ECの輸出入総額が5,776億元に達し、前年同期比で9.6%の増加を記録した。そのうち、輸出額は4,480億元で、前年より14%増加している。越境EC関連事業者は全国で12万社を超え、越境EC産業パークについては1,000カ所以上設立されている。さらに、越境ECサービスに特化した海外倉庫は1,800超が稼働しており、その総面積は2,200万平方メートルを超えている。

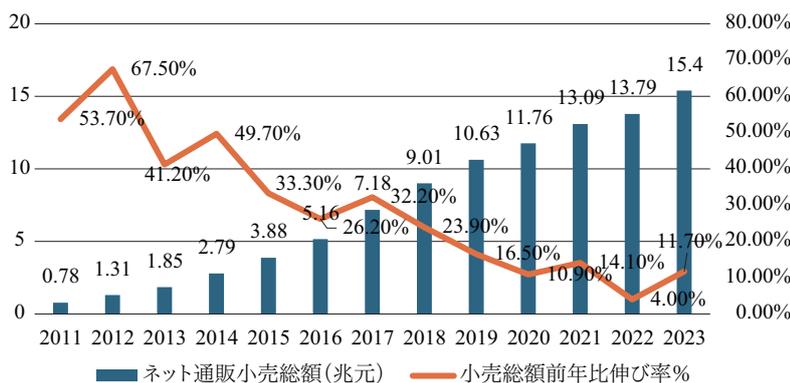


図1 2011-2023年 中国ネット通販小売総額推移

出所：中国商務部 2023: 2、中国国家统计局 2024を基に加筆・修正

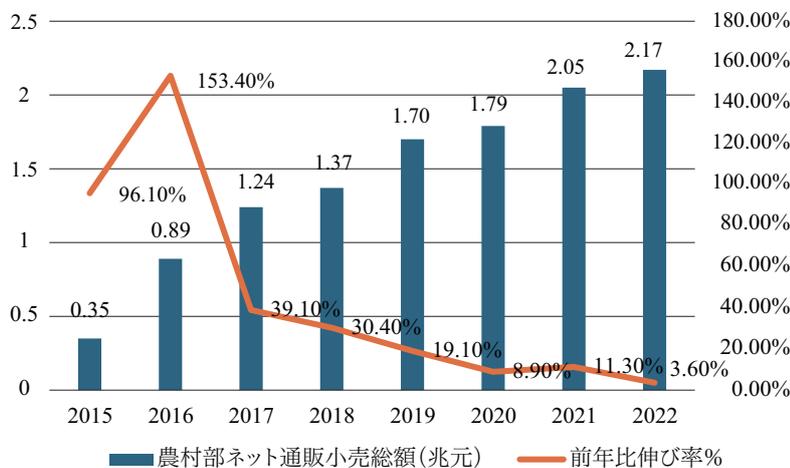


図2 2015-2022年中国農村部ネット通販小売総額推移

出所：中国商務部 2023: 5

さらに、越境ECサービスに特化した海外倉庫は1,800超が稼働しており、その総面積は2,200万平方メートルを超えている。

ECビジネスの成長とともに、この分野に従事する労働者の数も年々増加している。2021年にはEC業界従事者数は6,937万1,800人に上り、前年同期比で3.1%増であった（中国商務部 2023: 7）。これは、EC市場の拡大に伴って、関連職種や業種が増え、雇用の機会が広がっていることを示している。

2015年頃から中国政府は「互インターネット）+農村」と称する運動をスタートし、アリババや京東など大手ECプラットフォーム企業の農村部への進出を後押しするとともに、農村部へのECビジネスの浸透を促進している。同時に、中国政府は「大衆創業・万衆創新（大衆の起業と万人のイノベーション）」という政策を推進し、税制優遇や融資の利便性向上などを通じて、農村部における起業支援を行っている。こうした取り組みが功を

奏し、中国国内では起業しやすい環境が整備され、農村部におけるEC創業が大幅に増加した。その結果、2022年には農村部のネット通販小売総額が2.17兆元にのぼった(図2)。

こうした中で、農村部では数多くのECベンチャー企業が誕生した。2022年には農村部のEC事業者数が1,730.3万に達し、前年比8.5%増となった(人民日報2023-10-30: online)。これに伴い、EC事業者が犄めくEC村・EC鎮各地で形成している。代表的な例が「淘宝¹(タオバオ)村」と呼ばれる村落である。これは、アリババが設定するもので、①経営場所が行政村であること、②年間EC取引総額が1,000万円を超えること、③アクティブなEC店舗が100店以上もしくは村の総世帯数の1割以上がECビジネスを営むこと、という条件を満たす村がこれに当たる(阿里研究院2019: 6-7)。淘宝村の数は年々増加傾向にあり、2022年までに7,780カ所に達し、浙江省、広東省、江蘇省、山東省をはじめ、28省・直轄市に広がっている(図3)。なお、淘宝村のEC業者は、家具、衣料品、日常雑貨、電気製品など幅広い商品カテゴリーを取り扱っているのが特徴的である(阿里研究院2019: 31-36)。このように、中国の農村部ではEC集積が数多く形成されてきている。

さらに、中国農村部のEC集積では、国内市場だけでなく、AliExpress(速買通)などの越境ECプラットフォームを活用して海外市場向けの販売を展開する業者も増加している(中国商務部2023: 55)。2019年には、中国各地に越境EC「淘宝村」が474村存在するようになり、4億ドル以上の商品が越境ECを通じて海外市場に販売された(阿里研究院2019: 11)。

中国における以上のようなEC村の形成と拡大は、農村部経済の発展にも顕著な影響をもたらしている。農村住民はECプラットフォームを活用することで、伝統的な流通システムの空間的・時間的制約を受けることなく、新たなビジネスチャンスを得ている(周・劉2018: 63)。さらに、農村部におけるECの普及は、

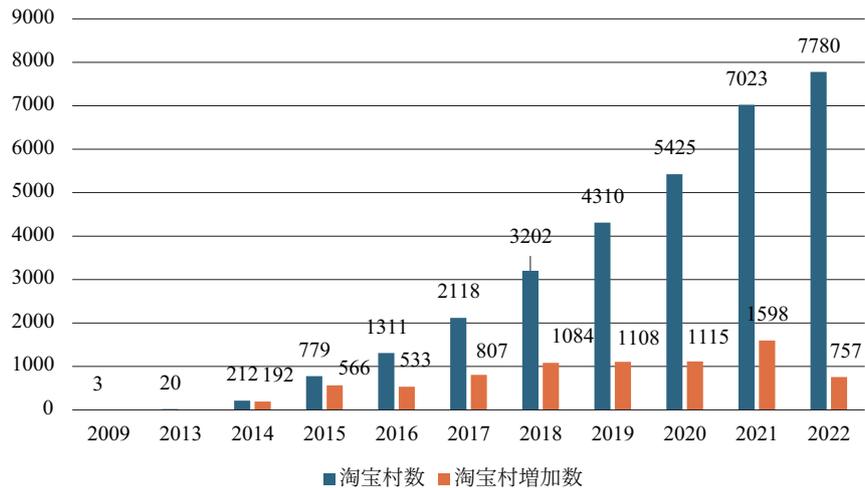


図3 淘宝村の数の推移

出所：阿里研究院 2020: 4；淘宝村名单(各年版)に基づき筆者作成

これまで都市から農村への一方通行であった流通チャネルを変革し、農村を農業生産から解放することで都市と農村の結び付け、新たな地域成長モデルを形成している(Lin et al. 2022: 1083)。これにより、所得格差の縮小や地元でのビジネスチャンスの増加、雇用の活性化など多様な利点生まれ、農村振興に大きく貢献している(Qi et al. 2019: 108)。

これらの状況を踏まえ、本稿では、中国における農村EC集積の形成要因およびEC集積が農村経済発展に与えるインパクトを解明するために、代表的なEC村²を対象に実施したフィールド調査の結果に基づいて、農村EC集積の生成と発展のプロセスおよびメカニズムを考察する。

II EC村の形成要因に関する先行研究

淘宝村をはじめとするEC村の形成に関する先行研究では、地理的分布、産業基盤、インフラの整備、宅配サービスの発展、伝統的な商業文化、市場環境、政府の活動などさまざまな視点から分析が行われてきた(Li 2017; Qi et al. 2019; Lin et al. 2022)。

EC村の生成には、消費市場やインターネット環境の整備、物流サービスの水準が大きな影響を与えるため、経済発展が先行している中国の東部地域により多くのEC村が分布していると指摘されている(刁ほか2017: 56; Lin et al. 2022: 1097)。また、多くのEC村は、その発展初期において、自然資源の賦存や伝統産業、

1 淘宝とは、中国最大手EC企業アリババが運営しているネット通販プラットフォームである。

2 一部の地方政府は独自の基準で「電子商務專業村」など呼ばれるEC村を認定しているが、淘宝村と重なるところが多い。

貿易ハブといった域内の既存経済基盤に依存する形で形成・発展していったと分析されている (Lin et al. 2022: 1095; Wei et al. 2020: 403)。さらに、地域の経済基盤の相違により、EC 村の形成パターンを 2 種類に分けることができる。一つは、EC 事業者が都市部から労働力コストや土地コストの低い農村部に移転するパターンで、もう一つは、地元の企業や個人が域内の物産を EC で販売するパターンである (Liu et al. 2020: 406)。また、EC 村の形成モデルについて、農産物を含む地元の資源賦存を基盤とする「生産志向型」と、EC の発展に応じて市場を基盤とする「市場志向型」に分類することもできる (Wei et al. 2020: 393)。

EC 村の空間的集積形成について、域内産業基盤のレベルや村の周辺地域の経済状況が大きく影響するが、村自体の経済状況はそれほど重要な条件にならないと指摘されている (Liu et al. 2020: 412)。その理由として、従来のビジネス起業と比べて、EC プラットフォームを利用するネット通販の起業ハードルが低いことが挙げられる (曾・郭 2016a: 42; Lin et al. 2022: 1096)。多くの EC 村の店舗は家族経営であり、外部の従業員を雇っておらず (Lin et al. 2022: 1096)、自宅や村の安価な賃貸物件を経営場所として利用できるよう (Tang & Zhu 2020: 26-27)、ネット店舗の運営コストは概して低く、創業時に多くの運転資金を必要としない (Mei et al. 2020: 1065)。また、都市部に比べて、農村部の EC 従事者の教育水準は比較的低い (Wei et al. 2020: 392)、高校卒業程度の教養がありさえすれば、操業可能な EC ビジネスが多く存在する (Qi et al. 2019: 11)。したがって、資金力や知識が必ずしも豊富でない農村住民でも EC 事業に携わることが可能である点も特徴的である (曾・郭 2016a: 39)。

一方、EC 村は都市部から離れた立地であることが多く、土地や賃金などのコストを抑えることができるものの、輸送コストが増加してしまうという側面もある (Lin et al. 2022: 1094)。そこで、立地による輸送費用上の不利を埋め合わせる物流サービスの利用可否が重要となる (刁ほか 2017: 61)。特に、小規模 EC 事業の主要な輸配送手段である宅配サービスの拠点ネットワークの充実度や料金水準は、EC 村の発展に大きな影響を与えている (史ほか 2018: 69)。例えば、義烏では伝統的な商業集積を基盤に物流集積が形成され、域内ユーザーのみならずより広域的な物流需要にも応えられるだけの、安価で多様な物流サービスが提

供されている (李 2018: 29)。このような宅配サービスを含む物流サービスは、義烏の EC 村の形成と発展を支える重要な基盤となっている (王 2022: 14)。もっとも、EC 村発展の初期段階には必ずしも十分な物流サービスや施設が整備されておらず、EC 事業と物流システムが相互作用しながら発展する可能性もある (曾・郭 2016a: 43)。また、EC ビジネスの成長に伴って貨物量が増加することで、次第に運賃率の低下や配達効率の向上が実現され、低コストかつ利便性が高い物流サービスの提供が可能となることもある (Wei et al. 2020: 398-399)。

さらに、EC ビジネスの創業には関連知識や情報の獲得が不可欠であり、EC に関する専門知識を持つ人材が求められる (董ほか 2016: 64)。起業先駆者あるいは創業リーダーといった存在は、知識や情報の保有者・伝道者として極めて重要である (曾ほか 2015: 94-95)。起業先駆者の多くは比較的若く、高い学歴や起業精神を持つことが特徴であり、中には都市部でのビジネス経験やインターネットに関する知識を故郷へと持ち帰る「帰郷移民」も多いという (Qi et al. 2019: 111-112)。また、個人のみならず地元企業が創業リーダーの役割を担うケースも見受けられる (Mei et al. 2020: 1607)。このように都市部から帰郷した EC 起業先駆者の行動を周辺の村民らが模倣する形でネット通販事業を立ち上げる現象が、EC 村の発展過程で珍しくない (Qi et al. 2019: 112)。すなわち、周・劉 (2018) が指摘するように、創業リーダーの「示範効果」が農村部 EC ビジネスの成長を加速させ、EC 集積の形成を促進する要因の一つとなり得る (周・劉 2018: 65)。もっとも、このような「示範効果」の影響は EC 集積形成の初期段階において最も強力に作用するが、集積が拡大するにつれて次第に弱まっていくと指摘されている (Mei et al. 2020: 1607)。

中国の農村部は都市部に比べて、人間関係を重視する「顔見知り社会」であり、親戚や隣人の中で特に、情報が多くやりとりされる (Liu et al. 2020: 406)。そのため、住民間のコミュニケーションが EC 知識を伝達する際の主要なルートとなる (周・劉 2018: 66; Lin et al. 2022: 1093)。一方、地元政府や同業組合、EC 企業、専門教育機関によって設立される EC ビジネスに関する訓練・育成コースも EC 知識伝達において重要な役割を果たしていると報告されている (曾ほか 2015: 95; 周・劉 2018: 67)。さらに、こうした知識伝

達の仕組みによる知識スピルオーバー (Knowledge Spillover)³の効果が、EC 村の登場と拡大の一因であると指摘されている (周・劉 2018: 65; Lin et al. 2022: 1093)。

EC 村発展初期では、村民が自発的に EC 事業を興すが、EC 事業が一定規模に達した後、地元政府が事業に積極的な関与を開始するというパターンもしばしば見られる (曾ほか 2015: 95)。とりわけ、労働力など EC 産業の発展に必要な要素が存在する地域では、EC 事業が無秩序に膨張する事態を恐れることが、地元政府の介入理由であるとされる (Lin et al. 2022: 1097)。とはいえ、インフラの整備、EC パークやサービスセンターの設立、低金利ローンの提供、税制優遇措置の実施、行政手続きの効率化、大学との提携によるトレーニングコースの提供、EC 事業の成長に対応した村落の改造といった地元政府による適切な支援策が、EC 事業の発展を後押ししていると多くの研究者は指摘している (Mei et al. 2020: 1607-1608; Wei et al. 2020: 399-400)。それに加えて、多くの大手 EC プラットフォームもまた、各地で EC サービスステーションの設置、トレーニングコースの提供、小規模 EC 事業者向けの融資など、EC 村の発展を支援する取り組みを展開している (Mei et al. 2020: 1608)。

もっとも、一部の地域では、EC 村を制度化する取り組みが依然として不十分であるとの認識が示されている (Phelps et al. 2022: 299)。とりわけ、EC 事業に精通し、EC 産業に関わる行政管理を経験したことのある地方政府の職員が少ないことが制度化の遅れをもたらす原因だとの指摘がある (Zhang et al. 2023: 530)。一部の地域では、EC 事業の健全な発展を目的に EC 関連の同業組合や業界団体を設立する動きが活発化しているが (Li 2017: 61; 曾・郭 2016b: 59; 周・劉 2018: 66)、こうした団体はまだ本格的に普及してはおらず、名ばかりのところも少なくないという (Zhang et al. 2023: 531)。

さらに、ネット通販の発展に伴い、物流サービス、広告、撮影、情報サービスなどの補完サービスが EC 村で次第に充実しつつあるという現象が各地で観察されている (曾・郭 2016a: 39; Li, 2017: 59)。EC 事業の集積は川上産業および川下産業を引き込むとともに、補完サービスをも呼び込む。これにより、EC 事業に

対する投資リスクが低下し、EC 村への新規参入者が増える。そして、さらなる成長を期待してインフラなどの基盤整備が促されるというように、EC 村のビジネスエコシステムはこのような好循環の中で形成されると分析されている (Lin et al. 2022: 1095-1097)。

以上取り上げている先行研究は、中国各地の農村部における EC 集積の全体的な傾向に関する概観である。一方、単一事例または少数事例を取り上げた定性的な分析によって、農村 EC 集積の形成要因を導き出そうとする先行研究からは、農村部の EC 集積の形成過程には実に多様な要因が絡んでいることが見て取れる (曾ほか 2015; 曾・郭 2016a, b; 史ほか 2018; 李・王 2020a, b, c, d)。また、定量的な手法を用いて、淘宝村の形成要因を目指す研究も散見される (周・劉 2018; Wei et al. 2020; 王 2022)。王 (2022) は先行研究の知見を踏まえながら、QCA 分析 (Qualitative Comparative Analysis、質的比較分析) によって、物流サービスと知識ソースの組み合わせが EC 村形成にとって中心的な条件であることを指摘している (王 2022: 15)。

ところで、EC 村の発展には、EC 事業の同質化や人材不足、資金調達の困難といった課題が伴う (Wei et al. 2020: 401)。特に、農村部の EC 事業者が越境 EC 事業に進出する際には、国際貿易に関わる複雑な仕組と慣れない越境 EC プラットフォームに直面するため、事業運営は困難が多い (Zhang 2024: 244-245)。その結果、一部の EC 村では発展が停滞し、衰退あるいは消失した事例も見られる (彭・丁 2024: 106-107)。このように、農村部における EC 集積の形成メカニズムに関する研究においては、EC 村初期段階の形成要因に加え、EC 村の持続的な発展を支える要素を明らかにすることにも意義があるものと考えられる。そこで本研究では、既存研究の知見を踏まえ、EC 集積の典型例に注目することにより、中国農村部における EC 集積の形成と持続的発展のメカニズムを探求することとする。

III 研究手法と研究対象

本研究では、Yin (1994) のケース・スタディ手法を援用し、複雑な現象を理解するために複数のデータ

³ 知識スピルオーバー (Knowledge Spillover) とは、企業、組織、または個人が有する知識や技術が、意図的あるいは非意図的に周囲に波及し、他の企業や組織、個人がその知識や技術を活用することで、成長や発展を遂げる現象を指す。

ソースを統合した事例研究を行うこととする（イン 1996(1994): 107）。さらに、探索的ケース・スタディのアプローチを用い、現象の多様な側面を明らかにした上で、理論化を試みる（イン 1996(1994): 186）。

研究対象の選定には理論的サンプリング手法を用いることとする。この手法は、理論を導くためのデータ収集の方法論であり（Glaser & Strauss 1967: 45-77）、現象を理解するために必要なカテゴリーやその特性を幅広く抽出し、それらのカテゴリー同士や属性間の関連性を明確にするためのケース選定手法である（横澤ほか 2013: 46）。本研究では、理論的サンプリングに基づき、「越境 EC が活発的に行われている典型的な EC 村」という基準のもと研究対象を選定した。

また、複数の事例を比較することで共通点や相違点を検討し、結論の一般化の可能性を高めるために、Yin (1994) の提唱する三角測量法を採用している（イン 1996(1994): 122-125）。データ収集には、文献レビュー、現地での直接観察、半構造化インタビューを組み合わせて用いることで、信頼性の高い分析を目指している。

具体的には、まず、EC 村に関する報告書、記事、統計データ、研究論文を中心に予備調査を実施した。その結果、浙江省の義烏市には中国で最も多くの EC 村があり、青岩劉など先駆的な EC 村が存在していることを把握した。そして、域内の EC 村に数多くの越境 EC 業者があり、もっぱら越境 EC を営む村も存在する。以上の理由から、本研究では義烏を研究対象と

して選定した。

2019年8月1日から8月5日まで義烏の5つの EC 村と1つの EC タウンでフィールド調査を実施し、政府関係者、EC 関連教育機関、各村の役場の役員、EC ベンチャーに対して半構造化インタビューを行った。また、各村の EC 店舗や関連する補完産業の実態についても調査した（表1）。

IV 調査からの発見事実

1 調査地域の概要⁴

義烏市は中国浙江省の中部に位置する県級の行政区で、杭州、寧波、上海といった主要都市から100キロ以上離れている。1970年代までの義烏は、一人あたりの耕地面積が少ないほか、土地の肥沃度が低く、経済的に貧しい地域であった。地場産業としては古くから製飴業が営まれ、「敲糖幫（飴のたたき売り）」と称される行商の伝統が根付いていた。この行商人達は、地元で生産した飴を持って省内他県や隣接の江西省、福建省などにまで足を延ばし、鶏の羽等と交換する「鶏毛換糖」⁵と呼ばれる物々交換と、針や糸などの日用品の販売を行っていた。

1970年代後半の改革開放後、義烏の住民はこの伝統的な行商と商業精神を受け継ぎながら、日用品の販売ビジネスを継続的に展開してきた。1982年には日用品の卸売市場「義烏小商品市場」が設立され、1990年代以降、義烏は「小商品市場（国際貿易城）」を中心に急速に発展し、「世界の小商品（日用品・生活雑貨などの軽工業品）の都市」として大きな変貌を遂げた。この小商品市場には約7万5,000のブースが設置され、総販売面積は600万平方メートル以上に達する。ここは、取扱品目が約200万点に及ぶ、軽工業製品の卸売市場としては世界最大規模の商業集積地となっている。義烏は軽工業製品の豊富な品揃えを誇り、世界中210以上の国と地域に製品を供給しており、各国からのバイヤーが訪れる国際的な商業都市になっている。国際貿易城のほかに、義烏市内には、また11の専門市場と14の専門卸売街が存在し、これらの市場の周辺には物流、広告、技術支援、仲

表1 義烏のインタビュー調査

地域	日付	場所	インタビューの主要な話し手のポジション
義烏	2019年 8月2日	義烏市場委員会	電商課の課長
		青岩劉村	村書記、EC 企業創業者
		電商小鎮	管理センターの主任、EC 企業マネージャー
	2019年 8月3日	龍回村役所	村書記
		柳二村	村役場の役員、EC 店舗創業者
	2019年 8月4日	義烏工商学院	副院長
高橋村		村書記	
		北下朱村	村役場の役員、微商協会幹事、EC 企業創業者

出所：筆者作成

⁴ 筆者の既刊論文（李 2018: 18-19）及び既刊報告書（李・王 2020a: 54-55）の一部を加筆・再構成している。

⁵ 飴を鶏の羽根と交換し、得られた羽根は小物加工の素材や肥料として活用される。

介、金融などの多様なサービス産業が集積している。このようにして義烏では「小商品市場」を中心とした膨大な商業集積が形成されている。

2010年以降、義烏ではECビジネスが急速に台頭し、2013年にEC取引量がついに小商品市場内の取引量を上回るようになった。義烏市政府の公表データによれば、2023年現在、域内に約65.3万社のEC企業が存在し、年間EC取引総額は4,423.67億元に達しているという。また、越境EC事業者も増加しており、全EC企業のうち約26万社が越境ECを手掛けている。2023年の越境EC取引総額は1,211.6億元で、前年比11.8%増加を達成した。これらのEC事業者はAliExpress、eBay、Amazonといった主要プラットフォームに加え、TikTok、Shopee、TEMU、SHEIN、Lazada、WISHなど新興プラットフォームをも活用している。2018年7月、中国政府は義烏市に越境EC総合試験区を設置することを発表し、義烏は全国34の越境EC総合試験区の設置都市の中で唯一の県級市である。

2009年以降、義烏におけるECビジネスは市街地周辺の農村部にまで徐々に浸透し、都市部を囲む村々がEC集積として成長を遂げている。域内には「中国网店第一村」と称される青岩劉村をはじめ、計225のEC村⁶と13のEC鎮が形成され、中国最大のEC村群が義烏に出現している。

2 EC村の主役：域外からの移住者⁷

義烏のEC村における主な特徴の一つとして、EC起業者の大半が地元村民ではなく、域外からの移住者によって構成されている点が挙げられる。義烏市政府統計局のデータによると、2023年末時点で義烏の常住人口は約190.3万人であり、そのうち半数を超える約100万人が域外からの移住者であった。周辺のEC村における移住者の割合はさらに高い。例えば、北下朱村では、戸籍上の村人（以下同じ）が1,400人に過ぎないのに対し、移住者は1万人を超える。また、青岩劉村では村人が1,700人、外来者が約2万人、龍回村では村人2,170人に対して外来者は3万人に達している。柳一村、柳二村、柳三村を合併した柳青社区でも、約5,000人の村人に対して約5万人の外来者が常住している。

義烏EC集積の重要な人材供給源の一つは、義烏工商職業技術学院（以下、義烏工商学院）である。同学院は職業人材の育成を目的とする市立3年制短期大学である。学生は全国12の省・自治区から集まっており、地元浙江省出身者の割合は1割未満である。多くの卒業生は義烏に定住し、ECベンチャーを立ち上げるか、EC企業に就職している。

EC村は多くの場合、都会から離れた場所に位置しており、「草根階層」⁸出身の創業者が安価な商品を取

表2 EC村のベンチャー像

	年齢	出身地	学歴	主な商材	起業失敗歴	主な仕入先	義烏を選んだ理由 (上位2つ)
A氏	30代	湖南省	短大	文房具、事務用品	2回	小商品市場とメーカー直仕入れ	物流、雰囲気
B氏	20代後半	山西省	高卒	清掃用品	1回	アリババのB2Bプラットフォーム	情報、物流
C氏	30代	安徽省	大卒	小型電器	3回	メーカー直仕入れと小商品市場	物流、諸費用水準
D氏	20代半ば	江西省	高専	アクセサリ	無回答	メーカーにOEM委託	情報、ネットワーク
E氏	40代	浙江省	短大	金属製品	3回以上	メーカー直仕入れ	物流、情報
F氏	40代	湖北省	高卒	ニット	大きいのは2回	メーカーにOEM委託と小商品市場	ネットワーク、物流
G氏	30代	安徽省	短大	バッグ類	1回	小商品市場とメーカー直仕入れ	仕入れ、物流
H氏	30代	江西省	大卒	おもちゃ	2回以上	メーカーの委託販売	情報、諸費用コスト
I氏	20代半ば	浙江省	大卒	靴下と靴の中敷き	無回答	メーカー直仕入れ	物流、賃金

出所：2019年8月1日から2019年8月5日まで、義烏のEC村において行ったインタビューに基づき筆者作成

6 そのうち、222の淘宝村がある。

7 筆者の既刊報告書（李・王 2020a: 59-60）の一部を加筆・再構成している。

8 いわゆる「草の根」と呼ばれる、経済力が弱く社会的地位も低い人々を指す。

り扱うという点が特徴的であると指摘されている（阿里研究院 2019）。義烏のEC村もこの特徴を備えており、多くの草の根的な創業者がECビジネスに挑戦している。特に、義烏のEC村の創業者には、域外からの移住者、若年層、非一流大学出身者という3つの属性が顕著に見られる（表2）。これらの創業者の多くは、比較的経済発展が遅れている地域から移住してきた者である。また、名門大学の卒業生は極めて少なく、比較的偏差値が低い大学や短大・専門学校の卒業生が高い割合を占めている。中で職業教育系の短大や専門学校の卒業生の割合が大きく、高卒者も多く含まれる。

後進地域出身の若年層は、強いハングリー精神と忍耐力を持ち、少ない資金で創業可能なECビジネスに挑んでいるといえる。仮に創業に失敗した場合でも、域内のEC企業に就職し、資金と経験を蓄えた後に再度創業に挑戦する者も多い。このような創業者達は、義烏のEC村の形成と発展における重要な推進力として機能している。

3 産業基盤としての商業集積⁹

義烏におけるEC創業者の多くは高学歴や資金力に恵まれない、草の根的な起業家であり、彼らが義烏に惹かれる主な要素の一つは、そのフレンドリーな起業環境である。特に、厚い伝統的な商業集積の存在が、この起業環境の重要な要素となっている。

前述の通り、義烏には小商品市場を核とする伝統的な商業集積が存在し、これが義烏のECビジネスの基盤となっている。義烏に拠点を置く多くのEC事業者は、日用消費財のネット通販をベースとした事業を展開している。筆者らのインタビュー調査からは、創業初期において小商品市場を含む現地の卸売市場を主要な調達先として活用していたECベンチャーが多いことが分かった。例えば、I氏は2017年南京の大学を卒業した後、義烏に移住し、小商品市場周辺で居住兼事業スペースを確保し、同市場を仕入れ先として生活雑貨のEC事業を開始した。

2013年頃から、義烏市政府は「電商換市」という戦略を策定し、独自のプラットフォーム「義烏購」を構築することで小商品市場など卸売市場のECモール化する施策を試みた。しかし、当初の政策は直接的には成果を上げるに至らなかった。一方、市場内の店舗に

おいてはECの浸透によりビジネスのスタイルが確実に変化しており、商談や受注の多くを電話、SNS、メール、ECプラットフォームを通して行う店舗が市場の大半を占めるようになった。

小商品市場に加え、義烏にはECサプライヤー・ベースとしての役割を果たす村が存在している。その一例は、義烏市街地の中心部から東へ約5キロの距離に位置する北下朱村である。この村は義烏小商品市場の発祥地の一つとされており、1970年代末に数軒の農家がカレンダーの制作・販売を開始したことが起源とされている。その後、カレンダーやその他の印刷物を扱う青空市場が自然発生的に形成された。1990年代以降、この村の印刷物市場は義烏小商品市場に統合されたが、村自体は小商品市場で売れ残った商品の集散地へと変貌した。さらに、村の隣接地には「北下朱貨運市場」と呼ばれる路線便ターミナル（路線便とは、1台のトラックに不特定多数の荷主の貨物を混載し、決められたルートと拠点を經由して目的地まで運送するサービスを指す）が設置され、ここを經由して売れ残りの在庫商品が路線便ネットワークに載せられ、域外へと輸送される仕組みが整えられた。

2016年に数名の義烏工商学院の卒業生が北下朱村に移住し、SNSアプリWeChat（微信）をベースにした「微商」形式のECビジネスを開始した。彼らはWeChat上のバーチャルコミュニティを販売チャネルとして活用し、低価格かつ小ロットの商品の販売を手掛けた。このビジネスが成り立った背景には、大量かつ廉価な売れ残り商品と、利便性が高い物流サービスの存在が挙げられる。彼らの成功を契機に、「微商」のベンダーとして参入しようとする事業者が集まり、商品供給の基盤はさらに強化された。その後、ライブEC（ライブ配信を通じて商品を紹介し、リアルタイムで購入できるECの形態を指す）の台頭に伴い、豊富かつ廉価な商品供給がライブEC創業者達を惹きつけ、この村はライブECベンチャーの集積地としても知られるようになった。

義烏のECベンチャーは創業当初、卸売市場である小商品市場からほとんどの商品を調達していたが、事業の拡大に伴い、市場外の調達ルートを開拓したことで、小商品市場への依存度は低下する傾向が見られた。とはいえ、義烏市政府の市場委員会の推計によれば、

9 筆者の既刊報告書（李・王 2020a: 59-60）の一部を加筆・再構成している。

周辺のEC村とECパークに所在するEC事業においては、小商品市場への仕入依存率は依然として50～60%と高い水準にあるという¹⁰。

4 ECビジネスを支える物流集積¹¹

ネット通販を中心とするEC事業は、ラストワンマイル（最終拠点からエンドユーザーへの配送サービスを指す）の課題を解決する必要がある、比較的高品質かつリーズナブルな物流サービスを必要とする。義烏では、伝統的な商品集積ベースの大規模な物流集積が形成されている（李 2018: 28）。この物流集積では、ECビジネスの物流ニーズに対応可能な物流サービスを提供する事業者が数多く存在し、EC村の形成と発展をサポートしている。

義烏域内には現在、国内物流業務を営む企業が約1,900社、国際物流業務を営む企業が約1,600社もある。そこで提供されるサービスは、トラック輸送、鉄道輸送、航空輸送、海上コンテナ輸送、宅配便、フォワーディングなど多様なモードや形式を含んでおり、中国全土31省の1,502県と、世界211の国・地域に連結している（義烏市市場発展委員会 2024: online）。これにより、中国と世界各地を結ぶ膨大な輸送ネットワークが構築されている。2010年、義烏市は国連アジア太平洋経済社会委員会（UNESCAP）から「国際陸港都市」として認定され、物流革新都市トップ10にもランクインした。さらに、2019年には中国中央政府によって29の物流中枢都市の一つに選定され、中国を代表する物流ハブとして地位を確立している。

義烏は内陸部に位置しているため、国際貿易を支える主要な物流サービスとして、域外の国際海港と国際空港を経由した複合輸送が重要である。代表的な国際輸送サービスには、寧波舟山港を経由するシー&トラック複合輸送やシー&レール複合輸送、杭州や上海の国際空港に接続するエア&ランド輸送がある。これらのインターモーダル輸送（海運や鉄道など複数の異なる輸送手段を組み合わせる貨物を輸送する方法）に加え、ユーラシア大陸横断鉄道のコンテナ輸送サービスである「義新欧」（義烏、新疆、欧州を結ぶ国際定

期貨物列車）も開通し、義烏の国際物流において重要な役割を担っている。

2013年には、敷地面積が94万m²に及ぶインランド・ポート（無水港）である義烏港が竣工し、供用を開始した。港内には、税関、検査検疫、コンテナヤード、オフィスビル、バンニング施設、保管施設、駐車場といった施設が完備されており、本船荷役を除く国際物流機能をワンストップで提供できる体制が整っている。151社の物流事業者と190社のフォワーダーが構内に拠点を構え、35万m²の保管施設も併設され、義烏からの商品輸出活動を支えている。1日当たり約1.5万台以上のコンテナトレーラーが入港し（中国寧波網 2020-12-22: online）、2022年のコンテナ取扱量は48.5万TEU¹²に達し、前年比24.4%増となった（人民日報 2023-03-03: online）。

義烏港と寧波舟山港の一体化が進み、両港はドレージ輸送により効率的に連結されている。義烏港から寧波舟山港経由で貨物を輸送する際には、申告、検査、通関など手続きが一回で完了する仕組みが構築されている。2023年1月から11月までの間に、義烏港から寧波舟山港経由でのシー&レール複合輸送において計1,632本の列車が運行し、14万6,942TEUの貨物が輸送された（寧波海関 2023-12-19: online）。さらに、2024年に完成予定の「義甬舟開放大通道」¹³では、義烏から寧波舟山港ターミナルに直通する新たな鉄道路線が開通する予定である。この新鉄道路線は2段積みコンテナ輸送が可能で、1回あたりの輸送量が倍増するため、期待を集めている（人民日報 2023-03-03: online）。

加えて、「卡车航班」¹⁴と称される義烏から上海や杭州の国際空港と連結するトラック定期便サービスも運行している。このサービスは、中国東方航空などの航空会社が義烏の物流企業と提携して開発したもので、義烏の荷主の空運利用における利便性を高めることが狙いである。一部の国際宅配企業も自社輸送キャパシティを補完するために、この「卡车航班」を利用している。

さらに、義烏空港では国際航空貨物輸送サービスの整備も進められている。2019年には中国郵政との提

10 義烏市場委員会に対するインタビューより

11 筆者の既刊論文（李 2018: 24-26）と既刊報告書（李・王 2020b: 67-68）の一部を加筆・再構成している。

12 TEUとは「twenty-foot equivalent unit」の略で、20フィートのコンテナに換算した貨物量を表す単位である。

13 「義甬舟開放大通道」は、寧波舟山港、義烏陸港、甬金高速、金甬舟鉄道などを基盤に、海運、空運、陸運を統合する複合輸送システムを構築する戦略プロジェクトである。

14 「卡车」は中国語で「トラック」を意味し、「航班」は中国語で「航空便」を指す。

携により、大阪への直行貨物便が新設され、2024年1月から6月までの間に同線路で106便が運行し、1,072.82トンの貨物が輸送された（浙江省郵政管理局 2024-07-18: online）。2024年7月にはマニラ行きの新路線も開設され、当初は週3便の運航が予定されていたが、今後は週5便への増便が計画されている（義烏商報 2024-07-16: online）。

義烏と欧州を結ぶ国際鉄道コンテナ貫輸送である「義新欧」は、ユーラシア横断鉄道コンテナ定期便の「中欧班列」（中国と欧州を結ぶ国際定期貨物列車）の一環として2014年11月に開設された国際輸送サービスである。義新欧は現在、スペイン、フランス、イタリア、イギリス、ベルギー、ドイツ、チェコ、ロシア、中央アジア諸国、ベトナムなど計17路線を運行し、50カ国以上、160都市以上にわたる広域ネットワークを構築している。繁忙期には1日13便が運行し、輸送実績は2019年の528便から2022年の1,569便に増加した。そのうち、往路便が約6割、復路便が約4割を占めている（人民日報 2023-03-03: online）。

義新欧に対応する鉄道コンテナ・ターミナルも整備が進んでいる。地方政府傘下の国際陸港集団は約1.5億元を投資し、義烏西駅に隣接した場所に、敷地面積53万 m^2 の鉄道物流センターを設置したが、そこには税関検査場、検疫検査場、保税倉庫、コンテナヤード、複合輸送の荷役エリア、事務棟、駐車場などが完備されている。同ターミナルは、義新欧および寧波舟山港に連結するシー&レール複合輸送の拠点として機能し、義烏の物流ハブ機能を支える重要な役割を担っている。

義烏の越境EC事業者の多くは、物流コスト負担力が弱い日用品を取り扱っているため、運賃が比較的高い航空輸送の利用が困難である。また、海上輸送のリードタイムが長く、スピードを重視するECビジネスの要請に対応できない場合が多い。このような事情を背景に、空運よりは安価で海運よりは迅速かつ柔軟性に優れた鉄道輸送の「中欧班列」サービスの登場と拡充が、義烏の越境ECに適した物流インフラをさらに強化することになった。

EC事業から発生する膨大な小口輸配送ニーズに対応する宅配サービスはEC村の発展にとって不可欠な要素である。義烏には130社の宅配企業が支社や子会社、営業所を構え、500カ所以上の集配拠点が分布している（澎湃新聞: online）。UPS、FedEx、DHL、TNTといった大手インテグレーターをはじめ、約70社の

国際宅配業者が義烏に進出している（浙江省郵政管理局 2024-09-04: online）。2023年、義烏の宅配便取扱個数は105.8億個に達し、上海や北京、深圳などの巨大都市を凌ぎ、広州に次いで全国2位になった。中には、国際宅配便の取扱量は4,898.1万件にのぼり、前年比で46.4%増加している（義烏統計局 2024: online）。

義烏市の西郊外には、急成長するECビジネスに対応するため、大規模な宅配物流園区が整備されている。敷地面積は約40万 m^2 に及び、郵政速通、順豊速通(SF)、天天快通、万通、申通、中通、韻達など中国代表的な宅配事業者が拠点を構えている。この園区では、1日あたり800万件以上の宅配便が処理され、単なる仕分け・発送業務にとどまらず、約6万 m^2 の倉庫も併設され、EC事業向けフルフィルメント業務も積極的に行われている。

また、越境ECを支える物流インフラの整備も急速に進んでいる。義烏空港に隣接するエリアには、大規模な国際郵便互換局と交換ステーションが建設され、稼働している。この施設には越境EC監管センター、税関、検査検疫の出先機関が併設され、これにより越境ECの速達貨物の処理が迅速化され、大幅な時間短縮が実現している。2021年における年間越境EC輸出貨物の処理量は1,279.04万件、金額ベースでは5,284.73万ドルに達し、前年比26.88%増となった（義烏商報 2022-01-07: online）。

小口の輸配送ニーズに適する宅配サービスに加えて、大口輸配送に対応するトラック特積路線便も充実している。物流業者は特定の路線便を運営し、ドア・ツウ・ドアまたはターミナル・ツウ・ターミナルの輸送サービスを提供している。これらの業者は義烏公路港、青口、福田、江北下朱、紅獅物流センターの5つの公共トラック・ターミナルに集積しており、特に、義烏公路港は50万 m^2 の敷地面積と69万 m^2 床面積の巨大な規模を有し、トラック・ターミナルとして中国最大級を誇っている。同ターミナルには260社以上のテナントが入居し、ここから500以上のトラック特積路線のネットワークが全国2,000以上の県レベル地域に分布している。2023年のデータによれば、義烏公路港では1日あたり約28,000台のトラックが出入りし、年間約8,327万トンの貨物が取り扱われている（義烏市陸港集団 2024-05-21: online）。

義烏の物流サービスのもう一つの強みは、非常に低い料金水準になっていることにある。図4で示された通り、浙江省の宅配便運賃水準は全国で最も低く、義

鳥はその中でさらに最低水準である。300g 以内の宅配貨物は、中国大陸全土で 1 個あたり 1.5 元という極端な低料金で配送が可能である。一方、大ロット荷物を取り扱う EC 事業者向けには、さらに安価なトラック路線便が提供されている。例えば、義烏から北京までの路線便の運賃は 1 kg あたり 0.5 元に過ぎない。また、義烏には多くの国際物流企業が拠点を構えており、航空便の運賃も南京などの大都市に比べて 1kg あたり数元安く設定されている。加えて、中欧班列の運賃水準は、国際空運の 5 分の 1 以下と非常に経済的であり、海運運賃に比べて約 2 割高いものの、欧州までの輸送時間を約半分に短縮できるという大きな利点がある。

宅配サービスを低料金水準に留められる理由は、小商品市場および EC 集積から発生した膨大な宅配需要と、数多くの宅配事業者間での激しい価格競争にある。加えて、物流集積における多様な物流サービス間のシナジー効果も低料金の実現に寄与している。一部の宅配事業者は小口の宅配便貨物を発送方面別にまとめ、大口貨物として特積路線便に幹線輸送を依頼することで宅配便の運営コストを抑えることができる。こうして宅配便から委託される大量の幹線輸送業務は、路線

便のさらなる便数拡充にもつながっている。

単価の低い日用雑貨類を取り扱う EC 事業者にとって、物流コストはオペレーション全体の費用に占める割合が大きく、その水準が事業の存続と競争力に直接的な影響を与える。筆者が訪問したすべての EC 事業者は、義烏を事業拠点として選択した主要な理由の一つは、コストパフォーマンスと利便性の高い物流サービスであるとしている。

5 EC に関連する知識伝播と人材育成¹⁵

商業集積および物流集積は、EC ビジネスの発展にとって重要な基盤であるが、必ずしも EC 集積の形成に直結するわけではない。その主な理由は、EC ビジネスが伝統的な流通業とは異なる技術的要件を有するためである。EC ビジネスに関連する専門知識のソースと、専門知識が効果的に伝播する仕組みが欠如している場合、EC 集積の形成は難しくなる。

前述の義烏工商学院は EC 人材の育成や専門知識の伝播、EC 創業の促進などにおいて中心的な役割を担ってきたことが、筆者の現地調査で確認された。同学院は早くも 2008 年に EC 専攻を設置し、実践的な職業教育に積極的に取り組んでいる。同年に創業学院（アントレプレナーシップ・スクール）も設立され、全学向けに EC 教育プログラムを展開している。加えて、ラボの無料貸与や起業ファンドの提供を通じて教員と学生の起業を支援し、「創業班」と称する起業塾も開講しており、2018 年まで 16 期にわたって約 2,000 人の塾生を輩出した。さらに、2009 年から、敦煌網や eBay と連携し、「敦煌班」、「eBay 班」といった越境 EC 教育プロジェクトを開始している。

2016 年に義烏工商学院は EC 専攻と創業学院を統合し、「創業学院・電子商務学院（EC スクール）・創業園（起業パーク）」という新たな組織（以下、EC スクール）を発足させた。現在、EC スクールには、EC ビジネス、ビジネスデータ分析と応用、越境 EC ビジネス、インターネット・マーケティングおよびライブ

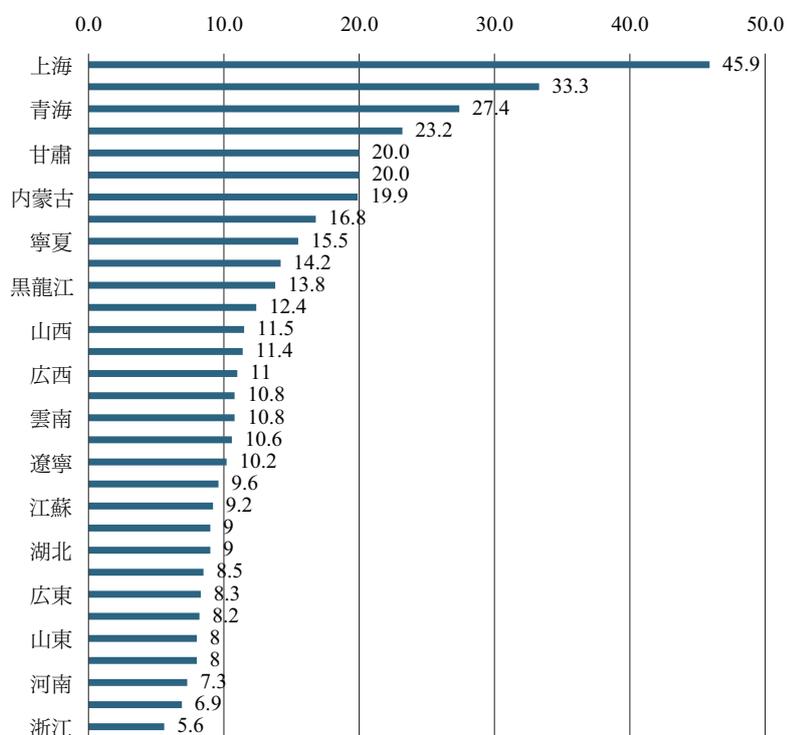


図 4 2021 年中国各省市宅配便平均単価 (元/個)

出所：智研シンクタンク 2022

¹⁵ 筆者の既刊報告書（李・王 2020a: 57-58）の一部を加筆・再構成している。

EC という計 4 つの専攻があり、1,960 人以上の学生が在籍している。また、74 名の教員のうち、31 名の「創業導師」（起業メンター）として活動しており、それぞれが経営する EC ベンチャーに希望する学生を参加させることで、実践的なトレーニングを実施している。また、知識やスキルを補うため、EC ビジネスで実績を持つ起業家や、EC 関連の特定技能を有する専門家を客員講師として招聘し、講義を担当させている。さらに、学生のモチベーション向上を図る取り組みとして、創業した学生の店舗売上実績を必修単位に換算する制度も導入されている。加えて、大手 EC プラットフォームから知識を取り入れ、それを人材育成に活用する取り組みも実施している。例えば、2009 年以来、Amazon、WISH、eBay、Shopee、速買通などと提携し、5 つの越境 EC 専門ワークショップを設置し、学生の越境 EC 起業を支援・指導している。

こうした取り組みを通じて、在学生の約半数は 1 年次から教員が主導するプロジェクトに参加するか、自ら EC ビジネスを立ち上げている。学内では、ワークショップとインキュベーターのスペースが無料で提供されているが、こうしたスペースには限りがあるため、多くの学生は青岩劉村や龍回村などの EC 村に誘致され、これらの村に設置されたインキュベーター・センターで事業を立ち上げる。青岩劉村が「中国 EC 村第 1 号」としての地位を確立するきっかけとなったのは、EC 創業を目指す義烏工商学院の在学生を受け入れたことである。2009 年以降、青岩劉村は EC 創業に挑戦する学生に対して無償のワークスペースを提供し、義烏工商学院と連携して無料の EC ビジネス講座を開講している。同様に、龍回村も起業パークを整備し、EC 創業の学生を受け入れることで、EC 村として発展基盤を構築した。このように、義烏工商学院は起業家精神にあふれた EC 人材を周辺の EC 村に送り出し、地域における EC 集積の形成に寄与している。義烏工商学院の調査によれば、学生の卒業後 1 年以内の起業率は、2015 年は 12.78%、2016 年は 11.78%、2017 年は 12.51%、2018 年は 11.84% であり、その中の多くが周辺の EC 村でビジネスを起業したという。

義烏工商学院に加え、義烏の EC 集積には民間教育研修機関が多数設立されており、研修プログラムの開発や提供、インターンのマッチングを通じて、EC 技

術の普及および EC 人材の育成に積極的に取り組んでいる。青岩劉村では「義烏市青岩劉 EC 学院」が設立され、独自に運営されている。龍回村も全国 15 の職業教育系の短期大学と提携して「龍回大学生 EC 創業・人材育成基地」を設立し、域外から学生を受け入れた。学生達は村に半年間滞在し、EC の基礎知識や基本的なスキルを習得した後、企業でインターンシップを行いながら EC 運営に関する実践的なスキルを身につける。このプロジェクトでは、村側は学生に宿泊施設と食費補助を無料で提供し、村の会議室を座学の教室として活用している。プロジェクト修了後、学生の多くは義烏に留まり、自ら起業するか、または義烏の EC 企業に就職している。龍回村にある約 500 の EC 事業者のうち、200 軒のオーナーはこのようなインターンシップや人材育成プログラムを通じて輩出され、村に定着しているという。さらに、各 EC 村の村役場は、草創時の事業者を支援し、最新の業界動向を伝える目的で外部の講師を招聘し、無料の EC セミナーなどのイベントを開催している。提供される教育訓練のプログラムは、デザイン、意匠、EC 店舗オペレーション、調達、フォワーディング、パッケージング、撮影、画像処理、ファイナンスなど、EC ビジネスに関連するほぼすべての分野にわたり、充実した内容になっている。

6 インフラの整備と政府の施策¹⁶

EC 村の形成には、創業者や産業基盤、知識ソースの存在に加え、EC ビジネスに対応するインフラの整備が重要な課題となる。インターネットや道路などの基本的なインフラ整備はもちろんのこと、義烏における EC 集積の主役である域外からの移住者に事業場と住居を提供することも欠かせない。義烏の村々が大量の移住者を受け入れることを可能にしている背景には、この地域特有の「村落改造モデル」の存在がある。

一般的な不動産開発モデルでは、不動産開発事業者が土地を買い取る方式が主流であるが、義烏のモデルでは土地を不動産業者に譲渡せず、農民自身がマンションなどを建設し、家賃貸業を行う仕組みが特徴的である。まず、村が市政府に「旧村改造」を申請し、認可後に村全体の土地用途が再設定・再区画される。この際、戸籍上の人口、年齢、婚姻状況、既存宅地の

¹⁶ 筆者の既刊報告書（李・王 2020b: 66-68、69-70）の一部を加筆・再構成している。

面積などを基に、各世帯に配分する土地面積が算出される。村によって異なるが、一人当たり60~120m²の宅地が配分されるのが一般的である。

村人は配分された宅地に4~5階建てのマンションを建設する。建設費用は自己負担であるが、政府の利子補助を受けた銀行融資を利用できる。この仕組みにより、村人の住居ニーズを満たすと同時に、多数の賃貸用物件が市場に供給される。例えば、2018年には義烏の農村部で6.2万戸の不動産証書が発行され、その大半は「旧村改造」による物件であった。仮に1戸あたり100m²を賃貸したとすると、合計で600万m²の賃貸物件が提供されていることになる。

義烏の各村は安定的な賃貸収入の確保を目指し、EC事業者を積極的に誘致している。例えば、龍回村で実施される大学生向けのECインターンシップやインキュベーター運営を通じてテナント誘致を図っている。多くの村人はマンションの最上階を自らの住居とし、1階から3~4階までの部屋を賃貸用とすることで家賃収入を得ている。筆者の調査対象となった龍回村や柳二村では、20m²の部屋が年間約20万円で借りられる。創業者達は最適な条件を求めて村間で拠点を移動することが多く、筆者らの調査では、小商品市場周辺や青岩劉村のようなEC先発村から、家賃がさらに安い柳二村のような後発村に移動するケースも少なくなかった。

さらに、EC村ではインターネット環境など通信インフラの整備も進んでいる。各村は村の資金を用いて光ファイバーの敷設や増強を行い、EC事業者に高速かつ大容量のネット利用環境を提供している。例えば、青岩劉村では村全域で無料Wi-Fiが利用可能となっており、北下朱村では5Gの導入を進めることでライブコマースを支援する環境を整えている。また、情報セキュリティやIT機器メンテナンスの専門業者も誘致することで、IT支援サービスの充実も図られている。

このように、リーズナブルな家賃で住宅兼事業のスペースを確保できる環境は、資金力に乏しい若い創業者を惹きつけ、義烏の商業集積である小商品市場の周辺から郊外の村々へのEC集積の広がりをも後押ししている。

義烏の先発EC村は自発的に形成されたものの(王 2022: 8)、その後のEC集積の発展において、地方政府と村役場は共に重要な役割を果たしている。実際、小商品市場などの産業基盤の整備には、義烏市政府が一貫して中心的な役割を担ってきた。1980年代

から現在までに、小商品市場は5回の移転と10回の増築を経ており、これら一連のプロジェクトの企画・建設・実施・運営はすべて市政府の主導で行われた(李 2018: 19)。加えて、港やトラック・ターミナル、宅配物流園区などの物流インフラ整備も、市政府や市営企業が主導して推進している。

義烏市政府はECビジネスの育成と発展を目的とした各種施策を早期から実施してきた。例えば、「義烏購」のECプラットフォームや「電商換市」政策などは、政府主導によるECビジネス促進の代表例として挙げられる。当初、義烏市政府はEC村に対する積極的な関与を行っていなかったが、2015年以降に方針を大きく転換し、EC村への支援を強化した。同年、市政府内に市場発展委員会が設立され、「百村電商プロジェクト」が開始された。この委員会に所属するEC科は、EC事業者数、EC貨物の発送量、EC総売上などの指標に基づき、各EC村を1つ星から5つ星までにランク付けし、評価結果を公表している。さらに、4つ星以上の評価を得た村には市から奨励金が交付される制度が導入された。

また、ECにおけるラスト・マイル配送の利便性の向上を図るため、市場発展委員会は中国郵政と提携し、農村EC公共サービス・ステーション・ネットワークの構築を進めている。従来の郵便局に加え、580の中小規模小売店舗をサービス拠点としてネットワークに組み入れた。さらに、農産品ECの拡大を目的に、民間企業が運営する「緑禾網」のプラットフォームと連携し、義烏域内外の農産品を取り扱うEC事業者を支援している。

義烏市政府は「ECビジネスに優しい環境を整備する」という方針を掲げ、税制や手続きにおける優遇措置を積極的に講じている。税制面では、法人化していないECアカウントには所得税を免除し、法人化している小規模EC企業には低額の定額税を適用するとともに、その他の税制減免措置も適用している。また、行政手続きの簡素化も進めており、身分証明書(IDカード)の提示だけでEC企業の新規登録を1日以内に完了できるようになっている。さらに、越境EC向けの輸出入ワンストップ・サービスの窓口を設置することで、EC企業の利便性の向上にも努めている。

教育訓練コースの受講者が年間1,000人を超える専門教育機関や、EC関連の大型イベントを主催する企業に対しても市から潤沢な補助金を支給している。また、各種EC関連の展示会や国際シンポジウム開催に

対する財政支援も行い、こうした支援策により義烏市のEC集積地としての知名度を向上させ、さらに多くのEC事業者を引き寄せる好循環が形成されている。

義烏では、市政府だけでなく、各村の役場もEC事業の発展に積極的に取り組んでおり、この取り組みがEC集積に大きく寄与している。例えば、「旧村改造」プロジェクトは村民自身の投資で進められるため、村役場が村民を取りまとめ、プロジェクトを推進する役割を果たしている。各村の役場は、プロジェクトの認可申請、村民の説得、土地の区画整理、宅地配分、建物デザイン、建設の入札、テナント誘致に至るまで、すべての段階に深く関与している。当初はテナントの確保を主な目的とし、義烏工商学院の学生や域外からのEC従事者を誘致する村が多かったが、次第に本格的なEC村の形成を目指す村が増えている。

筆者が調査した青岩劉村や龍回村の役場では、EC集積の形成と拡大を明確な目標に掲げている。具体的には、インキュベーターの設置、インターンシップの受入、無料の教育プログラムの実施などに加え、EC事業者向けの相談窓口や苦情受付を行うサービスセンターの開設、EC事業者間の交流を促進するためのサロンの運営、銀行融資の斡旋、商品仕入れ先の紹介など、多岐にわたる支援策を講じている。

7 ECエコシステムの形成・発展

義烏では、産業基盤や物的インフラの整備に加え、物流サービスをはじめEC関連のサポーター事業や補完事業を含むECエコシステムが徐々に形成・発展してきた。義烏の各EC村ではEC事業者に加え、宅配、倉庫、梱包、利用運送などの物流事業者や、ネット店舗運営代行、デザイン、撮影、商標登録、教育訓

練などの補完サービスを営む事業者も増えている。例えば、青岩劉村の事業所構成は、EC店舗を除くと、宅配22%、教育訓練17%、フォワーダー14%、撮影12.5%、デザイン9%、倉庫業8.5%、梱包・パッケージング7%、店舗運営代行5%、商標登録3%となっており、様々な補完サービスの事業者が集まっている。また、デザインや物流サービスなどのサポート事業に特化したEC村も登場しており、例えば、高橋村の2つの物流専門街には国際物流サービスを専門的に手掛ける企業が15社も軒を並べている。

義烏における小規模EC事業者は、当初はEC村の賃貸物件で事業を展開し、事業規模の拡大に伴ってECパークへの移転を図る事例が多い。こうしたニーズに対応するため、義烏全域には計30のECパーク、20のライブコマース基地が整備されており、その総床面積290万㎡に及ぶ。各パークには、各種EC補完サービス事業者のほか、データセンター、コンベンションセンター、展示場、ホテル、飲食店なども併設され、利便性の高いビジネス環境が提供されている。また、義烏では越境ECに特化した「義烏跨境電商園」の整備も進み、その総建築面積は約162万㎡、総投資額は約100億元と推定されている。2024年12月に完了予定の第一期では、10～15階建てのオフィスビル9棟、15～16階建てのアパート4棟、商店施設が建設され、概算投資額は25億元に達する見込みである。さらに、この産業パークでは「倉庫とオフィスの分離」という新しいモデルを採用し、越境EC物流パークも併設されている。これにより、異なる入居ニーズに対応するEC村とECパークは相互補完の関係を築くことができ、義烏のEC集積地の基盤としての機能をさらに強化することにつながっている。



図5 Chinagoods プラットフォーム

出所：Chinagoods 公式サイトより

また、最先端の技術を活用した EC ビジネス支援の取り組みも進んでいる。従来のアリババ、京東、Amazon、TikTok などのプラットフォームの利用に加え、浙江中国小商品城集団¹⁷は Chinagoods という新たなプラットフォームを開設した。このプラットフォームは、小商品市場にある約7.5万の店舗を中心としながらも、200万社にのぼる川上の中小零細企業にもサービスを提供している (図5)。

Chinagoods は膨大な取引データを活用し、供給側と需要側の間で、設計・生産、展示・取引、輸配送・倉庫保管、金融・与信など、幅広いニーズを効率的にマッチングさせる仕組みを構築している。さらに、マーケットエンティティ、業務プラットフォーム、サービスプラットフォーム、インフラの各要素を統合し、オンラインでの展示・取引、通関手続きの簡素化、物流のデジタル化、グローバルなサプライチェーンサービス、信用データの収集・活用、金融サービスの提供など、多岐にわたる機能を果たしている。これにより、義烏小商品市場の全面的なデジタル化を推進し、EC ビジネスのさらなる発展を目指している。

また、越境 EC 事業に特有の課題に対応するため、情報面や金融面での機能強化も進められている。同集団は2023年10月に、世界初の商品貿易分野に特化した大規模言語モデルを発表するとともに、新たにアップグレードした「Chinagoods AI (人工知能) スマートイノベーションサービスプラットフォーム」を立ち上げた。このサービスは画像・動画生成、翻訳・通訳、多言語対応デジタルヒューマン、商品情報のリリースサポートなど革新的な機能を提供し、越境 EC ビジネスをエンパワーメントすることを目指すものである。例えば、「貿語心生」というアプリケーションにより、商品紹介の動画が中国語から自動的に36カ国の言語へ翻訳され、AI デジタルヒューマンを活用した24時間連続の多言語ライブ配信が可能となる。さらに、越境 EC の決済問題の解決を目指し、小商品城集団は「Yiwu Pay」という越境決済プラットフォームを開発した。現在、この決済サービスは150以上の国と地域をカバーしており、47万社以上がユーザーとなっている。2024年1月から9月の取引総額は200億人民元を超え、前年比770%の急増となった。

V ディスカッション

この節では、先行研究の知見とフィールド調査の発見事実を踏まえ、義烏における EC 集積の形成のダイナミズムについて分析する。

義烏の小商品市場を中心とする巨大な商業集積は、EC 事業者豊富な商品調達チャネルを提供している。また、膨大な物流需要を生み出すこの伝統的な商業集積は、物流集積の生成と発展を促進し、物流集積の発展により商業集積はさらに低コストで高効率の物流サービスを利用可能となる (李 2018: 29)。この産業集積の相互作用は継続的進行し、物流集積と商業集積は相互に強化されながら、EC ビジネスの発展に有利な条件を提供する。これにより、EC 事業者が義烏に集まり、EC 集積の形成が促進される (図6)。

商業集積、物流集積、EC ビジネス集積の三者間で生まれるシナジー効果が、義烏における産業集積のダイナミズムを特徴付けている。一般的には、中間業者を排除する「中抜き」の特徴を持つ EC ビジネスの成長に伴い、伝統的な卸売市場が衰退を余儀なくされることも多い (白戸 2004: 75)。しかし、義烏の卸売市場はこの一般的な傾向とは異なる方向に進化している。小商品市場内の店舗は依然として EC 村の創業者にとって主要な仕入れ先として機能し、同時に地方政府が構築した EC プラットフォームなどによって、伝統的な商業集積である小商品市場の EC 化が進展して

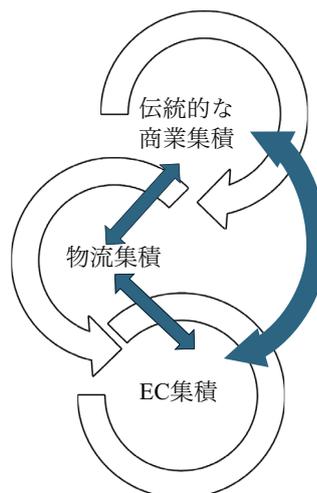


図6 義烏における産業集積のダイナミズム

出所：筆者作成

¹⁷ 義烏小商品市場を運営する会社である。

いる。また、EC集積の拡大につれて、物流の需要がさらに増大し、より多くの物流事業者を惹きつけ、宅配便をはじめとする物流サービスの拡充と物流集積の高度化に寄与している。つまり、商業集積、物流集積、EC集積は互いに依存しながら強化され、義烏における産業集積のさらなる発展を促進している。

義烏における巨大な商業集積と分厚い物流集積の存在は、EC集積の形成において重要な役割を果たすものとして先行研究が指摘する産業基盤や物流サービスといった必要条件に合致している (Li 2017; 刁ほか 2017; 史ほか 2018; Lin et al. 2022)。しかし、伝統的な商業集積と物流集積の存在だけでは、中国農村部におけるEC集積の形成を十分に説明することはできない。

まず、EC集積の形成には、ECビジネスに必要なインフラ整備が不可欠である (Lin et al. 2022)。多くのEC村の地元創業者は、道路やインターネットなどの基本的なインフラを利用して自宅でECビジネスを展開している (Tang & Zhu 2020; 王 2022)。これに対して、域外からの移住者が主役となる義烏のEC村では、独自の不動産開発モデルによりインフラの整備が進められている。このモデルによって基本的なインフラが整備され、その上で生み出された安価な物件は資金力の弱い域外のEC創業者のニーズを満たした。また、改造が進む各村では、継続的に大量の物件が供給されることで、新規創業者の「受け皿」が拡充され、既存の創業者も各自のビジネス状況に最適な物件を見つけやすい環境が整えられている。これにより、外部からの人材流入に加え、義烏のEC村間での人材の流動性も高まり、EC創業者の頻繁な移動がスピルオーバー効果を生み出している。この効果がうまく機能することで、後進の村も次第にEC村へと変貌し、義烏におけるEC集積の拡大が促進されている。

EC集積の形成を促すもう一つの要因は、ECビジネスに関する知識を獲得するための仕組みである (董ほか 2016: 64; 周・劉 2018: 80; Lin et al. 2022: 1093)。先行研究によれば、初期には創業リーダーによる「示範効果」がEC村の形成を促進する一方で (周・劉 2018: 65)、EC村が成長するにつれてこの効果は次第に薄れるのである (Mei et al. 2020)。また、住民間のコミュニケーションに依存するという伝統的な知識伝播の仕組みが存在するものの (周・劉 2018: 66; Lin et al. 2022: 1093)、複雑な知識を正確かつ効率的に伝達するには課題がある。特に、越境EC事業の展開にお

いては、国際貿易、国際物流、越境ECプラットフォームの運用規則、外国語など、専門的で豊富な知識が求められるため (Zhang 2024: 244–245)、単にEC創業者を模倣するだけでは、このような知識の獲得は困難である。つまり、「示範効果」や伝統的な知識伝播の仕組みには限界があり、EC村のさらなる発展を遂げるためには、より高度な知識ソースとその伝播の仕組みを構築する必要がある。

これに関して義烏では、工商学院をはじめとする地元教育機関の実践重視の教育プログラムにより、知識伝播と高度人材の育成といった課題の解決が図られている。前述のように、同学院は多様なEC関連の専門知識を学ぶことのできる専攻を設置していることに加え、実際のEC創業を行う教育プロジェクトも導入している。この実践重視の取り組みにより、より高度な知識を獲得した人材は、知識の「源泉」として周辺のEC村に輩出されている。また、各ECプラットフォームとの緊密な連携により、学生が外部からの最新知識を常に吸収できる環境が整えられている。さらに、EC創業の成功者が客員教員として学校に戻り、より実践的な知識を教授している。加えて、各村ではECに関する民間教育研修機関も数多く設立されている。このように、教育機関、EC創業者、ECプラットフォームが連携し、ECに関する知識と人材を提供する仕組みが形成されつつある。この高度な知識を効率的に伝播する仕組みは、義烏におけるEC集積の形成と発展を支える重要なファクターである。

EC村の形成は、関連産業や補完サービスを引き寄せ、エコシステムを構築し、新規参入を容易にすることで、EC村のさらなる成長を促進する (Lin et al. 2022: 1095–1097)。しかし、地方政府の認識不足や経験不足により、EC村の順調な成長が果たされないという現象も多くの地域で見られる (Zhang et al. 2023: 531)。これに対して義烏では、市政府と村役場が連携し、ECビジネスが発展しやすいエコシステムを構築している。経営の場所、インターネット環境、物流施設などの「ハード」なインフラの整備にとどまらず、行政手続きの簡素化、税制優遇、人材育成の支援、融資のサポートなど「ソフト」な経営環境の構築にも力を注いでいる。さらに、AIなどの新技術を活用するプラットフォームの構築により、EC事業者が直面する商流、物流、情報流、資金流などの課題の緩和にも取り組んでいる。このような多様な機能を持つエコシステムが、創業者の能力を補完することで起業

のハードルを下げている。そのうえ、エコシステム内では事業間の有機的な分業・協業関係が築き上げられ、EC事業の効率性も向上している。こうした取り組みは、既存のEC事業を支えるとともに、新規参入者の増加をも促進し、結果としてEC集積の持続的な発展を実現している。

先行研究では、EC村の形成には、EC事業が都市部から農村部に移転するモデルと、地元の資源や産業基盤に依存するモデルの二つがあると指摘されている (Liu et al. 2020: 406; Wei et al. 2020: 393)。しかし、越境ECが活発に行われる義烏の

EC村の形成と発展は、どちらのモデルにも完全に合致してはいない。一般的には、豊富な国際貿易経験、便利な国際物流のサービス、高度なインターネットスキルと知識が必要であるため、農村部での越境ECの展開は都市部よりも困難であると考えられている (Zhang 2024: 244)。本研究では、義烏のEC村の事例を通じて、農村部におけるEC集積の形成と発展において鍵となるのは、産業集積としての伝統的な商業集積、利便性とコストパフォーマンスを兼ね備えた物流サービス、ECビジネスに適したインフラの整備、高度な知識ソースと人材育成の仕組み、さらに起業ハードルを下げるビジネスエコシステムといった重要なファクターであることが明らかになった (図7)。これらのファクターを取り入れたメカニズムの構築によって、農村部における越境EC集積の形成は初めて可能になるのである。

VI おわりに

本研究では、中国農村部におけるEC集積の理論的サンプルとして義烏のEC村を取り上げ、産業基盤、物流サービス、インフラの整備、知識ソースとその伝達仕組み、政府の施策、ECエコシステムの構築などの諸要因がEC集積の形成に及ぼす影響を解明した。義烏で見られるEC村の形成メカニズムは、中国農村部全体におけるEC集積が今後いかなる方向に進化するかをも示唆しているといえる。

先行研究でも指摘されているように、人材不足や資金不足、立地条件による情報の非対称性といった問題

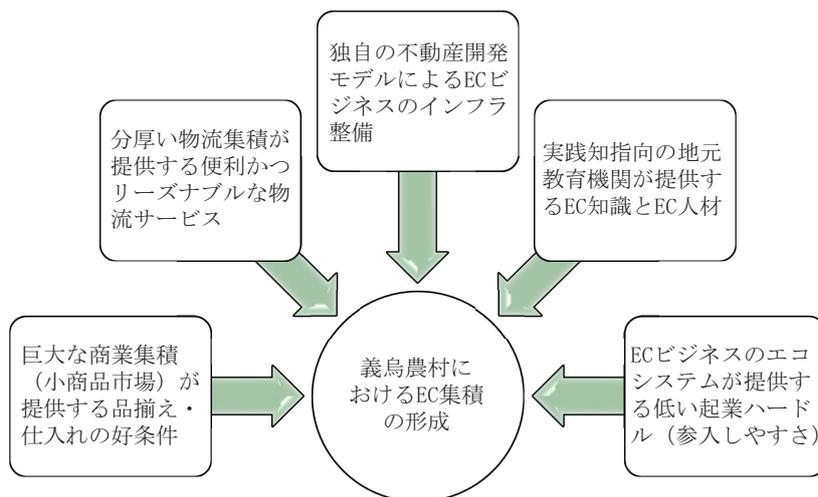


図7 義烏EC集積の形成メカニズム

出所：筆者作成

は、しばしばEC村のさらなる発展を制約する (Wei et al. 2020: 402)。たとえ産業基盤や物流サービスによりEC村が形成されたとしても、これらの制約により衰退や消失に向かう可能性もある (彭・丁 2024: 110-113)。これに対して義烏では、既存の商業集積と物流集積、基本的インフラのほか、短期大学や専門教育機関を核とした知識伝達の仕組み、地方政府の適切な施策、有機的なECエコシステムがこれらの制約を緩和し、域内のEC村が持続的な発展を遂げている。また、EC集積と伝統的な商業集積、物流集積間のシナジー効果により、ECビジネスを中心とした産業集積全体の持続的な発展が進んでいる。これは、義烏のEC村で越境ECと国際物流サービスが急速に成長していることによっても裏付けられる。

「インターネット+」の普及は農村部および経済後進地域に新たな機会をもたらす一方で、デジタル・デバインド (digital divide) や地域格差を生み出す可能性があることも指摘されている (Wei et al. 2020: 383)。本研究では、EC村の発展がトリクルダウン効果に依存せず、新技術の恩恵を農村の「草根階層」へ直接届けることで、デジタル・デバインドの解消に貢献している点も明らかにした。

このような農村部EC集積の発展は、中国の既存の流通システムに大きなインパクトを与えている。村民はECのユーザーだけでなく、ECビジネスのプレーヤーとして登場し、都市部と農村部をつなぐ双方向的な流通システムの発展を推進している。また、進化し続ける農村部のEC集積は今後も、農村振興のエンジンとして機能し、農村部経済全体の活性化につながる

と期待される。

本研究にはいくつか課題が残されている。本稿で取り上げた事例は同じ地域内の5つのEC村に限定されており、導き出された結論が多様なタイプがある中国のEC村全体をカバーしているとは言い難い。従って、同域内の事例の追加や他地域のEC村群との比較など、さらなる調査・検証が必要である。また、越境EC村の発展に関しては、アンチグローバル化の動きが及ぼす影響にも注目すべきである。今後もこれらの点を継続して研究し、解明に努めたい。

謝辞

本稿は、科学研究費補助金基盤研究C（課題番号23K01655）の支援を受けて行われている研究成果の一部を反映している。現地調査の際には、多くの義烏の皆様にご協力を頂いた。ご氏名は伏せさせていただくが、心より感謝している。

参考文献

(日本語文献)

イン, ロバート K

1996 『ケース・スタディの方法 第2版』 近藤公彦(訳)、千倉書房 (Yin, Robert K 1994 Case study research 2/e. Sage Publications.).

王 亦菲

2022 「中国農村部におけるECクラスター形成要因に関する研究：QCAアプローチ」『中国経済経営研究』5(2): 1-18.

経済産業省

2024 『令和5年度電子商取引に関する市場調査報告書』。

白戸 伸一

2004 「デジタル時代の流通論」『浦和論叢』32: 53-79。

横澤 公道・辺 成祐・向井 悠一郎

2013 「ケース・スタディ方法論：どのアプローチを選ぶか」『赤門マネジメント・レビュー』12(1): 41-68。

李 瑞雪

2018 「商業集積の発展とロジスティクス・クラスターの形成(II)：義烏の事例」『経営志林』55(1): 17-37。

李 瑞雪・王 亦菲

2020a 「何が寒村をEC集積地に変貌させたのか：中国最大の“淘宝村”義烏の事例(前編)」『ロジスティクス・ビジネス』20(3): 54-60。

李 瑞雪・王 亦菲

2020b 「何が寒村をEC集積地に変貌させたのか：中国最大の“淘宝村”義烏の事例(後編)」『ロジスティクス・ビジネス』20(4): 66-70。

李 瑞雪・王 亦菲

2020c 「中国“淘宝村”探訪記：山東省曹県(前編) 地元の伝統的産業をEC事業化」『ロジスティクス・

ビジネス』20(6): 64-68。

李 瑞雪・王 亦菲

2020d 「中国“淘宝村”探訪記：山東省曹県(後編) 物流サービスの発達と農村振興政策」『ロジスティクス・ビジネス』20(7): 54-58。

(英語文献)

Glaser, B. G., & Strauss, A. L.

1967 *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. Mill Valley, CA: Sociology Press.

Li, Anthony HF.

2017 E-commerce and Taobao Villages: A Promise for China's Rural Development? *China Perspectives* 2017(3): 57-62.

Lin, J., Li, H., Lin, M., & Li, C.

2022 Rural e-commerce in China: Spatial dynamics of Taobao Villages development in Zhejiang Province. *Growth and Change* 53(3): 1082-1101.

Liu, M., Zhang, Q., Gao, S., & Huang, J.

2020 The spatial aggregation of rural e-commerce in China: An empirical investigation into Taobao Villages. *Journal of Rural Studies* 80: 403-417.

Mei, Y., Mao, D., Lu, Y., & Chu, W.

2020 Effects and mechanisms of rural E-commerce clusters on households' entrepreneurship behavior in China. *Growth and Change* 51(4): 1588-1610.

Phelps, N., Wang, C., Miao, J. T., & Zhang, J.

2022 E-commerce: A platform for local economic development? Evidence from Taobao Villages in Zhejiang Province, China. *Transactions in Planning and Urban Research* 1(3-4): 251-268.

Qi, J., Zheng, X., & Guo, H.

2019 The formation of Taobao villages in China. *China Economic Review* 53: 106-127.

Tang, W., & Zhu, J.

2020 Informality and rural industry: Rethinking the impacts of E-Commerce on rural development in China. *Journal of Rural Studies* 75: 20-29.

Wang, C. C., Miao, J. T., Phelps, N. A., & Zhang, J.

2021 E-commerce and the transformation of the rural: The Taobao village phenomenon in Zhejiang Province, China. *Journal of Rural Studies* 81: 159-169.

Wei, Y. D., Lin, J., & Zhang, L.

2020 E-commerce, Taobao villages and regional development in China. *Geographical Review* 110(3): 380-405.

Zhang, J., Wang, C. C., Phelps, N. A., & Miao, J. T.

2023 Rural e-commerce and emerging paths toward product renewal: Evidence from Taobao villages in Zhejiang province, China. *The Professional Geographer* 75(3): 521-535.

Zhang, J.

2024 A Study on Strategies for the Collaborative Development of Multi-Subject Cross-border E-commerce in Rural Areas. *Academic Journal of Business & Management* 6(3): 243–249.

(中国語文献)

阿里研究院

2019 『中国淘宝村研究報告 (2009–2019)』。

阿里研究院

2020 『1%の改变—2020中国淘宝村研究報告』。

阿里研究院

(n.a.) 『淘宝村名单 (各年版)』。

刁 貝娣・陳 崑崙・丁 鐳・曾 克峰

2017 「中国淘宝村的空間分布格局及其影響因素」『熱帶地理』37(1): 56–65。

董 坤祥・侯 文華・丁 慧平・王 萍萍

2016 「創造新導向的農村電商集群發展研究：基于遂昌模式和沙集模式的分析」『農業經濟問題』(10): 60–69。

彭 紅艷・丁 志偉

2024 「中国淘宝村“增長—消失”的時空特征及影響因素分析」『世界地理研究』33(4): 103–116。

史 修松・張 洋・張 効禎

2018 「農村電商產業集群發展區域差異研究：来自淘宝村的証据」『淮陰工学院學報』35(6): 64–70。

曾 億武・郭 紅東

2016a 「農產品淘宝村形成機理：一個多案例研究」『農業經濟問題』(4): 39–48。

曾 億武・郭 紅東

2016b 「電子商務協會促進淘宝村發展的機理及其運行機制：廣東省揭陽市軍埔村的實踐為例」『中国農村經濟』(6): 51–60。

曾 億武・邱 東茂・沈 逸婷・郭 紅東

2015 「淘宝村形成過程研究：以東風村和軍埔村為例」『經濟地理』35(12): 90–97。

中国商務部

2023 『中国電子商務報告2022』。

周 応恒・劉 常瑜

2018 「淘宝村”農戶電商創業集聚現象的成因探究：基于沙集鎮和顏集鎮的調研」『南方經濟』(6): 62–84。

(ウェブページ)

義烏市市場發展委員會

2024 「關於对義烏市十六屆人大三次會議江東街道2号建議答復的函」http://www.yw.gov.cn/art/2024/6/14/art_1229668134_59483935.html (最終閱覽日2024年11月3日)

義烏市陸港集團

2024-05-21 「義烏公路港獲評中国物流学会産学研基地」http://www.yw.gov.cn/art/2024/5/21/art_1229134684_59480348.html (最終閱覽日2024年11月5日)

59480348.html (最終閱覽日2024年11月5日)

義烏商報

2022-01-17 「去年義烏快件(跨境)監管中心 數清閩業務位居全國第一」http://szb1.ywcity.cn/content/202201/07/content_191639.html (最終閱覽日2024年11月4日)

2024-07-16 「中国郵政義烏義烏至馬尼拉國際貨運航線開通」http://www.yw.gov.cn/art/2024/7/16/art_1229187636_59487869.html (最終閱覽日2024年11月3日)

義烏統計局

2024 『2023年義烏市國民經濟和社会發展統計公報』https://zjcmpublic.oss-cn-hangzhou-zwynet-d01-a.internet.cloud.zj.gov.cn/jcms_files/jcms1/web3549/site/attach/0/bb2669e30f334dfa91dd7b459a809cd3.pdf (最終閱覽日2024年11月4日)

人民日報

2023-03-03 「走進義烏看活力」<http://society.people.com.cn/gb/n1/2023/0303/c1008-32635265.html> (最終閱覽日2024年11月3日)

2023-10-30 「2023年度前三季度、全國農村網絡零售額達到1.7萬億元、增長12.2%」http://paper.people.com.cn/rmrb/html/2023-10/30/nw.D110000renmr_20231030_1-09.htm (最終閱覽日2024年11月1日)

2024-06-04 「全國跨境電商主體超12萬家」http://paper.people.com.cn/rmrb/html/2024-06/04/nw.D110000renmr_20240604_3-02.htm, (最終閱覽日2024年11月1日)

浙江省郵政管理局

2024-07-18 「義烏至馬尼拉國際貨運航線開通」<http://zj.spb.gov.cn/zjsyzglj/c100057/c100061/202407/a20087dfcb074f2db8196bcca6bec6c1.shtml> (最終閱覽日2024年11月3日)

2024-09-04 「義烏局積極推動跨境寄遞業務」<http://zj.spb.gov.cn/zjsyzglj/c100057/c100061/202409/9d619b1feb941de8930811e9a5bfd0.shtml> (最終閱覽日2024年11月4日)

智研シンクタンク

2022 「2021年中国快遞行業發展現狀及市場競争格局分析」<https://www.chyxx.com/industry/202202/994514.html> (最終閱覽日2024年11月5日)

中国國家統計局

2024 『中華人民共和國2023年國民經濟和社会發展統計公報』https://www.stats.gov.cn/sj/zxfb/202402/t20240228_1947915.html (最終閱覽日2024年11月2日)

中国寧波網

2020-12-22 「世界第一港」新跨越 從三個維度看總書記點讚的「硬核」力量 <http://news.cnnb.com.cn/system/2020/12/22/030214438.shtml> (最終閱覽日2024年11月3日)

寧波海關

2023-12-19 「義烏—寧波舟山港万海航運海鉄聯運直裝班

列首發」http://ningbo.customs.gov.cn/ningbo_customs/ztjj92/4339819/5579398/index.html (最終閲覧日2024年11月3日)

澎湃新聞

「義烏成全國首個年快遞量破百億件縣級市、總量占浙江四成」<https://baijiahao.baidu.com/s?id=17856103253>

97729257&wfr=spider&for=pc (最終閲覧日2024年11月3日)

Chinagoods 公式サイト

https://www.chinagoods.com/perform_introduce (最終閲覧日2024年11月5日)

The Formation and Development Dynamics of E-Commerce Clusters in Rural China:

Based on A Case Study of Yiwu's E-Commerce Village

Ruixue LI*¹ and Yifei WANG*²

With the spread of e-commerce, a new type of industrial cluster called “e-commerce villages” (EC villages) has been forming in rural areas of China, based on online retailing. These rural e-commerce operators are not only targeting the domestic market in China but are also actively participating in cross-border e-commerce. The rapid growth of EC villages has contributed to rural revitalization and significantly influenced the development of rural economies. This study focuses on EC villages engaged in cross-border e-commerce, aiming to elucidate the dynamics behind the formation and development of these e-commerce clusters. To explore the factors contributing to the formation of e-commerce clusters in rural areas, field research was conducted in five EC villages located in Yiwu City, Zhejiang Province, China. By understanding the actual conditions of EC villages and building upon insights from existing research, the study analyzes the mechanisms behind the formation of e-commerce clusters in rural areas.

The field research confirmed that the importance of related industrial foundations and basic infrastructure aligns with existing research. Additionally, the study identified several key factors for the formation of e-commerce clusters: logistics services that combine convenience and cost-effectiveness, infrastructure tailored to e-commerce businesses, mechanisms for advanced knowledge sharing and human resource development, and a business ecosystem that lowers the barriers to entrepreneurship. Furthermore, the synergy effects generated among commercial clusters, logistics clusters, and e-commerce business clusters in Yiwu were found to be critical in promoting the sustainable development of regional industrial clusters.

Keywords

E-commerce, EC villages industrial clusters, China, rural areas, logistics

*¹ Hosei University

*² Southwest Jiaotong University

ポスト場所における領土と統治

— 日台のボーダーを越えて暮らす人々の購買行動から —

藤野 陽平*

新型コロナウイルスの感染拡大後に急激にオンライン空間が拡張するに伴い、リアルとバーチャルという二元論的な発想では十分に捉えきれない空間が拡張し続けている。本研究ではそうした場所をポスト場所という概念で捉える。議論するのはこの新しい空間における領土と統治のあり方である。従来は国民国家というレベルで切り分けられてきた領土が、サイバー空間という別の空間ではインターネットやスマートフォンのサービスをいかに使わせるかという、サイバー空間の囲い込みによって行われている。

現代では国境で区切られた国家という統治と、囲い込まれたサイバー空間という統治の2つが同時に存在している。本研究では日本と台湾とを行き来しながら生活する人々がどのように国境というボーダーを超えた購買行動をしているのかを事例とする。新たな2つの統治の下、時に統治を受け入れ、時にそれに抵抗し、さらにそれを逆手に取って利用するようなポスト場所を生き抜くノマドたちのあり方を通じてこの時代の領土や統治、そしてその中でいかに主体性を維持しているのかといった問題について考察する。

キーワード

Eコマース、シミュラークル、非場所、コミュニケーション資本主義、ノマディズム

目次

I はじめに——ポスト場所時代の地域、フィールド、人類学	5 現地でのEコマース利用
1 メディア化する社会と身体	6 食
2 拡張するサイバー空間とポストコロナ時代の「地域」	7 タクシー配車アプリ
II ポスト・コロナで変わる空間	8 薬品
1 コロナ前後で変容する空間	9 ファングッズなど入手困難なもの
2 場所、非場所からポスト場所へ	10 なかったら作ってしまえばいい!
3 目的	IV 分析
III 越境者の購買行動に関するインタビュー調査	1 コミュニケーション資本主義
1 概要	2 加速するシミュラークル化とハイパーマーケット
2 拡大する、台湾/日本で買える日本/台湾製品	3 究極の非場所としてのEコマース
3 Eコマース	V ポスト場所を生きる遊牧民たち
4 ボーダーとしての送料——現地で購入し、持ち込む	VI おわりに

* 北海道大学

I はじめに

——ポスト場所時代の地域、フィールド、人類学

1 メディア化する社会と身体

新型コロナウイルスの感染拡大はこれまでの社会、空間、身体のある方を一変させた。感染拡大期には物理的な移動が制限され、国境を越えることはおろか、都道府県を跨いだ移動すら憚られ、全世界の人間が自宅軟禁の状態に置かれた。

スマートフォンの登場や SNS の広がりによってそれまでも徐々に進んでいたのだが、コロナによる移動制限によってヒトの身体がサイバー空間へと急激に広がっていった。オンラインでのコミュニケーションが広がるにつれ、自分の身体はパソコンやスマートフォンと一体化し、その自分と一体化したパソコンに内蔵されているカメラやスピーカーが接続している相手の目や口になり、相手の身体の一部であるパソコンが私の目や口になるという個が融解し、全体が接続されるポスト・ヒューマン的な状況が急激に広がりをみせた。

この新しく現れた世界ではフィールド、ホームといった人類学にとって基盤となる概念の再検討が必要となっている。異文化を対象とした研究を基礎とする人類学にとって移動ができない時代、むしろメディアを対象とした人類学のフィールドが拡散するという倒錯した状況となっている。自分の身体の一部となったパソコンの画面にはそれまで現地調査でインタビューを行った相手と、自宅にしながらコミュニケーションをとっているのだ。この時代のフィールドとはどういうものなのだろうか。従来はたとえば台湾で調査すれば台湾の某ということができたが、ポストコロナの状況ではホームにしながらフィールドワークができてしまうし、逆にフィールドに行ったところでホームと断絶することはできない¹。

2 拡張するサイバー空間とポストコロナ時代の「地域」

オンライン空間を対象としたフィールドワークの必要性も高まっているが、たとえばゲーム空間における中国を調査した場合、それを中国ということが可能なのだろうか。サイバー空間において地域というものは

設定可能なのだろうか。確かに自動翻訳のサービスの質は向上しているとはいえ、外国語のサイトを閲覧するには障壁が存在しており今なお言語は地域の指標となるだろう。時差も大きな要因だ。新型コロナウイルスの感染が収束しない中、出国できない留学生たちが母国にしながら留学先で深夜や早朝に行われる授業を受けるといった困難があったことを耳にしているし、それまでの常識では考えられない時間帯に発表が行われているオンラインの国際学会に私自身参加したこともある。そのほか、国家もサイバー空間が広がる現在においても一定の地域のイメージを彷彿とさせる。

サイバー空間では性別も年齢も民族も人間であるかどうかも自由に選択できる。松本 (2021) がゲーム「三国志」においてヒトはいかに「曹操」になるのかを検討したように、サイバー空間では誰でもが世界史に名を轟かせる英雄になることもできる。歴史上の曹操は中国人だが、プレイヤーは何人であっても構わない。もちろんプレイヤーは自分が曹操ではない事はわかっているものの、デジタルゲームの持つハーフリアル (ユール 2016) という特性から一定の「中国人」としてのリアリティも持つこととなる。それはファミリーコンピュータの草創期のゲーム「イースルカンフー」にはすでに体験できたことであり、「ストリートファイター」シリーズのチュンリーへと引き継がれ、世界中のプレイヤーたちは幾度となく「中国人」になってきた (藤野 2024)。

従来のリアルな空間で行ってきた人類学者のフィールドワークは、たとえば「中国」に行けば、そこにあるものは「中国」の何かだったが、今日拡大するサイバー空間では単純に「中国」と言い切ってしまうのは難しい。それでいて一定の「中国」がそこにはある。このポストコロナのハーフリアルな時代における空間は人文社会科学に共通した課題である。

II ポスト・コロナで変わる空間

1 コロナ前後で変容する空間

(1) コロナの終息とともに現れたオンライン・オフラインのあわいの世界

新型コロナウイルスの感染拡大で閉じ込められた人間たちは「オンライン会議」「オンライン飲み会」「オンライン

¹ こうした問題についてはすでに藤野 (2023) で検討している。併せて参照いただければ幸いである。

墓参」など、考える限りの「オンライン某」という取り組みを生み出し、身体をサイバー空間へと解放していった。オンライン観光やオンライン飲み会のように、そのうちの多くは一過性のブームで終わり、淘汰されたものがある一方で、オンライン会議、オンライン授業、在宅勤務のようにある程度定着したものも存在している。当時はこれ以降、全ての局面がオンライン化するのではないかと、近い将来 VR ゴーグルを全員が着用してメタバースの中で暮らす時代が来るのではないかとという雰囲気もあったが、実際のところメタバースは一部の人が利用しているだけにとどまった。当時、新しいメディアを駆使することで何でもバーチャルにリアルが体験できると思われてきたが、一方で思ったほどリアルとサイバーは繋がっていなかったことにも社会は気づき始めている。例えば、オンライン会議で初めてあった人に、その後、実際リアルに直面すると全然違う印象を受けるという経験をした人は少なくないだろう。リアルとバーチャルの断絶も経験しつつ人はオンライン化も併用している。完全にオンラインを排除するのでも、完全に受け入れるのでもない状況となっている。0か100かであれば単純であるが、実際はより複雑であり、だからこそ検討の必要が生じている。

(2) サイバー空間上の国境

国内で使っていた Google や YouTube をそのまま国外でも利用できるように、当然のことながら大多数のインターネットを用いた新しいサービスの展開には国境というものは関係なく利用できる。インターネットのブラウジング以外にも例えば Uber のようなサービスは日本で設定してさえおけば、台湾や韓国などに行った時に特別な設定など不要でそのまま利用することができる。

一方で強く国境を意識させるのが中国の存在だろう。一度中国国内に入るとそれまで利用できていたスマートフォンの買い物、タクシー、地図といったアプリの多くが利用できなくなる。ありとあらゆることができるように思わせてくれたスマートフォンが、写真を撮ることができるくらいの小さな箱になってしまう。そこで中国のアプリを入れることで、その機能を一つずつ取り戻していくのだが、それは中国政府のリクエストを受け入れるということと表裏一体である。また、海外に暮らす中国人たちを見ても、海外に出てきているにも拘わらず WeChat や Red といった中国の

アプリを使用し続ける人が多い。彼（女）らは中国にとどまっているともいえないだろうか。

本稿では中国の政府によって統制を受けているメディア状況を批判するという意図はない。むしろ、国境を越えて移動しているにもかかわらず、いずれも国外の企業が提供する同じアプリを使えることの方に注目して議論を進めていきたい。

(3) デジタル空間における囲い込み

この問題を考える上で重要なのはデジタル時代の囲い込みの問題である。それまでコモンであった共有地が地主に囲い込まれ小作人らが追い出され都市に移動、賃金労働者となっていったという16世紀から18世紀のイギリスで起きた囲い込み(エンクロージャー)と同じように、インターネットの世界も国家やGAFA等に代表される大手の企業によって富を生み出すシステムが独占されている状況がみられる。

特にジョディ・ディーンの議論を伊藤らが発展させたように(伊藤編 2019)、コミュニケーション資本主義化が進むことで、この問題がクローズアップされる。コミュニケーション資本主義とは従来、資本の対象ではなかったコミュニケーションが、資本の対象になっていくことを概念化したものであるが、例えば写真を撮ることは従来、本人やその家族友人とのコミュニケーションしか生まなかったが、SNSが登場することで写真をアップし、いいねを集めるようになるとプラットフォームなどが富を得ているようなことがそれにあたる。

多くのインターネットやアプリケーションが無料、もしくはサービスに対して過剰に安価に提供されている。ユーザーたちは安価で便利であるため、喜んで利用するが、利用すればするほど情報が集められ、ビッグデータを構築する。このビッグデータが今日、莫大な資本を生み出すのだが、サービスを提供する企業はこれを独占的に利用することができる。まさに囲い込みが起き、無料で便利なサービスを使うことで知らず知らずのうちに、統治を受け入れている。このように考えると自国で使えるサービスが外国に行っても使えるということはどういった意味があるのかを考える必要が生じている。

2 場所、非場所からポスト場所へ

ポストコロナの社会に現れた新しい空間を考察する上でマルク・オジェの場所と非場所の概念をもとにポ

スト場所という概念を提出したい。オジェによれば場所とはアイデンティティを構築し、関係を結び、歴史をそなえるものである一方で、非場所とはアイデンティティを構築するとも、関係を結ぶとも、歴史をそなえるとも言えない空間であるという。空港や郊外型の大型スーパーのような場所が非場所の代表であろうが、オジェによればスーパーモダニティが非場所をうむのだという（オジェ 2017: 104）。

スーパーモダニティの時代を超えて、ポストコロナの現在、2次元空間が3次元空間へと拡張することで場所や非場所といった概念では説明のつかない場所が生じている。こうした場所をここではポスト場所という概念で捉えたい。

例えば、2022年7-9月に東京国立博物館で日中国交正常化50周年記念として特別デジタル展「故宮の世界」という特別展が行われた。実に奇妙な場所である。いうまでもなく故宮は中国の北京にあるが、実際の展示は東京上野の東京国立博物館で行われる。そして、デジタル化された展示なので、技術的には自宅でPCやVRゴーグルで見ることも可能なはずである。北京に実物の故宮を見に行くのでも、自宅でオンラインという訳でもなく、東京の国立博物館にてデジタル複製された故宮を見学するのだ。リアルな場所であるトーハクでやっているからこそ、この展示には意味があるのであって、中国まで行くのとも自宅のパソコンを使いインターネットで見るのとも違う独特な経験がそこに生じている。このような新たな技術を取り込んで生じている場所を非場所の現代的展開と捉えるのではなく、地域や国家が崩壊しシミュラクル化したポスト場所として考えていきたい。

3 目的

そこでポストコロナの状況で加速するポスト場所化する現代社会の場所を考えることで、領土と統治のあり方を考えることが本研究の目的である。特にオンライン化が進み、空間と距離の概念が再構築される現在、サイバー空間とリアルな空間との間でどういった実践が行われるのだろうか。実際にボーダーを超えた人々がEコマースなどをどの様に利用しているのかという購買行動からこの問題を考える。特に在台日本人が日

本商品をどのように購入しているのか、もしくは在日台湾人が台湾商品を購入しているのかといった、購買行動をその事例としながら、ポスト場所時代の領土、フィールド、空間、そして統治、労働、経済といったものを考えることとする。

III 越境者の購買行動に関するインタビュー調査

1 概要

本研究では、在台日本人3名（いずれもオンラインインタビュー）、在日台湾人4名（いずれも対面でのインタビュー）、日本商品を頻繁に購入する在台台湾人1名（オンラインインタビュー）に対してインタビュー調査を実施した。いずれも本研究の目的を説明し、公開前に事前に内容を確認してもらった上で、研究発表に用いることを了承してもらっている。なお、何を購入しているのかというのは極度にプライバシーに関わるものであるため、極力個人が特定できないように記述している。

質問内容はEコマースの利用状況、在日台湾人であれば台湾の商品をどのように購入しているのか、また在台日本人であれば日本の商品をどのように購入しているのか、また、関連する情報についても質問した。

2 拡大する、台湾/日本で買える日本/台湾製品

今回のインタビューでは日本で台湾商品を、台湾で日本商品を現地調達する様子が広く聞かれた。近年台湾では日系の商店の営業が広がっている。代表的なのはDAISO（台湾では台湾大創百貨股份有限公司）とドン・キホーテ（同、DON DON DONKI）で本稿を執筆中の2024年12月の時点で台湾でDAISOは80店舗を、ドン・キホーテは5店舗を営業している²。そのほかにはマツモトキヨシ（同、台湾松本清、24店舗³）、サツドラ（同、台湾札幌薬粧）のようなドラッグストアも日系の企業が参入している。台湾企業であるが日本の医薬品を扱う「日薬本舗」というドラッグストアも経営している。また、一般のスーパーマーケットでも日本の商品は以前に比べて格段に手に入りやすくなっている。そのほかにもユニクロ（同、

2 ドン・キホーテのウェブサイト (https://www.donki.com/store/shop_list.php?pref=55) による。(2024年12月1日最終閲覧)

3 マツモトキヨシのウェブサイト (<https://www.matsumotokiyoshi-tw.com/shopinfo>) による。(2024年12月18日最終閲覧)

UNIQLO、73店舗⁴⁾やシママラ（同、思夢樂、44店舗⁵⁾といったアパレルも台湾の各地に展開しているし、紀伊國屋やジュンク堂などが営業しており日本の書籍を取り扱っている。その他にも枚挙にいとまがないが、自動車、家電など多くの「日本」製品が台湾にはあふれている。

特筆すべきは台湾式の「日本食」だろう。そもそも台湾における日本食は日本統治時代から存在したので、外省人と呼ばれる戦後中国大陸から台湾に移住した人々が持ち込んだ料理（例えば小籠包や牛肉麵）よりも「伝統」的なものと言えるだろう。それゆえに日本統治期から続く老舗日本料理も営業している。ただし、こうした日本料理は多分に台湾化しており、日本の和食というより台湾式の「日式料理」として捉えたほうがいいだろう。こうしたローカルな日式料理の他にも牛丼、回転寿司、うどんやラーメン、カレー、焼肉などのチェーン店は各地に展開していて台湾で手軽に日式料理に触れることができる。さらにモスバーガーやサイゼリアも展開しているが、いずれも日式ハンバーガー店、日式イタリア料理店として台湾で認識されている。そういう意味では上述のラーメンやカレーも中華料理やインド料理ではなく日式料理として受容されている。こうした状況はグローカル化する日本料理の典型であろう。郊外型の大型スーパーマーケットや国道沿いのチェーンの飲食店はオジェのいう非場所に該当すると思うが、日本でも台湾でもその他の国でも、現地の文脈とは断絶して、同じものが同じように提供されている点では、非場所としての日式料理チェーン店の展開は実に興味深い。本稿の目的とは焦点が異なっているので、これは今後の課題とし別稿を用意したい。

さて、私が博士論文に向けた長期フィールドワークを台湾で行った2005–2007年の時点でも日本商品を購入することはできたが、その種類はごく限られていた。確かに当時から DAISO は台湾で営業していたが店舗数も少なく、どうしても必要な場合、新光三越や遠東 SOGO のような日系の百貨店に行くしかなかった。当然値段は割高である。これらの新しく参入している日系の商店は、もちろん日本で購入するより価格は高いものの、台湾で暮らす人々にとって日本商品を手に取り

りやすい存在に変えている。

一方の日本でも台湾商品を手に入れることが容易になっている。アジアの食品を扱う店舗が増えていることに加えて、カルディや業務スーパー、ドン・キホーテなど外国の食品や調味料を扱う店舗で台湾食品の取り扱いが拡大しており、気軽に購入することができる。ただし、台湾で手に入る日本商品は家電や衣料品、薬品、食料品と多岐にわたるところ、日本で入手できる台湾商品は食料品に偏っている。こうしたところにも今なおポストコロニアル的な不均衡が今なお見て取れるが、いずれにせよ近年の日台における相互の商品販売の拡大によって越境Eコマースの必要性が下がっているとと言えるかもしれない。

3 Eコマース

日本でも台湾でもEコマースを使って自国のものを取り寄せるという行為はみられた。ただし、送料がかかってしまうので、多くの場合、母国にいたときと同じようにEコマースを利用しているというケースは少なかった。むしろ、その送料を回避するような行為がみられた。

(1) 送料無料の時を利用する

日本に暮らす台湾人留学生のケースである。まだ留学前であり、台湾で大学に通っている頃に新型コロナウイルスの感染拡大が発生する。大学では授業がなくなったので寮から自宅へ戻った。ちょうどその際に Amazon の送料無料のキャンペーンが行われたので、元々日本の漫画やアニメファンであった彼女は日本からマンガを大量に購入したのだという。大学の寮では狭くて置く場所がないが、自宅であれば気にせず注文できたのだそうだ。

(2) 日本のEコマース×集荷というサービス

台湾在住の台湾人で日本の書籍をしばしば購入するインフォーマントは日本のBOOKOFFのEコマースサイトでセールが行われる際にまとめて購入するという。その際に直接台湾に配達してもらうのではなく、一旦、海外発送代行の業者宛に配送し、一括して台湾に発送してもらっているという。彼が利用しているの

4 ユニクロのウェブサイト (<https://www.uniqlo.com/tw/stores/>) による。(2024年12月19日最終閲覧)

5 しまむらのウェブサイト (<https://shimamura.com.tw/store-info#>) による。(2024年12月19日最終閲覧)

は「御用聞き屋」⁶という業者で、私書箱を作り、日本のEコマースサイトから注文したものをまとめて海外へ転送するサービスを提供している。台湾でも展開する日系書店でも購入できるのだが、それでは新品である上に日本で買うよりも高くつくため、BOOKOFFのセールで中古品を安価で購入すれば、数千円の御用聞き屋の使用料を払ってもこちらが安いのだという。

(3) こだわりの品は日本から取り寄せる

台湾では購入できない日本の抹茶をEコマースで取り寄せているというケースも聞かれた。茶道を習うほどではないが、自分で抹茶をたてるというインフォーマントは抹茶の中でも、丸久小山園の抹茶⁷を取り寄せていて、ここでは海外発送用のサイト⁸もあるので、これを利用している。茶器は台湾でも購入可能だが割高のため、日本の楽天で購入し送ってもらったという。

4 ボーダーとしての送料

——現地で購入し、持ち込む

インタビューで母国の商品をどのように手に入れているのかについて広く聞かれたのは、「帰国時にまとめ買いして持ち込む」、「家族に郵送してもらったり、帰国時に購入したりする」というように自分で運んできたり、知人が来るときに持ってきてもらうということである。逆に自分が日本にいる場合、「台湾の友人たちが欲しいものがあると直接Eコマースサイトで買うと高くつくからと、私に連絡してくるので、私が注文して受け取り台湾に発送する」と台湾の友人から日本商品の代理購入を依頼されることもあるという。さらに欲しいものがあったとしても、シンプルに我慢するという人もいた。

台湾の食べ物を買いたい、台湾から持ってくるインスタント麺やお菓子は自分で持ってくる。それ以外は我慢する。自分で帰る時と知人が来るときに持ってきてもらう。今のところそれ以外にどうしても必要なものはない。

5 現地でのEコマース利用

(1) 大きなものや運びにくいものを持つ物質性

現地でEコマースをどのように使っているのかについても質問しているが、多くの場合日用品を購入しているようである。特に水やお米といった重たくて自分で運びたくないものが購入されていた。これは越境者に限らない広くみられる傾向であるだろう。

また、自分では運べない大きなものを購入すると答えた人が複数いた。インフォーマントの一人の台湾人留学生は、来日後、大学の寮に住んでいたが、寮に住めるのは半年だけなので、その後は自分でアパートを借りて暮らすことになる。アパートには家具などが付いていないので、購入する必要があるが、引越しの際に自分では車を持っていないので、大きなものをAmazonで注文したという。

しかし、Eコマースでは家具のようなものは実際の大きさとか雰囲気がわかりにくい。そこで彼女は某大手家具店に足を運び実際に直接自分の目で見て確認しそれをAmazonで注文したという。その方が安くて自宅まで運んでくれ助かったのだという。来日後1年未満の留学生は自家用車を所有していることは稀で、車を出してくれるほど親しい知人がいるとも限らない。そもそも留学生の場合、日本では車の運転免許を所有していないという人の方が多いのではないだろうか。そうした人にとって一人で運んでくるのは難しく、送料も高くつく家具のような大きなものを、Eコマースならば自宅まで運んでくれるのはありがたいというのは理解に難くない。インタビューするまでもなく想像しうる内容であるものの、ここにはデジタルの世界では関係がない、質量や容量といった物質性に関する問題が存在する。彼女は家具を購入する際に実際に現物を見に店舗まで足を運んでいるが、それ以外にも洋服はネットで買わないという。ここにもデジタルの画面越しには伝わらない物質性の問題が横たわっている。

(2) 移動の利便性が、それとも物質性が

——紙の質感とKindleの移動しやすさの間で

越境者が使うEコマースのうち、書籍を購入するというのも広く見られるもので、ここで特に物質性の問

6 御用聞き屋のサイトは以下のとおりである。<https://guide.goyokikiya.com> (2024年12月19日最終閲覧)

7 丸久小山園の抹茶のサイトは以下のとおりである。<https://www.marukyu-koyamaen.co.jp> (2024年12月19日最終閲覧)

8 海外発送用のサイトは以下のとおりである。<https://www.marukyu-koyamaen.co.jp/english/shop/> (2024年12月19日最終閲覧)

題が生じる。実際に紙の本を取り寄せるのか、KindleやPDFのようにデータで利用するのかということである。上述のブックオフのセール品を転送サービスで取り寄せていたケースや、送料無料の時期にAmazonで大量に漫画を購入したケースに見られるように、紙の本は強い人気がある。実際にPCの画面で見ると紙の本で見ると見やすいと感じる人は多いであろう。私も論文等をPDF化してハードディスクに入れているが、実際に読む際には再度プリントアウトしている。我ながら資源の無駄遣いだとは思っているが、紙の方が読みやすいと感じてしまう身体への反応は如何ともし難い。書籍の持つ物質としての側面と情報の持つデータとしての側面との間の綱引きであるが、単に便利というだけでは解決できないほど物質性は人に強く働きかけてくる。

現在日本で暮らす台湾人のインフォーマントの一人は、台湾で暮らしている間に日本の書籍をどのように購入していたのかという質問に対して、自分だけではなく一般的に台湾人はこのように購入しているとして、以下のように答える。

Amazonは台湾でも注文できるが、送料が高いため、Kindleがよく使われている。リアルタイムで読めるし、台湾に入って来ないものも購入できる。紀伊國屋、ジュンク堂、そのほかの日本書籍を扱う書店でも購入できるが、注文票を書いて、一旦、到着するのを待ってやっと入手できる。特に雑誌は早く読みたいのでKindleの人気が高い。音楽も某アイドルグループのように握手券や総選挙のチケットが必要ということでもなければ、オンラインのデータだけで購入すれば良いと思う人が多い。

越境者たちには、そのうち帰国するという人が多く、もう一度移動するのであれば、手軽に運べるデータで所有したいという人も当然存在する。台湾で暮らす日本人女性は、日本にいるときには、書籍を紙で購入していたのだが、台湾に来てそれをやめKindleを利用するようになったという。形のないものにお金を払う抵抗がなくなった。漫画などは紙で買うことがなくなったし、台湾にいるとそもそも紙の本は買えないものもあるという。

しかし、すべての書籍が電子化されているわけではない、電子版がない場合にはAmazonで購入して自炊業者に依頼しPDFだけデータで送ってもらっている

のだという。10冊以上なら1冊210円なので、送料よりも安くつくのだという。今ではSSDが本棚のようなものになっているのだそうだ。

6 食

異文化に暮らす人々にとって食べ慣れた故郷の味は何としても手に入れたいものの一つであろう。台湾に暮らす日本人にとって日本食を食べるのはそれほど難しいことではない。インフォーマントの一人は「近所にスシロー、牛角、丸亀製麺などがあり、日本食が食べたいという時には食べられる」と述べたが、このような話は今の台湾の状況を正確に示している。私が長期調査を行っていた2005-2007年の時点では台北や高雄などの大都市を除けば、日本の外食チェーン店は営業していなかった。しかし、今日では中規模の都市で日本食チェーン店を見つけることは難しくない。もちろん「日本での値段を知っているため、台湾で営業する日系の外食チェーン店を利用する気にはならない」という声もある。

日本で暮らす台湾人にも、この点について話を聞いてみたところ、日本で台湾の食材を手に入れることについて以下のようなケースが見られた。

台湾食材は近所にあるアジア食材屋で購入することが多いが、ドン・キホーテ、カルディで購入する。醤油膏、辣椒醬といった調味料も売っている。コロナ前は売っていなかったもので持ってきていた。コロナになると帰国できない人たちが持って来られないので、ニーズが高まったのではないかと。札幌で購入することができるようになった。カルディは品揃えがすごい。特に葱抓餅。コロナ前は自分で作っていたが、大変なので、助かっている。自分たちで作ったものの方が冷凍よりももちろん美味しいが、朝起きてすぐ食べられるのは魅力だ。カルディには胡椒餅、飯糰もある。業務スーパーでも葱抓餅なども売っている。

台湾料理が食べたくなった時には剥皮辣椒や醬瓜といった調味料を台湾から持ってきているので、日本のスーパーでも売っているチキンなどを使って台湾料理を作る。作れないものは我慢するしかない。新竹出身なのでビーフンを食べたいし、鶏排も自分で作るようなものではない。日本にも唐揚げがあるが別物である。

もう一つのケースは別の意味で興味深い。

食べることはとても好きで、普段の料理を極力節約して毎日ほぼ同じメニューを作っている。そこで浮いた分を外食をして美味しい料理を楽しむ。そこで普段の料理として、台湾料理が食べたくなるということはあまりない。「火を通したものを食べている」が、ほぼ同じ材料を同じ調理法で同じ味付けで食べている。強いて作る台湾料理と言えば蛋餅だが、これは自作している。とはいえ、完全に台湾の味を再現するというだけでもなく、調味料も日本で購入できる醤油を使っている。

普段の食事を摂生する彼女は「火を通したもの」を作っていると言う。レヴィ=ストロースの料理の三角形を意識しているのではないようであるが、単に料理には力を入れていないということが言いたかったようである。とはいえ、レヴィ=ストロースの考える様に食べることができない身の回りの世界を、料理という過程を通して食べられるものへと変えていく作業の持つ普遍性はボーダーを越えて暮らす人々にあっても変わりがないことなのだろう。

7 タクシー配車アプリ

台湾で暮らす日本人の中には Taxi の配車アプリを使っているという人が多かった。特に現地語が得意ではない人にとっては、言語が苦手でも利用できるというのは大きなメリットだろう。行き先が間違えて伝わったりすることがないので、口頭で伝えるより便利だし、アプリで依頼すると親切になるという声が聞かれた。

私も台湾や韓国では Uber Taxi を利用している。近年流しのタクシーがつかまえてくなくなっていることに加えて、郊外で調査などをして公共交通機関がない場合などに重宝している。台湾にサバティカル研修で滞在していた時のことである。宿泊先の大学の寮に帰るために台北の都心部から Uber Taxi を利用した。ところが、運転手が高速道路の出口を間違えて大幅に大回りされてしまったことがある。普段よりも大幅に割高になってしまったタクシー料金に納得がいかなかったので、Uber のアプリを使い「乗車サポートに問い合わせる」の機能を使うと AI とのチャットがはじまり、問題点を伝えたところ、距離が計算され直され適正な運賃になるように後日返金された。

8 薬品

上述のように日系のドラッグストアが広く受け入れられているのだが、それに見られるように台湾から日本への医療品へは高い期待が寄せられている。台湾訪問中に風邪を引いたりすると、友人たちは日本の製薬会社の風邪薬を分けてくれるということによくあるし、日本から台湾に行く際に銘柄を指定されて薬を買ってくることを依頼されることもよくあった。

インタビューの中でも「コンピュータをよく使うので目薬は日本のものを使う、それ以外ではビオフェルミンやワカモトを使う」という声は聞かれた。台湾でも珍しくないケースである。日本に暮らす台湾人にとって「台湾で日本の化粧品をよく買っていた。しかし、台湾で買うと高いので、家族などから帰国する際に日本の薬を買ってくるように頼まれる」と台湾にいる時から化粧品を含む日本の医薬品を使っており、台湾の家族知人から代理の購入が頼まれるというのも、考えられるケースだ。

一方で日本の医薬品が強すぎるので、あえて台湾の薬を使用しているというケースも見られた。以下のように語る。

日本ではオーバードーズのように例えば風邪薬を大量に飲んでドラッグのように使うこともできるのだが、台湾の薬はそれほど強力ではないので、逆に安心できる。日本の企業は風邪をひいても薬を飲んで出勤することが求められるが、台湾ではそんなにひどければ家で休んで良い。そもそも風邪薬は風邪を治すものではなく、症状を緩和してゆっくり休むためのものだと思っている。薬でウイルスを殺すためのものではない。漢方も同じ考え方である。持ってきている漢方は2種類ある。一つは総合系で、何にでも効果があるがマイルドである。これで効かなければ、もう一段階強力な葛根湯を使う。日本では葛根湯はマイルドだと思われているようだが、台湾では強力な漢方薬として扱われている。台湾では医者処方箋を出さないと入手できないものが日本のドラッグストアには普通に売っている。どんな副作用があるのかわからないので恐ろしくて使えない。そこで漢方薬は台湾から持ち込んでいる。漢方薬以外にはプナトンという頭痛薬を持ってきている。これは日本の頭痛薬ほど強くないので、安心して服用できる。

一般の台湾人とは逆の対応であるが、日台の越境者の多様性を示す事例として報告する。

9 ファングッズなど入手困難なもの

ある台湾人留学生は、台湾に暮らす友人から日本のアニメやアイドルのファングッズを購入して台湾に送って欲しいと頼まれるという。そのグッズはファンクラブに入らないと入手できないものとのことで、ファンクラブに入会するには日本に住所がないといけない。そこで、友人の代わりに入会し、グッズを購入し、台湾に郵送するのだという。

また別の留学生は、台湾にいるときに Facebook や X のコミュニティでアニメのグッズの売買をしていたという。コミュニティに売却したいグッズを書き込み、欲しい人がいれば連絡を取り合って、契約するのだという。

この形式であればプラットフォームに手数料を払う必要はないが、仲介業者が不在で詐欺に遭ったりしないのかと言えば、もしそういうことがあればコミュニティにそのユーザーのことを書き込むのだそう。そうすればその人はそのコミュニティに居られなくなるので、それが抑止力になっているという。現在日本で暮らしているがメルカリを利用して「推し活」としてグッズの購入をしているそうで、今後は販売もしてみたいという。

日本で働く台湾人のインフォーマントのオフィスに行くとデスクにいつも「乖乖」という台湾のスナック菓子が PC においてある。仕事のデスクワーク中に故郷の味で小腹を満たすのかと思っていたのだが、台湾ではこの「乖乖」というスナック菓子を PC、特にサーバーの上に置いておくと壊れないということが言われているのだという。「乖乖」とは中国語で「いいこいいこ」の意味で、これを置いておくと PC を「いいこいいこ」しているというおまじないの様な意味があるのだそう。逆にこれを置いておかないと「鬼」がいたずらをするかもしれない。そこで賞味期限が切れる前に交換する必要がある、切れるとサーバーにエラーが起きるといふ風に言われている。本人もこれは宗教のような迷信だと笑いながらいう。

そして、熊本にも工場を展開し近年話題となっている TSMC では専用の「乖乖」まで存在するのだそう。これはとても人気があり入手困難なので、ネットで注文するとプレミアがついて高価でやり取りされるという。彼は IT 企業に夫が勤める友人が一箱買うように

それを分けてもらっているのだという。

10 なかったら作ってしまえばいい!

最後に紹介したいのは、E コマースを積極的には使わないというケースである。台湾に移住して3年の彼女は、日本の書籍と子供が何か必要になった時に日本の Amazon で注文する。送料は高いが頻繁にあることではないので「えいやっ!」と購入しているという。早ければ2-3日で届くので便利と感じているという。Kindle やパソコンの画面で長文を読むのは苦手なので紙の書籍を購入しているという。

友人が履いていたジーンズを可愛いと褒めたら、台湾まで送ってくれたのだが、サイズが合わなかったのでも自分で注文しよう海外発送のシステムを利用して注文しようか思ったことがある。注文の直前までいったのだが、決済の際にインターネットにクレジットカードの情報を入れるのを怖いと感じ結局注文しなかったという。

このようにあまり E コマースを利用していない彼女であるが、先日 PCHOME という E コマースのサービスを使い始めたそう。しかし、やはりネット決済への抵抗は払拭できていないので、近所のコンビニエンスストアで支払っている。また、一度登録するとクーポン等のメールがいちいち来て煩わしいと感じているという。

このように E コマースに対して比較的否定的な態度を取る彼女であるが、単にイメージだけで毛嫌いしているというのでもない、というのも以前 AI を開発している会社に勤務したことがあり、インターネット上に個人情報をあげることの問題点を理解しているからである。例えば台湾の LINE には「發票管家」というサービスがあって、レシートを撮影すると管理してくれるのだが、一度やってみたらアナライズされてしまいそれに恐怖心を覚えたこともあるそうで、誰かに情報を取られてしまうことに対する危機意識を持っている。

調味料など日本製品で必要なものをどのように購入しているのかといえば、「全聯」というスーパーマーケットチェーンの「くらし良好」という日本製品のシリーズがあり重宝しているという。日本に帰った時には切り干し大根やひじきといった乾物をたくさん買ってくる。また、台湾では錠剤しか売っていない「パブロン」の微粒や子供用の「ノーシンピュア」、「龍角散のど飴」は日本で買ってくるのだという。

彼女は一つ問題を抱えている。というのは娘さんにアレルギーがあり台湾の油や醤油は使えないのだそうだ。基本的な調味料に制限があるのは大きな困難であるだろう。塩ですらきちんと選ばないと反応が出てしまうのだという。日本のメーカーのものならいいということでもなく、いろいろ試した結果、特定のメーカーの醤油であればアレルギーが出ないということがわかった。そこで日本から知人が来るときなどに持ってきてもらったりしているという。

このようにEコマースを極力使わないようにしながら、一方で家族のアレルギーという問題を抱える彼女は、一つ興味深い取り組みをはじめた。それは醤油を手に入れるのが困難なら、自分で作ってしまえばいいと、自作を始めたのである。彼女は発酵教室という様々な発酵食品を作る教室に参加しており、その先生が自家製醤油を作っており、先生の指導とレシピとで醤油を仕込み始めたのだという。彼女は先生の醤油を「フレッシュでとても美味しい」といい、もちろん醤油を自作するというのはとても根気のいることで、まだ完成していない様だが、もしうまくいって娘さんのアレルギー反応が出なければ大成功だし、越境者の購買活動の中でも特異なケースでありながら、大きな可能性も秘めている様に思われる。

IV 分析

1 コミュニケーション資本主義

上述の通り、サイバー空間における囲い込みを通じて行われる統治にはコミュニケーション資本主義に特徴付けられるEコマースをはじめとする現代の購買行動に連動している。便利なサービスを無料や安価で提供し、ユーザーを増やすことでビッグデータを構築し、それを独占的に利用することで莫大な富を生み出す。ユーザーはより便利でより安価なサービスを主体的に選んでいるようでいて、それは情動がハックされることで無意識のうちに選ばられている。例えばYouTubeを使い始めた頃には、見たい動画があるときに自分で検索した動画を見ていても、しばらくするとユーザーの好みを先回りしてリコメンドしてくる。徐々に特段、見たいものがあるというわけでもなくも惰性でサイトを開き、リコメンドされる動画をクリックしてしまう。動画を見ることでそれに付随する宣伝を見ることになり、プラットフォームは経済的な利潤を生み出す。それだけではない。YouTubeはGoogle

と連動しているので、そこで得られた情報はGoogleのすべてのサービスに連動する。

本稿の準備をしている際のことである。年末年始の予定が空いていたので、息抜きがてら年末年始の航空券とホテルをGoogleを使って検索した。本当に旅行に行く決めて検索したというより、ただ調べてみるだけのつもりで行き先は漠然と台湾、韓国、沖縄としてみた。その時には特に購入には至らなかったし、実際に旅行に行くことの決心もついていなかった。息抜きを終えて作業に戻り、ながら作業のBGMとして何かを流したいと思いYouTubeを開いた。そうするとYouTubeでは何も検索をしていないのに沖縄ソングメドレーという動画が上位に現れる。航空券やホテルの検索をした途端に、反映されることに薄気味悪さを覚えもしたが、その動画を流しながら発表の準備をしていたところ、だんだん沖縄への気持ちが強くなっていくのが自分でもわかった。動画が終わる頃には年末年始には沖縄旅行に行くという気持ちになっており、次の休憩にはもうチケットの手配を始めてしまっていた。

年末年始のチケットを検索するというたったそれだけの行為のつもりが、仕組まれたかのように情動がハックされ、経済行動を取ってしまったことがよくわかる。このように計算されたプログラムに乗せられて、行動へとつながっている。人類学ではモノがヒトを動かすエイジェンシーについて活発に議論されているが、従来のモノが持っていたものをより純化させたかのように、コミュニケーション資本主義下のサイバー空間の中のモノがヒトを動かす力は強大だ。この状況ではユーザーは単に消費者というわけではない。商品を購入するだけでなく、ビッグデータの情報を差し出しているのであり、この新しい統治のあり方を構築する主体の一部となっている。ユーザーは便利なアプリを無料で使っているという意識しかないままに、嬉々として「タダ働き」させられてしまっている。

このようなコミュニケーション資本主義が幅を利かせる現代社会における購買行動であるが、国境を越えてそのサービスを使うということは、どこにいることになるのだろうか。日本でGoogleやLINEを使って生活している場合、そこを「日本」と言えるのだろうか。それと同じサービスを台湾で利用した場合、「台湾」になるのか、それとも「日本」のままなのだろうか。いや、Googleなら「米国」、LINEなら「韓国」ということになるのだろうか。

そもそもその企業の発祥の地と国民国家とを同一の

地域と考えること自体無理がある。そうではなく、ここで構築されつつあるのは国民国家とは異なる軸での統治のあり方である。ただし、それでいて従来の国家のあり方とも無関係というわけでもない。

2 加速するシミュラークル化とハイパーマーケット

この状況を考える上で参照したいのはボードリヤールの議論である。彼はシミュラークルという概念でオリジナルなき模倣が繰り返される現代の消費社会を考察した。当時、溢れるプラスチック製品が社会を変えていく状況を鋭い視点で分析していったのだが、近年のAIが芸術を生み出し、データはいくらでもコピーが可能という状況はオリジナルなき模倣の究極的な姿であるともいえ、これを考察する上で示唆に富んでいる(ボードリヤール 2008)。

リアルとバーチャルとが交差するポスト場所は従来画面の向こう側にだけ存在していた存在が、現実世界に滲み出てきているわけであるが、その滲み出てくる存在はAIが生み出し、デジタル化を通じて無限にコピーできるシミュラークルな存在で本物なき模倣がある。

二次元空間の、デジタル化を通じて本物なき模倣に満ちた場所となるポスト場所もまたポトリヤールのいう内破(impllosion)の起きる場である。内破について彼は以下のように説明する。

ある極と他の極を、始まりと終わりを分つものは何もなく、昔からあった二つの極が互いに折り重なり、気まぐれに衝突し、互いに誤解し合う。つまり内破(impllosion)だ——因果律が放射するあり方、決定論の差異的なあり方、それを電気の正と負で吸収すること——意味の内破。だからここにシミュレーションが始まる。(ボードリヤール 1984: 44)

内破が起きるとシミュレーションが始まり、その先にはハイパーリアリティがある。ボードリヤールはそれを文化の死と捉えるが(ボードリヤール 1984: 86)、本物なき模倣に満ちた世界における場所とは、ハイパーリアル化した現実における場所とはどういう場所なのか。

ボードリヤールは郊外型スーパーなどをイメージしながら、ハイパーリアル化した購買の空間としてハイパーマーケットという議論をしている。

ハイパーマーケットは、そのマーケットを点々とばらまき、マーケットの補給を約束する高速道路や、地上に敷きつめられた自動車が形づくる駐車場や、コンピュータの末端などと不可分だ——さらにその遠方の同心円上にある——さまざまな活動の完璧なまでの機能を映し出すスクリーンのような町全体とも不可分だ。ハイパーマーケットは、絶え間ない合理的な拘束で流れ作業につながれる代わりに、流動的で拡散する係員(あるいは忍耐強い人)が任意の回路通りに流れの一点から一点へと移動するかなのような印象を与える点を除いて、大きな組み立て工場と似ている。(ボードリヤール 1984: 99)

ハイパーマーケットは人見知りの間に起きる交換が関係性を紡いでいったものとは異なり、非場所で行われる関係性を構築しないような交換が行われ、そしてそこは「大きな組み立て工場」のように消費者も全体のシステムの中に位置付けられ、労働の一部となっている。

危機的大衆に仕上げられ、その向こう側で商品はハイパー商品に、文化はハイパー文化になる——つまりはっきりした目標のある交換や、決定的な欲求とはまるで関係なく、ある種の完全に記号化された宇宙と関わりをもち、あるいは集積回路で一つの衝動が一点から一点に走り、そこでは選択、読み取り、照合、指示、解読が絶え間なく通過するのだ。(ボードリヤール 1984: 88)

3 究極の非場所としてのEコマース

ここでオジェの場所と非場所の議論を参照しながらポスト場所における交換について考えてみたい。上述の通り非場所とは「アイデンティティを構築するとも、関係を結ぶとも、歴史をそなえるとも言えない空間」という(オジェ 2017: 104)。Eコマースを使うことでアイデンティティは生まれにくい、また、Eコマースでの交換によって関係は結ばれない。Eコマースを利用すると購入履歴を見ることはでき企業はユーザーのライフログを取ることができるが、歴史や記憶というものとは別物である。

従来のマーケットでは消費者と販売業者とは市場を成立させる二つの極であったのだが、ポトリヤールが「昔からあった二つの極が互いに折り重なり、気まぐれに衝突し、互いに誤解し合う」というように、消

費者と販売業者のいずれもがより大きなシステムの中に位置付けられ、共に巨大なシステムを駆動していく労働者となっている。ハイパーマーケットの持つ特徴を突き詰め、巨大化したEコマースのシステムの中では消費者もシステムを動かす一部分となり、そのサービスを提供するプラットフォームがその富を独占する。空間自体がハイパーリアル化した時代の新たな統治のあり方がここにある。

V ポスト場所を生きる遊牧民たち

(1) デジタルノマディズム

突如、従来の場所概念が通用しなくなったポスト・コロナ時代であるが、ユーザーの一人一人は大きなシステムの中に放り込まれ、気付かずに労働をさせられている。そこでAIによって提供されるシミュラクルに基づいたサービスはオリジナルなき模倣に満ちており、無限に提供され続けるサービスにさらされ、プロトコル上で情動をハックされる。一方で国境というボーダーや、国民国家が定めた法も存在し、人々はどれほどサイバー空間に逃れようとも、国家という枠組みから完全に自由になることは困難である。リアルとサイバーとが入り組んだポスト場所という空間は自由に性別も選べるし、勇者にでもメジャーリーガーにでも中国人にでもなれるのだが、それはそれほど自由なものではなく、誰かが作り上げたプログラム上でしか動くことはできない。そしてそのプログラムを利用すれば利用するほど巨大な企業が利潤を産むのに貢献しその統治を受け入れざるを得ない。また、画面のこちら側にはあいかわらず自分の身体がそこにはあり、従来の領土上、法律で認められた範囲内で自由を味わうことになる。リアルとサイバーとを使い分けるポスト場所に生きるヒトは、このようにリアルの支配とサイバーの支配という二重の統治のもとにある。

本研究で取り上げた越境者たちにとってこの二重の支配とはどういうものであったのだろうか。ここで見てきた越境者たちは時に正規のルートで購入するが、ネットショッピングの方が安価であればそれを利用するし、さらに転送サービスの方がさらに安価なのであればそれも利用する。シンプルに自分で持ってくることもあれば、知人が来る時には運んでもらうし、自分が帰国する時には知人のリクエストに応じる。リクエストの中には、日本にいなければ購入できないファンクラブのグッズなどを頼まれることもあるし、縁担ぎ

のグッズのようなものは現地で購入することはできないので知人から提供してもらい、どうしても手に入らないものは作ってしまう。

いずれも特段奇異でもない常識的な行動に見えるが、それでいて国家による統治も、プラットフォームによる統治も逆手にとって利用する姿が見て取れる。時に統治を受け入れつつも、より安価なサービスを利用したり、書籍の持つ物質性をデータ化してしまい、容易く移動してみせたりとこの二重の統治を逆に利用する姿がそこにはある。

国境というボーダーだけではなく、リアルとサイバーというもう一つのボーダーを行き来する越境者の姿に現代のノマディズムを見出すというのは自然なことではないか。ドゥルーズ、ガタリは『千のプラトー』の中で、以下のように説明する。

実際は地点、行程、領土を持っているにもかかわらず、遊牧民はそれを持たない、とすることができる。遊牧民がすぐれて〈脱領土化したもの〉と呼ばれているのは、まさしく遊牧民においては再領土化は、移民の場合のように脱領土化の後で行われるのではなく、また定住民の場合のように他のものの上に行われているのでもないからである（略）。逆に遊牧民にとっては脱領土化が大地への関係そのものを構成するので、遊牧民は脱領土化そのものにおいて再領土化するのである。つまり大地そのものが脱領土化する結果、遊牧民はそこにこそ領土を見出すのである。（ドゥルーズ、ガタリ 1994: 438）

サイバー空間という新しい大地が広がる空間、そしてそのサイバーなものがリアルに滲み出しはじめたこのポスト場所という新しい大地、ここを新たな領土する現代の遊牧民たちの動きは始まったばかりであり、今後調査が必要である。

(2) デジタルスティグマジーな統治とそこで生きるデジタルノマディズム

ポスト場所には二重の統治があるわけだが、サイバー空間における統治の特徴はどういったものだろうか。従来の統治とサイバー空間における統治の違いの一つに統治する主体の有無が挙げられるだろう。国家による統治には王や領主、独裁者のような支配者がおり、市民がその統治を拒否したければ革命や民主化運動などを起こすこともできた。しかし、このインター

ネットの世界は誰かがデザインしたものではなく、大手のプラットフォームや国家のようなものがあるにせよ、特定の主体がいるというわけでもない。それでいてすでに巨大なシステムが出来上がっており、これに個人で抵抗しようにもそもそも何と戦うのかすらわからない。

こうした特に誰かが作り上げたというわけではない、今日のサイバー空間のあり方を吉田 (2021) はスティグマジーに着想を得て、今日の世界をデジタルスティグマジーと捉える。スティグマジーとはアリやハチといった1匹ずつの昆虫が設計図などを知っているわけではないのに、一つの構造のある巣を作り上げることを指す生物学の用語であるが、それをもとに以下のように説明する。

デジタルスティグマジーによって作られたこの世界では、すべてのコミュニケーション・チャンネルが開かれすべてがつながっているように見えつつ、しかし実際には、もはや他の誰かとの間に共通性を構築することに耐えられない0と1に純化された孤絶した神たちが、0と1の海を漂流し続けているだけでしかない。(吉田 2021: 86)

誰とでもつながっていながら孤立している状況から、さながら蟻が最終的にどういうものが出来上がるのかわからないまま、全体で巣を作り上げるように、現代社会に属するヒトはこのデジタルな世界を作り上げつつある。絶対王政であれば市民革命を、独裁国家であれば民主化運動という形で抵抗することができた。ノマディズムはそれとは異なる価値観で、そうした支配や統治をすり抜けて生き延びてきた。

デジタルスティグマジーによる統治の構造ではどのような抵抗によって換骨奪胎が可能なのだろうか。王や独裁者のような抵抗すべき絶対的な相手はいない。むしろ自分もこの巨大な巣を作り上げているアリの1匹なのだ。一部取り込まれつつ、国家やプラットフォームによる統治をすり抜けながら、それを利用するような姿は、この時代にあって主体性を維持しつつ生き延びていく手段なのかもしれない。

VI おわりに

以上、日本と台湾との間の国境を越える越境者がどのようにボーダーを超えた購買行動をしているのかと

いう点から、新型コロナウイルスの感染拡大以降に急速に広まったポスト場所における新しい領土について考えてみた。数年にわたる長期フィールドワークを基礎とするエスノグラフィを学問的アイデンティティとしてきた人類学にとって、フィールドという場所自体がメディアの展開によって急激な変化にさらされている。国家による統治もプラットフォームによる統治も完全に避けることは困難だ。プラットフォームに情報を握られそれが新たな統治のあり方だと気がついたとしても、やはり Google マップを利用して移動するし、YouTube を見て暇を潰している。たとえ意識的に利用しないように心がけたとしても、オンライン授業や雇い主が求めてくる E ラーニングの教材動画が YouTube にアップロードされていることも多く、視聴しないわけにもいかないということも起こりうる。もはやこうしたサービスを完全に拒否して生活できない。会員登録しないと利用できないサービスは非常に多い。例えば航空券の購入はインターネット上で行うことが一般的になっており、それには極力会員登録することが求められ、個人情報とクレジットカードの情報を入力し、その情報を企業が利用することに同意しなければ購入できない。サイバー空間における囲い込みは個人レベルで対抗しようにも如何ともし難い。しかし、今みたようにネット時代のノマドたちはそれに従いつつ、一方で巧みに利用している。このように無限に複製可能なデジタルなモノは、インターネットで繋がってあればいつでもどこでも入手できる時代だからこそ、シンプルに物質性があるものをボーダーレスに運び、取り寄せ、購入するといった行動に、この時代に主体性を維持しながら生きていくことのヒントが隠されているのかもしれない。

参考文献

- 藤野 陽平
2023 「エスノグラフィのリミックス——スマホ時代の人類学とアフター・コロナ時代の人類学」『メディア・リミックス——デジタル文化の「いま」を解きほぐす』谷島貫太、松本健太郎 (編)、pp. 262–275、ミネルヴァ書房
- 藤野 陽平
2024 「メディア——プレ・コロナからポスト・コロナの新展開」『中国民族誌学——100年の軌跡と展望』河合洋尚、奈良雅史、韓敏 (編)、pp. 209–217、風響社

オジェ, マルク

2017 『非場所——スーパーモダニティの人類学に向けて』中川真知子(訳)、水声社

伊藤 守編

2019 『コミュニケーション資本主義と〈コモン〉の探求——ポスト・ヒューマン時代のメディア論』東京大学出版会

ボードリヤール, ジャン

2008 『シミュラクルとシミュレーション』竹原あき子(訳)、法政大学出版局

ボードリヤール, ジャン

1992 『象徴交換と死』今村仁司、塚原史(訳)、筑摩書房

ドゥルーズ, G.・F. ガタリ

1994 『千のプラトー——資本主義と分裂症』宇野邦一、小沢秋広、田中敏彦、豊崎光一、宮林寛、守中高

明(訳)、河出書房新社

松本 健太郎

2021 「ゲームのなかで、人はいかにして「曹操」になるのか——「体験の創出装置」としてのコンピュータゲーム」『日中文化のトランスナショナルコミュニケーション——コンテンツ・メディア・歴史・社会』江藤茂博、牧角悦子(監修)、松本健太郎、王怡然(編)、pp. 〇-〇、ナカニシヤ出版。

ユール, イェスパー

2016 『ハーフリアル——虚実のあいだのビデオゲーム』松永伸司(訳)、ニューゲームズオーダー

吉田 健彦

2021 『メディオーム——ポストヒューマンのメディア論』共和国

Territory and Governance in the time of post place:

From the purchasing behavior of people who live beyond
the Japan-Taiwan border

Yohei FUJINO*

Post-place territoriality and governance: Transborder buying behavior of people who reside between Japan and Taiwan

Following the COVID-19 pandemic, the emergence of online spaces that cannot be properly situated within the real/virtual dualistic structure continues to grow. Drawing on the concept of “post-place”, this paper considers how notions of territoriality and governance are reconfigured in these new spaces. While territorial borders were formerly institutionalized under the framework of the nation-state, their governance is being extended into an enclosed cyberspace, as seen through the regulation of internet and smartphone services. At present, these two modes of governance, that is, the governance of nation states enclosed by territorial borders and the governance of enclosed cyberspace, exist simultaneously. This study examines how the buying behavior of people who reside between Japan and Taiwan transcends national borders. It considers how nomads engage with governance in post-places, sometimes accepting it, sometimes resisting it, and at other times using it to their own advantage, to explore how contemporary modes of territoriality, governance, and subjectivity are formed.

Keywords

electronic commerce, simulacre, non-place, communicative capitalism, nomadism

* Hokkaido University

第二部

沖縄出身南洋移民女性の生業と戦争

— ジェンダーの視点から —

川島 淳*

近代日本において沖縄から南洋群島への人口移動は、日本や沖縄、南洋群島などをとりまくアジア・太平洋地域の国際関係や、日本による沖縄・南洋群島の統治政策を背景として生まれた社会現象であったといえる。本稿では、沖縄から南洋群島に移動した女性の渡航の形態・要因や生業の実態、戦時体制下での生活形態などから、性別役割分業のありようについて明らかにしつつ、アジア・太平洋地域における帝国日本の植民地統治・戦争遂行との関係のなかで沖縄出身南洋移民女性の特性について考察する。その際に、沖縄県内の自治体史に掲載されている移民女性の証言などに依拠することにする。

帝国日本の形成・展開・崩壊ないしは縮小という一連の過程において、沖縄出身南洋移民女性は、好むと好まざるとにかかわらず、帝国日本の南洋群島統治の維持・拡大を支える存在であった。すなわち、南洋群島の統治政策や戦争遂行は、性別役割分業などに基づく移民の活動によって支えられていたといえる。また、沖縄と南洋群島の統治政策や戦争遂行と、それに基づく性別役割分業によって、自らの人生、生と死が直接的にも間接的にも影響を受ける存在であったことが垣間見られる。これこそが、まさに性別役割分業と戦争遂行・植民地統治との関係性によるものであったと考えられる。

和文キーワード

ジェンダー、帝国日本、沖縄、南洋群島、植民地

目次

I はじめに	3 水産業
II 南洋群島における沖縄出身女性の生業と戦争、性別役割分業に関する論点の整理	4 畜産業
1 近代日本と植民地	5 被服身製品製造業
2 帝国日本と沖縄	6 商業
3 帝国日本と南洋群島	V 総動員体制下の南洋群島における女性の役割
4 南洋群島における性別役割分業	1 日中戦争の長期化に伴う総動員体制の構築
III 沖縄出身南洋移民女性の渡航	2 日本軍の敗退と戦時非常体制下の南洋群島における性別役割分業の再編
IV 南洋群島における沖縄出身者の生業	3 性別役割分業体制の再編
1 総論的考察	4 性別役割分業と南洋群島に残留した女性
2 農業	VI むすび

* 沖縄国際大学

I はじめに

本稿は、アジア・太平洋地域における帝国日本の形成・展開・崩壊ないし縮小という一連の過程のなかで、沖繩出身南洋移民女性の特性について、生業と戦争をめぐるジェンダーの視点から考察するものである。

帝国日本において沖繩と南洋群島との間での人口移動は、日本や沖繩、南洋群島などをとりまくアジア・太平洋地域の国際関係や、日本による沖繩・南洋群島の統治政策などを背景として生まれた社会現象であったといえる。

本稿でいう、沖繩出身南洋移民とは、1920年代から40年代前半にかけて、沖繩から南洋群島に渡航して産業開発などを担い、好むと好まざるとにかかわらず、南洋群島の統治を支えたが、アジア・太平洋戦争において犠牲者となるか、あるいは、戦場を生き延びて戦中・戦後に引き揚げて、戦後沖繩社会に復帰・定着するか、または、戦後沖繩で米軍基地建設などによって土地を奪われて海外などに再移住した人々のことを指し示している。このように、沖繩出身南洋移民の渡航・活動・引揚は、帝国日本・日本植民地主義の形成・展開・崩壊ないしは縮小に対応していた。

沖繩出身南洋移民の回顧録や証言などは、各種団体の記念誌や、沖繩県内の自治体史などに掲載されている。南洋群島からの引揚者で構成されるサイパン会やテニアン会などの記念誌において、戦争前は「楽園」であったが、戦場となった南洋群島が「地獄」であったという回顧録や言説などがある。他方、沖繩県内の自治体史・字誌に掲載されている沖繩出身南洋移民の証言において、渡航・生活・戦争・引揚という4つの要素が、起・承・転・結という論理構造のなかで構成されている。すなわち、沖繩での経済的事情や、閉塞感からの脱却、好奇心、徴兵忌避などの個人的な事情によって、斡旋人や南洋群島との人的ネットワークなどを通して渡航した男性は、南洋群島での生活が安定するにつれて、妻子を呼び寄せた。しかし、南洋群島での戦争に巻き込まれて、肉親や知人などが戦争の犠牲となった。生き残った者は、南洋群島から米軍統治下の沖繩に強制送還されて、現在に至っているというのである。

沖繩出身南洋移民の特質に関する従来の研究としては、あえて議論を単純化すると、日本の南洋群島統治政策や南進政策の遂行、南洋興発株式会社などの事業

展開、産業開発や要塞化などとの関連で沖繩出身南洋移民の特性について論述した論考（今泉裕美子 1992: pp. 131-177; 今泉裕美子 2016: pp. 127-188; 石川朋子 2000: pp. 99-121; 森亜希子 2013: pp. 317-374; 森亜希子 2014: pp. 15-28）、沖繩出身者の渡航や経済活動、学校生活、年中行事といった生活形態などについて言及した論考（今泉裕美子 1997: pp. 213-222; 今泉裕美子 2002: pp. 547-740; 今泉裕美子 2003: pp. 195-223; 森亜紀子 2011: pp. 125-135; 森亜紀子 2013: pp. 317-374; 森亜紀子 2024: pp. 159-183）、沖繩出身南洋移民の「帝国性」について考察した論考（富山一郎 1996: pp. 129-163; 富山一郎 2006）、沖繩出身南洋移民女性に着目した論考（那覇市総務部女性室・那覇女性史編集委員会編 1998; 今泉裕美子 2002: pp. 547-740; 今泉裕美子 2003: pp. 195-223; 森亜紀子 2024: pp. 159-183）がある。また、ジャーナリズムの立場から沖繩出身南洋移民の特質について問い直したものもある（赤嶺秀光 1990: pp. 72-87; 赤嶺秀光 2001: pp. 38-41）。

このように論じ尽くされた感のある沖繩出身南洋移民であるが、従来の研究において、必ずしも帝国日本の形成・展開・崩壊ないしは縮小との関係性のなかで、沖繩出身南洋移民女性の特性について考察されているとはいえないように思われる。そこで、本稿においては、沖繩出身女性の渡航や経済活動、戦時体制下での生活などから、性別役割分業のありようについて明らかにしつつ、アジア・太平洋地域における帝国日本の植民地統治・戦争遂行との関係のなかで沖繩出身南洋移民女性の特性について考察する。その際に、沖繩県内の自治体史に掲載されている移民女性の証言に依拠することで、個別具体的な日常生活のなかに、図らずも、植民地統治や戦争、性別役割分業が維持されていたことを明確にする。

本論文は4節で構成されている。まず、近代日本における沖繩と南洋群島の統治政策の展開や、性別役割分業などとの重層的な関係性のなかで、沖繩出身南洋移民の特性について考察することの意義について論述する。また「III 沖繩出身南洋移民女性の渡航」において、ジェンダー規範や、女性の渡航に関する類型について確認する。「IV 南洋群島における沖繩出身女性の生業」では、農業・水産業・畜産業・被服身製品製造業、商業に従事した女性の証言に依拠して、性別役割分業のありようなどを明確にする。さらに、「V 総動員体制下の南洋群島における女性の役割」では、

1940年以降における性別役割分業の再編のありようと移民女性の活動形態との関係性について検討する。また、1944年頃に、性別役割分業の再編により、男性は、南洋群島に残留して防衛戦力となる一方で、女性は食糧増産や軍事建設作業に従事する役割を担うか、あるいは戦時引揚にあたって14歳未満の子供や60歳以上の高齢者などに付き添うという役割などが付与されることもあった女性の戦争体験のありようについて論述する¹。

II 南洋群島における沖縄出身女性の生業と戦争、性別役割分業に関する論点の整理

1 近代日本と植民地

近代日本は、琉球王国・琉球藩を解体して1879年に沖縄県を設置し、日本の領土内に編入した。日清戦争で1895年に台湾を、日露戦争で1905年に南樺太を領有した。1905年にロシアから関東州の租借権などを獲得し、1910年には韓国を併合した。1914年に第一次世界大戦が勃発すると、日本は日英同盟に基づいてドイツに宣戦を布告し、赤道以北のドイツ領南洋群島を占領して、大戦後に南洋群島を委任統治下に置いた。このように、日本は、戦争などを通して領域を拡大し、異民族を支配下に置き、「公式帝国」として形成された。そして、日本本土と植民地などとの間に、人的にも物的にもネットワークが構築された。なかでも、南洋群島における産業開発の中心に製糖業が置かれ、その主な労働力に沖縄出身者が充てられたことから、南洋群島に渡航する沖縄出身者が増大した。

その後、1931年には満洲事変が勃発し、1932年に関東軍によって満洲国が建国され、翌年に日本が国際聯盟の脱退を宣言した。1935年に日本は国際聯盟を脱退し、ロンドン海軍軍縮条約を破棄するとともに、南洋群島を南進政策の拠点として設定し、南洋群島の統治政策と産業開発を遂行した。1937年に日中戦争が勃発した。日中戦争が長期化するなかで、1940年に北部仏印進駐が実施され、日独伊三国同盟が締結された。1941年12月8日に日本は米英仏蘭に宣戦を布告し、アジア・太平洋地域における西洋諸国の植民地

を占領・統治した。しかし、1942年以降になると、米軍の反撃によって、日本軍にとっての戦局は悪化した。南洋群島のサイパンやテニアン、フィリピン、沖縄などで地上戦が展開された。民間人も日本軍によって召集・徴用され、戦闘に巻き込まれた。米軍占領後のサイパン・テニアン・沖縄などは日本本土を爆撃するための拠点となった。1945年8月14日に、日本はポツダム宣言を受諾し、翌日正午の玉音放送によって国民などは敗戦を知らされた。その後、日本の本土や植民地、占領地などにいた人々が、出生地・本籍地に帰還することとなった。

以上のような帝国日本の形成・展開・崩壊ないし縮小は、後述のように、沖縄出身南洋移民の渡航や生業などにも、大きな影響を及ぼすこととなったのである。

2 帝国日本と沖縄

現在の沖縄には、かつて琉球王国があった。琉球王国は明・清との朝貢関係にあり、1609年の島津侵攻によって島津氏の支配下にも置かれたことで、明・清と徳川幕府・薩摩藩との二重朝貢体制のなかに位置づけられた。徳川幕府が崩壊した後の1868年以降における日本の国民国家形成過程のなかで「国境画定」が政策的課題となった。日本は琉球王国を琉球藩に再編し、1879年には琉球藩を廃して沖縄県を設置した。その後においても、旧支配者層のなかには日本政府・沖縄県に抵抗を続け、「琉球救国運動」を展開するものもいた。これに対して、日本政府・沖縄県は、地域社会における支配者層が「琉球救国運動」に合流することを懸念して、琉球王国時代の地方制度や土地制度などを継承する「旧慣」温存政策を実施した。1894年に日清戦争が勃発し、翌年に日本が清国に勝利すると、「琉球救国運動」は急速に衰微した。こうした状況のなかで、日本の沖縄統治政策は、「旧慣」温存政策から「内地延長主義」的政策に転換した。

日清戦争後における沖縄の諸制度改革によって、従来の社会経済的構造が変容した。なかでも、沖縄からの移民送出の背景となる主な制度改革として、1898年における徴兵令の施行と、1899年から1903年にかけて実施された土地整理事業の実施があげられる。

¹ かつて筆者は、戦時引揚に関する政策決定内容と実際の政策遂行との関係性について言及し、戦時引揚対象者が1943年12月8日付の「邦人引揚ニ関スル件」と1944年4月14日付で閣議決定された「南洋群島戦時非常措置要綱」において「老幼婦女子」とされ、1944年3月1日付の「人口疎開ニ関スル件」においては14歳未満の子供と60歳以上の高齢者などの付添の役割を担う女性として設定されたように、戦時引揚対象者の範囲は時期によって変動していたことを明らかにした(川島淳 2025)。

日本において徴兵制度が確立されたのは1873年であった。他方、沖縄に徴兵令が適用されたのは日清戦争後の1898年であった。これにより、沖縄出身男性も兵役の義務を負うこととなった。反面、沖縄を含む日本全国で兵役の義務を逃れようとする徴兵忌避が多発した。例えば、徴兵検査前の逃亡失踪や意図的な身体的損傷などがあげられる。他方、合法的な徴兵忌避は、対象者が移民として出生地から海外に移動することであった。このような徴兵忌避による他地域への移動は、アジア・太平洋戦争期まで続いたのである。

また、沖縄から他地域に移動する際の渡航費用を確保するために、土地などを売却する人々も存在した。沖縄において土地の私的所有権が認められたのは1903年の土地整理事業の完了後のことであった。琉球王国時代において、耕作者は一定の期間、土地を割り当てられたが、永続的な所有者ではなかった。しかし、土地整理事業の実施と完了によって耕作者に土地の所有権が与えられたことから、所有者は地価に基づく税金を負担し、土地の売買が可能となった。これにより、沖縄から他地域への移動が可能となった。

このように、沖縄の社会経済的構造が変容した。土地整理後の沖縄において、主にさとうきび栽培と製糖業を中心としたモノカルチャー的な構造が確立・維持された。第一次世界大戦後に黒糖相場が暴落したことによって、「瀕死の琉球」・「ソテツ地獄」と形容されたように、沖縄は不況に陥った。こうした経済的事情などによって、沖縄から日本本土や植民地、外国に移動するものが増大したのである。

以上のように、近代日本による沖縄統治政策の遂行といった、国民国家化ないしは植民地主義の過程ないしは結果、沖縄の社会経済的構造が変容して、沖縄からの帝国内移動や海外移動が活発化したのである。

3 帝国日本と南洋群島

第一次世界大戦において日本海軍は赤道以北のドイツ領南洋群島を占領した。南洋群島は、大戦後において、日本のC式委任統治地域となった。このように、南洋群島は、日本の統治下に置かれた植民地であった。1920年代から1930年代前半にかけて、南洋群島の産業開発は、南洋興発株式会社の製糖業が中心であった。1930年代後半期において、日本は、国際聯盟を脱退し、

またロンドン海軍軍縮条約などを破棄したことに伴い、1935年に「南洋群島開発調査委員会答申」と「南洋群島開発十箇年計画」、翌年に「国策の基準」を策定して、「漸進的平和的手段」に基づく「南進政策」を遂行することとなった。このように、南洋群島の開発は「南進政策」と密接に関連づけられた。その結果、日本の南洋群島統治政策のありようは大きく変容した（川島淳 2009b: pp. 47-71；川島淳 2013: pp. 100-125）。

南洋群島開発の労働力のなかには沖縄出身者も含まれていた。1920年代から30年代前半にかけて、南洋興発株式会社社長の松江春次は、沖縄出身者が幼少の頃からさとうきび栽培に従事していたことなどを理由に、南洋群島のさとうきび栽培の労働力を沖縄出身者に求めた（松江春次 1932: p. 82）。第一次世界大戦後の沖縄において、黒糖相場の暴落によって、沖縄から他地域に移動する人々が増大した。こうした Push 要因と Pull 要因によって、沖縄出身者が南洋群島在住者の大半を占めることとなった。また、沖縄出身者が南洋群島の家族や同郷者などとの血縁的・地縁的な関係で移住したことも、南洋群島在住の沖縄出身者が増大した要因の一つである。さらに、1930年代後半になると、南洋群島開発が「南進政策」と関連づけられた結果、建設業従事者の確保などの Pull 要因と、経済的事情や徴兵忌避などの Push 要因によって、沖縄などから南洋群島に移住するものも増加したのである。

1930年代後半から1940年代前半にかけてのアジア・太平洋戦争において、日本軍にとって戦局が悪化すると、女性や子供、高齢者のなかには、日本本土や沖縄への引揚を余儀なくされるものもいた。また、南洋群島に兵役法が適用され、1943年10月時点での南洋群島において在郷軍人は7,207人であり、同年7月の時点で徴集延期者が4,616人、徴集適齢者が615人であった。これらの人員が戦場に動員される潜在的な可能性があった²。さらに米軍がサイパンやテニアンなどに上陸すると、地上戦が展開され、サイパン島などにおいて、南洋群島在住者などの「強制集団死」が発生した。あるいは戦場を生き延びて収容所生活を送り、戦後に南洋群島から強制送還されて沖縄社会に復帰・定着するもの、さらには戦後沖縄から海外などに再移住するものもいた。このように、沖縄出身南洋移民の

² 「南洋庁官制中ヲ改正ス」（国立公文書館所蔵「公文類聚 第68編第32巻 昭和19年官職32・官制33（南洋庁）」）のなかに、在郷軍人や徴集延期者、徴集適齢者の数値についての統計資料が収録されている。本稿は、この統計資料に依拠した。

活動形態などは、帝国日本・日本植民地主義の形成・展開・崩壊ないしは縮小の影響を受けたのである。

4 南洋群島における性別役割分業

近代社会において身体的な男性と女性との区別がそのまま社会的・文化的な区分に適用された。男性と女性といった性別役割分業体制に基づく賃金格差によって男性と女性の序列化が固定化・強化された。すなわち、男性と女性の賃金格差によって、男性が主に経済活動に従事することになったがゆえに、家計では既婚男性の収入が主となり、既婚女性のなかには家事労働に従事する者や、家業や家計を補助するための仕事に従事する女性もいた。あるいはまた、未婚女性のなかには、家事労働をする女性や、社会における男性と女性との区分に基づいた職業に就く女性もいた。このように、家族内においても男性は「公共領域」、女性は「家内領域」という性別分業体制が構築され、男性と女性といった性別に基づく社会的役割が固定化・強化され、これが男性と女性の社会的な序列化にもつながったのである。

また、本稿との関連で着目したい点は二点ある。第一に、子供を産める可能性があるのは女性だけなので、跡継ぎを産まなければならないという社会的「義務」などが、近代・前近代を問わず、女性に付与されたことである。第二に、男性の許に女性が嫁ぐという婚姻形態があった。この背景には、家制度ないしは近代家族の特質が垣間見られるのである。

以上のように、資本主義体制における男性と女性との雇用形態の差別化、跡継ぎの出産という女性に付与された社会的「義務」、男性の許に女性が嫁ぐといった人生儀礼などが維持・拡大されたことによって、男性と女性の序列化と、それに伴う社会的な役割と規範が固定化・強化されていくこととなった。したがって、男性と女性との序列化や、社会的な役割や規範などは、沖縄出身南洋移民女性の渡航や生活形態に大きな影響を及ぼした。

1937(昭和12)年に勃発した日中戦争が長期化するなかで、総動員体制が構築・確立された。これに伴って性別役割分業が再編され、女性が戦争協力体制のなかに組み込まれ、生業と家事労働に従事する一方で「銃後の守り」の役割を担うこととなった。1942年以降になると、米軍の反撃によって、日本軍にとっての戦局は悪化した。1943年に「絶対国防圏」が設定されると、南洋群島に戦時非常体制が構築された。これに

伴って、高齢者や子供などが戦時引揚の対象となり、その付添の役割が女性に付与されることもあった。このような戦時引揚によって、家族が分断されることとなった。他方、南洋群島にとどまった女性は、食糧増産などに従事した。1944年6月以降に、米軍はサイパンやテニアン、アンガウル、ペリリューに上陸して地上戦を展開したことから、女性のなかには、地上戦に巻き込まれて死亡するものや、戦場を生き延びて戦後に沖縄に引き揚げた女性もいたのである。

このように、南洋群島在住の沖縄出身女性の生活は、各時期に再編されたジェンダー規範の影響を受けることとなったのである(川島淳 2014a: pp. 7-17; 川島淳 2014b: pp. 35-48)。こうした性別役割分業とその序列化を射程に入れて、次節以降では、沖縄出身女性の渡航と経済活動、総動員体制下における「銃後の守り」などを軸に、沖縄出身南洋移民女性の特質について考察することにする。

III 沖縄出身南洋移民女性の渡航

南洋群島在住者は、日本本土や沖縄などからの渡航者や、現地住民、外国人などで構成されていた【表1】。日本から南洋群島への移住者総数における沖縄出身者の比率は、1922年には22.21%であったが、1923年には46.69%と激増した。1924年には45.96%、1925年から1931年にかけて50%前半、1932年から1938年にかけて50%後半、1939年には60.70%にまで達した。このように、南洋群島における産業開発の進展によって沖縄出身者の割合が増加したことが判る。その背景には、1921年に創立された南洋興発株式会社の社長松江春次が沖縄出身者を、さとうきび栽培の労働力にあてたこと(松江春次 1932: p. 82)や、南洋群島在住の沖縄出身者との人的関係による人口移動があったことがあげられる。南洋群島在住の沖縄出身者のなかには、労働で得た賃金のなかから沖縄の留守家族に送金するものもいた。この送金によって、沖縄の留守家族は、茅葺屋根の家から赤瓦屋根の家に建て替えることもあった。これを目の当たりにした地域住民は、好奇心などによって、既に渡航していた地縁的・血縁的な関係者を頼って南洋群島に移動することもあった。

南洋群島在住で沖縄出身の女性と男性の比率を確認する。1920年代には、男性に対して女性の割合は30%前後であった。1930年代になると、女性の占める割合は30%後半であった。ただし、一時的ではあ

表1 南洋群島在住者数及び南洋移民者数と各比率

年	在住者			日本			沖繩出身			全国と沖繩出身者の比率 (%)	全国と沖繩出身者女性の比率 (%)	沖繩県出身者の女性の比率 (%)	沖繩出身者の男性の比率 (%)
	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女				
1922(大正11)	51,086	26,615	24,471	3,161	2,150	1,011	702	494	208	22.21	20.57	29.63	70.37
1923(大正12)	54,358	28,998	25,360	5,121	3,497	1,624	2,391	1,740	651	46.69	40.09	27.23	72.77
1924(大正13)	55,186	29,366	25,820	5,457	3,576	1,881	2,508	1,754	754	45.96	40.09	30.06	69.94
1925(大正14)	56,294	30,100	26,194	7,330	4,990	2,340	3,894	2,814	1,080	53.12	46.15	27.73	72.27
1926(昭和1)	57,466	31,020	26,446	8,298	5,440	2,858	4,351	3,036	1,315	52.43	46.01	30.22	69.78
1927(昭和2)	58,816	31,743	27,073	9,831	6,269	3,562	5,132	3,454	1,678	52.20	47.11	32.70	67.30
1928(昭和3)	61,086	33,003	28,083	12,281	7,838	4,443	6,615	4,509	2,106	53.86	47.40	31.84	68.16
1929(昭和4)	64,921	35,478	29,443	16,018	10,140	5,878	8,289	5,620	2,669	51.75	45.41	32.20	67.80
1930(昭和5)	69,626	37,929	31,697	19,629	12,105	7,524	10,176	6,482	3,694	51.84	49.10	36.30	63.70
1931(昭和6)	73,027	39,965	33,062	22,663	13,905	8,758	12,227	7,774	4,453	53.95	50.84	36.42	63.58
1932(昭和7)	78,457	43,338	35,119	28,291	17,409	10,882	15,942	10,263	5,679	56.35	52.19	35.62	64.38
1933(昭和8)	82,252	45,318	36,934	32,214	19,484	12,730	18,212	11,391	6,821	56.53	53.58	37.45	62.55
1934(昭和9)	90,651	50,248	40,403	40,215	24,214	16,001	22,736	14,207	8,529	56.54	53.30	37.51	62.49
1935(昭和10)	102,537	57,333	45,204	51,309	30,779	20,530	28,972	17,541	11,431	56.47	55.68	39.46	60.54
1936(昭和11)	107,137	59,446	47,671	55,948	32,961	22,987	31,380	18,892	12,488	56.09	54.33	39.80	60.20
1937(昭和12)	113,277	62,862	50,415	61,723	36,276	25,447	34,237	20,237	14,000	55.47	55.02	40.89	59.11
1938(昭和13)	122,969	69,264	53,705	71,141	42,356	28,785	41,201	25,095	16,106	57.91	55.95	39.09	60.91
1939(昭和14)	129,104	73,412	55,692	75,286	45,186	30,100	45,701	28,021	17,680	60.70	58.74	38.69	61.31

※本表は、南洋庁編『第一回 南洋庁統計年鑑』（一九三三年、『南方資料叢書11-1 南洋庁統計年鑑1（昭和八年）』青史社、一九九三年復刻版）及び同編『第二回 南洋庁統計年鑑』（一九三四年、『南方資料叢書11-2 南洋庁統計年鑑2（昭和九年）』青史社、一九九三年復刻版）、同編『第三回 南洋庁統計年鑑』・『第四回 南洋庁統計年鑑』・『第五回 南洋庁統計年鑑』（一九三五年・一九三六年・一九三七年、『南方資料叢書11-3 南洋庁統計年鑑3 第三回 第四回 第五回』青史社、一九九三年復刻版）、同編『第六回 南洋庁統計年鑑』・『第七回 南洋庁統計年鑑』・『第八回 南洋庁統計年鑑』・『第九回 南洋庁統計年鑑』（一九三八年・一九三九年・一九四〇年・一九四一年、『南方資料叢書11-4 南洋庁統計年鑑4 第六回 第七回 第八回 第九回』青史社、一九九三年復刻版）を基に作成した。

るが、1937年に女性の占める割合が40%であった。このように、南洋群島在住沖繩出身女性の割合が増加した要因について、沖繩出身南洋移民男性が生活を安定させて、女性を呼び寄せた結果であったことが先行研究で明らかにされている（飯高伸五 1999: pp. 107-140；石川朋子 2000: pp. 99-121）。すなわち、帝国日本における沖繩と南洋群島との間に人的ネットワークが構築されたのである。以下では、ジェンダー規範と、その実態との関係性や、南洋群島における家族の形成と再編のありようという観点から、女性が南洋群島に渡航した形態や要因について確認する（川島淳 2009a: pp. 19-44；川島淳 2010a: pp. 147-167；川島淳 2010b: pp. 17-54；川島淳 2011: pp. 15-59）。

沖繩出身男性のなかには、経済的事情や好奇心、徴兵忌避、家族や親戚の呼び寄せなどによって、南洋群島に渡航するものもいた。南洋群島での生活が安定した後に妻子を呼び寄せる既婚男性や、妻とともに渡航する男性、沖繩から女性を呼び寄せて結婚するものなどもいた。また、未婚女性は、村落内婚などの婚姻形

態に立脚した南洋群島在住の男性との結婚や、肉親・親戚による呼び寄せ、音信の途絶えた肉親の捜索（大城サチ 2002: p. 800）、料亭との身売り契約などによって、沖繩から南洋群島に渡航した。他方、既婚女性のなかには、生活の安定などによって夫の呼び寄せで渡航する女性、職業的使命感や跡継ぎを産むとの「義務」、経済的事情などによって夫とともに渡航する女性、音信の途絶えた夫を捜索するために渡航した女性（金城シゲ 2002: p. 814）などがいた。このように、人生儀礼や、男性・家族の事情などによって南洋群島に渡航する女性もいた。

同一村落出身者の婚姻形態について確認しよう。中本シズは、1935年5月にテニアン在住の姉夫婦が帰沖した際に、「南洋群島は、お金儲けが良く、大変暮らしよいかから一緒にテニアン島に行こうと誘いがある。親達も大賛成で出稼ぎをすすめる。私は、まだ十六歳（満十五歳）のこと判断に迷いましたが姉夫婦を信じ行くことにした」と証言する（中本シズ 2005: p. 537）。テニアン到着後に、姉夫婦はシズに結婚を勧め

た。シズはそのときの心境について「実は、テニアン島への誘いは、同字出身の中本亀助さんとのお見合い結婚が目的だった。親達も合意しているので、ぜひ同意してほしいとのことである。未熟で人生経験の浅い私にとって、全く予期せぬことに戸惑う。姉夫婦に任せることにし、一九三八年(昭和十三)十一月二〇日結婚、新生活へスタートする」(中本シズ 2005: pp. 537-538)と証言する。この証言によると、第一にシズと亀助はともに奥武島出身者であったが、亀助は南洋群島に在住していたので、変則的ではあるものの、出身村落内婚であった。第二にテニアン在住の姉夫婦は、親の承諾を得た上でシズをテニアンに連れて渡航した後に、シズに亀助との結婚に「ぜひ合意してほしい」と話していたことから、たとえ形式的であったとしても、ある程度の決定権はシズにあった。なお、テニアンに姉夫婦とともに渡航した後の結婚話であったため、断ることができなかつたとも考えられる。ちなみに、玉城村では親が結婚相手を選定するが、最終的な決定は、ある程度本人の意志に委ねられることもあったと言われている(金城繁正(編) 1977: p. 455)。

また、親族集団や特定の社会集団内部における内婚という婚姻形態があった。たとえば、比嘉スミ子と思信との婚姻形態は、屋取集落内において旧土族であった親同士が決めた許嫁結婚であり、親族集団内の内婚であった。スミ子の夫はすでに南洋群島で生活していたため、1937年頃にスミ子は19歳で夫の実家で結婚式を挙げた後に、夫の住む南洋群島に渡航した(比嘉スミ子 2006: pp. 589-591)。

以上のように、沖縄在住の女性と、南洋群島在住の男性との婚姻関係は、沖縄と南洋群島との人的ネットワークや戦前期沖縄における婚姻形態に立脚していたと言える。したがって、沖縄出身女性が南洋群島に渡航したのは、人的ネットワークと沖縄の人生儀礼によるものであったのである。

又吉ミネは、1921年8月4日に石川村字伊波で生まれた(今泉裕美子 2002: p. 740)。「私の両親はサイパンでパイヤ作りをしていました。私は沖縄で生まれ、十七歳で内地に行きウェイトレスとして働き、十九歳のときにサイパンに呼ばれました。サイパンでは洋裁学校へ行き、それからパカンに渡って、あのころは新しい生地はなかったので、おもに洋服の直しの仕事をしました」(又吉ミネ 2002: p. 789)と証言する。この証言から、ミネが両親に呼び寄せられたのは、子供に家業を手伝わせるためではなく、両親が子供と

ともに暮らしたいという気持ちがあったからであろう。

また、料亭との身売り契約によって南洋群島に渡航した女性もいた。1940年6月27日付の『琉球新報』(浦添市立図書館所蔵製写版)には「女郎に現抜かし妹を賣る 義兄の悪企みストップ」との見出しで、次の記事が掲載されている。「市外壺川二二七元市内某校小使中地光男(二七)仮名——は辻遊廊きたけ楼娼妓に現を抜かし入り浸りで遊興するうち遊興費 困つ 揚句妻ハツの妹ミヨ(一六)仮名——を南洋の料亭へ売り飛ばすべく企み折よく南洋テニアン料亭涼月の女将が女雇入れに来てゐるので同女へ義妹ミヨの身売り契約をなしミヨへは大阪へ出稼ぎ せると騙し一千三百円の身代金を受けとつたことを那覇署刑事が探知し詐欺嫌疑で取調べた結果前記事情が判明同人もその不心得を詫びたので嚴重訓戒をなしミヨの身代金千三百圓半約二百圓は消費してあつたが之を返済の上妹は妻引渡され釈放された」という。詐欺事件ではあるものの、この記事から、料亭との契約によって、沖縄から南洋群島に渡航した女性も存在したことが判る。さらに、テニアンで料亭に勤める女性を顧客とした商店の女性は「大富楼という料亭があつて、お手伝いさんなんかも入れたら、三四、五名と大勢いた。ほとんどの女の人が辻から買われてきて、借金を負っている」(上江洲敏 2002: p. 666)と証言する。このように、身売り契約によって料亭で働かざるをえなかつたために渡航した女性もいた。また、渡航の際に、身売り契約をした女性を伴った人物とともに南洋群島に移動した子供の証言(仲宗根正雄 2002: pp. 593-594)もある。

次に、沖縄から南洋群島に渡航した既婚女性の渡航についてみてみよう。吉野シゲは、結婚後の1933年の県議会議員選挙において金武村の有権者数の3分の2以上の者が選挙違反として検挙された。シゲの夫も罰金を払うために借金をし、その返済のために妻子を沖縄に残して同年に南洋群島に渡航した。夫久信はサイパンで仕事に従事して借金を返済し、また土地と家屋を購入した。1940年に、当時31歳のシゲと次女民子がサイパンに呼び寄せられた。このように、夫が借金返済のために、沖縄に帰る前提で南洋群島に渡航したが、サイパンでの生活が安定したので、妻と次女を呼び寄せた(吉野シゲ 1996: p. 501)。

金城朝子は、1940年に夫の呼び寄せでサイパンに渡航した。夫の生家は資産家であったため、「金儲けの出稼ぎは必要なく、それに夫は長男でしたから家系を守るために移民はしなくてもよかった」が、「友達

が行くので、自分も行こうと決めたようです。一九三五年（昭和十）に、安谷屋出身の三人が一緒に行きました」と証言する（金城朝子 2001: p. 549）。しかし、夫は1ヶ月で帰沖したものの、「沖繩にいたら兵隊にとられるぞと周囲から言われ、それから間もなく再渡航しました」という（金城朝子 2001: p. 549）。朝子は、サイパンに渡航する契機について、「私には娘が二人でき、夫の両親と沖繩に残りましたが、日中戦争が勃発して、戦線が拡大すると、1940年に「知り合いの役場の人が家に来て、「直一は第一補充だから、南洋にいてもいつ召集されるかわからない」と言い、召集される前に早く会いに行きなさい、と勧められました。また、舅やおじ達にも「跡継ぎの男の子を生まないといけな」とか、あれこれ言われ、私は子供を姑に預け、一人で夫のもとへ行くことになりました」という（金城朝子 2001: p. 549）。こうして朝子は、跡継ぎの男の子を産むために、サイパンに渡航した。1942年に第三子が生まれたことについて、朝子は「跡継ぎの男の子をと言われて行ったのに、三番目も女の子（洋子）でした」と語るように、跡継ぎの男児を産まなければならないというプレッシャーを感じていたことが垣間見られる（金城朝子 2001: p. 550）。1944年に「やっと長男（直秀）が生まれました」との証言から、男児が生まれて安堵したことが判る（金城朝子 2001: pp. 549-550）。このように、女性には跡継ぎを産まなければならないという「義務」が付与されたがゆえに、沖繩から南洋群島に渡航した女性もいた。なお、夫とともに、子供を産むために渡航したとの証言（兼島カマド 2002: pp. 505-506など）もある。

知念春江は、小禄第一国民学校の教員であったが、1942年3月末に夫とサイパンに渡航した。春江は「私たち夫婦は、大きな希望を抱いていた。サイパン島は沖繩県人が人口の八割を占めているのに、殆ど農地開拓の農民が多く、学校教員は他県出身者が多かった。そこで、沖繩からの教育がほしいとの県人会の要望で、それに応えて夫が出向を命じられた。そのため二人で行き、私も同じく、南村のアスリート国民学校に勤務することになった」（知念春江 1989: pp. 185-186）と証言する。この証言から、出向を命じられた夫に伴われて、サイパン在住の沖繩出身者の子弟を教育するとの県人会の要望に応えるという職業的な使命感が渡航動機としてあげられており、「国策南進」と戦争が教員の春江夫婦の生き方に影響を及ぼしたと言える。

以上のように、沖繩出身女性が南洋群島に渡航した

要因や背景にあった近代社会における男性と女性との序列化や人生儀礼、「性の商品化」には、帝国日本による南洋群島統治を支える要素が潜在化していた。また「沖繩よりも南洋群島のほうが暮らしやすい」という論理による渡航は、好むと好まざるとにかかわらず、日本本土—沖繩という支配—被支配の権力構造から脱却して、南洋群島における「内地人」—「沖繩人」—「チャモロ」・「カナカ」という階層的秩序のなかの「植民者」という位置に囚わらずも参入することを意味していたと考えられる。

IV 南洋群島における沖繩出身者の生業

1 総論的考察

南洋群島が日本の委任統治地域となり、日本による産業開発が実施された。1930年代後半頃において南洋群島の主要産業はさとうきび栽培や燐鉱、鯉節、コブラ、酒精などであり、これらの生産品は日本本土に移出された。他方、南洋群島在住の住民は、米穀や、その他の食糧品、煙草、車輛、船舶、機械類、綿布、綿製品、木材、木製品などの消費物資を、日本本土などからの移入に依存していた。また、南洋群島とニューギニアや、葡領ティモール、英領ギルバート島、南太平洋諸島などとの間には物流関係が構築された。限られた分量であるものの、主な輸出品は綿布や雑貨、食糧品などであり、主な輸入品はコブラやココア、コーヒーなどであった。主として南洋群島との物流関係は日本本土との間に構築された（大蔵省管理局 1946: pp. 98-100；南洋庁 1933～1939）。

こうした産業開発を担ったのは日本本土や沖繩などから移住した人々であった。南洋群島の職業における男女比について、『南洋庁統計年鑑』の1930（昭和5）年から1937（昭和12）年までの統計資料に基づいて平均値を算出した。すなわち、「接客業従事者」という項目における女性の割合は67.01%（629.00人）であった。「家事使用人」は、62.06%（246.38人）であった。「無業者」は60.18%（9,913人）であった。「無業者」には、専業主婦や子供、高齢者が含まれていたものと思われる。現在、家事労働は職業の一つとして認められているが、戦前期の日本においては、無業者として位置づけられていた。「被服身製品製造業」において女性が就いた割合は51.75%（42.63人）であった。「畜産業」は33.59%（48.50人）であった。主に家内領域で生産された被服身製品や家畜は南洋群島内で供給さ

れて消費された。「水産業」は9.10% (175.63人)、「農業」は32.86% (3,344.50人)であった。「商業」は25.95% (459.00人)であり、日本本土からの生活必需品や嗜好品を南洋群島在住者に供給する役割を担う職業であった。「医療従事者」は42.85% (64.00人)であり、主に看護師に該当する。「公的機関での事務員」は2.39% (11人)であり、「土木建設業」は0.39% (3.75人)であったことが判る。

また、『南洋庁統計年鑑』には、賃金に関する項目がある。これによると、大工・船大工・木挽・左官・石工・鍛冶工・水夫・土工・鋳力工・製糖工・自動車運転手・採鋳職工・採鋳鋳夫という項目には、「邦人」と「島民」の区別があるが、男性と女性の区別はない。他方、日雇人夫と、「家事使用人」に該当する「下男」・「下女」という項目において、男性と女性の区別がある。それゆえ、男性と女性の区別のない職業は主に男性が就く職業であったと思われる。また、男性と女性との間に賃金格差があった。各島嶼での平均賃金は異なっているが、サイパンを事例としてしてみると、1922年から1937年にかけてサイパン支庁管内での日雇者の平均賃金は、男性が1円49銭、女性が75銭であった。このように、男性と女性との職業区分や賃金格差には、男性と女性との序列化がうかがえる。

南洋群島における基幹産業は主に製糖業と水産業であった。黒糖と鰹節などは南洋群島から日本本土などに移出された。こうした産業開発のなかには、性別役割分業もまた垣間見られる。以下では、ごくわずかな事例であるが、農業と水産業、畜産業、被服身製造業、商業について女性の産業形態を中心にみてみよう。なお、女性は生業とともに家事労働にも従事していた。

2 農業

南洋興発株式会社は、1922年に設立され、さとうきび生産の事業を展開した。労働の場において「公共領域」と「家内領域」が分離していない場合と、分離している場合があった。未分離の場合でも、前近代的な農業形態とは異なり、自身の土地などで農業に従事する者と、会社経営のなかで農業に従事する者もいた。以下では、「公共領域」と「家内領域」との関係を射程に入れつつ、農業従事者における性別役割分業のありようについて確認する。

南洋興発株式会社の人夫として働いた女性の証言をみてみよう。崎浜ツルは1941年頃に夫の呼び寄せで次女と渡航した。「テナンの直営農場では、平日は

畑の整地から植え付け、施肥、収穫までのサトウキビ生産一切の仕事をしました。なかでも、炎天下での収穫作業は女にはとっても辛く苦しいものでした」と証言する(崎浜ツル 2006: p. 580)。崎浜ツルの他にも、夫婦が人夫として働いたとの証言(仲本キクエ 2002: pp. 553-554; 比嘉カマド 2001: pp. 526-529)がある。このように、南洋興発株式会社の直営農場において性別に基づく仕事に相違性はなかったものの、賃金格差が生じていたことから、男性と女性の序列化が垣間見られる。

上運天ゴゼイは、1936年頃に夫の呼び寄せでサイパンに渡航し、26歳で人夫として働いた。ここでの性別役割分業について「畑の仕事は男は穴を掘ったり、株を起こしたりして、女はさとうきびの根払いをしたり、草を取ったりしました。製糖期になったらさとうきびの刈り取りで年中忙しかったです」(上運天ゴゼイ 2002: p. 508)と証言する。このように、開墾などは男性の仕事であり、根払いや草取りは女性の仕事であったことから、農業においても、性別役割分業の一端がうかがえる。なお、綿花栽培のために山を開拓した証言(兼島カマド 2002: p. 506)もある。

南洋群島で生産されたタピオカやパパイヤ、蓖麻、綿花は、日本本土に向けて移出された。金城カメは、夫の徴兵忌避のため、1941年頃に23歳で夫と娘とロタに渡航した。「主人は鉄木を山で切って、牛車に載せて持ってきて、削ってから煎じて固める仕事をやっていた。会社は、固めたのを内地に送っていた。染めもの用として送っていたんじゃないかね。(中略—引用者)私はタンタカシー〔蓖麻〕会社で働いていた。蓖麻は会社が植えてあるもので、いい天気有的时候には、畑に行って蓖麻の実を取ってきて、乾燥させていた。雨が降ったら、会社の中で実をもぎ取った。取った実は、しばって飛行機の油にするために、箱に詰めて、全部内地に送りよった。(中略—引用者)住んでいたのはテトというところ。鉄木の会社の宿舎があった」(金城カメ 2002: p. 704)という。この証言から、夫婦が別の会社で農業に従事する場合もあり、「公共領域」と「家内領域」が分離され、夫が勤めた会社の宿舎に住んだことが判る。その後、金城カメはパパイヤ小作に転職した。「パパイヤの血〔乳液〕をとって乾燥させて、南貿会社に持っていった。これは心臓の薬になるといって、内地のほうに送っていたみたい。パパイヤの実からミルクみたいな血をとって、乾燥させた粉を五つの一斗缶いっぱい溜めてから会社には納めて

いた。(中略—引用者)畑は会社から…」(金城カメ 2002: pp. 704-705)と証言する。また金城百合もロタ島で夫婦とともにパパイヤ栽培に従事した(金城光守・百合 2002: p. 698)。このように、金城カメや金城百合の証言からも判るように、夫婦はともにパパイヤ小作の仕事に従事した。

以上において、農業に従事した女性の証言に基づいて、女性の経済活動についてみてきた。前近代の農業形態とは異なるものの、「公共領域」と「家内領域」が未分離の状態である場合と、分離されている状態である場合があった。南洋群島で南洋興発株式会社などの会社経営のなかに農業が組み込まれて農業に従事する者や、会社の小作人の下で人夫となる者、私下を受けた土地で農業を営む者もいた。このように、多様な農業形態において性別による役割が厳密に区分されていたわけではなかったが、しかし日雇い男性と女性に賃金格差があり、男性と女性の序列化があったことが看取できる。こうして生産された農産物は日本本土に移出された。

3 水産業

水産業においては、男性が漁撈活動を行い、その魚介類を女性が販売・加工した。また、男性が獲った鰹は加工され、鰹節として日本本土に移出された。その際に、鰹節工場で働いた比嘉トシ子や、魚の行商に従事した中本シズの証言をみてみよう。

鰹節は南洋節と呼ばれ、日本本土に移出された加工品である。比嘉トシ子は23歳で許嫁の呼び寄せによって、1940年にパラオ諸島のマラカル島に渡航した。夫は電気工であり、比嘉トシ子は「退屈だったのでマラカルのカツオ節工場で働きました。沖縄人の漁民がカツオをとっておりました。そこでは一日三、四〇銭でした」(比嘉トシ子 1984: p. 431)という。このように、夫の収入で生活できたが、比嘉トシ子は鰹節工場で働いたのである。

中本シズは、1935年に姉夫婦とともにテニアンに渡航し、1938年に結婚した。その後、沖縄での経験を活かして、魚の行商に従事した(中本シズ 2005: p. 538)。

姉夫婦は、同郷出身者数人で、株式のマグロ船を建造してマグロ漁業をしており、また舅も漁業に従事しておりましたので、私も、沖縄での行商経験を活かして、行商することにした。鮮魚行商人は、七、

八人位いて、沖縄での行商とは違い、徒歩で個別訪問での販売である。行商は、良い品物を消費者に供給することであり、そのため、朝早く漁船が入港するのを待ち受ける。入港すると、着物の裾を捲りあげ、競って海に入り、船まで近寄って魚の品選びをし、自分のかごに入れておく。それから価格の調整である。船からの魚の品選びは、取り合いで大変だった。行商人は、いつも下半身の着物は、水浸しである。始めた頃は、自分でも嫌気がしたが、行商人は、みんな同じ格好である。気にすると商売はできない、遅れをとることになる。次第に慣れて気にすることもなかった。

魚の仕入れが済むと、下半身水浸しになっているままで、その上、素足で訪問販売へと急ぐ。当初はそれでも許されたが、このような状態での個別訪問するのは、見苦しくて失礼になるとの事で役所より履物勸行が義務づけられ、それに反した場合は、罰金が課された。私は、ズックを使用した。これまで素足で走り巡っていた私は、履物には不馴れで、足にマメができ、大変でしたが、馴れてからは靴履きは楽で歩き易い。

行商は、朝売り、夕売りの二回行っており夕売りの分は、朝で仕入れたものを鮮度が落ちぬよう貯蔵しておく。朝売りが済むと、昼は山に行き薪取り、そして、夕売りに出かける。夕売りは製糖工場の従業員が、仕事を終え帰宅する時間を見計らって行く。夕売りの方が売れ行きは良かった。家事、行商にめまぐるしい毎日だったが、健康に恵まれていたので、自分で汗を流して働き収入を得る。働けば働くほど収入が増し、仕事にも張りが出て楽しくなる。

以上の証言から、テニアンにおける魚の行商のありようが判る。漁船の入港によって、船まで近寄って魚を選別して価格を調整し、そのまま訪問販売をした。この販売は朝と夕方の二回であったため、夕方まで魚の鮮度が落ちないように保存した。その間、昼に薪を取りに行ったという。中本シズの他にも、魚の行商に従事した女性もいた(知念米 1999: pp. 354-356; 翁長文子 1998: pp. 506-508)。このように、男性は船に乗って魚を捕獲し、その魚介類を女性が行商で販売するという、性別役割分業がみられたのである。

4 畜産業

南洋群島における畜産業は、食用としても役用とし

でも、島内で需要を満たすための産業であった。夫は「公共領域」での仕事に従事する一方で、妻は家計を補助するために「家内領域」で畜産に従事した。その後、家計補助の仕事が畜産にまで拡大する場合もあった(松田カメ 1995: pp. 500-502)。他方、行政機関である南洋庁は1922年に庁令第21号畜産奨励規則を制定した。1935年に南洋群島開発調査委員会が拓務大臣に提出した答申の「植民方策」のなかでも「自給作物ヲ栽培センメ併セテ家畜ヲ飼養セシムルコト」³として、畜産が奨励された。

名嘉真ふみ⁴は、22歳の時に1938年に夫とともにサイパンに渡航した。渡航直後に、名嘉真ふみは夫婦で農業に従事した後に、夫はマンガン掘りの仕事に就いた。夫の「給料は小作するよりずっとよかったです。また、牛二頭、山羊七、八頭、鶏も飼っていました。鶏の卵をガラパンの料亭から注文を受けて、月に三回くらい一五〇個持って行って、それでいくらか生活できました。だから、夫の給料は貯金しました」と証言する(名嘉真ふみ 2002: pp. 476-477)。このように、夫は「家内領域」から分離された「公共領域」でマンガン掘りに従事する一方で、名嘉真ふみは「家内領域」において家畜を飼って鶏の卵を料亭に販売した。

5 被服身製品製造業

南洋移民にとって衣服は生活上必要不可欠のものであった。南洋群島での生活に必要な衣服などを、日本本土からの移入に依存しつつも、南洋群島で被服製造に従事する女性もいた。夫は「公共領域」で土地の測量や農業監督、採石などの仕事に従事する一方で、女性は「家内領域」において、家計を補助するために、洋裁や和裁の仕事に従事した。

未婚女性であった又吉ミネは、先述のように、両親の呼び寄せで、サイパンに渡航して洋裁学校に通った後に、パガンで洋服直しの仕事に従事した(又吉ミネ 2002: p. 789)。他方、名嘉真たつは、20歳で結婚し、22歳であった1935年には、夫の呼び寄せで子供とテニアンに渡航した。夫は新湊やチューロで農業監督をした後に、ソンソンで「土地事務所で土地の測量をしたり伐採するところを監督したり」し、たつは「鶏が

二〇羽ぐらいいました。それと、私はミシンを持っていたから洋裁をしていた」(名嘉真たつ 2002: pp. 645-646)と証言する。このように、夫の収入が家計の中心であったが、名嘉真たつも洋裁などで家計を補助した。ほかにも、「家内領域」において洋裁や和裁の仕事に従事した女性もいたのである(新垣イネ 1998: pp. 217-219; 志良堂静 1987: pp. 121-126)。

以上において、裁縫に従事する女性の証言をみてきた。夫が「公共領域」で農業監督などの仕事に従事するなかで、女性は「家内領域」で洋裁や和裁などの仕事に従事した。つまり、夫の収入が家計の中心となり、裁縫の仕事からの収入は家計の補助であったのであろう。このように、南洋群島内での需要を満たすために裁縫の仕事があったことが判る。

6 商業

南洋群島における商業は、移民者の生活必需品や嗜好品を供給する業種であった。商業に従事した女性でも、既婚女性においては、「公共領域」と「家内領域」が未分離の状態にあって夫の稼業を手伝う場合と、夫が「公共領域」で働く一方で、妻が「家内領域」のなかで商業に従事して家計を補助する場合、夫が「公共領域」での仕事を辞めて妻の従事する商業に参入する場合があった。他方、未婚女性においては、「家内領域」から離れて商業に従事する場合があった。このように、近代家族と商業との関係は多種多様であった。ここでは、自転車店や雑貨店を中心に確認しよう。

上江洲敏⁵は、19歳で呼び寄せ結婚により、1936年にテニアンに渡航した。夫は自転車業を営んでおり、上江洲敏は、夫の家業である自転車や雑貨の販売などを手伝いつつ、店員の賄いと子育てをした。なかでも、上江洲敏の夫は日本本土と南洋群島の物流にも関与していた。「鯉漁船の船員が、潮がかかっている鯉節を売りに来た。『近くの店を当たったんだけど、「一遍にこんなたくさんは引き取れない。上江洲だったら引き取るはずだから』と言われて来たんだけど」と言ったので、ひと船分安くで引き取った。鯉節でもとつてもうかったんです。日本の兵隊が、酒を飲んで帰りがたら、「これをお袋に送ってちょうだい。おつりはい

3 「南洋群島開発調査委員会答申」(国立公文書館所蔵「公文類聚」第五十九編・昭和十年・巻七・官職門 官制 通信省 鉄道省 拓務省)。

4 南洋群島在住のおじとともに、畜産に従事したという証言(志良堂静 1987: p. 122)もある。

5 他にテニアンで自転車屋を経営した証言(玉寄ウト 1999: pp. 518-520)もある。

いよ」と言って、国元に送らしよった。ですから内地にもたくさん送りました。この鯉節は安かったし、内地では貴重品だったんでしょね」と証言する（上江洲敏 2002: pp. 665-666）。このように、鯉節を仕入れて日本本土に移出した。そのうえで、日本本土からレコードやクレンザーなどを仕入れて販売した。「レコードも入荷するとすぐ飛ぶように売れました。戦時中の軍歌が中心でした」（上江洲敏 2002: p. 666）という。また、「主人は、こっちから砂糖や鯉節を送って、石鹼代用のクレンザーなどは向こうから送らせて、仕入れ上手だった。また、さらしと脱脂綿とクレンザーが入荷したときなど、綿とクレンザーを配給で売るときには巡査が立ち会って、代金は秤の重しを上から置いて大きな空き缶にちゃー入りー〔どんどん入れた〕。空き缶には細かいお金を入れた。そのようにして売りよった」（上江洲敏 2002: p. 666）と証言する。このように、日本本土との移出入にも関わった夫の事業を、上江洲敏が手伝ったのである。

雑貨店で未婚女性が働くこともあった。仲里(松本)ヨシは、1927年にサイパンで生まれ、尋常高等小学校卒業後に「ガラパンの街に出て、雑貨店の住み込み店員になりました。沖縄県人の経営で名城商店という店でした。(中略—引用者註)店員といっても、最初は使い走りの雑用ばかりでしたが、それでも、街で働けるのは大変な喜びでした」と述べ、「一年後に今度は、石山商店の店員に採用されました。この石山商店はガラパンでも一番賑やかな北二丁目の名店街にあり、百貨店のような大きな店構えでした」（仲里ヨシ 1999: p. 357）と証言する。このように、尋常高等小学校卒業後に雑貨店の仕事に従事した。

また、南洋群島においても、戦線の拡大や戦局の悪化、総動員体制の構築によって、商店や会社の売店が配給所に变化した。名幸(稲嶺)静子は、1943年頃にポナペ島にあった「わかもと」という薬会社の売店で働いた。「私は学校を卒業していたのでその会社の売店で働きました。売店といっても、その頃には配給を

する所が変わってました。売店の主任と二人で船を漕ぎ、配給用のメリケン粉や砂糖をワカモトの農場に取りに行くこともありました」と証言する(名幸(稲嶺)静子 2001: p. 554)。このように、会社の売店が配給所になったのである。

以上において、商業に従事した女性について概観した。既婚女性にとって稼業である商業は「公共領域」と「家内領域」が未分離の状態にあった。未婚女性にとっては、商業が「家内領域」から分離された「公共領域」である場合もあったのである。

V 総動員体制下の南洋群島における女性の役割

1 日中戦争の長期化に伴う総動員体制の構築

1938年5月3日に「南洋群島ニ於ケル国家総動員ニ関スル件」が制定され、国家総動員法が南洋群島にも延長適用された。また、1940年10月15日に南洋庁令第31号「南洋群島防災規則」⁶、同年12月26日に「南洋群島防空規程」⁷が制定された。この防災に関する一連の規則・規程⁸が制定された時期は、日中戦争の長期化や、同年9月における日本軍の北部仏印進駐と日独伊三国同盟締結といった、太平洋地域における現状打破的な対外路線を日本が実行した時期である。このように、アジア・太平洋地域において英米仏蘭との緊張が高まるなかで、南洋群島に防災規則と防空規程が策定された。

さらに同年12月5日に南洋庁訓令第60号「隣保組織要領」において隣保組が設置された⁹。これにより、日本政府—南洋庁—各支庁—部落—一区—隣保組—各戸の上意下達の行政システムが構築された。同年12月25日に南洋群島大政翼賛会が結成され、翼賛運動が南洋群島においても展開された。

こうした政策過程において、南洋群島での性別役割分業の規範が隣組を通して提示された。以下では、「南洋群島防災規則」と、これに基づく隣組単位での訓練

6 「南洋群島防空令制定ノ件ヲ定ム」(国立公文書館所蔵「公文類聚 第六十八編 昭和十九年 第六十八巻 軍事二・防空・徴発」類2866)という案件に収録されている。

7 防衛省防衛研究所所蔵「南洋群島防空規程 昭和15年12月26日」(中央—軍事行政法令—197. JACAR [アジア歴史資料センター] Ref. C13070847300)。

8 「南洋群島防空令制定ノ件ヲ定ム」(国立公文書館所蔵「公文類聚 第六十八編 昭和十九年 第六十八巻 軍事二・防空・徴発」類2866)及び防衛省防衛研究所所蔵「南洋群島防空規程 昭和15年12月26日」(中央—軍事行政法令—197. JACAR [アジア歴史資料センター] Ref. C13070847300)という案件に収録されている。

9 1940(昭和15)年12月5日付南洋庁訓令第60号「隣保組織要領」(『南洋庁公報 第21巻 1940(昭和15)年』ゆまに書房、2012年、pp. 613-614)。

に関する女性の証言を確認する。

「南洋群島防災規則」¹⁰では、「本令ニ於テ防災ト称スルハ非常変災ニ因ル危害ヲ防止シ又ハ被害ヲ軽減スル為南洋群島ノ全部又ハ一地方ニ亙リ行フ行為ヲ謂フ」(第1条)のであり、「防災ノ実施ハ南洋庁長官之ヲ命ズ」(第2条)とのことが明文化された。ここで、防災とは、緊急事態によって身体・生命・物品などを損なうことを防ぎ、また被害を軽減するため、南洋群島全域ないしは一地方において行う行為のことであると定義したうえで、防災実施の権限は南洋庁長官に帰属することが定められた。同長官の権限は、防災のための特別施設を設置することや防災の実施に従事させること、他人の土地・建物・船舶・物品の一時的な使用と、その使用の制限・禁止、警防団の設置、防災訓練の実施などであった。

防災訓練などには、隣組単位で女性も参加した。南洋群島在住の女性は、生業や、配給物資による家事労働などに従事しつつ、「銃後の守り」という役割を担い、隣組を単位とした軍事訓練・防空訓練・消火訓練に参加した。テナアン在住の女性は、「戦時態勢の許に「欲しがりません勝つまでは」の掛声で大へん切り詰めた生活でした。隣組単位に家庭の主婦達は慰問袋を作ったり、防空訓練でバケツリレー、砂運び、担架送り、また、かけ声勇ましく「エイヤーエイヤー」と竹槍などの訓練なども盛んに致しました。が、最初の空襲で感じたことは、今までの訓練が、直接なんの役にも立たなかったということでした」(徳村光子 1981: p. 47)と証言する。また、サイパンにおいて竹槍を用いた軍事訓練の様子について、「婦人は「死ぬときは、必ず、敵を一人殺してから死ぬ！」と、竹ヤリで突く訓練があった。竹ヤリは配給だった。敵の鉄砲に対して、竹ヤリで本当に戦争ができると思っていたのか、毎日訓練をさせられた。私は妊娠しているときも次男を産んでからも参加した。参加すると、ミルクや砂糖の配給がもらえた」(伊礼ユキ 1995: p. 507)という。この証言から、米軍が上陸した場合、女性は最前線に配置されて「死ぬときは、必ず、敵を一人殺してから」との「義務」を付与され、また隣組の訓練に参加しなければ物資が配給されなかったことが看取できる。

以上のように、隣組などにおける監視と懲罰の緊張状態のなかで、女性としての「あるべき姿」もまた提示されたことが判る(川島淳 2014a: pp. 7-17)。すなわち、女性は、生業と家事労働に従事するとともに、「銃後の守り」としての役割や、最前線における兵士としての「義務」もまた付与されたのである。

2 日本軍の敗退と戦時非常体制下の南洋群島における性別役割分業の再編

1941年12月8日に、日本軍はマレー作戦を実施し、その直後に真珠湾を攻撃して、英米仏蘭に宣戦を布告した。日本軍は、同月中にグアム島や香港を占領し、1942年1月から5月にかけてフィリピンや蘭領東インド、ビルマなどを占領した。同年6月のミッドウェー海戦で日本海軍が敗北し、1943年2月にガタルカナル島で日本軍は敗退した。このように、戦局の推移によって、米軍が制海権を掌握しつつあり、日本軍の海上交通の確保も厳しい状況になった。1944年2月以降に、南洋群島在住の女性のなかには、戦時引揚に応じる者や、食糧増産のために南洋群島に残留するものもいた。これについて、以下で確認しよう。

1943年9月30日開催の第11回御前会議において「今後採ルヘキ戦争指導ノ大綱」が決定された。そのなかで、いわゆる「絶対国防圏」の設定が明示された¹¹。

一、万難ヲ排シ概ネ昭和十九年中期ヲ目途トシ米英ノ進攻ニ対応スヘキ戦略態勢ヲ確立シツツ随時敵ノ反抗力ヲ捕捉破摧ス

二、帝国戦争遂行上太平洋及印度洋方面ニ於テ絶対確保スヘキ要域ヲ千島、小笠原、内南洋(中西部)及西部「ニューギニア」「スダ」「ビルマ」ヲ含ム圏域トス

戦争ノ終始ヲ通シ圏内海上交通ヲ確保ス

この「内南洋(中西部)」は、マリアナ諸島とトラック諸島、パラオ諸島などに該当し、「絶対国防圏」内に組み込まれた。しかし、その東側に位置するポナペやマーシャル諸島などは「絶対国防圏」の外に置かれた¹²。このように、日本軍の戦略上において、南洋群

¹⁰ 「南洋群島防空令制定ノ件ヲ定ム」(国立公文書館所蔵「公文類聚 第六十八編 昭和十九年 第六十八巻 軍事二・防空・徴発」類2866)。「南洋群島防災規程」の引用箇所は、これによる。

¹¹ 参謀本部編『杉山メモ』下巻、原書房、2005年普及版、p. 473

¹² 参謀本部編『杉山メモ』下巻、原書房、2005年普及版、pp. 466-495

島は「絶対国防圏」の内と外に分断されたのである。

「絶対国防圏」の策定に伴って、南洋群島における性別役割分業が変容することとなった。女性を南洋群島に残留させて戦争に動員するという方針が継承される一方で、高齢者や子供の付き添いとして日本本土などに引き揚げさせる政策も採用されることとなった。このようなジェンダーに基づいた政策は、1943年12月8日以前に策定された「邦人引揚ニ関スル件」や1944年2月20日から3月1日頃にかけて策定された「人口疎開に関する件」、同年4月14日に閣議決定された「南洋群島戦時非常措置要綱ニ関スル件」のなかで明確化されている。以下では、戦時非常体制が構築されるまでの南洋群島におけるジェンダーのありようの一端について明らかにする¹³。

1943年12月8日以前に「邦人引揚ニ関スル件」¹⁴が策定された。これによると、第一次戦時引揚対象者は「病弱者及何等勞務ニ従事セザル者又ハ島内生産ニ比較的影響ナキ所謂消費階級ニ属スル者及其ノ家族（農耕従事者ノ家族等ハ除外ス）」であった。第二次戦時引揚対象者は「戦局変化ニ伴ヒ群島ノ使命達成上真ニ必要ナル者（国防資源開発、食料自給自足、運輸通信強化等ノ従事者）及島ノ防衛上真ニ必要ナルモノ（在郷軍人及訓練ヲ受ケタル青年団員等）ヲ除ク一切ノ者」であった。このように、米軍の侵攻が予想される南洋群島に残留することができるのは、主に防衛戦力になる人々と、国防資源開発や食糧増産などの労働力になる人々であった。これ以外の人々は、南洋群島からの戦時引揚を余儀なくされた。すなわち、南洋群島に残留か引揚かという境界が設定されたのである。

1944年2月5日に「南洋群島防空令」が制定・施行される¹⁵と、南洋群島からの戦時引揚対象者は、さらに限定されることとなった。同月20日付の『南洋新報』において「人口疎開に関する件」が公表され、3月1日付で「人口疎開ニ関スル件」が策定された。

ここでは、戦時引揚対象者の範囲について明確にしよう。

同月20日に「人口疎開に関する件」と「南洋群島人口疎開要綱」などが『南洋新報』に掲載された¹⁶。前者では「群島周辺の状態に鑑み防衛体勢強化の一環として内地に於ける分散疎開に呼応し今般南洋群島に於ても一部在住民の疎開を概ね左記要綱に依り実施せんとす」というように、南洋群島における防衛体勢強化の一環として日本本土の「分散疎開」に呼応して南洋群島の一部在住民は、「南洋群島人口疎開要綱」に依拠して、引き揚げることとなった。その対象者の範囲は「(一)病弱者 (二)妊産婦 (三)十四才未満の者及び六十才以上の者並之等の扶養者にして欠くべからざるもの」であるが、「所轄支庁長支庁出張所長に於て労力保持其の他の理由に依り必要と認めたるものは之を除く」ことが定められた。つまり、戦時引揚対象者は、病弱者や妊産婦をはじめ、14歳未満の子供と60歳以上の高齢者、そして子供や高齢者の付添をする人物であるが、例外として支庁長や支庁出張所が労働力とみなされた場合には南洋群島に残留することができるということが定められた。この例外規定により、戦時引揚対象者であっても、戦時引揚に依らずに残留することができたのである。

同年3月1日付の「人口疎開ニ関スル件」は北部支庁テニアン出張所長名義の施行文書である。この文書には、「過般新聞紙上ニテ発表ノ通、南洋群島周辺ノ情勢ニ鑑ミ防備態勢強化ノ一環トシテ内地ニ於ケル分散疎開ニ呼応シ今般南洋群島ニ於テモ一部在住者ノ疎開（内地引揚）ヲ概ネ左記要領ニ依リ実施スルコトニナリマシタ該当事者ハ原則トシテ内地帰還ヲ要スルモ一先希望者ヲ取纏メ順次引揚ゲセシメ度ニ付別紙帰還申込書ニ記入セシメ至急取纏メ提出相成度」¹⁷とのが記されている。前半部には、2月20日付の新聞記事と同内容である。後半部においては、戦時引揚該当

13 防空法体系に基づいて疎開・引揚が実施された先行研究（石原俊 2022a: pp. 75-97；石原俊 2022b: pp. 104-125）も参照のこと。また、政策決定と政策遂行との齟齬も表面化した（川島淳 2025）。

14 「老幼婦女子内地引揚ニ関スル件」（国立公文書館所蔵「昭和十七年度 高等警察関係 チューロ巡査駐在所」返青284）。「老幼婦女子内地引揚ニ関スル件」によれば、1943年12月8日付で北部支庁長多田仁己はテニアン出張所長加藤勝吉に、「本月六日人員概数電報アリタル処農場方面老幼婦女ハ除外シアルモ一應是ヲ包含スル概数更ニ報告アレ」と指示した。この指示を受けた加藤は、「邦人引揚ニ関スル件」のなかに「一二、一八日報告済」との文言があるように、「農場方面老幼婦女」を含めた概数を12月18日付で多田に報告したのであろう。したがって、「老幼婦女子内地引揚ニ関スル件」の内容と「邦人引揚ニ関スル件」の書き込みとの関連から、前者が本文文書であり、後者が添付文書であったと考えられる。

15 前掲「南洋群島防空令制定ノ件ヲ定ム」。閣議書に「南洋群島防災規則」が添付されたことから、「南洋群島防空令」と「南洋群島防災規則」が関連づけられたのであろう。

16 「防衛態勢強化のため 在住民の疎開断行 臨時帰還者相談所設置」（国立国会図書館所蔵『南洋新報』1944年2月20日付）

17 「老幼婦女子内地引揚ニ関スル件」（国立公文書館所蔵「昭和十七年度 高等警察関係 チューロ巡査駐在所」返青284）

者は原則として日本本土に帰還することになるけれども、まずは希望者を取りまとめて順次引き揚げさせたいので、申込書に記入して提出するように促している。このことから、対象者は戦時引揚に感じざるをえなかったが、その引揚の順番を確定するために、「希望者」には「帰還申込書」に記入させたことが判る。

「人口疎開ニ関スル件」において、戦時引揚対象者が「(イ)病弱者」、「(ロ)妊産婦」、「(ハ)十四才未満ノ者及六十才以上ノ者並ニ此等ノ扶養者ニシテ欠クベカラザルモノ 但シ附添ハ婦女ニ限ル」¹⁸とすることが定められた。2月20日付の新聞発表の内容とほぼ同様に、戦時引揚対象者は、病弱者や妊産婦とともに、14歳未満の子供や60歳以上の高齢者と、子供や高齢者の世話に欠かすことのできないとされた女性であった。このように、南洋群島在住の女性は、子供と高齢者の戦時引揚に付添の役割を担うこととなった。なお、「人口疎開ニ関スル件」という公文書で示された戦時引揚対象者の範囲は、新聞記事の内容よりも公式的なものであった。そして、「人口疎開ニ関スル件」が施行された後においても、前年12月8日付の「邦人引揚ニ関スル件」で定められた、戦時引揚対象者の優先順位と範囲は機能していたと考えられる(川島淳 2025)。

先述のように、1943年9月30日開催の御前会議において、マリアナ諸島は「絶対国防圏」内に位置づけられた。当初、マリアナ諸島やパラオ諸島において、戦争遂行のために、女性や子供を残留させて農業に従事させる方針であった。しかし日本軍の戦局の悪化によって、1944年2月上旬までに、トラック諸島やマリアナ諸島、パラオ諸島在住の女性や子供の戦時引揚が検討課題となった(中島文彦 1963: pp. 379-391)。

他方、2月17日午前、米軍はトラック諸島を空爆し、23日午前、マリアナ諸島の空爆を開始した。同年3月4日に中部太平洋方面艦隊が編成され、サイパンに司令部が設置された。同日に、マリアナ諸島在住の留邦人に関する方針が変化し、戦時引揚対象者は、女性のなかでも食糧生産に直接的に関係のないものと、子供や高齢者であったという(中島文彦 1963: pp. 379-391)。このように、日本は、当初マリアナ諸島在住の女性や子供を残留させて農業に従事させる方針であったが、それ以後に女性や子供などを引き揚げさせ

る方針に転換した。

1944年4月13日に大東亜大臣青木一男は、内閣総理大臣東條英機に宛て「南洋群島戦時非常措置要綱ニ関スル件」を内閣に提出した¹⁹。閣議請議書によると、「南洋群島ニ於ケル現下ノ緊迫セル情勢ニ鑑ミ南洋庁ノ行政ヲ軍ト表裏一体タラシメ戦時非常ノ事態ニ即応セシムルノ要アルニ依リ別紙ノ通決定ノ必要ヲ認ム仍テ茲ニ提出ス」という。このように、米軍の侵攻が予想されるなかで、南洋庁の行政と日本軍の活動を密接に関連づけた戦時非常体制の構築が示された。これを受けた内閣書記官は閣議書を起案した。翌日に閣議での決定を経て、「南洋群島戦時非常措置要綱」が施行された。その内容は、以下の通りである。

第一、方針

南洋群島在住民ノ総力ヲ結集シテ直接戦力化シ、軍ト一体トナリテ皇土前線ノ防衛ニ当ラシムル建前ヲ執リ、以テ南洋群島ノ戦時非常体制ヲ確立ス

第二、要領

一、全在住民ヲシテ各其ノ在住スル島嶼ニ在リテ凡テ戦闘的配置ニ就カシムル建前ノ下ニ、官民ヲ問ハス軍事設営ノ協力ヲ第一義トシ併セテ軍需食糧ノ供出、食糧ノ自給、国防資源ノ確保等緊急業務ニ集中的且機動的ニ動員ス

二、全在住民ノ生活ヲ凡有事態ニ応シテ齊シク確保シ得ル如キ体制ヲ整備スルト共ニ、其ノ活動ヲ鼓舞シ後顧ノ憂ナカラシムル為万全ノ措置ヲ講ス

三、南洋庁ノ機構ニ付テハ軍ト表裏一体トナリ其ノ機能ヲ發揮セシムル如ク特別ノ措置ヲ講ス

第三、措置

一、全在住民ヲ職域別又ハ地域別ニ軍隊の組織ニ編成シ集中的且機動的動労体制ヲ確立ス

二、全在住民ノ活動ヲ鼓舞シ後顧ノ憂ナカラシムル為左ノ措置ヲ講ス

(イ) 在住民中扶助ヲ要スル者ニ付テハ之カ生活ヲ確保ス

(ロ) 邦人老幼婦女子ハ急速引揚ヲ実施スルト共ニ内地ニ於ケル之カ援護及就労ヲ強化スルト共ニ引揚ニ際スル預金ノ払戻等金融ニ関

18 「老幼婦女子内地引揚ニ関スル件」(国立公文書館所蔵「昭和十七年度 高等警察関係 チューロ巡査駐在所」返青284)

19 「南洋群島戦時非常措置要綱ニ関スル件」(国立公文書館所蔵「公文類聚 第六十八編 昭和十九年 第七十卷 軍事四 国家総動員二」類2868)。以下、本案件の引用資料は、特筆しない限り、これによる。

シ特別ノ措置ヲ講ス

(ハ) 在住民ノ所要ニ応シ逐次軍属タラシム

- 三、南洋庁ノ機構及事務処理ニ付テハ戦時非常ノ事態ニ即応スル如ク処置スルモノトシ且軍トノ一体的活動ヲ為サシムル為現役軍人又ハ予備役軍人ヲ南洋庁職員ニ特別任用スルノ途ヲ講スト共ニ南洋庁職員ハ概ネ軍属ト為スモノトス
- 四、一般会計ノ予備金支出ニ依リ群島ニ於ケル非常的財政需要ニ応シ得ルノ途ヲ講ス
- 五、南洋群島ニ於テ事業ヲ為ス会社ヲ活用スルニ當リ、其ノ業務遂行ノ敏速適確ヲ期スル為必要ナル措置ヲ講スルモノトス
- 六、群島内物資需給ノ実情ニ鑑ミ南方各地域群島間竝ニ群島内配船ヲ円滑ナラシムル為帰帆船ノ配置等適当ノ措置ヲ講ス

このように、南洋群島において在住民も軍と一体となって防衛にあたるという方針に基づいて、戦時非常体制が構築された。この「戦時非常体制」において、男性は、南洋群島に残留して防衛の役割を担うことになり、女性は南洋群島で食糧増産や軍事施設建設作業に従事する役割を担った。その一方において、「邦人老幼婦女子」が戦時引揚対象者として明文化された。このように、「南洋群島戦時非常措置要綱」が閣議決定されたことで、戦時非常体制は、南洋庁への内閣の指令に基づいて構築され、性別役割分業も再編された。

以上で明らかにしたように、戦時引揚対象者の範囲も、1943年12月頃から翌年4月にかけて多少なりとも変化した。1943年12月時点では、南洋群島に残留することができるのは、防衛戦力となる人々と、国防資源開発や食糧増産の労働力になる人々であり、それ以外の人々は、南洋群島から引き揚げさせられることとなった。その後、1944年2月から3月にかけて、戦時引揚対象者は限定されることとなった。すなわち、基本的には、病弱者や妊産婦、14歳以下の子供、60歳以上の高齢者、子供と高齢者の引揚に付き添う女性に限定された。しかし、同年4月14日に閣議決定された「南洋群島戦時非常措置要綱」によると、前年12月時点の「邦人引揚ニ関スル件」と同様に、防衛戦力や、国防資源開発と食糧増産の労働力にならない高齢者や子供、女性が戦時引揚対象者となったのである。このように、戦局の推移に伴う日本軍の混乱によって、戦時引揚対象者の範囲も多少なりとも変動していたのであり、この変動に伴って南洋群島における性別

役割分業のありようも変化したのであろう（川島淳2025）。

3 性別役割分業体制の再編

ここでは、戦時引揚に応じた女性の移動形態と、南洋群島に留まって食糧増産に従事した女性の活動形態について明確にすることで、戦時非常体制下における性別役割分業のありようの一端について検討する。

(1) 戦時引揚に応じた女性

1942年時点において、南洋群島在住者数は145,272人であった。そのうちの沖縄出身者は54,854人であり、沖縄出身者の占める割合は37.75%であった。また、現地住民と外国籍を除いた在住者93,220人のうち、沖縄出身者の割合は58.84%であった。南洋群島から日本本土に上陸した戦時引揚者総数は、沖縄県立図書館所蔵の複写版「南洋群島在住民疎開者接收事務報告書その他資料」に基づく、16,386人であった。そのうち、日本本土出身者は9,453人であり、沖縄出身者は6,136人であった。戦時引揚者全体のなかで、沖縄出身者の占める割合は約37.45%であった。南洋群島在住沖縄出身者54,854人の11%に相当する【表2】。なお、出身地別で戦時引揚者が多かった順序を示すと、沖縄県出身者6,136人について、東京府出身者が983人、福島県出身者が974人、静岡県出身者が664人であった【表3】。

【表2】によると、戦時引揚に応じた女性と子供の総数は13,739人であった。このうち、日本本土出身の女性と子供の総数は8,049人であり、沖縄出身の女性と子供の総数は5,205人であり、成人男性は2,637人であった。海没者数は、1,700人であったといわれている【表4】。1944年2月の南洋群島防空令の適用と、1944年6月15日における米軍のサイパン上陸を指標として、戦時引揚者数の推移を確認すると、1943年12月から1944年1月までの引揚者数は755人であり、戦時引揚者全体の4.61%に該当する。1944年2月から6月までの引揚者数は14,413人であり、全体の88.06%に該当する。7月から12月までの引揚者数は1,200人であり、全体の7.33%に該当する。このように、1944年2月から6月に引揚者が集中していたことが判る【表5】。ちなみに、戦時引揚者が上陸した場所は主に横浜や神戸であった【表6】。

以上の統計は、南洋群島から日本本土に上陸することができた戦時引揚者の総数である。フィリピンや台

湾への戦時引揚者数は、現在不明であるため、含まれていない。また引揚船のなかには米軍の攻撃によって撃沈された船舶もあるため、南洋群島で戦時引揚船に乗った総数と、日本本土に上陸した戦時引揚者総数は一致していない。これらは今後の課題である。

次に、戦時引揚に応じざるをえなかった女性の証言について確認しよう。ヤップ島在住の女性は、空襲後に「軍から引き揚げ命令が出て、私は子どもたちと船に乘せられた。おとうたちは島を守るためにヤップに残ることになった。生活にも慣れていたので、なるべくなら帰りたくなかった」(山内キヨ 1998: p. 359)という。大城トミは、トラック諸島で夫と漁業に従事したが、戦時中に「引き揚げ命令が下った。長い間脇目もふらずに働いてつくった財産だったが、仕方なく帰ることにした」(大城トミ 1995: p. 400)と述べる。この証言から、南洋群島で経済的基盤を確保して生活に慣れたが、不本意ながらも南洋群島からの戦時引揚に応じざるをえなかったことが判る。

1944年2月13日にテニアンで空爆があった。テニアンで教員をしていた照屋秀は「最初の空襲があった。その後婦女子の引揚げ命令が出た。男は帰さないと言う。理由を聞くと食糧問題とのこと。食べ盛りの四人の男の子が居たので引揚げるのがお国の為だと思い夫照屋正善を残して」引き揚げたと証言する(照屋秀 1985: p. 88)。このように、食糧事情によって子供の付

添として戦時引揚に応じたのである。

他方、肉親から南洋群島に留まるように諭されたものの、テニアン空爆後に引揚に応じる女性もいた。「主人はテニアンからニューギニアへ軍属として行ったんです、昭和十九年ぐらいに。行ってすぐに空襲が始まりました。主人はいないし、私は次男を妊娠していたから、人に迷惑をかけたらいけないので引き揚げるといったら、主人の姉さんも私の姉さんも反対していました。私たちが乗った前の船が沈没したので、あの船には公務員の奥さん方が乗っていたらしく、危険だからと反対したけど、昭和十九年三月に引き揚げてきました」(金城ハルヨ 2002: p. 731)と証言する。このように、テニアンでの空爆後に、妊娠していた女性のなかには、肉親への配慮によって、戦時引揚に応じる女性もいたのである。

他方、妻子を引き揚げさせた男性の証言を確認する。3月のパラオ空爆後に、妻と子供が沖縄に引き揚げた男性は、「そろそろ子供も歩ける様になって可愛い盛りで、十九年三月空襲が来て、家内と子供はパラオの政府から沖縄に強制送還された。帰らんとっても駄目だった。とても苦しかったよ。今まで親子水入らずで暮らしているでしょう、妻子が沖縄に帰って当初はとても辛かった」(津嘉山正行 1992: p. 238)と証言する。テニアン在住の男性は、妻と姪が沖縄に引き揚げるにあたって、「すでに家族は日本本土や沖縄に帰し

表2 南洋群島から本土への戦時引揚者の総数・男女比

	総計	男性			女性			女性と男児	全体の占める割合	男性の割合	女性の割合	女性と男児の割合	男性の大人の割合
		大人	子供	合計	大人	子供	合計						
本土	9,453	1,404	2,281	3,685	3,465	2,303	5,768	8,049	57.69%	38.98%	61.02%	49.12%	8.57%
沖縄	6,136	931	1,654	2,585	1,940	1,611	3,551	5,205	37.45%	42.13%	57.87%	31.76%	5.68%
朝鮮	777	298	156	454	196	127	323	479	4.74%	58.43%	41.57%	2.92%	1.82%
樺太	8	2	2	4	4	0	4	6	0.05%	50.00%	50.00%	0.04%	0.01%
台湾	2	2	0	2	0	0	0	0	0.01%	100.00%	0.00%	0.00%	0.01%
その他	10								0.06%			0.00%	0.00%
合計	16,386	2,637	4,093	6,730	5,605	4,041	9,646	13,739	100.00%	41.10%	58.90%	83.85%	16.09%

※本表は、「南洋群島在住民疎開者接収事務報告書その他資料」(沖縄県立図書館所蔵複製版)23頁～26頁を基に作成した。子供は14歳未満のものとして捉えられる。

表3 出身府県別引揚者数上位5位

	沖縄県	東京府	福島県	静岡県	鹿児島県
人数	6,136	983	974	664	569
割合	37.45%	6.00%	5.94%	4.05%	3.47%

※本表は、「南洋群島在住民疎開者接収事務報告書その他資料」(沖縄県立図書館所蔵複製版)23頁～26頁を基に作成した。

※「割合」は、【表1】で示した引揚者全体の16,386人のなかで占める割合のことである。

表4 米軍に撃沈された南洋群島からの引揚船

船舶名	出港日	出港地	撃沈日	撃沈場所	死者数	生存者数	撃沈の要因	出典
波上丸		サイパン	1943(昭和18)年10月7日	ラバウル近海	不明			前掲「移民政策」
日鉱丸		トラック島	1943(昭和18)年11月1日	東笠原島沖	3名		アメリカ潜水艦の魚雷攻撃	「南洋群島海没者名簿」
近江丸		クサイ	1943(昭和18)年12月27日	ポナペ島南東海上	124名			前掲「移民政策」
総洋丸		ポナペ島	1943(昭和18)年12月7日	東カロリン群島方面海上	7名		アメリカ潜水艦の魚雷攻撃	「南洋群島海没者名簿」
赤城丸	1944(昭和19)年2月17日	トラック島	1944(昭和19)年2月17日	トラック島沖合	511名	53名	アメリカ飛行機の爆撃	「南洋群島海没者名簿」
夕映丸		トラック島	1944(昭和19)年2月17日	トラック島沖合	2名			前掲「移民政策」
アメリカ丸	1944(昭和19)年3月4日	サイパン	1944(昭和19)年3月6日	マリアナ群島ウラカス島沖合	494名	3名		前掲「移民政策」
三池丸		パラオ	1944(昭和19)年4月26日	パラオ島北方の海上	7名		アメリカ潜水艦の魚雷攻撃	「南洋群島海没者名簿」
青森丸		サイパン	1944(昭和19)年4月	サイパン・本土間の海上	4名		アメリカ潜水艦の魚雷攻撃	「南洋群島海没者名簿」
美山丸		パラオ	1944(昭和19)年5月14日	パラオ島北方の海上	27名		アメリカ潜水艦の魚雷攻撃	「南洋群島海没者名簿」
ジョクジャ丸		パラオ	1944(昭和19)年5月15日	西カロリン群島方面海上	7名		アメリカ潜水艦の魚雷攻撃	「南洋群島海没者名簿」
千代丸	1944(昭和19)年5月31日	サイパン	1944(昭和19)年6月2日	内地近海洋上	97名	46名	アメリカ潜水艦の魚雷攻撃	「南洋群島海没者名簿」
白山丸	1944(昭和19)年5月31日	サイパン	1944(昭和19)年6月2日	内地近海洋上	278名	99名	アメリカ潜水艦の魚雷攻撃	「南洋群島海没者名簿」
籠田川丸		トラック	1944(昭和19)年6月12日	東カロリン群島方面海上	2名		アメリカ潜水艦の魚雷攻撃	「南洋群島海没者名簿」
泰南丸		ポナペ島	1944(昭和19)年6月24日	九州沖	1名		アメリカ潜水艦の魚雷攻撃	「南洋群島海没者名簿」
神島丸		ロタ	1944(昭和19)年6月11日	西カロリン方面海上	54名		アメリカ飛行機の爆撃	「南洋群島海没者名簿」
バタビア丸		サイパン	1944(昭和19)年6月12日	西カロリン群島方面海上	18名		アメリカ飛行機の爆撃	「南洋群島海没者名簿」
門司丸		サイパン	1944(昭和19)年6月15日	西カロリン群島、サイパン島北方海上	5名		アメリカ機動部隊と交戦	「南洋群島海没者名簿」
大栄丸		ヤップ島	1944(昭和19)年7月3日	パラオ・ヤップ間海上	43名		アメリカ潜水艦の砲撃	「南洋群島海没者名簿」
ブラジル丸		サイパン	1944(昭和19)年7月5日	西カロリン群島方面海上	1名		アメリカ飛行機の爆撃	「南洋群島海没者名簿」
朝日丸		パラオ	1944(昭和19)年8月12日	パラオ諸島	不明			前掲「移民政策」
広順丸		パラオ	1944(昭和19)年8月12日	西カロリン群島方面海上	15名	12名	アメリカ潜水艦の魚雷攻撃	「南洋群島海没者名簿」
広善丸		チニアン	1944(昭和19)年12月	小笠原沖	不明			前掲「移民政策」

※財団法人南洋群島協会「南洋群島海没者名簿」(沖縄県立図書館所蔵複製版)と前掲「移民政策」に基づいて作成した。

表5 月別南洋群島各地から本土への引揚者総数と割合

年	月	西カロリン諸島				マリアナ諸島				東カロリン諸島				マーシャル諸島				その他		
		パラオ	ヤップ	サイパン	テニアン	ロタ	グアム	トラック	ポナペ	ヤルーツ	クサイ	ヤルーツ	ポナペ	トラック	ポナペ	ヤルーツ	クサイ	人員	割合 (%)	
1943年	12月			39																
	1月			111																
	2月	1		109	1															
	3月	255		572	557															
	4月	1,642		906	659	81														
	5月	700		781	343	215														
	6月	1,306		60	98	91														
	7月			136																
	8月	476																		
	9月	297																		
	10月	7																		
	1944年	11月	4																	
12月		232																		
合計		4,920	820	2,582	1,658	387	189	5,176	1,950	362	258	620	16	16	0.10					
合計		5,740	35.07%	4,816	29.42%	5,176	31.62%	620	3.79%	16	0.10									

※本表は、「南洋群島在住民疎開者接収事務報告書その他資料」（沖縄県立図書館所蔵複製版）28頁～29頁を基に作成した。割合の上段は当月に占める割合であり、下段は引揚者全体に占める割合である。

表6 上陸地別引揚者数

	横 浜	横 須 賀	芝 浦	築 地	神 戸	大 阪	呉	門 司	和 歌 山 県 勝 浦	千 葉 県 勝 浦	三 崎	長 崎	佐 世 保	磯 子 ・ 羽 田	総 計
引揚者数	11,980	65	203	75	2,852	17	524	611	4	4	2	1	4	44	16,386
割合(%)	73.11	0.40	1.24	0.46	17.41	0.10	3.20	3.73	0.02	0.02	0.01	0.01	0.02	0.27	100.00

※本表は、「南洋群島在住民疎開者接収事務報告書その他資料」（沖縄県立図書館所蔵複写版）を基に作成した。

ていて働き手の男たちが島に残っていました。私も妻と姪（兄の子）を沖繩に引き揚げさせるときは途中のことを考えて非常に不安でした。妻は流産した後でしたがここには危険だから早く手続さしないとけないし、いろいろ考える余地もないまま帰りました。（中略—引用者）できることなら私も一緒に沖繩に帰りたいたと思いましたが、男は帰ることは許されませんでした」（仲本正重 2010: p. 55）と証言する。このように、戦時引揚による家族の分断について証言者の悲痛な想いが看取できる。また、子供や女性が引き揚げに応じる一方で、男性が南洋群島の防衛戦力とされて召集・徴用された。こうした性別役割分業は、統治権力によって再編された結果でもあった。

また、戦時引揚に応じた女性たちのなかには、米軍による船舶の撃沈で十分な船舶が確保されなかったために引き揚げられなくなった女性もいた。すなわち、「婦女子の内地引揚げが決定され、多くの人たちが帰還船に乗ってどんどんパラオを去って行きました。私の家族はどうするか迷ってしまいましたので、あとから申し込んだときはすでに船舶の都合がつかず、あきらめざるを得ない状況になって」おり、「何しろ、せっかく乗船しても米軍にやられた船も多かったですから、引揚げるべきか、残るべきか、みんな迷いました」（高江洲順義 2004: pp. 361-362）と証言する。このように、戦時引揚者の増加によって、戦時引揚に応じるか否か迷ったが、申し込んだ時には、船舶の都合がつかず、残留を余儀なくされた女性もいた（翁長千代 1984: p. 444；知念米 1999: p. 355）。

他方、南洋群島での残留を決断した女性もいた。サイパンで戦時引揚の対象となった教員の女性は「夫と別れて、子どもと二人で帰るのは不安である。「死なばもろとも」と残ることにした」（知念春江 1989: p. 187）と証言する。また、妊産婦は戦時引揚の対象者

であり、妊娠9ヶ月目の女性は、「婦女子、特に妊婦は一刻も早く疎開するようにとの命令が出された。その時、私は三男盛邦を妊娠していて、九ヵ月目にはいつていた。陸だったら助かる率も大きい、海だったら助かる確率は少ない。泳ぎはあまり上手でないし、お腹も大きいのでどうしたらいいかと思案していた。そしたら、アイライ飛行場に勤労奉仕で行っていた夫が帰ってきた」ので、その後、南洋群島に残留することにしたと証言する（幸地和子 1995: p. 545）。さらに、戦時引揚対象であった女性は、「戦争前の引き揚げは希望次第でしたので、私は帰りませんでした。魚雷があつてやられたりしたから、これも怖くて、自分一人だったらいいけど、子ども二人連れているから帰らなかった」（平良豊 2005: p. 294）と証言する。このように、子供のことを慮って南洋群島に残留した女性もいた。

他方、南洋群島残留に関する夫などの証言もある。「南洋庁から戦争が激しくなる前に婦女子を本国へ疎開させるよう通知がきました。しかし妻は引き揚げ途中の海で敵にやられるかもしれないと言って引き揚げを拒みました。ほとんどの婦女子も引き揚げをしませんでした。引き揚げない人は戦争のための食料増産をさせられることになり、パラオ本島（バベルダオブ島）に移ることになりました」（米須清志 2001: p. 523）との証言がある²⁰。

このように、戦時引揚をしても、南洋群島に留まっても、死を覚悟せざるを得ない状況のなかで、戦時引揚に応じるものもいれば、南洋群島に留まることを希望するものもいたのである。

(2) 戦時引揚における女性の心情

戦時引揚において、パラオからフィリピン・台湾を経て沖繩に戻る予定であったが、フィリピンや台湾に

²⁰ ほかに戦時引揚に応じなかった証言（外間清徳 2004: p. 369；伊波長宜: 1982: p. 524；新垣義吉・ウシ 1995: p. 478）がある。

滞留して敗戦を迎えた後に、日本や沖縄に引き揚げた人々もいた。また、パラオからフィリピンに向かう途中で米軍の攻撃を受けて、美山丸とジョグジャ丸という輸送船が撃沈されて死亡するものと、救助された後に、フィリピンに上陸した戦時引揚者もいた。フィリピンや台湾で食糧不足による栄養失調、マラリアなどの伝染病などによって死亡する人々もいた。他方、サイパン・テニアン・トラック諸島などから、日本本土を経由して沖縄に到着したものもいた。戦前に日本本土から沖縄に向かう途中で米軍の攻撃を受けるかもしれないという恐怖心を抱きながら、戦前に沖縄に帰還して、沖縄戦で「集団死」に追い込まれた女性（川島淳 2022b: pp. 207-214）もいれば、日本本土で敗戦を迎えた女性（川島淳 2015: pp. 1-10）もいたのである。

1944年2月17日・18日には、米軍がトラック諸島に空爆を実施した。トラック諸島沖に停泊していた戦時引揚船の赤城丸も攻撃された。その死亡者数は511名で、生存者52名であった。これについて、内原勇助は次のように証言する。「一九四四年（昭和十九）二月十六日の夕刻、私は家内と三人の子供を赤城丸に乗船させた。男は島に残され、女性と子供と老人だけが強制的に引き揚げさせられた」が、翌17日午前7時に空襲警報が発令された後に、赤城丸と夕映丸、護衛艦は米軍の攻撃を受けて撃沈された。乗船者のうち「約五〇人ぐらいの人々が救命ボートでタマン桟橋にたどりついたが、そのうちの二〇人ぐらいは病院で亡くなってしまった。結局生き残ったのは約三〇人ぐらい」であり、「私も臨月の妻と三人の子供らを一度に失った」（内原勇助 1987: pp. 336-337）と証言する。城間松助は、「妻と子供たちを疎開させるために、船に乗せました。乗船したその日は出発せずに、遠く沖の方に停泊していました。翌日の一九四四年（昭和十九）二月十七日にトラック諸島への大空襲があり、その空襲で、妻や子供たちの乗った船も攻撃され、妻と子供たちは死にました。乗船したその日に出ていたら、そんなことにはならなかったのと思いました」（城間松助 2003: p. 539）と証言する。このように、妻子が乗船したその日になぜ出航しなかったのか、そして、生と死との境界線が何によって決定づけられるのか、といった命題が心の中に深く刻み込まれることになったのであり、戦時引揚は戦場という極限状態のなかで

実施されたとと言える。

専業主婦であった女性はパラオから引き揚げることになった。戦時引揚の途中で、「私と娘二人は、主人を残してパラオから引き揚げることにしました。一九四四年（昭和十九）の初めごろです。ちょうど、三女の弘子が生まれて間もないころでした。パラオから一二隻の船団を組み、軍艦が護衛しての航海でした。途中、「敵の潜水艦が向かっているので、甲板上に集合するように」という指示が出たときは、弘子を背負い、片方の手で道子の手を引き、もう片方の手に荷物を抱えて、船底から甲板に駆け上がりましたが、怖くて涙が止まりませんでした」（喜友名トヨ 2006: p. 657）と証言する。このように、戦時引揚船が米軍の攻撃を受けるかもしれないという恐怖心を抱き、また生命の危険を感じながら、南洋群島から引き揚げたのである²¹。

(3) 南洋群島からの戦時引揚者のなかで沖縄戦に巻き込まれた人々

このように、日本本土などを経由して沖縄に帰還した女性や子供は、沖縄戦に巻き込まれることになった。1944年10月10日に米軍が沖縄に初めて空爆を実施した。現在、沖縄では、「10・10空襲」と呼ばれている。米軍の空爆が日本軍の演習だと誤解する人もいるなかで、戦時引揚者は、米軍の空爆であることに気づき、注意を喚起することができたと証言している。すなわち、「十・十空襲のときは、飛行機が飛んで、あっちにいったかと思ったら、飛び上がったたりおりたりしながら弾を落としていた。南洋の空襲に似ていたから、子どもたちには南洋から持ってきた頭巾を被せて、私は毛布を被っていた。私たちは南洋で「友軍だあ」といってやられた人を見たり、体験もしていたから空襲だとわかったが、みんなはアメリカ軍か日本軍かわからないから、外に出ていたので、「空襲だよ、空襲だよ」と叫んだ。みんなは演習しているのかとしか思っていなかったの、私がいわなかったらみんなやられていたかも知れない」（幸地ヤス 2005: p. 620）と証言する。10・10空襲後に、ヤップから引き揚げた女性は、「10・10空襲も過ぎ、沖縄もいよいよ戦場になるんだなと感じた。ヤップからも苦勞して引き揚げてきたのに、ここで戦争に巻き込まれたら、今度こそ親子一緒に死

²¹ 他にも同様の証言（山内キヨ 1998: p. 359）がある。

んでしまうかもしれないと思った」(山内キヨ 1998: p. 359) と証言している。このように、戦時引揚者は、南洋群島で米軍の空爆を経験し、また海上において生命の危険を感じながら移動し、沖縄においても米軍による空爆に遭遇したように、1943年12月以降から米軍の攻撃に生命の危険を感じつづけ、常に「戦場」という緊張状態のなかにいた存在であったと捉えられる。

その一方で、南洋群島から沖縄に引き揚げた女性の活動の様子が1944年12月16日と翌年1月20日の『沖縄新報』(浦添市立図書館所蔵複写版)で報道されている。12月16日付の新聞には、「蹶然起つ サイパンの妻たち」との見出しで「南方拓士の引揚家族を援護しようとする南洋群島共助義会支部では生活救済に乗出したが頼る夫をサイパン、テニアン島に残し幼児を抱いて敢闘する妻女達はこの温かい援護に感泣、報復を誓い合つて各職域に或は家庭に凛々しい頑張りをみせてゐる」といった記事などが掲載されている。また、翌年1月20日付の新聞には「二の舞ひせぬぞッ 奮起する南方引揚民ら」との見出しで、南洋群島共助義会沖縄支部の国場という人物へのインタビュー記事として「今次戦争における県民の試練は大きく、恨みを呑んで引揚げた 縄島 の大半は財を失ひ引揚 の途次肉親を失ふなど総ゆる辛苦を具さに嘗めたがこれら引揚民は温い保護にいまさら奮起山を開墾して増産に励む者、或 細い暮しの中から息子を高工にやるなど自らは戦力 強作業 突入、サイパンの二の舞ひを する など大いに頑張つてゐる」とのことや「全南洋群島引揚民の激しい憤りはサイパンをテニアンをこの手 奪ひ返すのだと力一杯起上つてゐる」とのことなどが報道されている。このように、南洋群島から沖縄への戦時引揚者の活動を報告することで、沖縄県民に戦意を高揚しようとする意図が垣間見られる。

1945年4月1日に沖縄島に上陸した米軍の主力部隊は首里の第32軍司令部に迫った。5月に軍司令部は首里から摩文仁に撤退し、6月23日に軍司令官の牛島満が自決して、日本軍の組織的抵抗は終了したが、日本兵はゲリラ戦を展開した。こうした戦局の推移のなかで、日本軍による住民虐殺や「強制集団死」が実行されたのである。

南洋群島から沖縄に引き揚げた女性と子供は、「隣組できれいに造ったカナシチャグワの壕では、中にいたおばさんに、子どもが泣いたら大変だと断られて、私たち家族だけは別の壕に入った」のであり、カ

ナシチャグワの壕では「アメリカにやられるより自分で死んだほうがいとみんな薬物で死んだ」(幸地ヤス 2005: pp. 618-622) と証言する。この壕で「強制集団死」が実行された。なお、飛行場建設や陣地構築の作業の際に、沖縄の人々は、日本軍兵士に、米軍の捕虜になったら殺されるから、その前に死ぬようにいわれたとの証言が散見される。そのような背景によって、この壕での「強制集団死」も実施されたように思われる。

また、別の女性は、壕のなかで、子供が泣いたら迷惑がかかると考えて、防空壕にも入れず、空爆を受けるなかで彷徨い歩いたと証言している。すなわち「沖縄に着いてからまた戦が。南洋で爆撃されて沖縄に帰ってきたら、沖縄のほうでも爆撃。そのようなときに三男が生まれているんです。壕の中に入ったら泣くから、人に迷惑がかかると思って、防空壕にも入れなくて、しょっちゅう道から子どもを抱いて歩いていた。空襲で吹き上げてくる土をかぶったりもしました。沖縄に帰ってきてからもあっちに引越したりこっちに引越したり、年寄りを連れて、そんな状態だったので、息する暇もないくらいでした」(上江洲トヨ 2002: p. 688) という。また、他の女性は「友軍が帰って少ししたらアメリカがきてしまった。「カマン、カマン」して呼ばれて、壕にいたよそのおばあさんに、「おまえたちから早く出ていって」と言われた。壕の中では幸雄がしょっちゅう泣いていたから、おばあさんに怒られていた。壕から出たら、アメリカはガムなどいろいろくれた。宮里のお父さんが、「幸雄が泣いたからよかった。もし泣かないで、このまま壕に入っていたらガスをまかれて全滅するところだった。あなたのおかげで助かったんだよ」と言われた」(金城春子 2005: p. 215) との証言もある。このように、壕から追い出されなかったものの、壕のなかで子供がいつも泣いていたので、周囲の人々に嫌がられたが、この子の泣き声によって、米軍は、壕に隠れているのが民間人であると認識したため、壕から出るように伝達した。実際に壕から出ると、米軍から捕虜として扱われたことが判る。

また、戦時引揚に応じた女性の夫は、戦後に南洋群島から沖縄に帰還すると、安谷屋の収容所において、名幸ガマに避難していた妻が死亡したことを知った。「瑞慶覧の人たちは、みんな安谷屋に収容されていたからですが、妻はすでに亡くなっていました。沖縄戦のとき名幸ガマに避難していて被害にあったようで

す。妻はテニアンに残った私のことをとても心配していたそうです。それなのにその私は生きて帰ってきて、妻が死んでしまったのですから、そのショックは並大抵のものではありません」(仲本正重 2010: p. 58) と証言している。この名幸ガマには、七、八十名が避難していたが、生き残った人は3名であり、意識不明の状態に捕虜になったため、それ以外の人々がどのような最期を遂げたのかということは、現在でも不明である。なお、遺骨は1952年と1989年に収拾された。このガマにおいて「強制集団死」があった可能性は否定できないと思われる。

また、妻子を沖縄に帰還させた男性は「戦争が終れば、家内と子供をまたヤップに戻すつもりでした。沖縄の方が安全だというので帰したら、かえって沖縄が戦場になってしまって、家内も二人の子供も、私の両親もみな死んでしまいました」(当間盛助 1984: p. 438) と証言する。以上の証言から、生と死が何によって決定づけられるのか、あるいは何を信じていいのかわからない、と感じていた様子が垣間見られる。

このように、1943年以降における戦争遂行のなかで、防衛戦力となる男性は南洋群島に残留させられて現地で召集された。他方、子供と高齢者、女性が主な戦時引揚の対象者となった。なお、女性のなかでも、国防資源開発や食糧生産に従事していたものなどは除外された。このような性別役割分業があったがゆえに、戦時引揚者のなかには、不本意ながら引き揚げた女性や、家族や親戚のことを慮って引き揚げる女性もいた。他方、米軍の攻撃による戦時引揚船の撃沈が相次ぎ、戦時引揚に十分な船舶が稼働できなかったため、残留せざるをえなくなった女性や、戦時引揚に応じても、南洋群島に留まっても、死を覚悟せざるをえないという緊張状態のなかで、家族とともに生活することを望んで残留する女性などもいた。戦後に引き揚げた男性のなかには、沖縄戦などで妻子が死亡したものもいれば、沖縄で妻子と再会したものもいた。さらに、戦時中に日本本土に上陸したものの、沖縄に帰ることができずに、日本本土で敗戦を迎えて戦後沖縄に引き揚げたものもいた。このように、戦局の悪化に伴う性別役割分業の再編が、沖縄出身南洋移民女性の生と死に大きな影響を及ぼしたことが看取できる。こうした戦時

引揚は、南洋移民女性にとって、まさに戦争体験の一形態であったといえる。

4 性別役割分業と南洋群島に残留した女性

南洋群島に残留しなければならなかったのは、防衛戦力となる男性と、国防資源開発や食糧増産の労働力になる人々であった。南洋群島の防衛を担う男性は、1943年9月29日に改正された兵役法施行令によって南洋群島に兵役法が適用された²²ため、南洋群島で徴兵検査を受け、また現地で召集されることになり、戦闘に参加することとなった。

他方、南洋群島に残留した女性は、食糧増産などに従事し、農作物を日本軍に供出した。これは、1944年2月8日に閣議決定された「南洋群島軍需食糧補給緊急対策要綱」²³に基づくものであった。すなわち、同月5日に海軍大臣嶋田繁太郎と大東亜大臣青木一男が内閣総理大臣東條英機に宛て「南洋群島軍需食糧補給緊急対策要綱ニ関スル件」という閣議請議書を送付した。これによると、「現下決戦段階ニ即応シ南洋群島軍需食糧補給体制ヲ強化スルノ要アルニ依リ別紙ノ通決定ノ必要ヲ認ム仍テ別紙要綱ヲ提出」したという。2月8日に内閣書記官が起案し、以下のことが同日に閣議決定を経て指令として発せられた。

第一、方針

決戦段階ニ即応シ南洋群島ニ於テハ速ニ軍需食糧ノ補給協力ニ努ムルモノトス

第二、要領

- (一) 駐在部隊ノ食糧補給ニ任ズル為糧食(米、甘藷等)水産食料品蔬菜其ノ他ノ食料品ノ増産確保ヲ期ス
- (二) 群島在住民ノ所要糧食ニ付テハ極力之ガ節約ヲ図ルト共ニ可及的ニ代用食ニ転換シテ主食糧品(米、粟等)ノ軍需ヘノ供出ニ努ム

第三、措置

- (一) 軍需食糧作物ノ増産ヲ図ル為現ニ実施中ノ群島食糧自給計画ノ外ニ可耕未利用地ハ官民有地ヲ通ジ速ニ整地又ハ開墾ヲ行ヒ食糧作物ノ栽培ヲ行フト共ニ蔗作地其ノ他ノ非食糧作付地ハ食糧作付地ニ転換セシム此ガ為十八一九年期産精

22 「兵役法施行令ヲ改正ス」(国立公文書館所蔵「公文類聚」第67編第95巻昭和18年 軍事一・陸軍・海軍)

23 「南洋群島軍需食糧補給緊急対策要綱ニ関スル件ヲ定ム」(国立公文書館所蔵「公文類聚」第68編第75巻 昭和19年 産業・農事。以下、本案件の文書は、これによる。

ノ内地向移出ハ之ヲ最少限度ニ留メ十九年度及二十年度ノ兩年ニ互ル島内軍民ノ消費酒精、雜酒製造用數量ヲ確保ス

(二) 島内努力ハ特殊工事、国防資源開発ニ要スル者ヲ除キ概ネ食糧作物栽培ニ結集セシムルト共ニ不足努力ノ補給ニ関シテハ要スレバ陸上部隊ノ協力ヲ得

(三) 軍需補給ノ為ニスル農場ニ付テハ軍用農場トシ資金、資材等ハ海軍ニ於テ一括計上シ之ガ実施ハ概ネ南洋庁ニ委託ス

(四) 軍需食糧補給ヲ円滑ナラシムル為南洋興発会社ノ機構ヲ便宜活用シ群島内ノ食糧需給調整機関タル機能ヲ附与シ食糧ノ數量並ニ価格ノ調整ヲ行ハシム

之ガ為南洋興発会社ヲシテ別勘定ヲ設ケシメ之ガ収支ヲ明カナラシムルト共ニ運営ニ当リテ損失ヲ生ジタル場合ハ政府ニ於テ之ガ補填ノ方途ヲ別途考慮ス

軍ニ対スル供出食糧品ノ価格ハ生産費ヲ基準トシテ海軍及ビ南洋庁ニ於テ協議シテ定メタル價格トス

すなわち、南洋群島で速やかに軍需食糧の補給協力を努力する方針が示された。駐在部隊に必要な糧食や水産物、野菜その他の食糧の増産と、その確保を実現する一方、南洋群島在住民に必要な食糧を代用食に転換させて、主食糧品を軍隊に供出するように努めることが決定された。また、軍需食糧作物を増産するために食糧作物の生産が可能な土地に転換させること、特殊工事と国防資源開発に必要な人々を除く者を食糧作物の栽培に集中させること、南洋興発株式会社に食糧需給調整機関に転換させることなどが決定された。

こうした状況のなかで、南洋群島に残留した女性などは、食糧増産などに従事することになった。ポナペ残留の女性は「徴用されて砂糖をつくったり、芋や野菜の増産をさせられた。日本に引き揚げるまでずっと徴用だった。山の中への避難訓練もあった」（島袋安亀・カマド 1995: p. 462）と証言する。また、パラオに残留した女性は「軍から畑を与えられイモを植えた。手榴弾で皆一緒に死ぬか、イモを植えるかとも言われた。また、食糧増産すると、たとえ死んでも一緒に靖国神社にまつられるとも言われたので、月の夜、イモを植える時もあった」（当山イト 1996: p. 533）と証言している。このように、南洋群島に残留して食糧増産

などに従事する女性もいたのである。

1944（昭和19）年6月以降、米軍はサイパン島やテナアン島、アンガウル島、ペリリュー島に上陸し、地上戦を展開した。南洋群島に留まった女性のなかでも、米軍との戦闘に巻き込まれて死亡するものや、日本軍によって「強制集団死」に追い込まれた人々などもあった。他方、戦場を生き延びて米軍の捕虜となって、戦後沖繩に引き揚げた女性もいたのである。

VI むすび

はなはだ雑駁ながら、以上において、沖繩出身南洋移民女性の渡航・生業・戦争についてみてきた。本論をまとめることでむすびとしたい。

帝国日本の形成・展開・崩壊ないしは縮小という一連の過程において、沖繩出身南洋移民は、好むと好まざるとにかかわらず、帝国日本の南洋群島統治の維持・拡大を支える存在であると同時に、沖繩・南洋群島の統治政策・戦争遂行によって、自らの人生が直接的にも間接的にも影響を受ける存在であったといえる。なかでも、女性の渡航は、男性の事情に大きな影響を受けたことが看取できる。また、植民地南洋群島での産業開発や政治社会は、主に男性と女性との性別役割分業に基づく移民の活動によって支えられていたのである。

南洋群島における基幹産業は主に製糖業と水産業であった。黒糖と鰹節などは南洋群島から日本本土などに移出された。こうした産業開発のなかには、性別役割分業もまた垣間見られた。特に、水産業においては、漁業は男性の仕事であり、魚介類の行商や加工生産は女性の仕事であった。また、畜産業は島内の需要を満たす産業であり、既婚女性のなかには「家内領域」で家計を補助する仕事として畜産業に従事するものもいた。さらには、南洋群島在住者の生活に必要な衣服なども、日本本土からの移入に依存するとともに、「家内領域」において被服製造業に就く女性もいた。このように、南洋群島の産業開発と、それを担う人々の生活必需品を供給する産業には、性別役割分業のありようが垣間見られる。

1940年以降の総動員体制下において、隣組などにおける監視と懲罰の緊張状態のなかで、女性は、生業と家事労働に従事するとともに、「銃後の守り」としての役割、最前線における兵士としての「義務」もまた付与された。このように、隣組の活動のなかで、女

性としての「あるべき姿」や性別役割分業のありようもまた提示されたのである。

1943年以降における戦争遂行のなかで、防衛戦力となる男性は南洋群島に残留させられて現地で召集された。他方、子供と高齢者、女性が主な戦時引揚の対象者となった。ただし、女性のなかでも、国防資源開発や食糧生産に従事したものなどは除外された。このように、戦時引揚者のなかには、不本意ながら引き揚げた女性や、家族や親戚のことを慮って引き揚げる女性もいた。他方、米軍の攻撃による戦時引揚船の撃沈が相次ぎ、戦時引揚に十分な船舶が稼働できなかったため、残留せざるをえなくなった女性や、戦時引揚に応じても、南洋群島に留まっても、死を覚悟せざるをえないという緊張状態のなかで、家族とともに生活するために残留する女性もいた。戦後に引き揚げた男性のなかには、沖縄戦などで妻子が死亡したものもいれば、沖縄で妻子と再会したものもいた。さらに、戦時中に日本本土に上陸したものの、沖縄に帰還できずに、日本本土で敗戦を迎えて戦後沖縄に引き揚げたものもいたのである。

他方、サイパンやテニアンなどに残留して食糧生産に従事した女性は、米軍上陸後の戦闘にも巻き込まれた。なかでも、日本軍によって「強制集団死」に追い込まれた人々がいる一方で、戦場を生き延びて米軍の捕虜となり、戦後沖縄に引き揚げた女性もいた。

以上のように、帝国日本の形成・展開・崩壊ないしは縮小という一連の過程において、沖縄出身南洋移民女性は、帝国日本の南洋群島統治の維持・拡大を支える存在であった。すなわち、南洋群島の統治政策や戦争遂行は、性別役割分業などに基づく移民の活動によって支えられていたといえる。また、沖縄や南洋群島の統治政策や戦争遂行と、それに基づく性別役割分業によって、自らの人生、生と死が直接的にも間接的にも影響を受ける存在であったことが垣間見られる。これこそが、まさに性別役割分業と戦争遂行・植民地統治との関係性によるものであったと考えられる。

参考文献

(日本語文献)

赤嶺 秀光

1990 「南洋移民とは何だったのか」『新沖縄文学』84: pp. 72-87

2001 「南洋移民は幸福だったか」『けし風』32: pp. 38-41

飯高 伸五

1999 「日本統治下マリアナ諸島における製糖業の展開」『[三田史学会] 史学』69(1): pp. 107-140

石川 朋子

2000 「沖縄南洋移民に関する一考察」『[沖縄国際大学] 地域文化論叢』3: pp. 99-121

石原 俊

2022a 「総力戦の到達点としての島嶼疎開・軍務動員」『シリーズ戦争と社会3 総力戦・帝国崩壊・占領』pp. 75-97、岩波書店

2022b 「島嶼戦と住民政策」『思想』1117、pp. 104-125

今泉 裕美子

1992 「南洋興発(株)の沖縄県人政策に関する覚書」『沖縄文化研究』19、pp. 131-177

1997 「南洋群島の「玉砕」と日本人移民」『戦争と日本人移民』飯野正子・木村健二・桑井輝子(編)、pp. 213-222、東洋書林

2002 「南洋群島」『具志川市史 第4巻 移民・出稼ぎ編 論考編』具志川市史編さん委員会編、pp. 547-750、具志川市教育委員会

2003 「南洋へ渡る移民たち」『近現代日本社会の歴史 近代社会を生きる』大門正克・安田常雄・天野正子(編)、pp. 195-223、吉川弘文館

2005 「南洋群島引き揚げ者の団体形成とその活動—日本の敗戦直後を中心として—」『史料編集室紀要』30: pp. 1-44

2015 「南洋群島の日本の軍隊」『地域のなかの軍隊7 帝国支配の最前線 植民地』坂本悠一(編)、pp. 260-290、吉川弘文館

2016 「パラオ諸島をめぐる民間人の「引揚げ」」『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究 国際関係と地域の視点から』今泉裕美子・柳沢遊・木村健二(編)、pp. 127-188、日本経済評論社

川島 淳

2009a 「沖縄出身南洋移民女性の渡航形態について—1930年代から1940年代前半期の未婚女性に焦点をあてて—」『南島文化』31: pp. 19-44

2009b 「戦間期国際社会と日本の南洋群島の統治・経営方針—1935年における南洋群島開発調査委員会の答申の紹介を中心に—」『駒沢史学』73: pp. 47-71

2010a 「沖縄から南洋群島への既婚女性の渡航について—近代沖縄史・帝国日本史・女性史という領域のなかで—」『東アジア近代史』13: pp. 147-167

2010b 「沖縄出身南洋移民未婚女性の渡航要因と移民男性の婚姻形態—帝国日本史・近代沖縄史・女性史という複合的領域のなかで—」『南島文化』32: pp. 17-54

2011 「沖縄出身南洋移民既婚女性の渡航要因と男性の論理について—帝国日本史・近代沖縄史の重層的関係性と女性史を射程に入れて—」『南島文化』

33: pp. 15-59

2012 「南洋群島における沖縄出身女性の経済的活動について」『南島文化』34: pp. 19-50

2013 「南洋群島開発調査委員会の設置と廃止について—制度的位置と性格に焦点をあてて—」『駒沢史学』81: pp. 100-125

2014a 「総力戦体制下南洋群島と沖縄出身女性—隣組での活動に焦点をあてて—」『よのつじ』10: pp. 7-17

2014b 「戦時下南洋群島からの戦時引揚について—ジェンダーの観点から—」『南島文化』36: pp. 35-48

2015 「戦時下南洋群島からの戦時引揚の実態について—出航・航行に関する沖縄出身女性・子供の証言を中心に—」『南島文化』37: pp. 1-19

2015 「南洋群島からの戦時引揚と沖縄出身女性について」『よのつじ』11: pp. 1-10

2025 「戦時非常体制下における沖縄出身南洋移民の戦時引揚について」『南島文化』47: pp. 35-60

サイパン会誌編集委員会

1986 『サイパン会誌 想い出のサイパン』、サイパン会

1994 『サイパン会誌 第2号 心の故郷・サイパン』、サイパン会

2003 『創立20周年 サイパン会誌 第3号 平和を祈念して』、サイパン会

テニアン会編

2001 『はるかなるテニアン』、テニアン会

富山 一郎

1996 「ナショナリズム・モダニズム・コロニアリズム」『講座外国人定住問題第一巻 日本社会と移民』伊豫谷登士翁・杉原達(編)、pp. 129-163、明石書店

2006 『増補版 戦場の記憶』日本経済評論社

那覇市総務部女性室・那覇女性史編集委員会

1998 『なは・女のあしあと 那覇女性史(近代編)』ドメス出版

森 亜紀子

2011 「ある沖縄移民が生きた南洋群島—要塞化とその破綻のもとで—」『アジア遊学145 帝国崩壊とひとの再移動 引揚げ、送還、そして残留』、pp. 125-135、勉誠出版

2013 「委任統治領南洋群島における開発過程と沖縄移民—開発主体・地域・資源の変化に着目して—」『日本帝国圏の農林資源開発—「資源化」と総力戦体制の東アジア—』野田公夫(編)、pp. 317-374、京都大学学術出版会

2013 「沖縄出身南洋移民と家族の生活世界—戦時下パラオにおける後期移民世代の経験をめぐって—」『帝国以後の人の移動—ポストコロニアリズムとグローバリズムの交錯点—』蘭信三(編)、pp. 351-399、勉誠出版

2014 「戦時期南洋群島における資源開発・要塞化とその帰結—境界を生きた沖縄の人々に着目して—

『農業史研究』48: pp. 15-28

2024 「〈南洋群島〉という植民地空間における沖縄女性の生を辿る」『記憶と歴史の人類学—東南アジア・オセアニア島嶼部における戦争・移住・他者接触の経験—』、風間計博・丹羽典生(編)、pp. 159-183、風響社

(英語文献)

Kawashima, Jun

2022a “Population movements of migrant Okinawan women during the development of the Empire of Japan” *Women in Asia under the Japanese Empire*, Tatsuya Kageki and Jiajia Yang ed., Abingdon: Routledge.

2022b “Population movements of migrant Okinawan women during the collapse of the Empire of Japan” *Women in Asia under the Japanese Empire*, Tatsuya Kageki and Jiajia Yang ed., Abingdon: Routledge.

引用資料

新垣 イネ

1998 「テニアンで戦争に遭う」『糸満市史 資料編7 戦時資料下巻—戦災記録・体験談—』糸満市史編集委員会(編)、pp. 217-219、糸満市役所

新垣 義吉・ウシ

1995 「テニアンの死体は話以上」『戦時体験記録 北谷町』企画課町史編集室(編)、pp. 477-484、北谷町役場

伊芸 ウシ

1996 「南洋移民をふりかえって」『金武町史 第一巻「移民・証言編」』金武町史編さん委員会(編)、pp. 510-511、金武町教育委員会

伊波 長宜

1982 「サイパン移住と戦争」『宜野湾市史 第三巻資料編二 市民の戦争体験記録』宜野湾市史編集委員会(編)、pp. 523-525、宜野湾市

伊礼 ユキ

1995 「子供の内股はつねられた痕だらけ」『戦時体験記録 北谷町』企画課町史編集室(編)、pp. 506-510、北谷町役場

上江洲 敏

2002 「上江洲敏」『具志川市史 第4巻 移民・出稼ぎ 証言編』具志川市史編さん委員会(編)、pp. 663-666、具志川市教育委員会

上江洲 トヨ

2002 「上江洲トヨ」『具志川市史 第4巻 移民・出稼ぎ 証言編』具志川市史編さん委員会(編)、pp. 667-668、具志川市教育委員会

内原 勇助

1987 「赤城丸撃沈される」『渡嘉敷村史 資料編』渡嘉敷村史編集委員会(編)、pp. 333-337、渡嘉敷村役場

- 大蔵省管理局
1946 『日本人の海外活動に関する歴史的調査 南洋群島篇 第二分冊』 pp. 98-100
- 大城 サチ
2002 「大城サチ」『具志川市史 第4巻 移民・出稼ぎ 証言編』具志川市史編さん委員会(編)、pp. 800-801、具志川市教育委員会
- 大城 トミ
1995 「義兄は友軍に殺された」『戦時体験記録 北谷町』企画課町史編集室(編)、pp. 400-403、北谷町役場
- 沖縄新報社
1944 「蹶然起つ サイパンの妻たち」『沖縄新報』1944(昭和19)年12月6日
1945 「二の舞ひせぬぞッ 奮起する南方引揚民ら」『沖縄新報』1945(昭和20)年1月20日
- 上運天 ゴゼイ
2002 「上運天ゴゼイ」『具志川市史 第4巻 移民・出稼ぎ 証言編』具志川市史編さん委員会(編)、pp. 507-508、具志川市教育委員会
- 翁長 三郎・千代
1984 「引揚げ後に思わぬ不幸が」『浦添市史 第五巻資料編4 戦争体験記録』浦添市史編集委員会(編)、pp. 441-446、浦添市教育委員会
- 翁長 文子
1998 「ウマカラウティーマ」『糸満市史 資料編7 戦時資料下巻一戦災記録・体験談一』糸満市史編集委員会(編)、pp. 506-508、糸満市役所
- 兼島 カマド
2002 「兼島カマド」『具志川市史 第4巻 移民・出稼ぎ 証言編』具志川市史編さん委員会(編)、pp. 505-506、具志川市教育委員会
- 喜友名 トヨ
2006 「疎開先での娘の死」『北谷町史 附巻 移民・出稼ぎ編』北谷町史編集委員会(編)、pp. 655-659、北谷町教育委員会
- 金城 朝子
2001 「跡継ぎの男の子をといわれて」『北中城村史 第三巻 移民・本編』北中城村史編纂委員会(編)、pp. 549-552、北中城村役場
- 金城 カメ
2002 「金城カメ」『具志川市史 第4巻 移民・出稼ぎ 証言編』具志川市史編さん委員会(編)、pp. 704-705、具志川市教育委員会
- 金城 シゲ
2002 「金城シゲ」『具志川市史 第4巻 移民・出稼ぎ 証言編』具志川市史編さん委員会(編)、pp. 814-815、具志川市教育委員会
- 金城 繁正
1977 『玉城村誌』金城繁正(編)、玉城村役場
- 金城 春子
2005 「金城春子」『具志川市史 第5巻 戦争編 戦時体験I』具志川市史編さん委員会(編)、pp. 212-216、具志川市教育委員会
- 金城 ハルヨ
2002 「金城ハルヨ」『具志川市史 第4巻 移民・出稼ぎ 証言編』具志川市史編さん委員会(編)、pp. 730-731、具志川市教育委員会
- 金城 光守・百合
2002 「金城光守・百合」『具志川市史 第4巻 移民・出稼ぎ 証言編』具志川市史編さん委員会(編)、pp. 697-700、具志川市教育委員会
- 幸地 和子
1995 「怖かった南洋のジャングル病」『戦時体験記録 北谷町』企画課町史編集室(編)、pp. 543-554、北谷町役場
- 幸地 ヤス
2005 「幸地ヤス」『具志川市史 第5巻 戦争編 戦時体験I』具志川市史編さん委員会(編)、pp. 618-622、具志川市教育委員会
- 米須 清志
2001 「南洋へ移民」『北中城村史 第三巻 移民・本編』北中城村史編纂委員会(編)、pp. 522-526、北中城村役場
- 崎浜 ツル
2006 「家族を結わいつけて岩壁に立つ」『北谷町史 附巻 移民・出稼ぎ編』北谷町史編集委員会(編)、pp. 580-584、北谷町教育委員会
- 参謀本部
2005 『杉山メモ』下巻、p. 473、原書房普及版
- 島袋 安亀・カマド
1995 「水や食糧が豊富だったボナベ」『戦時体験記録 北谷町』企画課町史編集室(編)、pp. 460-463、北谷町役場
- 志良堂 静
1987 「サイパン移民・パラオでの戦争体験」『宜野座村誌 第二巻資料編I 移民・開墾 戦争体験』宜野座村誌編集委員会(編)、pp. 121-126、宜野座村役場
- 城間 松助
2003 「南洋群島への出稼ぎ」『大里村史 移民本編』大里村移民史編集委員会(編)、pp. 538-540、大里村役場
- 平良 豊
2005 「平良豊」『具志川市史 第5巻 戦争編 戦時体験II』具志川市史編さん委員会(編)、pp. 292-295、具志川市教育委員会
- 高江洲 順義
2004 「パラオで船大工をしていた」『佐敷町史 五 移民』佐敷町史編集委員会(編)、pp. 359-363、佐敷町役場

- 玉寄 ウト
1999「テニアン島の戦争体験」『東風平町史—戦争体験記—』町史編集委員会(編)、pp. 518-520、東風平町
- 知念 春江
1989「玉砕の島サイパンで」『座間味村史 下巻』座間味村史編集委員会(編)、pp. 185-198、座間味村役場
- 知念 米
1999「パラオも沖縄も大変だった」『佐敷町史 四 戦争』佐敷町史編集委員会(編)、pp. 354-356、佐敷町役場
- 津嘉山 正行
1992「輸送隊で野戦病院に食糧を送る—パラオ」『北谷町史 第五巻資料編 4 北谷の戦時体験記録(上)』北谷町史編集委員会(編)、pp. 237-240、北谷町役場
- 照屋 秀
1985「南洋から引揚げて沖縄戦に遭遇」『北谷町民の戦時体験記録集(第一集) 沖縄戦一語でいいかな何時め世までいん』北谷町史編集事務局(編)、pp. 88-92、北谷町役場
- 当間 盛助
1984「再びヤップへの願いも空しく」『浦添市史 第五巻資料編 4 戦争体験記録』浦添市史編集委員会(編)、pp. 433-438、浦添市教育委員会
- 当山 イト
1996「月夜のイモ植え」『金武町史 第一巻「移民・証言編」』金武町史編さん委員会(編)、pp. 532-533、金武町教育委員会
- 徳村 光子
1981「戦時下のクリスチャン生活」『那覇市史 資料篇 第3巻 7 市民の戦時・戦後体験記 I (戦時篇)』那覇市企画部市史編集室(編)、pp. 45-50、那覇市企画部市史編集室
- 仲里 ヨシ
1999「サイパンからきょうだい三人で引揚げる」『佐敷町史 四 戦争』佐敷町史編集委員会(編)、pp. 357-359、佐敷町役場
- 中島 文彦
1963「南洋群島在住邦人の内地引揚及びその在外財産について」『続々・引揚援護の記録』厚生省援護局庶務課記録係、pp. 379-391、厚生省
- 仲宗根 正雄
2002「仲宗根正雄」『具志川市史 第4巻 移民・出稼ぎ証言編』具志川市史編さん委員会(編)、pp. 593-594、具志川市教育委員会
- 名嘉真 たつ
2002「名嘉真たつ」『具志川市史 第四巻 移民・出稼ぎ証言編』具志川市史編さん委員会(編)、pp. 645-647、具志川市教育委員会
- 名嘉真 ふみ
2002「名嘉真ふみ」『具志川市史 第四巻 移民・出稼ぎ証言編』具志川市史編さん委員会(編)、pp. 476-477、具志川市教育委員会
- 仲本 キクエ
2002「仲本キクエ」『具志川市史 第四巻 移民・出稼ぎ証言編』具志川市史編さん委員会(編)、pp. 553-554、具志川市教育委員会
- 中本 シズ
2005「せっかく生活が安定してきたが」『玉城村史 第7巻 移民編』玉城村史編集委員会(編)、pp. 537-541、玉城村役場
- 仲本 正重
2010「北大東島からテニアンへ」『北中城村史 第四巻 戦争・証言編二』北中城村史編纂委員会(編)、pp. 53-59、北中城村役場
- 名幸(稲嶺) 静子
2001「ボナペからの引き揚げ体験」『北中城村史 第三巻 移民・本編』北中城村史編纂委員会(編)、pp. 552-557、北中城村役場
- 南洋新報社
1944「防衛態勢強化のため 在住民の疎開断行 臨時帰還者相談所設置」『南洋新報』1944(昭和19)年2月20日付
- 南洋庁
1933~1939『南洋庁統計年鑑』第1回~第9回
- 比嘉 カマド
2001「サイパンに夢を求めて」『北中城村史 第三巻 移民・本編』北中城村史編纂委員会(編)、pp. 526-529、北中城村役場
- 比嘉 スミ子
2006「結婚式を挙げてサイパン島へ」『北谷町史 附巻 移民・出稼ぎ編』北谷町史編集委員会(編)、pp. 589-592、北谷町教育委員会
- 比嘉 トシ子
1984「本土出稼ぎ後にマラカル島へ」『浦添市史 第五巻資料編 4 戦争体験記録』浦添市史編集委員会(編)、pp. 430-433、浦添市教育委員会
- 外間 清徳
2004「生まれ故郷のサイパンは戦場に」『佐敷町史 五 移民』佐敷町史編集委員会(編)、pp. 368-372、佐敷町役場
- 又吉 ミネ
2002「又吉ミネ」『具志川市史 第4巻 移民・出稼ぎ証言編』具志川市史編さん委員会(編)、pp. 789-790、具志川市教育委員会
- 松江 春次
1932『南洋開拓拾年誌』南洋興発株式会社、p. 82
- 松田 カメ
1995「そんな死に方をしてはいけない」『戦時体験記録 北谷町』企画課町史編集室(編)、pp. 500-506、

- 北谷役場
山内 キヨ
1998 「ヤップ引き揚げと沖縄戦」『糸満市史 資料編 7
戦時資料下巻—戦災記録・体験談—』糸満市史編
集委員会(編)、pp. 359-360、糸満市役所
吉野 シゲ
1996 「忘れられない島サイパン」『金武町史 第一巻「移

- 民・証言編』金武町史編さん委員会(編)、pp.
501-504、金武町教育委員会
琉球新報社
1940 「女郎に現抜かし妹を売る 義兄の悪企みストッ
プ」『琉球新報』1940年6月27日付

The Livelihood and War of South Seas Immigrant Women from Okinawa: A Gender Perspective

Jun KAWASHIMA*

In modern Japan, the population shift from Okinawa to the South Seas Islands was a social phenomenon that emerged against the backdrop of international relations in the Asia-Pacific region surrounding Japan, Okinawa, and the South Seas Islands, as well as Japan's policy of governing Okinawa and the South Seas Islands. This paper examines the characteristics of Okinawan-born South Sea immigrant women in relation to Japan's colonial rule and war in the Asia-Pacific region, while clarifying the gender role division of labor based on the patterns and factors of travel, economic activities, and life under the wartime regime of women who moved from Okinawa to the South Sea archipelago. In doing so, by relying on the testimonies of immigrant women in the local government histories of Okinawa Prefecture, we will clarify how individual and concrete experiences have maintained colonial rule, war, and gender role division of labor.

In the series of processes of the formation, development, collapse, and downsizing of Imperial Japan, women immigrants from Okinawa and the South Seas supported the maintenance and expansion of Imperial Japan's rule over the South Seas, whether they liked it or not, and at the same time, their activities based on the division of labor and gender roles supported the government policy and the conduct of war in the South Seas. At the same time, the government policy and the conduct of war in the South Seas were supported by the activities of immigrants based on the gender role division of labor. In addition, we can catch a glimpse of the fact that they were affected directly or indirectly in their own lives, life and death by the division of labor based on gender roles, as well as by the policies of governance and the conduct of war in Okinawa and the South Sea archipelago. This is precisely the relationship between the division of labor and the conduct of war and colonial rule.

Keywords

Gender, Imperial Japan, Okinawa, Micronesia, Colonies

* Okinawa International University

アジア・太平洋戦争期の「南進」日本女性文学研究と ベトナム地域研究との架橋を目指して

— 森三千代の『晴れ渡る仏印』に登場する2人のベトナム人女優を手がかりにして —

宮沢 千尋*

本稿では、森三千代の著作『晴れわたる仏印』に登場するカイルオン劇の2人のベトナム人女優に対する森の記述を分析し、彼女のベトナム観、ベトナム人女性観、そしてそれらの限界について検討する。この分析を通じて、筆者はアジア太平洋戦争中に「南洋地域」を訪れた日本人女性作家による文学に関する研究と、ベトナム地域研究の間に架橋する試みを行う。

森は1942年にフランス領インドシナを訪れた際に、張鳳好と愛蓮という2人のカイルオン劇の女優に出会った。

ベトナム文学者と会見して交流した際に、森は、ベトナム人が伝統的な思想と、フランスの植民地支配によってもたらされた西洋的な思想との間で葛藤していることを理解し、それが新しいベトナム文学の中心的なテーマになると認識していた。しかしながら、森はベトナム文学がフランスの指導のもとで発展するものと考え、ベトナム人自身の主体性への理解は十分なものではなかった。

一方、張鳳好や愛蓮によるカイルオン劇の公演を観た際には、森は伝統的な要素のみに焦点を当て、伝統的なベトナム演劇と西洋演劇の融合によるダイナミズムを理解することができなかった。彼女は、カイルオン劇がベトナム文学と同様に、ベトナム人自身の主体性によって生み出された「ベトナム・ルネサンス」の一部であることを捉えそこねたのである。

キーワード

アジア・太平洋戦争期「南進」日本女性、「南洋文学」、森三千代、ベトナムのルネサンス、カイルオン劇女優

目次

- | | |
|------------------|-----------------------|
| I はじめに | III 森三千代が出会ったベトナム女性たち |
| II 森三千代と『晴れ渡る仏印』 | 1 張鳳好 |
| 1 「対仏印日本婦人文化使節」 | 2 愛蓮 |
| 2 『晴れ渡る仏印』 | IV 結論 |

* 南山大学

I はじめに

本稿は、アジア・太平洋戦争期に当時のフランス領インドシナ（略称「仏印」）に「文化使節」として派遣された作家の森三千代の紀行文集『晴れ渡る仏印』¹（1942年初版、2005年復刻版刊行）に登場する2人のベトナム人女優に対する森の記述を取り上げて、当時のベトナムの社会・文化・政治状況を踏まえながら、森のインドシナ観、主にベトナム観、ベトナム女性観を考察するものである。それにより、筆者は、アジア・太平洋戦争期に東南アジアに赴きたいわゆる「南進」日本人女性の研究および「南洋文学」研究と、ベトナム地域研究の間に架橋する基礎作りを目指したい²。

筆者は文化人類学と歴史学を主要なディシプリンとするベトナム地域研究者であり、2004年3月に南山大学人類学研究所の主催で行われた戦争とジェンダーに関するワークショップでコメンテーターを務めたが、その際にとりわけ張雅氏の報告³と論文（張 2021、2023）に触発されて、自分自身が今まであまり学んだことのないアジア・太平洋戦争期に当時の「仏印」に赴いた日本女性、特に作家に関心を持った。自分なりに学んでみると、同時期に仏印に渡った日本人女性作家の研究とベトナム地域研究が互いに補い合うことでさらに研究を深化させることができるのではないかとの展望を抱いた。筆者が目指すのは、『晴れ渡る仏印』を当時のベトナムの社会、文化、政治の文脈の中で、再解釈することである⁴。

日本文学研究の一領域として「南洋文学」を研究する側は、研究者の関心、ディシプリンの違い、研究する言語の制約があるので無理からぬことであるが、日本の作家による「南洋文学」や紀行文を読む際に、そこに出てくる「南洋」の人・物・事の背景を十分に理解していない面がある。一方、ベトナム研究の側は、日本文学や個々の作家、作品への理解に乏しい。文学研究者でない限り、文学研究の理論一般にも通じてい

ないであろう。

以上のような状況を踏まえて、筆者が今できる範囲で、両者を架橋するための覚書を残しておくことも意味のないことではないのではと考え、誠に拙いものではあるがここに記すことにする。当時の「仏印」に赴き文章を遺した女性には林芙美子、長谷川晴子、吉屋信子、木村彩子など複数いるが（張 2023）、本稿では森三千代の「仏印」に関連する作品の中で、特に紀行文集である『晴れ渡る仏印』に焦点を当て、その中で森が出会った2人のベトナム人女優、張鳳好と愛蓮に注目する。

論述に入る前に、当時の「仏印」の状況を簡単に説明する。日本は膠着状態に陥った日中戦争を打開する目的で、1940年9月に「北部仏印進駐」を行った。当初、南中国からベトナム北部に向けて、日本軍は自らが武器を与えて訓練したベトナム人の武装組織である「ベトナム復国軍」⁵とともにフランス軍と戦闘しながらベトナムに入った（「武力進駐」）。しかし、これは日本政府や日本軍中央の決定によるものではなく、急遽、日仏両国間で交渉が行われ、南中国から侵攻した日本軍の第五師団は中国側に撤退した。ベトナム復国軍は日本軍とともに撤退することを拒否してベトナム領内でフランス軍と戦闘を続けるが、日本軍の支援を失ったためフランス軍に撃破された（白石 1982）。日本軍は改めて丸腰のまま再度進駐した（「平和進駐」）。1941年7月にはベトナムの南部に進駐するが、この時もフランス植民地支配を容認したままであった。「大東亜共栄圏」のスローガンに反して、1941年12月8日の真珠湾攻撃によるアジア・太平洋戦争の開戦を経て1945年3月9日の「仏印処理」で日本軍がフランス植民地機構を解体するまで、日本はインドシナでフランス植民地支配と共存していたのである。現地の日本商社である「印度支那産業」の山根道一や近江谷嗣（小牧近江）、「大南公司」の社長松下光廣と西川寛生ら社員、日本文化会館の小松清、現地駐屯の

1 出版時の原題は『晴れ渡る佛印』であるが、復刻版の表記に従い、本稿では「仏印」と記述する。

2 フランス植民地当局は「ベトナム (Việt Nam)」という呼称を使うことを許さず、「アンナン (Annam)」と呼ばせていた。森をはじめ日本人の多くは漢字表記で「安南」を用いることが多かった。本稿では引用の際には「安南」または「アンナン」、筆者が記述する際には「ベトナム」を用いる。

3 張雅「1940年代に南洋へ赴く男性作家と女性作家の役割について」。南山大学人類学研究所2023年度第4回公開シンポジウム「海を越えて南洋に渡った人たちの体験—戦争とジェンダーの視点から—」。2024年3月3日、於南山大学。

4 本稿の論述にあたり、『晴れ渡る仏印』や森の日記を引用する際には、読者の便宜を考えて、一部を旧仮名遣いから新仮名遣いに改めた。また、漢字は常用漢字に改めた。

5 東遊運動の盟主であり、日本に亡命していたベトナム阮朝の皇族畿外公クオンデが日本軍参謀本部の援助で作った「ベトナム復国同盟会 (Việt Nam Phục Quốc Đồng Minh Hội)」の軍事部門である（白石 1982）。

日本軍司令官町尻量基、参謀林秀澄、「仏印」に置かれた日本の外交機関である仏印大使府の一部の外交官など、ベトナムの民族主義者を支援した人々もいたが、日本の戦争政策の枠内での行動に留まらざるを得ず（武内・宮沢（編）2024）、「仏印処理」も、米軍のインドシナ上陸への対処やソ連の対日参戦を防ぐなどの目的で行われた（白石・古田 1976）ものであり、ベトナムの独立も不徹底なものであった（武内・宮沢（編）2024）。

森が「仏印」を訪問した1942年初頭は、1941年7月に「南部仏印進駐」が行われ、11月に南方総軍司令部がサイゴンに設置、12月8日に真珠湾攻撃が行われた直後の時期であった。フランスはヴィシー政権下であり、「南部仏印進駐」の際に日仏両国は協定を結び、「仏印」を日本と共同防衛するという形を採った。すなわち、「仏領印度支那ノ共同防衛に関する日本国『フランス』国間議定書」には、両国が「仏印」の共同防衛のために軍事上の協力を行うことが定められていたが（立川 2000: 90-91）、水面下では緊迫した状況にあった。「仏印」領内に留め置かれた大量の「援蒋物資」接収はドクー総督により拒否されていたが（立川 2000: 170-174）、「南部仏印進駐」後にやっと再開されたものの隠匿物資がすぐに日本側に引き渡されたわけではなかった。大川周明が創設した満鉄東亜経済研究所附属研究所（通称「大川塾」）を卒業して、大川より「仏印」に派遣された西川寛生（ひろ）の日記を読むと、山根道一が機関長を務める「山根機関」に所属してベトナム北部に隠匿された「援蒋物資」接収に苦勞して従事していたことがわかる。主権を握るフランス側に配慮して接収作業を諦めることもあった（武内・宮沢（編）2024: 159）。

次に、当時のインドシナにおける文化状況について述べる。上述の「日仏協力」の一方で、双方はインドシナの人々に対しプロパガンダ合戦を繰り広げていた。その際に「文化」は重要なカギであった。1930年代からフランス植民地当局は、現地の文化の保護・発展を重視する政策を採っていたが、この時期になると日本が展開するアジア主義から目を逸らすために、インドシナ各国の文化や伝統を承認・復興することに力を入れた。文学賞を設置することなどによってベトナム語の出版活動が奨励されたり、科挙廃止後に衰退の一途をたどっていた漢字が見直された。紀元前に中国に果敢に抵抗したベトナムの英雄であるチュン姉妹が、ジャンヌダルク祭でジャンヌダルクとともに初め

て称えられたのは森が「仏印」を訪問した1942年のことであった。こうすることが現地住民に対する懐柔となると同時に、フランスの支配強化や現地住民の把握になると考えられたのである。同時に植民地当局は、フランス文化の存在を強調することも忘れなかった。ヴィシー政権下の「国民革命」とベトナムの伝統的な価値観が併置して論ぜられ、チュン姉妹とジャンヌダルクが関連付けて称えられたように、フランスの文化はベトナムのそれと共有する要素を多く持つと強調された（難波 2006: 200-201）。森もハノイの西郊にあるチュン姉妹の廟（森の原文では「徴姉妹の寺」）を訪れている（森 2005[1942]: 19-24）。チュン姉妹以外で国民革命と関連付けながらベトナムの歴史や伝統を宣伝するために利用されたのは、13世紀にモンゴルとの戦いを勝利に導いたチャン・フン・ダオ（陳興道 Trần Hưng Đạo）将軍、フランス人司教ピニョー・ド・ベーヌの協力を得て勢力を拡大した阮朝の初代皇帝ザーロン（嘉隆 Gia Long）などであり、これらの歴史上の英雄の肖像が配布され、できるだけ目につくように貼ることが定められた（難波 2009: 69）。

現地の文化の保護・発展を奨励する一方で、植民地当局は出版物を厳しく管理した。新聞、雑誌は当局によって奨励すべきものとそうでないものに分類され、前者に指定されたものは政府からの補助金や公的機関による定期購読などの便宜を享受することができたが、当局に従わなかった新聞、雑誌には一時的に発行停止処分が課された。ベトナム南部のコーチシナのブルジョワ政党である立憲党々首で「仏越提携」を唱えてフランス植民地当局に協力的であったブイ・クアン・チエウ（Bùi Quang Chiêu）は、日刊紙『インドシナ・トリビューン（*La Tribune Indochinoise*）』の発行人でもあったが、1941年に「検閲は、新聞が何らかの意見を述べることを妨げている。新聞を発行しようと望むのなら、政府の栄光をひたすら讃えなくてはならない」と述べた（難波 2009: 69, 85）。後述するベトナムの文学者たちは、このような状況の中での創作活動を余儀なくされていたのである。

II 森三千代と『晴れ渡る仏印』

1 「対仏印日本婦人文化使節」

森三千代は1942年1月、「対仏印日本婦人文化使節」として外務省からフランス領インドシナに派遣された。森は当時、国際文化振興会の嘱託として働いてお

り、同会は1940年12月に情報局傘下に移管されるまで外務省文化事業部の管理下にあった。アジア・太平洋戦争期に軍政が敷かれたオランダ領東インド（「蘭印」）、英領マレー、英領ビルマ、フィリピン等には、日本の文化人が数百人単位で「南方徴用作家」として派遣され、軍の強い関与の下でおびたしい「南洋もの」が書かれたのであるが、日本の軍政下にはなかったタイと「仏印」は外務省が関与し、「徴用作家」ではなく「文化使節」を派遣した（土屋 2013: 168）。外務省の方針は、軍よりは温和であった（趙 2021: 325）。森は文化人が前線に赴く風潮に刺激されて先頭に立ちたいという功名心と、侵略戦争に加担しないという意識を抱いていたが、「文化使節」という肩書は、この両方を満足させるものであったと趙怡は述べている（趙 2021: 325-326）。また、森が文化使節に選ばれた理由は、夫の金子光晴とともに1920年代から1930年代初めに中国、フランス、東南アジアを旅しており、その経験を基に『をんな旅』（1941年）、『新嘉坡の宿』（1942年2月）を刊行し、さらにフランス語の詩集も出版していたという経歴が重要な要素であった（趙 2021: 327-328）。

1942年1月15日に森は迷彩塗装を施した小型飛行機に乗り空路ハノイに到着し、4月11日に帰国するまで3ヵ月ほど「仏印」に滞在した。その間、ハノイでインドシナ総督ドクー（Decoux）、王都フエで皇帝バオダイ（Bảo Đại、保大）に会い、そのほか学校やベトナム人の家庭を精力的に訪れた。フランス人、ベトナム人を問わず、多くの知識人とも交流し、日本古典文学の講演も行った。また、カンボジアのプノンペンやアンコールワットを訪れた（趙 2021: 326-327）。『晴れ渡る仏印』にはベトナムでも遺跡や歴史的建造物を訪問したことが書かれており、「VIP待遇」（土屋 2013: 168）、「国賓級の待遇」（趙 2021: 327）であったとはいえ、森自身も多くのことを事前に調べるか、または現地をよく学んでいたのではと思わせる。趙は、森が精力的に「仏印」を巡り、現地の事情を伝えようとして必死に努力したこと、「仏印」の社会と人々の紹介した森の語り口は熱の籠ったものであり、現地の歴史と風俗文化に尊敬の眼差しを注いでいたと述べる。なかでも「仏印」の文学に対しては多くの紙面を割り、恋と祖国愛という二重の意味を持つベトナムの

伝統詩を優美な日本語に翻訳し、情熱を込めて解説していることを挙げ、特に「ベトナム文学が当時の日本人にとってほとんど未知の世界だっただけに、彼女の視野の広さがいっそう際立つ」と指摘している（趙 2021: 330）。

森の「仏印」訪問のその他の成果としては、1942年出版のフランス語の紀行詩集『インドシナ詩集（*Poésies indochinoises*）』と、伝説集『金色の伝説』、1944年出版の童話集『龍になった鯉』のほか（趙 2021: 327）、『中央公論』の1942年5月号に掲載された短編小説「安南」などがある。

2 『晴れ渡る仏印』

1942年8月に室戸書房から出版された『晴れ渡る仏印』は全17章から成り、本書中の章名が、本書出版以前に『婦人公論』、『婦人朝日』、『南洋経済研究』などに掲載された森による記事と同名のももあり、また森はそれ以外にも「仏印」に関する紀行文を多く書いているのでまるっきり書下ろしというわけではないであろう。17章中、最後の2章はカンボジアに関するものである。アンコールワット、シェムレアップ、プノンペンでの体験を書いているが、名前が記され個性を持ったカンボジア人についての記述はない。一方、15章に亘るベトナムでの記述には、多くのフランス人、ベトナム人、日本人が登場する。

具体的に個人名の記載があるフランス人としては、インドシナ総督ドクー、文部局長シャルトン、理事長官グランジャン（Grandjean）、フエに在って前帝（バオダイの父）の名を冠したカイディン博物館長ソニー、作家のマダム・トリエール（マルグリット・トリエール Marguerite Triaire。後述するベトナム人女性作家チン・トゥック・オアインの共著者）についての記述がある。

ベトナム人としては、皇帝バオダイと、その叔父であるビュー・タイック（Bửu Thích。森の原文では寶石。以下同様）、「宮内大臣兼文部大臣」ファム・クイン（Phạm Quỳnh。原文ではファム・クキン、范瓊）と、その娘婿で作家のグエン・ティエン・ラン（Nguyễn Tiến Lãng。原文ではニエン・チエン・ラン、阮進朗）、評論家でリセの校長でもあるダオ・ダン・ヴィ（Đào Đăng Vỹ。原文ではダオ・ダン・ビイ、陶登偉）、作

家「ニエン・マン・ツウン」(未詳)、作家ファム・デュ・キエム⁶、上述のマダム・トリエールの共著者で女性作家兼ハノイの女子校の校長でもあるチン・トゥック・オアイン (Trịnh Thục Oanh。原文ではマダム・テイ・ン・テユ・ウオン)、女優の張鳳好、愛蓮などが登場する。また行く先々で出会った名前の記述がない、あるいは一部、または全部がイニシャルのみ記載されているベトナム人との交流も記されている。

森の派遣の目的が、ベトナムとではなく、「仏印」との文化親善である点から見て、森と会い、本書に個人名が記載されているベトナム人たちが、予め植民地当局によって注意深く選ばれて森と会見したことは疑いない。

例えば森が直接会った文学者は、上述のグエン・ティエン・ランやダオ・ダン・ヴィ、チン・トゥック・オアインなどフランス語で小説を書く作家が中心である。

ベトナムでは、1920年代末から30年代にかけてベトナム語のローマ字アルファベット表記(クオックグー *quốc ngữ*) で書く文学運動が盛んになるが、近代的な教育を受けた都市の「新学知識人」⁷たちから成る有力な文学運動の一つであり、ハノイを拠点とした「自力文団 (Tự Lực Văn Đoàn)」の作家たちについて森は書いておらず、会っていないどころかその存在すら知らなかったのではないと思われる⁸。「自力文団」は、平民主義、進歩思想、個人的自由、儒教からの脱却などを掲げて機関紙『風化 (Phong Hóa)』(1932–1937年)、『今日 (Ngày Nay)』(1935–1940年)を拠点として多様なテーマの小説を生み出し、近代小説の確立に主要な働きをしたほか、「光明団 (Đoàn Ánh Sáng)」または「光明会 (Hội Ánh Sáng)」とも呼ばれた慈善組織を作り貧困などの社会問題に取り組んだが、植民地当局の圧迫を受けて長続きしなかった (川口 1999: 166; 田中 2023: 22; Nguyen 2012: ix)。1930年代末から1940年代になると「自力文団」のメンバーは政治化していき、「自力文団」のリーダー的存在であったニャット・リン (Nhật Linh) は、民族主義政党で

ある大越民政党 (Đại Việt Dân Chính) を創設した。彼は1941年に、やはり「自力文団」のメンバーだったカイ・フン (Khái Hưng) とともに、日本に亡命していたベトナム皇族クオンデの腹心だった陳文安 (別名陳福安、日本名柴田) に会うために日本軍の軍用機で広東と台湾を訪れた (Guillemot 2012: 77, 87; 田中 2023: 28)。同年、カイ・フンは「自力文団」のメンバーで大越民政党に参加したホアン・ダオ (Hoàng Đào)、グエン・ザー・チー (Nguyễn Gia Trí) とともに逮捕された (Guillemot 2012: 78; 田中 2023: 67, 209)。森のインドシナ訪問時に彼らは獄中にいたのである。

当時のベトナム語文学運動には、「自力文団」の他に、まさに日本の仏印進駐時に成立したマルキシズムの観点に立つ「ハン・トゥエン (Hàn Tuyên)」グループ、また「春秋雅集 (Xuân Thu Nhã Tập)」グループ (竹内 1984: viii–ix)、さらに社会の不正や農村の貧困、植民地体制批判を行ったゴー・タット・トー (Ngô Tất Tố) やグエン・コン・ホアン (Nguyễn Công Hoan) がいたが (今井 1986; 川口 1999: 33)、彼らも森に会った形跡は無い。つまり、植民地体制批判や社会体制批判をベトナム語で書き、フランス語で書くよりも多くの読者を獲得していたであろう作家たちに森は会っていないのである。

森は『晴れ渡る仏印』の第3章にあたる「仏印の文学」において、ベトナム文学の紹介と批評を展開している。古典文学を高く評価する一方で、新しく誕生した「散文小説」についての言及は当時のベトナム文学の状況を十分に理解しているとは言えない。「若い文士達は安南語で、またはフランス語で創作する。しかしまだ文学専門雑誌は見ないようだ。主な発表機関は、仏字雑誌『印度支那』『エコー』、安南語雑誌『チュン・バック』、その他新聞等である」として (森 2005[1942]: 79)、すでに停刊し、メンバーのうち何人かは逮捕されて獄中にあつたとはいえ、自力文団の活動には全く触れていない。文中で「少数のすぐれた作家」として紹介されているのは、まず上述のグエン・ティエン・ランで、作品として言及があるのは、『テイ・ン・ニヤ

6 ファム・ズイ・キエム (Phạm Duy Khiêm) のことであると思われる。

7 第1次世界大戦終結後、フランス植民地当局は科挙を廃止し、教育制度の改革を行った。これにより、学校教育の場で教えられるのは漢字ではなく、クオックグーとフランス語が中心になった。新しい教育制度の下で学んだ学生たちは1920年代半ばに学校を卒業して植民地政府の下級官吏や企業の事務員、教師や医師、ジャーナリストになった。彼らは西欧の思想なども翻訳無しで理解することができた。このような知識人たちを、漢字や儒教の教育を受けた知識人たちとの対比で「新学知識人」と呼んだ。

8 ただし、森は「自力文団」の作家たちと交流があり、ベトナムの民族主義運動を援助していた近江谷嗣や小松清と「仏印」で会っているので、ベトナムの文学運動や民族主義運動について彼らから聞いていた可能性もある。しかし、いずれにせよ『晴れ渡る仏印』には言及は一切無い。

イ・ザン』以外はフランス語で書かれたものようである。ダオ・ダン・ヴィについては作品名の言及がなく、チン・トゥック・オアインに関しては、マダム・トリエールとの共著でありフランス語で書かれた『祖先から離れて』(En s'écartant des Ancêtres)と『西方からの答へ』(La Réponse de L'Occident)の名が紹介されている。実はこの2つの小説は森の「仏印」訪問前後、前者が1942年2月に『安南の婚姻』として、後者が1942年12月に『安南の情熱』として日本語訳が出版されている⁹。

さらに、「ニエン・マン・ツウン」の『若い娘の微笑みと涙』、ファム・ズイ・キエムの『ナムリエン詩集』の名が挙げられ、これらの作家が今日の「新しい安南文学」を代表している人たちだと言ってほぼ間違いのないのではないかと、語尾をぼかしながらも、自分の見解を主張している(森 2005[1942]: 79)。しかし、主にベトナム語で書く作家は紹介されていない。

もちろん、森自身も自分の限界には気づいていて、「自分の触れえなかったほかの人たちの中でみるみる成長してくる人たちのいることはほとんど疑いのないことだが、短期間の旅行者に過ぎない自分にはそういう人たちに接触することは全く不可能である」と述べる(森 2005[1942]: 79)。また、生まれたての「仏印文学」が「非常にすぐれて素質とよい条件を持っている」と言うが、その良い条件とは「彼らの手を直接取って歩かせている援助者フランス文学」のことであった。さらに、新しい小説家がどのような欲求、動機で、何を題材として文学をやるかという問いを立て、その答えは「若い安南が持っている多くの悲しみと悩み」であり、題材として取り上げられるものは主として「迷信深い道教、仏教と、儒教精神で作りに上げられた因習的な古い家庭内に、フランス風の新しい思想が流れ込み、古い世代と新しい世代のまじり合う悩み、苦しみである」と断じている(森 2005[1942]: 80-81)。

森は、上述のファム・クインが、ルネッサンスを近代化のための運動と「安南ルネッサンス (Renaissance Annamite)」、すなわちベトナムにおけるルネッサンス

を1920年代初頭から提唱していたことを知らなかった¹⁰。クインはベトナムに大きな影響を与えたフランスの関与を完全否定はしないが、「安南ルネッサンス」の主体はあくまでベトナム人であると考えていた(二村 2021: 177-178, 197-198)ことを森は知る由もなかったし、森にとっては「仏印文学」はフランスの援助無しには成立しないものであり、ベトナム人はフランス人に指導される存在だったのである。

また、土屋が指摘するように、『晴れ渡る仏印』には、フランス植民地支配そのものや、その植民地支配を打倒せず容認したまま日本軍が駐屯していることについての言及が無い(土屋 2013: 170-171)。上述のように趙によれば、森が「文化使節」として「仏印」に行くことを決意したのは、この任務であれば侵略戦争に加担することにはならないと考えたためである。筆者も森が侵略戦争に積極的に加担したとは考えない。しかし森は、植民地支配にも、「大東亜共栄圏」を唱えながらフランスの植民地支配を容認したままインドシナに駐屯している日本軍や日本政府の政策にも目を向けることを避けたように見える。

一方、森の「仏印」訪問時の日記を検討した趙は、例えばシンガポール陥落についての『晴れ渡る仏印』と森の未公開日記の記述のトーンに違いがあることを指摘して、森には本心と時勢に順応せざるを得ない両面性があり(趙 2021: 346-347)、さらに日記にはフランス植民地支配の実態への批判的な記述があることを指摘している。

すなわち、『晴れ渡る仏印』の中で森は、シンガポール陥落の報をハイフォンの日本人経営旅館である富士ホテル滞在中に聞き、偶然その旅館で晚餐中であつた日本軍司令官の所へ祝賀の乾杯に出向いたと記す(森 2005[1942]: 29-30)。一方、その日の日記には「夕食中シンガポールの陥落を聞く」という一行が記されているにすぎない。さらに別の日の日記には「仏印は要するにフランス人達が自分たちに如何に住みよく、ぜいたくに暮らすかについて考えてつくったところである」「ボーイ達は勿論、官省の下級官吏達はフラン

⁹ 鄭 鶯 夫人原作、關義訳、『安南の結婚』、興亜日本社。トリン・トゥック・オアイン著、奥好晨訳、『安南の情熱』、室戸書房。なお、森とチン・トゥック・オアインの交流については別稿で述べたい。

¹⁰ ファム・クインは「安南ルネッサンス」というフランス語の論説の中で以下のように述べているという。「正確さ、明晰さ、論理性、構成への配慮、創造への関心、そして主導性。これらは安南の精神にやや足りない性質ではないか？ これらの特性はフランス文化が私たちにもたらしてくれる。もし私たちがこれらを利用できるのであれば、私たちに真に祖国のルネッサンスのまえぶれを与える安南の魂の確かな充実化が起りえるだろう」(二村 2021: 194)。この「安南ルネッサンス」のベトナム語版が存在するかどうかについて筆者は未だ知ることができない。今後の課題としたい。また、二村によれば、クインのフランス語による言説の中における「ルネッサンス」という言葉の初出は1922年であるという(二村 2021: 注 p. 25)。

ス人の前ではものも言えず頭もあがらない。終始ビクビクして出て出合はすと直立不動の姿勢で迎える」「フランス人達は彼等の夢の王国を仏印に作り上げようとしたけれども生産国にはしなかった。汽車でも自動車でもこの土地には何一つ製作できない、本国から買入れるのである。さうして本国へ巨額の富を送った」と書いているというのである（趙 2021: 346-347）。搾取と低開発という植民地経済の本質を衝いた言葉であると言える。

筆者は、アジア太平洋戦争開戦後に「対仏印日本文化使節」として派遣された森の公の言説と私的な日記の記述が乖離するのは致し方ないことであろうと考える。しかし土屋が指摘するように、『晴れ渡る仏印』には確固たる植民地主義は見られないが、かといって反植民地思想を見出すことはできない。「独立」を文学者の立場でそれとなく表現したくらいで即座に検閲、処罰の対象になるとも思われぬにもかかわらずである（土屋 2013: 171）。実際に、森の「仏印」訪問後のことではあるが、1942年12月にはフランスの女性ジャーナリストであるアンドレ・ヴィオリス（André Viollis）によるフランス植民地当局のベトナム民族主義運動への過酷な弾圧について記述し、フランス植民地当局の行為がフランス人権宣言に悖るものであることを告発したルポルタージュ『インドシナ S. O. S. (Indochine S.O.S.)』（1935年刊行）が『牢獄の人々』という題名で邦訳、出版されている（ヴィオリス 1942[1935]）¹¹。当時の日本でベトナムの独立に関して語ることはタブーではなかったはずである。

ジェンダーに注目すると、森は記名、無記名にかかわらず、多くのベトナム人女性を観察し、本書に記述している。その中で、名前が記され、個性を持った人物として描かれているのが、作家チン・トゥック・オアインと、女優の張鳳好と愛蓮である。

以下、森が「仏印」で出会ったベトナム女性たちをどのように見ていたのか、また、それらの女性たちはどのような政治的・社会的・経済的な背景を持っていたのかをベトナム研究の視点から考察しつつ、森のベトナム観およびベトナム女性観と、その限界について探っていきたい。

III 森三千代が出会ったベトナム女性たち

『晴れ渡る仏印』を読んでいてまず感じることは、森のインドシナの人々に対する細やかな観察と温かな視線である。女性に対してもそうであり、「仏印の若い女達」という章の最初の文章は「安南の女はよくはたらくということでも有名である」であり、限られた経験を通してではあるが、紙漉きを生業とする村やハノイのマッチ工場、日本の役所や軍関係の事務所で働くインテリ女性に対する記述は肯定的なものであり（森 2005[1942]: 154-161）、「人の言うように安南人が無気力であるということは否めないことかもしれない。しかし、あの儒教に根ざした、伝統的な力に対する大きなよりどころは、なんとなく彼等におちつきを与え、彼等をノーブルにさえしている」（森 2005[1942]: 119）と述べるように、ベトナム人の「無気力」を「仏印」を訪れた他の日本人女性作家のように消極的なものと捉えずに、それが安定して暮らすことの象徴であると見ている（張 2023: 49-51）。

1 張鳳好

『晴れ渡る仏印』の第4章に当たる「安南芝居」には2人の実名が記されたベトナム女優が登場する。最初に描かれるのが張鳳好（「チョンフンホア」とルビが振られている）である。森は「仏印」滞在の終わり頃にハノイのオランピア劇場で張鳳好の芝居を観た。

¹¹ ヴィオリスは1931年末の3カ月間インドシナを訪問した。1930年のベトナム国民党や共産党の武装蜂起後のベトナム民族主義者に対する植民地当局の過酷な弾圧や植民地官吏の腐敗などについて書いたのが本書である。「まえがき」でヴィオリスは以下のように述べている（ヴィオリス 1942[1935]: 8-10）。

私の調査は（中略）「多数者」の権利を要求する多数民族を永遠に奴隷の地位に繋いで置くことが出来るかという点にも触れてはいない。又、彼らが要求する権利は、今から百五十年も前に我々が厳粛に宣言して（フランス大革命の人権宣言——訳者注）、1919年の講和会議が確認した権利なのだ（ベルサイユ会議の「民族自決」の原則を指している。——筆者注）。完全な独立とまで行かないにしても、彼ら自身の祖国の政治の上に、より広い範囲の自由を与える〔こ〕とが、仏蘭西として得策ではないかどうかと云う点にも触れはしなかった。（中略）私を攻撃する人々は、私が印度支那を舞台とするフランス当局の不法行為や、破廉恥な行為を暴露するのは反仏蘭西なことだと云う。然し私は前にも述べたように躊躇と深慮からこれを発表するのを差し控えていたのだ。然しそれでも真理に仕えることが仏蘭西に背くものだと主張する人があるのなら、私は甘んじて誹謗の暴言を受けよう。

ここにはヴィオリスの植民地主義に対する批判的な態度がはっきりと示されている。

森は鳳好の体格が「安南人ばなれして堂々として」おり、芸風がのびのびと自由で、声は「まるいよくひびく声のくせにちょっとかすれている」のに強い印象を受けたようだ。事前知識なしに観たのだが、歌も演技も一座の中で目立ってすぐれた存在であると感じたと記している（森 2005[1942]: 84-85）。実際、当時、鳳好が属していたのは「グランド・トループ・テアトラル・アンドシノワーズ（印度支那大演劇団）」という四五十人から成る大一座で、ハノイやサイゴンのほかインドシナの各地を巡業して歩いており、彼女は「ドラゴン・ダンナン」¹²勲章を授与され、多数の高貴や知名の士から「感状」をもらっていたことがベトナム語で書かれたプログラムに書いてあった（森 2005[1942]: 85）。南部出身の彼女は、森が観劇した際にはハノイに巡業に来ていたのであろう。

カオ・トゥ・ティンが総編集人を務めた『歴史の中のベトナム女性 第2巻 フランス植民地期のベトナム女性』によれば、張鳳好はチュオン・フォン・ハオ（Truong Phuong Hao、1911-2009）のことで、ベトナム



図1 張鳳好（コー・バイ・フン・ハー）が登場するカイルオン劇の舞台写真（1931年ごろ）

上から2列目の向かって左から2人目、3人目、4人目、上から3列目の向かって左から3人目、4人目、さらに上から4列目の左から2人目と右端が張鳳好である（Vuong 2024[1966?]: 10）。

ムの南部を中心に好まれる大衆的歌舞劇「カイルオン（cải lương）」の人気女優コー・バイ・フン・ハー（Cố Bảy Phùng Há、「6女のフン・ハー」の意）の名で親しまれた。フン・ハーとは、鳳好の広東語読みであるという（Cao 2012: 306, 312）。

鳳好は、1920年代からベトナム戦争終結後の1976年まで舞台に立って活躍した。1960年代半ばからはベトナム共和国（いわゆる「南ベトナム」）政権下で国立音楽院の講師も務め¹³、1984年にベトナム社会主義国政府からも「人民芸術家（nghệ sĩ nhân dân、略称NSND）」の称号を贈られている（CAFEF 2024 オンライン）¹⁴。植民地政府、親米政権、社会主義政権という政治体制の如何を問わず、人々に愛され、公的にも評価された女優であり、教育者であり、俳優のための養老院や共同墓地を建設するなど慈善運動家でもあった（Cao 2012: 312）。

コー・バイ・フン・ハーは「6女のフン・ハー」という意味だと述べたが、実際に広東省出身の華人である父と、ベトナム南部（当時のフランス領インドシナのコーチシナ）メコンデルタのミト（Mỹ Tho）省ディエウホア（Điêu Hòa）村出身の母との間に6女として、母の故郷で生まれた（Cao 2012: 306, 312）。鳳好が9才の時父が病死し、家族で父の故郷の広東に渡って亡き骸を葬ったが、ベトナムに戻ってみると家族の財産は他人に奪われており、一家は貧困状態に陥った。家計を助けるために学校を辞めてレンガ造りの炉で働いたが、歌が好きで仕事の後によく聴きに行っているうちに自分でも歌うようになり、その歌が上手いと評判になって1924年に13才で歌手に転じると瞬間に人気女優になったという（Cao 2012: 306-308）。

鳳好は1940年に技術者兼実業家である男性と3回目の結婚をすると、夫は彼女のために、彼女の名を冠した劇団を設立した。鳳好は中国から俳優を講師として招き、カイルオン劇の歌唱や音楽、演技の動作、中国劇で行われる武道などを学んでカイルオン劇に合うように改良し、さらにこれを若い世代の俳優に教えたという。「彼女はカイルオン劇の基盤を作った」とカオらは高く評価している（Cao 2012: 310-311）。

森がオランピア劇場で観た演目は「トー・アイン・

12 Dragon d'Annam か？

13 “NSND PHÙNG HÁ—Cuộc Gặp Gỡ Với Bạch Công Tử Đưa Cải Lương Thời Hưng Thịnh Nhất”, YouTube チャンネル Người Nổi Tiếng, 2018年4月18日公開、7分50秒から9分13秒。（<https://www.youtube.com/watch?v=hp4CRorb9ls>）（2024年11月15日アクセス）。

14 このような経歴のフン・ハーを紹介するベトナムのオンライン新聞雑誌記事や YouTube チャンネルは多く、学術論文の不足を補っているため本稿でも適宜引用する。

グエット」(Tô Ánh Nguyệt。森は「トウアンニュエット」と記述)であり、「唄と台詞と両方でゆくオペラ式のもの」で「唄の時にはかけで安南楽器で伴奏がつく」形式であった(森 2005[1942]: 85)。森が記すあらすじを要約すると以下のようになる。

主人公トー・アイン・グエットは若い学生ミンと愛し合い未来を誓うが、ミンは故郷に呼び戻される。グエットの両親は街の金持ちとの結婚を彼女に迫るが、すでにミンの子供を宿していたグエットは家を出て子を産み、ミンの故郷に行くが彼はすでに別の女性と結婚していた。グエットは自分が産んだ男の子をミンのもとに遺して自分は身を引く。それから18年、グエットは孤独の中で息子の成長を楽しみにしていた。グエットはしばしばミンの家を訪ねていたが、事情を知らない息子のタムはグエットを悪い女だと誤解し、金を渡して再び来ないように言い渡す。ミンは病気になる、死の直前にタムに真実を告白する。タムは必死に母を探し、父の墓の前で出会うことができた。母子は相識り、熱涙にむせぶところで幕が下りる。(森 2005[1942]: 86-87)

森の「この劇の内容は、ベトナム女性の生活に共通する苦悩を物語ったものとして非常なる大衆性を持っている」という指摘は正しい。18世紀末から19世紀初めにかけて中国清朝の通俗小説がベトナムで翻案された『金雲翹』¹⁵をはじめ、ベトナム文学や詩には主人公が苦難を受けるものが多い。

また、「トー・アイン・グエット」は愛し合う男女が親の命令で引き裂かれることから始まる悲劇である。1920年代になるとフランスの影響を受けた知識人たちの手によりクオックグーで多くの文学作品や女性に関する論説が書かれたが、家族や婚姻の問題は主要なテーマであり、親の決めた結婚に引き裂かれたり、苦しむ若者の姿が描かれ、儒教的な規範、男尊女卑の風潮が批判されるようになった(Marr 1984: 190-251)。

森は、鳳好が身をもだえるようにして女性としての訴えや母親としての歎きを歌うと観客から声が盛んにかかり、女性たちがハンカチーフを目に当てているのを目撃している。森は、「鳳好の芝居はベトナムの現代芝居としてもっとも本格的に推奨することができる」と高く評価している(森 2005[1942]: 88-89)¹⁶。また、鳳好にとって、このグエット役は当たり役であったようで、彼女の代表作として必ず言及されている(Cao 2012: 311; Sài Gòn Giải Phóng Online オンライン 2009)。

観劇後、森が鳳好と直接会話を交わしたかは書かれておらず、おそらく会話する機会はなかったとも推定されるが、もしそれが実現していたら、どのような会話を交わしたかについて筆者は大いに関心がある。森は鳳好に当時のベトナム女性の苦悩について質問したのだろうか? 筆者がこのように考えるのは、森と鳳好の境遇に多くの類似点を見出すことができるからである。

鳳好は生涯で4回結婚した¹⁷。最初の夫は1926年に結婚したカイルオン劇団の同僚で俳優トゥ・チョイ(Tu Choi)であり、2人の間には娘が1人産まれたが、夫が飲酒に耽り、他の女性の元に走ったので数年で破局に至った(Cao 2012: 310)。

2回目の結婚は、コーチシナ全域に金持ちの遊び人として名を轟かせたと言われる「白公子(Bạch Công Tử)」ことレー・コン・フオック(Lê Công Phước)とのもので1929年だった。彼はカイルオン劇を好み、鳳好を気に入って毎晩彼女の舞台を最前席で観劇したという¹⁸。鳳好のためにフイン・キー(Huỳnh Kỳ)劇団を設立したほか、自宅の隣に劇場を建てた。当時、カイルオンなど大衆歌劇団は常設の劇場を持たず、インドシナの都市や地方を巡業するのが普通であったというから、これは異例のことであった。さらに、劇団の巡業も行っており、そのために3隻の船を所有していた。そのうち1隻はフオックと鳳好夫妻専用のものであった(Cao 2012: 310-311)。フオックがいかに鳳好に入れ込んでいたかがわかる。

15 1910年代末には前述のフアン・クインによって「ベトナムの国民文学」と高く評価されるが、儒教知識人から激しい反発を受けた(宮沢 2012, 2020, 2022: 807-808)。

16 ただし、ベトナム芝居が単にこうした悲劇的なシーンばかりだけでなく、観客をくすぐって笑わせる諧謔も多いことに森は気づいている(森 2005[1942]: 88)。

17 “Nghệ sĩ PHÙNG HÁ U90 sống nhờ cửa Phật, đi thăm mộ hằng ngày làm niềm vui”, YouTube チャンネル Sài Gòn Xa Nhớ, 2024年8月22日公開。2分8秒あたり。<https://www.youtube.com/watch?v=kU01Dad-uhU> (2024年11月15日アクセス)。

18 “Nghệ sĩ PHÙNG HÁ U90 sống nhờ cửa Phật, đi thăm mộ hằng ngày làm niềm vui”, YouTube チャンネル Sài Gòn Xa Nhớ, 2024年8月22日公開。2分45秒あたり。<https://www.youtube.com/watch?v=kU01Dad-uhU> (2024年11月15日アクセス)。

しかし、結婚生活は順調なものではなかった。男児と女兒が1人ずつ産まれたが幼くして相次いで病死した。カオによれば、1930年までには「あちこちでの政治的事件 (chính sự)」¹⁹が原因でフオックの経済状態は悪くなって、彼はますます酒色に耽るようになった。2人の子供が亡くなった時もフオックはフン・ハーの傍にいなかったとされる (Cao 2012: 310)。

3度目の結婚は上述したように1940年、技術者で大きな会社の社長だったチャン・ヒュー・ビュー (Trần Hữu Bửu) とのものであり、彼は鳳好のために劇団を設立したが (Cao 2012: 310)、程なくして離婚し、チャウ・ヴァン・サウ (Châu Văn Sáu) と4度目の結婚をして人々を驚かせたが、これも短期間のうちに破綻した。さらに彼女は末子も病で失ったという²⁰。

上述のように、鳳好が身をもだえるようにして女性としての訴えや母親としての歎きを歌うと、観客から声が盛んにかかり、女性たちがハンカチーフを目に当てる光景を森は記しているが、3人目の夫と別れ4人目の夫との再婚したことが大きな反響を呼んだということから見ても、観客は夫たちとの別れや子供たちの相次ぐ死という鳳好の波乱に満ちた私生活を知っており、舞台上で彼女が演じるグエットと彼女自身、さらに女性の観客の中には自らの境遇とも重ね合わせる人もいたのではないかと思われる。

一方、森は1901年に旧制中学校の国語漢文教師をしていた父幹三郎が赴任していた愛媛県宇和島に生まれた。後に父の故郷である三重県伊勢市に移った彼女は、小中学校を通して首席であり、15才で県立亀山女子師範学校に入学した。卒業後に地元の小学校勤務を経て、1920年に東京女子高等師範学校に入学した。小説家志望だったため、当時の女性にとって最高学府である国文科を作家への登竜門と勘違いしての入学であったが、学校の厳格な雰囲気は幻滅していた。そのような時に、当時ヨーロッパから帰って来て『詩集こがね蟲』で注目されていた新進の詩人金子光晴と知り合って恋愛関係になり、妊娠をきっかけに卒業を前に退学して結婚した。2人の間には息子乾が生まれた (趙 2021: 4-7)。金子と森はよく知られているように、

夫婦同伴で中国 (1926年3月-5月、1928年11月-1929年5月、1937年12月-1938年1月)、フランスとベルギー (1929年12月-1931年12月)、東南アジア (1929年5月-12月、1932年4月-5月) を訪れており (趙 2021: 505-511)、それらの経験を基に多くの作品が書かれた。

しかし、2人は生涯に亘って互いの異性関係が原因で離婚と復縁を繰り返したことで有名である (趙 2021: i)。そして2人の世界「放浪」は、2人の異性関係とも結びついている。例えば、1929年のパリ行は、金子にとっては森を当時の恋人から引き離すための旅であったが、森にはパリで恋人と再会する密かな約束があった (趙 2021: 123)。また、盧溝橋事件後の1937年12月に森と金子は天津に渡航しているが、これは森が1930年代初に恋愛関係にあった中国国民党軍の軍人鈕先銘 (ちゅう・せんめい) の消息を探したかったために計画されたものだと後に森自身が書いている (趙 2021: 301)。さらに、森の「仏印」行きの理由の一つには、「仏印」に徴用されていた作家の武田麟太郎に会いたいという望みがあったからという説もある (趙 2021: 326)。このように親の決めた結婚ではなく、自分で相手を選んだ森であるからこそ、「トー・アイン・グエット」に描かれる当時のベトナム女性の生活に共通する苦悩——その一つが愛する者との仲を引き裂かれ、親の決めた相手と結婚しなければならないということであるが——をより理解することができたのではないか。つまり、鳳好も森も、女性に対して男性への服従を強いる儒教の「三従四徳」の規範の中に生きる存在ではなく、「新しい女」であった。

さらに、鳳好は女優業と劇団の座長という仕事をこなし、不実な夫たちとの結婚生活に苦しみながら子を産み育てたが、その子らを次々に亡くしている。森は息子の乾を両親に預けたまま海外を旅していたが、乾が重病になった際には森は懸命に看病し、乾を病から回復させた (趙 2021: 221)。『晴れ渡る仏印』の中には「仏印の子供たち」という章があり、「子供というのは、何人種でも、どこの国の子供でも可愛いものだ。支那には支那の子供の、安南の子供には安南の子供のそれぞれの愛くるしさがある。私が、仏領印度支

19 1930年のベトナム国民党のイエン・バイ蜂起や1930年5月からベトナム各地で起こった共産党の蜂起、それらに対する植民地当局による過酷な弾圧を指している。

20 “Nghệ sĩ PHÙNG HÁ U90 sống nhờ cửa Phật, đi thăm mộ hằng ngày làm niềm vui”, YouTube チャンネ Sai Gòn Xa Nhớ, 2024年8月22日公開。5分16秒から31秒あたり。https://www.youtube.com/watch?v=kU01Dad-uhU (2024年11月15日アクセス)。

那を旅して、ハノイ市に滞在していた時には、フランス人の子供や、安南人の子供達とおなじみになった」との書き出しで始まる(森2005[1942]: 184)。この章で森は、ベトナムの子供たちの生活の観察、すなわちその服装や「躰は厳重でもけて冷やかなものではない」親子関係、田舎の子供たちが親を助けて働く様子、参観したハノイの3つの学校(「ピエル・パスキエ小学校」、「リセ・エ・プロテクトラ」、「アルベール・サロー校」)の様子と教育制度、童謡や子守歌の歌詞、子供たちの遊びの様子を記述している。森のベトナムの子供たちに対する愛情の籠った温かな視線を感じさせる文章である(森 2005[1942]: 184-201)。

鳳好は広東人の父を持ちベトナムに生まれ育ち、フランス文化とベトナム文化が混交する植民地で生きた。一方、森は金子とともに世界各地を旅した。異国間恋愛の経験があり、それは森の作品の大きなテーマであった(趙 2021: 449)。

2人がもし親しく会話する機会があり、「お互いの心情を打ち明けあったら (*tâm sự với nhau*)」、何を語り合ったろうか? 国境を越えて、恋愛や結婚、子供への愛情など、相通じる点多かったのではないか。

2 愛蓮

一方で、同じ章の中に愛蓮という女優も登場する。森は、愛蓮を「芸というより人気の女優」と評し、「往日のターキー」、すなわち「男装の麗人」と称された女優の水の江滝子(瀧子)²¹を思わせると記す。森が彼女に最初に会ったのはハノイでのあるパーティーであった。香港で長く歌の修業をしたと語り、パーマメントをかけ、眉を長く描いている彼女に、森は洗練された雰囲気や、南中国女性によくみられるという「権高さ」、「モダンな感じ」を抱いた。愛蓮が所望されて歌ったのはベトナム語の「サンタ・ルチア」であったが、ベトナム語の歌を望む人たちに応えてベトナム語の恋歌も歌った。森は「さすがにそのほうがずっと聞きごたえがあった」と評価している(森 2005[1942]: 89-90)。

愛蓮(アイ・リエン、Ái Liên、1918?-1991)は、娘で歌手のアイ・ヴァン(Ái Vân、1954-)によれば、本名はレー・ティ・リエン(Lê Thị Liên)であり、母チャン・ティ・シン(Trần Thị Sinh)と最初の結婚相

手であるタイ・ディン・ラン(Thái Đình Lan)との間に、北部の貿易港ハイフォンで生まれた。母がランと離婚して、レー・ヴァン・トゥエット(Lê Văn Thuyết)と再婚した後、愛蓮もトゥエットの姓に変えた。一家は香港に渡り、飲食店を営んだという。そのため愛蓮は広東、フランス語、英語に堪能だった(VNEXPRESS 2013 オンライン)。

一方、愛蓮の本名はエレヌ・レー・ティ・リエン(Hélène Lê Thị Liên)で、父はベトナムと香港の間に船舶を運航しており、留学のために香港に行ったとする説もある(Cao 2012: 402)。また、母のチャン・ティ・シンも有名なカイルオン劇の女優だったとされる(Cao 2012: 402; VNEXPRESS 2024 オンライン)。愛蓮は英語、フランス語、中国語、日本語で歌うことができた(Cao 2012: 402)。日本語の歌は1940年9月の日本軍による北部仏印進駐後に覚えたものであろうと推察される。

16才から舞台に立ち、当時のフランス語新聞には「希望に満ちた偉大な才能」と評されたという。1940年にはベトナム北部でアイ・リエン歌劇団を設立し、カイルオン劇を上演してインドシナ全域を公演して回り、大成功を収めた。カンボジアでは当時の皇太子ノロドム・シハヌークに勲章を授与された(Cao 2012: 404)。団員全員が北部出身者で南部に巡業した初めてのカイルオン歌劇団だったという(Ngành Mai 2015 オンライン)。

1954年のジュネーヴ協定でベトナムが南北に分断された後も北部に残り、北部カイルオン劇団団長を務めた。子供たちも芸能の道に進んだ者が複数おり、その中の1人が北ベトナムの文化的スポークスパーソン、あるいは「国民的歌手」として日本でも知られたアイ・ヴァンである(Cao 2012: 404-405; Ngành Mai 2015 オンライン)。死後6年たった1997年に、張鳳好も授与された「人民芸術家」の称号を贈られている(MR THUONG n.d. オンライン)。

森は愛蓮に自分の劇を観に来てほしいと乞われ、その翌日の晩に灯火管制の中、リユー・ド・ソアラ通り(Rue de la Soie)の中国戲院という名の劇場に赴いている。やはりオペラ形式のカイルオン劇であったが、鳳好の芝居に比べてずっとくだけたものであった。「チャップリン髭を生やしたとりすました男や、背の

²¹ 1915-2009。北海道出身で舞台、映画、テレビで活躍した。NHKアーカイブズ、<https://www2.nhk.or.jp/archives/articles/?id=D000907119600000> (2024年11月15日アクセス)。

高い混血児らしいひょうきん者、ベレー帽をかぶって顔を赤く塗った男」たちや、主人、妻、娘が登場すると森は描写している。愛蓮が登場すると観客は狂喜して声援を送る。彼女はギターで「パロマ」を歌った。森は再び「おそらく愛蓮はベトナム人にとって超モダンな存在なのであろう。芸というより新鮮味で人気を呼んでいると思えた」と述べ、鳳好に比べけして評価は高くない(森 2005[1942]: 90-91)。

森が観た愛蓮の芝居も鳳好のそれと同じカイルオン劇であったが、鳳好の「トー・アイン・グエット」が「社会モノ (*tuồng xã hội*)」と呼ばれるもので、当時のベトナム人の置かれていた社会状況に題材を取ったものであったのに対し、愛蓮の芝居について森は題名を記していないが、「パロマ」、すなわち著名なスペイン歌謡の「ラ・パロマ (*La Paloma*)」を愛蓮が歌ったことから、これは1930年代に西欧の影響がカイルオン劇に及んだ際に生まれた「西洋モノ (*tuồng Tây*)」と呼ばれる「社会モノ」の新しいジャンルの芝居 (Hauch 1972: 43) だったと推定される。「西洋モノ」では、劇中で西欧の楽曲とベトナムのセンチメンタルなヴォン・コー (*vọng cổ*) と呼ばれる旋律を組み合わせるなどの演出を行って人気を博したという。それは、ラブ・シーンではカップルがタンゴを踊るが、ヴォン・コーが歌われている間には彼らは踊りを停止し、再びタンゴが始まると踊りだすというようなものであったらしい (Hauch 1972: 48)。愛蓮はピアノやヴァイオリン、ジャズドラムなどを演奏し (Cao 2012: 402)、「西洋モノ」を得意とした (Ngành Mai 2015 オンライン)。

ウン・クア (Ũng Quà) はクインが主筆を務めていた『南風雑誌 (*Nam Phong Tạp Chí*)』上において、カイルオン劇をクインが提唱した「安南ルネッサンス」の一環として評価しているが (Ũng Quà 1932: 68-69)、森は、カイルオン劇がベトナム文学と同様に新旧の文化の狭間にあるベトナムの状況から生まれて、ダイナミックに変化しつつあることを捉え損ねていた。また、香港に学んだ愛蓮と、中国、ヨーロッパ、東南アジアを訪問した経験を持つ森は、越境体験、異文化体験を共通にしているが、時間的な制約もあり、両者の親しい交流に結びつかなかった。

IV 結論

以上、森三千代の『晴れ渡る仏印』をベトナム地域

研究の立場から、当時のベトナムの政治、社会、文化の文脈を踏まえて再解釈した。

先行研究が指摘するように『晴れ渡る仏印』は戦時外交として読むならば貴重なフィールド・ノートであるが (土屋 2013: 169)、フランス植民地支配そのものは問題としておらず、大東亜共栄圏に賛成もしていないが、反対もしていないことを筆者は再確認した。しかし、短期間とはいえ、森のきめ細やかに「仏印」の人・物・事を観察しており、その視線は温かいものである。「仏印」を訪問した他の日本人女性作家と異なり、森はベトナム人の「無気力さ」を消極的に捉えず、現地の文化の文脈に即して肯定的に評価している。

森は、ベトナムの文学者との交流を通して、道教・儒教・仏教などの伝統的な思想や価値観や思想が存在するベトナム社会に、フランス植民地支配によってもたらされた西欧的な思想が流入し、ベトナム人がこれら新旧の思想、価値観の間で悩み、苦しんでいることを理解していた。しかし、森が出会ったベトナム文学者たちはフランス語で書くことを主とする人々のみであり、ベトナム語で書き、フランス語で書くよりも多くの読書を獲得したであろう、植民地体制批判、社会批判を描く作家たちには会っておらず、その存在すら知らなかったと思われる。森は新しく生まれたベトナム文学に発展の可能性があり、「よい条件」に恵まれていると感じたが、それはフランスによる指導、手引きが得られるということであり、ベトナム人の主体的な営みによってベトナム文学が生み出されるとは考えていなかった。まさに森が会見した「宮内大臣兼文部大臣」であるファム・クインが唱えた「安南ルネッサンス」が主張する、フランスとの交流は全面否定しないが、「安南ルネッサンス」はベトナム人が主体となるという主張を森は知る由もなかったし、ベトナム文学者との交流を通じて感じ取ることもできなかったのである。

また、森は2人のベトナム人女優が主演する大衆歌劇カイルオンを観劇しているが、通りすがりの観劇に過ぎず、2人の女優と親しく交流することはなく、2人のパーソナリティーとカイルオン劇についても理解を深めることはなかった。主に時間的な条件がそれを許さなかったものと思われる。それゆえ、見方が表面的、一面的になった。張鳳好のより伝統的と思われるストーリーや音楽に感銘するが、1930年代後半から現れた「西洋モノ」と呼ばれる、ベトナムの伝統的な歌と西欧的な音楽が混交する歌劇のスタイルには感心

していない。カイルオン劇は、クインの主張を受けて「安南ルネッサンス」を主張したウン・クアがその一環として高く評価したものである。しかし、森は自身自身がベトナム文学の課題として指摘した新旧の思想、価値観の中でのベトナム人の悩み、苦しみが、カイルオン劇にも表れていることに思い至らなかったのである。

最後に『晴れ渡る仏印』が一種のフィールド・ノートであることから、文化人類学的な視点で森にどんな可能性があったかを指摘しておきたい。文化人類学者の川田順造は、文化人類学の研究方法として「文化の三角測量」を提唱している。川田によれば、人間が作る文化を認識することは常に主観的でしかあり得ず、完全な客観は望みえない。しかし、文化の科学である文化人類学の文化認識は、その主観性を何らかの形で補正する手段を持つべきであり、その方法の一つが「文化の三角測量」だとして以下のように言う。

他の主観Bとの照合によって主観Aを相対化し、その主観性の位置を定めることだ。その場合、主観Bの他に更に別の主観Cが参照点としてあれば、主観Aを相対化しその位置を定めることも、より容易で確かなものになるだろう。同じことは主観B、Cについても言えるはずだ。(川田 2006: 339)

また、川田は、三角点A、B、Cとは異なるD、E、Fをモデルとして精錬し、文化の観測点を増やして、やがて全人類文化を覆うことも可能であろうとも述べる(川田 2006: 339)。森は日本に生まれ育ち、中国、ヨーロッパ、東南アジアなどを旅した。文化人類学者ではないが、文学者として文化の三角測量ないし多角測量が可能な立場にあり、『晴れ渡る仏印』においても部分的には、それに成功している。戦時における「文化使節」という立場のアドヴァンテージを享受しているが、一方で公的発言に制限が加えられたり、短期間の訪問のため、見方が一面的、表面的、断片的になってしまった。帰国後、特に戦後にもし森がベトナムやインドシナを再訪して長期間滞在し人々と交流すれば、より深い理解がえられたのではないだろうか。しかし、戦後の国際情勢や森の個人的事情はそれを許さなかった。その点が惜まれるのである。

謝辞

本稿執筆のきっかけになった南山大学人類学研究所のシンポジウムの企画者で、発表者でもある張雅先生、お名前は挙げませんが発表者、コメンテーター、参加者のみなさま、草稿に目を通してくださり貴重なコメントをお寄せくださった湯山英子先生、筆者の質問にお答えくださった田中あき先生、貴重な文献をお貸しくださった北澤直宏先生に心より感謝申し上げます。

参考文献

(日本語文献)

今井 昭夫

1986 「ゴー・タット・トー (1894～1954) 試論—儒教知識人の一軌跡—」『地域研究』4: 47-73。

ヴィオリス、アンドレ

1942[1935] 『牢獄の人々』慶應書房。

川田 順造

2006 「文化人類学とは何か」『文化人類学』71(3): 311-346。

川口 健一

1999 「自力文団」『ベトナムの辞典』石井米雄(監修)、桜井由躬雄、桃木至朗(編)、p. 166、同朋舎(発行)、角川書店(発売)。

白石 昌也

1982 「ベトナム復国同盟会と1940年復国軍蜂起について」『アジア経済』23(4): 22-44。

白石 昌也、古田 元夫

1976 「太平洋戦争期の日本の対インドシナ政策—その二つの特異性をめぐって—」『アジア研究』23(3): 1-37。

立川 京一

2000 『第二次世界大戦とフランス領インドシナ—「日仏協力」の研究—』彩流社。

田中 あき

2023 『仏領インドシナにおける植民地文学—ベトナム語作家カイ・フン(自力文団)の後期テクストを中心に—』東京外国語大学博士論文。

武内 房司、宮沢 千尋(編)

2024 『西川寛生「戦時期ベトナム日記」1940年9月～1945年9月』西川寛生(著)、風響社。

竹内 与之助

1984 「解説 自力文団の周辺」『蝶魂仙夢』カイ・フン(著)、竹内与之助、川口健一(訳注)、pp. v-viii、大学書林。

趙 怡

2021 『二人旅 上海からパリへ—金子光晴・森三千代の海外体験と異郷文学—』関西学院大学出版会。

張 雅

2021 「森三千代の仏印小説における二つの交流」『人文

- ×社会』1(2): 71-88。
- 2023 「1940年代の女性作家の作品から見る仏印像—「日仏協力」という〈帝国〉間の関係性を中心に—」『日本語文学研究』16: 37-57。
- チン オアン
鄭 鶯夫人 (原作)、關 義 (訳)
1942 『安南の結婚』興亜日本社。
- 土屋 忍
2013 『南洋文学の生成 訪れることと想うこと』新典社。
- トリン・トゥク・オアン (著)、奥 好晨 (訳)
1942 『安南の情熱』室戸書房。
- 難波 ちづる
2006 「第二次大戦下の仏領インドシナへの社会的アプローチ—日仏の文化的攻防をめぐって—」『三田学会雑誌』99(3): 189-204。
- 2009 「第二次世界大戦期インドシナにおけるフランスのプロパガンダ—日本のプロパガンダとの関係に注目して—」『史学雑誌』118(11): 63-88。
- 二村 淳子
2021 『ベトナム近代美術史 フランス支配下の半世紀』原書房。
- 宮沢 千尋
2012 「戦間期の植民地ベトナムにおける言語ナショナリズム序論 ファム・クインらの「キム・ヴァン・キエウ論争について」『ことばと国家のインターフェイス』加藤隆浩 (編)、南山大学地域研究センター共同研究シリーズ6、pp. 75-100、行路社。
- 2020 「植民地期ベトナム知識人にとっての「文明」と「国学」『近現代世界における文明化の作用 「交域」の視座から考える』大澤広晃、高岡祐介 (編)、南山大学地域研究センター共同研究シリーズ12、pp. 133-154、行路社。
- 2022 「フランス植民地期のベトナム知識人ファム・クインの「言語・文化ナショナリズム」と西洋哲学思想観」『東アジアにおける哲学の生成と発展 間文化の視点から』寥欽彬、伊東貴之、河合一樹、山村奨 (編著)、pp. 801-821、法政大学出版社。
- 森 三千代
2005[1942] 『晴れ渡る仏印』岩淵宏子、長谷川啓 (監修)、「帝国」戦争と文学19、ゆまに書房。
- (欧文、ベトナム語文献)
- Cao Tụ Thanh(Tổng chủ biên), Hoàng Mai(Chủ biên)
2012 *Phụ Nữ Việt Nam trong Lịch Sử, Tập 2, Phụ Nữ Việt Nam Thời Pháp Thuộc(1862-1945)*. Hà Nội: Nhà Xuất Bản Phụ Nữ.
- Guillemot, François
2012 *Dai Viet, Indépendance et Révolution au Viêt-Nam. L'échec de la Troisième Voie(1938-1955)*. Paris : Les Indes Savantes.
- Hauch, Duane Erine
1972 *The Cai Luong Theatre of Viet Nam, 1915-1970*. A Dissertation Submitted in Partial Satisfaction of the Requirements for the Doctor of Philosophy Degree, Department of Theater in the Graduate School, Southern Illinois University.
- Marr, David
1984 *Vietnamese Tradition on Trial 1920-1945*. Berkley, Los Angeles, London: University of California Press.
- Nguyen, Martina T.
2012 *The Self-Reliant Literary Group (Tự Lực Văn Đoàn) : Colonial Modernism in Vietnam, 1932-1941*. A Dissertation Submitted in Partial Satisfaction of the Requirements for the Degree of Doctor of Philosophy in History in the Graduate Division of the University of California, Berkley.
- Ứng Quà
1932 *Il Y A Une Renaissance Annamite. Tạp Chí Nam Phong*, 173, 63-70.
- Vương Hồng Sên
2024[1966?] *Hỏi Kỳ 50 Năm Mê Hát Năm Mươi Năm Cai Luong*. TP. Hồ Chí Minh: Nhà Xuất Bản Trẻ.
- (参照ホームページ)
- CAFÉF
2024 *Nữ Nghệ Sĩ Cai Lương Đầu Tiên Được Phong NSND và Cuộc Tình Với Công Tử Giàu Có, Ăn Chơi Bậc Nhất*. (<https://cafef.vn/nu-nghe-si-cai-luong-dau-tien-duoc-phong-nsnd-va-cuoc-tinh-voi-vi-cong-tu-giau-co-an-choi-bac-nhat-188240302153458896.chn>) (2024年12月8日アクセス)。
- MR THUONG THANHNHAC. VN-MUSIC CENTER
n.d. *Danh Sách Nghệ Sĩ Nhân Dân Việt Nam* (https://thanhnhac.vn/thuong_guitar/486/Danh-sach-Nghe-si-nhan-dan-Viet-Nam.html) (2024年12月8日アクセス)。
- Ngành Mai, Thông Tín Viên RFA
2015 *Đoàn Cai Lương Ái Liên Lưu Diễn Khắp Đông Dương. Đài Á Châu Tự Do*. (<https://www.rfa.org/vietnamese/news/programs/TraditionalMusic/traditional-music-1114-nm-11132015151203.html>) (2024年12月8日アクセス)。
- NHK アーカイブズ
n.d. 「水の江瀧子」 (https://www2.nhk.or.jp/archives/articles/?id=D0009071196_00000) (2024年11月15日アクセス)。
- Sài Gòn Giải Phóng Online
2009 NSND Phùng Há—“Cây Đại Thụ” của Sân Khấu Cải Lương Đă Ra Đi. (<https://www.sggp.org.vn/nsnd-phung-ha-cay-dai-thu>

cua-san-khau-cai-luong-da-ra-di-post78089.html)
(2024年12月8日アクセス)。

VNEXPRESS

- 2013 Chuyện Đời Cá Sĩ Ái Vân—Hồi Ước Một Đóa Hồng
(1)
(<https://vnexpress.net/chuyen-doi-ca-si-ai-van-hoi-uc-mot-doa-hong-1-2819877.html>) (2024年12月8日
アクセス)。
- 2024 Nghệ Sĩ Ái Liên—Chim Họa Mi Đất Bắc.
(<https://vnexpress.net/nghe-si-ai-lien-chim-hoa-mi-dat-bac-4773847.html>) (2024年12月8日アクセス)。

(参照 YouTube チャンネル)

Người Nổi Tiếng

- 2018 NSND PHÙNG HÁ—Cuộc Gặp Gỡ Với Bạch Công
Tử Đưa Cải Lương Thời Hưng Thịnh Nhất.
(<https://www.youtube.com/watch?v=hp4CRorb9ls>)
(2024年11月15日アクセス)。

Sài Gòn Xa Nhớ

- 2024 Nghệ sĩ PHÙNG HÁ U90 sống nhờ cửa Phật, đi thăm
mộ hằng ngày làm niềm vui.
(<https://www.youtube.com/watch?v=kU01Dad-uhU>)
(2024年11月15日アクセス)。

Bridging the gap between the Study of Japanese Women's Literature during the Asia-Pacific War and Area Studies for Vietnam:

Focusing on Two Vietnamese Actresses Featured in Michiyo Mori's *Clear Skies over Indochina (Harewataru Futsuin)*.

Chihiro MIYAZAWA*

This paper analyzes Michiyo Mori's descriptions of two Vietnamese actresses from the *Cai Luong* theater featured in her work *Clear Skies over Indochina (Harewataru Futsuin)* to examine her perspectives on Vietnam, Vietnamese women, and the limitations of those views. By this analysis, I would try to bridge the gap between the study of Japanese literature written by women writers who went to Southern Pacific area during the Asia-Pacific War and Area Studies for Vietnam.

Mori met these actresses, Phùng Há (Trương Phương Hào) and Ái Liên during her visit to French Indochina in 1942.

About Vietnamese literature, Mori understood that the Vietnamese people were struggling between traditional thought and the Western ideas brought by French colonial rule, and she also recognized that this would become a central theme in the new Vietnamese literature. However, she believed that Vietnamese literature would develop under French guidance, denying the agency of the Vietnamese people.

When watching *Cai Luong* performances by Phùng Há and Ái Liên, Mori focused on only traditional elements and failed to grasp the dynamism of the fusion between traditional Vietnamese theater and Western drama. She was unable to understand that *Cai Luong* theater, like Vietnamese literature, was recognized as part of the "Vietnamese Renaissance" created by the agency of the Vietnamese people.

Keywords

Japanese women going southward during the Asia-Pacific War, "South Seas Literature(*Nanyo Bungaku*)" of Japan, Mori Michiyo, "Renaissance in Vietnam", Actress of *Cai Luong* Theatre in Vietnam

* Nanzan University

1940年代に南洋へ派遣された女性作家の役割

張 雅*

本稿は1940年代に日本から南洋の占領地へと派遣された女性作家らに注目し、派遣の時期、期間、活動などの面から、女性作家に求められた役割について解明するものである。特に、1940年代に臨時徴用作家としてフィリピンに徴用された作家のうち、三宅艶子の『比島日記』（東邦社 1944）と川上喜久子の『フィリピン回想』（川上喜久子発行 1984）という二つのテキストを取り上げ、当時の日本社会に存在していた性別分業の考え方が軍政視察を目的とする女性作家の公的領域の体験にどのような影響を与えていたのかを考察する。この分析を通して、女性作家らが、占領地における政治間と性別間の支配的権力関係に沿う形で「女流作家」から「日本女性」へ、さらに「主婦」へと転化させられる、または自ら積極的に変わっていくなかで、常に自分の役割の再認識と個人的アイデンティティの再編成とに巻き込まれ、葛藤や抑制、反発という変化を示したことを浮かび上がらせるとともに、女性が戦争を語る時の特殊性を明らかにする。

キーワード

南洋、女性作家、戦争、役割分担

目次

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| I はじめに | 1 フィリピンに徴用された作家 |
| II 女性作家を戦地に送り込む軍部の思惑 | 2 女性作家の「洋服」と男性作家の「軍刀」 |
| 1 内地に向けての宣伝 | 3 「主婦」として、「作家」としての葛藤 |
| 2 占領地に向けての宣伝 | 4 「日本人女性」としての優位性 |
| III 女性作家の占領地南洋の体験 | V 終わりに |
| IV 個々の女性作家の自分の役割への意識 | |

I はじめに

1938年4月1日に国家総動員法が公布された後、日本では老若男女を問わずあらゆる人的資源が戦争に協力することが求められるようになった。それまでの女性たちは、家庭の内で母親や妻としての役割を果たすことを期待されたが、戦時体制下では国家のために尽くすよう動員され、積極的に社会進出するようになったのだ。たとえば、銃後の女性は出征兵士の送迎、

生産現場への進出、慰問袋の作成など多様な社会的な活動に参加したが、戦地へ赴いた男性たちの代わりに女性が積極的に社会進出する姿を記録に留めるために、女性作家がペンで様々な媒体に載せられる文章を書くことが必要とされるようになった（矢崎 1940: 245）。とりわけ、1940年代に銃後女性が軍需工場や防空演習など社会のさまざまな場面に進出して活躍するようになると、女性作家の活動も存在感が一気に高まり顕在化した。それは、戦争という特殊な社会状況

* 大阪大学

において国のために健気に奉仕する国民女性に対する認識の変化を、それに歩み寄るような形で「女性」的な視点から描く作品を流布させることによって、庶民の生活により一層、戦争の色を染み込ませるという効果を得ることができるためであった。

日中戦争が泥沼化した1930年代後半の時期から、日本政府は「北進論」から「南進論」に転じて「外南洋」地域に目を向けるようになった。1936年8月4日に開催された五相会議で公布された「国策ノ基準」では、「漸進的平和的手段で」南洋において経済活動を進めることが明示され、「南進論」が初めて国策として唱えられた(矢野 2009: 285-287)。この時期、アメリカが日本向けの軍需資材の供給に制限をかけたため、日本は鉄や石油などを確保することが急務となった。さらに4年後の1940年8月1日、松岡洋右外相は記者会見で「日滿支をその一環とする大東亜共栄圏の確立を図る」(矢野 2009: 114)という政府の外交方針を表明した。その後、1941年12月8日に日本は米英に宣戦を布告し、アジア太平洋戦争へと突入した。仏印、シンガポール、フィリピンを含む南洋地域は、欧米諸国の植民地から日本の占領地へと変わった。南洋の地理的範囲は、一般的にフィリピン・蘭印・ボルネオ・マレー・タイ・仏印を含む地域を「外南洋(表南洋)」と呼び、日本が委任統治するミクロネシアを「内南洋(裏南洋)」と称していた。本稿で取り上げる「南洋」とは、1940年代以降に日本が統治した「外南洋」に該当する地域を指している。

1940年に日本が「大東亜共栄圏」の構想を掲げた後、新聞、雑誌などのメディアが当局に協力させられただけでなく、文学者もペンを武器に思想戦と宣伝戦への参加を強いられ、作家たちが続々と徴用されて、日本が新たに占領した南洋へと派遣された。この時期の作家たちは、男女別々に南洋へと派遣されたため、男性作家と女性作家とでは期待された役割なども異なっていたように見受けられる。たとえば、輸送艦の上で太平洋戦争が勃発したというニュースを聞き、砲火を浴びながら敵前上陸した男性徴用作家に対して、一足遅れた出発した女性作家が南洋に着く頃、各地ではすでに日本軍により一年の軍政が施行されており、治安の回復と資源の開発に向けて占領地の建設を進めていたところであった。女性作家の記録によると、彼女たちは太平洋戦争中に日本の新聞メディアを通じて日本に暮らす庶民女性の南進を推奨したほか、仏印やインドネシアといった占領地に赴き兵士たちの慰問や学校の

視察などの活動もしたという。そのほか、彼女たちは日本女性の代表として現地の要人や女性たちと会談する機会を得て、公的領域の晴れ舞台で戦時中の日本人女性が果たす役割や日本女性の「特質」などについて発言した。そうした状況を知るにつけ、「女性を戦車に乗せない」という伝統のある日本の軍部は一体どのような思惑で戦時中に女性作家らを南洋に派遣したのか、この任務を引き受けた女性作家たちの考えはどのようなものだったのかという問いが想起される。

1940年代に南洋に派遣された作家に関する先行研究では、男性作家の南洋での宣伝工作が多様なアプローチから解明されてきた。一方で、男性作家と女性作家が同じ地域に派遣されるという状況下で、戦時中のジェンダー・イデオロギーが文学者たちの南洋経験にどのような影響を与えたかについて踏み込む研究は少ない。例えば、木村一信・神谷忠孝編集の『南方徴用作家』では、1940年代に南洋へ渡った徴用作家のリストを整理し、彼らの徴用の経緯や各地で行われた「文化工作」などの基礎的研究を取りまとめている(木村、神谷編 1996)。また、尹小娟の博士論文「南方徴用文学研究——戦後における南方表象の問題を中心に」では、「陸軍報道班」、「海軍報道班」、「占領地視察」という「徴用形態」の相違によって作家を区分し、六名の作家の戦時中の作品と戦後の改稿に注目し、各作家がどのように南洋の体験を認識していたのかを解明している(尹 2019)。さらに、同じ地域で同じ時期に活動した女性作家の記録を横断的に比較する研究として、鳥木圭太の「女性作家の見た〈南方〉——林芙美子と佐多稲子のスマトラ」が挙げられる。この論文では、林芙美子と佐多稲子が戦時中に発表した紀行文を比較し、二人の作家による他者表象の特徴を明らかにするとともに、共通する「虚偽」の主題を通じて、戦後日本社会における作家の立ち位置を考察している(鳥木 2017)。また、Julz E. Riddle は“The Woman Question during the Japanese Occupation in Kikuko Kawakami’s and Tsuyako Miyake’s Philippine Diaries (1943)”において、1943年にフィリピンの女性知識人と対談した川上喜久子と三宅艶子の日記に焦点を当て、座談会で彼女たちが伝統的な家庭内での女性の役割を強調したのに対して、フィリピン人女性知識人が女性の権利と社会における積極的な役割を擁護したことを分析した(Riddle 2022)。これらからは、先行研究では戦時中に南洋に派遣された男性作家と女性作家の役割分担について横断的に比較する研究がほとんど

なされてこなかったことが課題として浮かび上がる。

本稿は、父権的社会によって付与された「主婦」、「女流作家」、「日本女性」といういくつかのアイデンティティが太平洋戦争中の女性作家に葛藤を生じさせるという、同時期の男性作家の記録には見られない状況を分析し、女性が戦争を語るということの特殊性を明らかにする。特に、1940年代に臨時徴用作家としてフィリピンに派遣された作家のうち、三宅艶子の『比島日記』（東邦社 1944）と川上喜久子の『フィリピン回想』（川上喜久子発行 1984）という二つのテキストを取り上げ、戦時中の女性作家の役割という視点から、彼女たちの南洋体験の特徴を考察する。本稿が敢えて「女性作家」というカテゴリーを採用するのは、(1)「女流作家」というカテゴリーを用いて女性を戦地に送り込もうとした戦時中の軍部の思惑、(2)日本社会に見られた性別役割分業の観念に由来する男性作家と女性作家の集約的な南洋体験の相違、(3)「女性作家」として派遣された個々の女性が意識した自らの役割といった、「女性作家」というカテゴリーの中でそれぞれに重なりつつも異なる問題が存在していることを明確にする必要があるからである。

II 女性作家を戦地に送り込む軍部の思惑

1 内地に向けての宣伝

ここではまず、日本の軍部がどのような考えで女性作家らを南洋に派遣したのかを考察する。女性作家の南洋派遣を引率した当時、陸軍省大本営報道部員だった平櫛孝は、戦後出版した回想録『大本営報道部』において、「婦人の繊細なセンスで戦地を直視してもらおう」と思ったため、女性作家の派遣を決定したと記している。一方で、「女性を戦地まで無事に送るのがこれまた大変な仕事だった。軍用機で北京または上海に送ることも考えたが、「軍用機は兵器だぞ。それに女性をのせるとはなにごとだ」とカタブツの上司から一喝された」（平櫛 2006:91）と記している。

また、1942年9月に陸軍省報道部が女性作家に配布した「新聞、雑誌記者、女流作家 南方派遣指導要領」では、彼女らを視察旅行という名で徴用する目的は「大東亜戦争一周年記念日ニ方内宣伝資料ヲ収集セシム」こと、「戦蹟ノ見学」、「軍司令官、軍参謀、司政長官、司政官、現地要人トノ会見」、「軍政浸透状況ノ視察」にあるとされた（陸軍省報道部 1942）。すなわち、女性作家は本国内向けの「対内宣伝」の担い手と

して、女性に相応しい「争いを好まない」「物柔らか」な素質を発揮し、現地住民の宣撫と軍政に対する喝采とを作品にしたためることで、「大東亜共栄圏」の正当性を補完することを求められていた。

実際のところ、1941年に太平洋戦争が勃発した後、前線で戦う兵士と銃後を守る庶民を一体化するプロセスが強められていく中で、女性作家らは権力側に回って、庶民女性を対象として南洋で得た見聞を発信することで国家の動員政策に加担し、庶民女性の南進を勧めるべく助言していたのである。たとえば、マレーに赴いた小山いと子は「真面目な婦人、家庭主婦たちの手がまたどのやうに求められてゐる事か。これは原住民の女たちを指導するといふほかに、来てゐる日本の男たちのために何よりも急務ではないか」（小山 1942）と呼びかけていた。つまり、小山いと子は最も焦眉の問題は現地の日本人女性が足りないことであり、内地から慰問袋を送るよりも、女性が占領地へ赴き、日本人男性の士気を奮起させることのほうが差し迫って必要とされていると述べているのである。このように、女性作家たちは国家が主導する庶民の南進の代弁者に姿を変え、新聞記事などを通じて、占領地で戦う兵士の後を追ひ南洋へと南進することの重要性を一人一人の銃後女性に意識させたのである。

2 占領地に向けての宣伝

女性作家は日本内地向けの「対内宣伝」の業務を担わされたほかに、南洋において現地人との交流を促進し日本のことを知ってもらうという占領地に向けた宣伝の役割をも求められた。実は、彼女たちの南洋の視察行では軍政が敷かれ始めた占領地で軍部のお膳立てした計画に沿って軍政の進行状況を見聞することが目的とされたため、旅行気分各地を回るようになった。男性作家には宣伝班員として地方宣伝や新聞の作成と印刷などの業務に携わる際に、現地の住民と交流する機会があったのに対して、女性作家らは軍部の指示した公式の座談会に出席し、政府要人や上流階級の女性との交流を行った。その意味では、彼女らも、日本国家の欲望を象徴する記号へと転じ、占領地の人々に日本の文化と日本女性の「婦道」を認識させるのに適当な人材となった。例えば、林美美子は1943年2月25日にインドネシアの女性との座談会で「銃後の家庭を静かに護りつゞける日本婦人のたゞかぶ姿を説明」した後、「自分の国の習慣にしたがつて、つつましい女の愛情で家庭を固めて行くことが最も必要」である

と述べていた（ジャワ新聞社 1943）。三宅艶子と川上喜久子はフィリピンに滞在した際に、フィリピン人との交流を促進し日本のことを知ってもらいたいという理由で、現地の要人と五回の会談を行った。1943年1月5日に報道部主催でフィリピンの先進的な現地女性¹と交流する座談会で、三宅艶子は「フィリピンでは女のの方が威張ってゐるといふことをきいた、それから日本人は女を台所に押し込んでゐると思つてゐる、といふことをきいたけれど、ほんたうにさうでせうか」と尋ねたが、それに対して参加者の一人であったカティグバック夫人は「私にもし、男の子と女の子と二人あつて、その女の子が非常に優れた才能を持つてゐたならば、男の子よりもっと上の学校にまで入れてその才能を延ばすことを決して躊躇しないだらう」と返答した。その後、もう一人の参加者イラガン夫人から発せられた、秩序の下位にいる日本人女性は自身が台所に追いやられることに不満を抱かないのかという質問に対して、三宅艶子は「日本の女は決して嫌々乍ら台所にやられてゐるのではないと、内助の功といふやうな気持ちについて」話し、女性が自ら積極的に家庭内の役割を果たしていることを評価した（川上 1984: 69-73；三宅 2002: 71-81）。座談会に出席した三宅艶子と川上喜久子は公的領域で活躍する日本人女性の象徴となっているが、三宅艶子の回答からはフィリピン女性らが受けとった日本人女性のイメージはむしろ家庭という私的領域内に留まっており、戦時中の日本国家が女性に対して用意した選択肢は限られたものであることを象徴するものであった。

三宅艶子は戦後になってからの語りにおいて、自身のような女性の作家が戦地に派遣された理由は「日本の男性は野蛮だと思ひ込まれてゐた」ため、「日本の文化度をフィリピン人に示す」、「日本を見直」させる役目は女性が担うべきだと考えられたのだろうと思ひ返している（読売新聞社編 1970: 171-187）。ここからは、軍部が彼女たちを人的資源として利用し、残酷で攻撃的な戦場の風土を、平和を象徴する「女性」の感性で希薄化させようとする企図を抱いていたことが窺われる。男性国民が日本国の領土の拡大と資源の獲得という欲望に駆られて、それらの目標を達成するために野蛮な戦争を起こしたのだとすれば、男性の暴力による鎮圧は現地住民の反抗を起こさせるだけで暴力の

連鎖反応を生むことになる。現地住民の殺戮をも担うことになった男性国民に付与された否定的イメージを補うためには、平和と愛を象徴する「女性」の力を借り、日本国家の代表として占領地の住民を対象に親和と宣伝の活動をしなければならない。従つて、書く女たちは日本国家の占領地を「保護」という欲望を、本物の「日本婦人」として具現化する存在であつたともいえる。このように、南洋の占領地に出た女性作家は「女流作家」という既成の枠組みの中で振る舞い、「日本女性」の貞淑を語りながら、日本国家の占領の正統性と必要性を代弁する言説の中に服従させられたということであり、これは占領という暴力の正当性を擁護することに繋がった。

III 女性作家の占領地南洋の体験

神谷忠孝と木村一信が編集した『南方徴用作家』では、南洋に派遣された男性作家の「文化工作」を「対占領地宣伝、日本語の普及」、「対軍隊宣伝」、「対敵宣伝」の三つに分けている。彼らの徴用期間は「最低五ヶ月から三年に及ぶもの」（木村・神谷編 1996: 8-12）であり、東京都本郷区役所で徴兵検査を受けた後に、軍刀、巻脚絆などの携行を要求された。これらは軍隊の規律のある生活に馴化していくための必需品であつた。南洋に到着すると男性作家らは、戦火を潜り抜けて敵前上陸し、前線報道と現地の治安回復のための「文化工作」に従事した。彼らは輸送艦で軍籍に入る宣誓式を終え（今 1944: 79）、有給の「二流の兵士」として、ペンを武器に敵方の投降を促し国のために命を捧げた兵士たちの勇姿を記録していた。

これに対し、女性作家の出発は男性作家より一年ほど遅れた。彼女たちは軍報道部囑託の「臨時徴用」の形で雑誌、新聞の編集者らとともに南洋に渡つた。彼女たちの現地での滞在期間は半年ほどで、無給の身であつた。

南洋への派遣時の女性作家の身分は、陸軍臨時徴用作家、文化大使、雑誌の特派員、国境画定委員のタイプなど多様であつた。マレー方面に赴いた林英美子、佐多稲子、水木洋子、小山いと子、美川きよは国際法に反する病院船で千人あまりの民間人とともに出発した（黒田 1952: 57-72）が、ほかの女性作家はほ

1 「女子大学校長ベニテス夫人、作家のカティグバック夫人、哲学博士カルピオ夫人、社会事業家エスコグ夫人、女医アコスタ・シソン夫人、ナショナル・ティーチャーズ専門学校教授イラガン夫人」が出席した（川上 1984: 69-70）。

表1 女性作家の南洋滞在の詳細

	徴用形態	滞在の時期	場所	移動手段	スポンサー
林芙美子	陸軍報道部嘱託	1942年10月31日から 1943年5月5日まで	マレー、ジャワ 島、ボルネオ、 スマトラなど	往路：病院船 復路：飛行機	朝日新聞社
佐多稲子	同上	1942年10月31日から 1943年5月中旬まで	マレー、 スマトラ	往路：病院船 復路：輸送船	毎日新聞社
小山いと子	同上	1942年10月31日から 1944年末まで	スマトラ	往路：病院船 復路：飛行機	読売新聞社
美川きよ	同上	1942年10月31日から (?)まで	ジャワ島	往路：病院船 復路：輸送船	朝日新聞社
水木洋子	同上	1942年10月31日から (?)まで	ビルマ	往路：病院船 復路：不明	産経新聞社(?)
三宅艶子	同上	1942年11月24日から 1943年3月29日まで	フィリピン	往路：輸送船→ 台湾で飛行機 →マニラ 復路：飛行機	毎日新聞社
川上喜久子	同上	1942年11月24日から 1943年3月29日まで	フィリピン	往路：輸送船→ 台湾で飛行機 →マニラ 復路：飛行機	毎日新聞社
森三千代	文化大使	1942年1月から 4月まで	仏印	往路：飛行機 復路：汽船	国際文化振興会
吉屋信子	特派員	1941年10月21日から 12月19日まで	仏印	往路：飛行機 復路：飛行機	『主婦の友』
木村彩子	国境画定委員のタイピスト	1941年7月19日から 約1年間滞在	仏印	往路：飛行機 復路：輸送船	仏印泰国境画定委員会

※この表は以下の資料を参照してまとめたものである（筆者作成）。

望月 2008；加藤 2004；木村・神谷編 1996；小山 1949；森 1942；吉屋 1942.1, 1942.2；木村 1943

とんど飛行機で移動した。個々の女性作家は文化大使としての身分をあてがわれた森三千代を除き、現地で各新聞社・雑誌の出版社に割り当てられ、それら雇用先の企業に宿泊の場所や現地での移動手段などさまざまな面で便宜を図ってもらった代わりに、原稿を提供することが条件づけられた。このように、彼女たちは何も書かないわけにもいかないという潜在的な心得があったといえるが、見学先の南洋から帰国した後に見たものを文章にまとめるという明確な要求を受けていなかったため、自身の得た素材を取捨選択して書き記す自由をある程度を持っていたと考えられる（読売新聞社編 1970: 182）。南洋での滞在時、女性作家は基本的に日本軍の監視のもとで移動と活動をしたため、彼女たちが接触できる人も非常に限られたものとなった。三宅艶子の『比島日記』では、「女だけで夜歩いではいけないといふので、二人きりで出掛けたことはなかった」が、川上喜久子とともにカルマタでキャボの教会の祭りを見に行くため、ホテルの知り合いに見つからないよう密かに抜け出したことを記している（三宅 1944: 94）。二人がマニラに着いたばかりの頃

は、「新生比島の歌」を発表する音楽会に出席したり、温泉場に行ったり、市場を回ったりしており、確かに旅行のような暢気な情緒が日記には溢れている。その後、軍報道部は計画を立て、二人に鉄道の開設式や兵器所、捕虜収容所、バターン戦跡、砂糖工場などの場所を訪ねさせた。女性作家は現地での座談会や宣伝工作といった場で国家の「大きな物語」を語る際には、大本営と占領地の軍人の男性たちとの間の伝達役となった。そのため、男性たちが定めた基準によって彼女たちの書く内容が左右されるという一面もあったことが読み取れる。1994年出版された『日本のフィリピン占領』の人見潤介にインタビューした記録には、川上喜久子と三宅艶子が視察に訪れた話がある。

私がパナイ島でゲリラ工作をやっているときに、大本営から派遣された川上喜久子さんと阿部艶子さんという女流作家と新聞社の方が、パナイ島に来られたのですが、女流作家のお2人は、実際に一般住民に対してどんな宣伝工作をやっているのか、軍宣伝班の宣伝工作の実情をぜひみたいと言われた。こ

れにはほんまに困って。日本では、「今度の戦争の意義はこうだ」なんて、やいやい言うているところですからね。現地で、「こないしたほうが得だから、日本軍に反抗したらこんなとぼっちりがきて損だから、こんなことしないほうがいいよ」、というような幼稚な話ばかり毎日しているのだったら、あの人はなんの宣伝をしていると、むちゃくちゃに言われるだろう。大本営も現地の事情は知らないのだから、きついお叱りをうけることにもなりかねない。それで私は前の晩から、通訳の人に、「明日はいつもと違ってたいへんむずかしいことを言うけれども、君が、民衆に言うことはいつも通り言うてくれ、そして、私の言うことはぜんぜん無視してやってくれたらよい」と言って、私はもっともらしく、その大本営の人にわかるようなことを言う、通訳の人は、いつも言うているように「おまえらこうしたほうが得だよ」と [一同爆笑]、冷や汗流しながら、やりました。(日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム編 1994: 505-506)

人見潤介が地方で行った宣伝工作は演説を主体にして、映画、歌唱、伝単を併用して民心を収攬し、ゲリラの投降を促すことを企図したものであった。民衆にとっては演説中の「八紘一字」「大東亜共栄圏」などの言葉はどうしても理解しづらいものであった。平子友長の「三木清と日本のフィリピン占領」では、人見潤介が三宅艶子と川上喜久子を「大本営から派遣された要人 (= 密告者) として」扱い、彼女たちの前で全力の演出と周到な歓待を行い、気を配ったと指摘している (平子 2008)。以上の資料を合わせて読むと、宣伝の経験を積み重ねた宣伝小隊の成員はわかりやすい言葉で民衆を「教化」することを暗黙の了解として共有していたことがわかる。しかし、このような経験を一時的な参加者である川上喜久子、三宅艶子に知られるのは自分たちの立場を危険にさらすことになり、今まで貫いてきた宣伝の方針を翻される懸念もあったため、彼女らの前ではあえて演出するという対策を取った。宣伝に参加しなかった二人は軍隊の要人が決めたスケジュールに沿って、彼らが見せたいものだけを見せられたことがわかる。

軍関係者が立てた計画の主幹は、主に日本人がいかに資源を獲得するために苦勞しているか、いかに現地住民の民心を得ているかに集中していた。マンカヤン鉱山を見学する際、掘り出した鉱石をいかにトラック

に積み日本に輸送していくのか、鉱山の復旧をさせるために先遣隊がいかにか飛び回って仕事に奮闘したのかといったさまざまな産業戦士の苦難を聞かせたため、三宅艶子と川上喜久子の意識の焦点はそこで働いた坑夫ではなく、戦争資源の獲得のための産業戦士の苦勞に集中した (三宅 2002: 115 ; 川上 1984: 92)。オードドル捕虜収容所に行った際には、彼女たちは所長の部屋で食事を取ったため、実際捕虜が何を食べていたのか、どのような作業を命じられていたのかについては恐らく見せられず、知らされていなかっただろうと思われる。三宅艶子と川上喜久子が現地で見たものは、現地の軍人の見えない手によってフィルターがかけられており、治安が回復した場所だけに案内されたことがわかる。

女性作家の視察旅行には、国家の戦争の正当性と軍政の順調な実行を国民に伝えることが求められていたため、占領地の軍関係者が仲介役として「粉飾」された「平和」像を彼女たちに提示していたことが見受けられる。国家と軍隊から二重の欺瞞を受けていた彼女たちは「国家」(男性)側の暴力を遂行するための便利な存在でしかなかったと言わざるを得ない。なぜなら、現地において女性作家は軍の庇護のもとで活動したために、軍に都合がよいことを書くことが期待され、また軍にとって風向きが悪くなる内容を書いてはならないという二重の制約を受けたからである。こうした側面から見ると、彼女たちは利用される側であっただけでなく、戦争に加担する存在でもあったといえるだろう。このように、戦争協力者としての「加害者」と国家権力に統制される「被支配者」両方の立場に立たされた女性作家の、「歴史的主体」として活動していた主体性に目を向ける時、それと不可分な関係にあったであろう「国家」(男性)側による支配の陰を無視することはできない。

IV 個々の女性作家の自分の役割への意識

1 フィリピンに徴用された作家

作家という職業は発表した作品の芸術性、作家自身に対する認知度などによって文壇での格付けが決定されるのが常である。文壇で一定の地位を獲得するには社会の風潮を捉えて、人目を引く作品を世に送り出す必要がある。個人の内に「女性作家」や「占領者」、「主婦」といった多様なアイデンティティが共存する中で「女性作家」というポジションを前面に押し出すこと

で南洋の視察を承諾するという事は、せっかくの未踏の地へ入るチャンスを掴んだのだから命をかけても創作のモチーフを求めたいという思いが女性たちに存在していたことを示しているといえよう。たとえば、「無名」の作家であった美川きよは『南ノ旅カラ』（文松堂書店 1944）を、阿部艶子は『比島日記』（東邦社 1944）を戦時中に刊行している。要するに、当時「無名」だった女性作家にとっては南洋へ行くのは「名誉」なことであり、名声を上げるチャンスでもあった。個々の女性作家たちの南洋へ赴く動機と立場は一樣ではなかったが、内地における生活が全面的に規制されていく中で、南洋を訪問することは女性作家にとって書く材料を発見することに繋がるだけでなく、内地の息苦しい生活から解放され、負担が少ない旅行を実現することのできる滅多にない機会であったに違いない。

本節では、フィリピンに徴用された二人の作家のテクスト、三宅艶子の『比島日記』（東邦社 1944）と川上喜久子の『フィリピン回想』（川上喜久子発行 1984）を中心に取り上げ、服装、アイデンティティの葛藤などの面から、フィリピンに派遣された男性作家と女性作家の体験の相違を考察する。

戦時中に行われた作家らのフィリピンへの徴用は主に三回に分けられる。第一次徴用の尾崎士郎、今日出海、石坂洋次郎などは1941年12月24日に甲班の成員としてリンガエン湾から上陸し、1月5日にマニラに入城した。第一次徴用の作家は敵前上陸してからマニラで印刷機など宣伝用の機材を取り揃え、新聞の発行や映画館の開館、地方の宣撫宣伝などの文化工作に従事した。彼らは日本がフィリピンで軍政を敷き始めた頃の初期の宣伝班員として、日本軍による現地での民心収攬と治安回復のための文化工作の礎石を築いた。

第二次徴用の火野葦平や上田広、三木清、沢村勉などは1942年2月に神戸港からフィリピンに向かい、3月4日にマニラに到着した。マニラに到着すると、作家達はすぐに第二次バターン攻略戦に従軍した。5月7日に総攻略戦が終わった後は、報道班員の作家達は文化工作の任務に従事した。具体的には、陣中雑誌『南十字星』の編集、官民連絡所の講習会での講演、収容された捕虜を対象とする教育などの仕事を遂行した。

第三次徴用の里村欣三と今日出海は1944年12月末にフィリピンへ渡ったが、この時には日本軍はレイテ作戦でアメリカ・オーストラリア両軍に完全に敗北しており、帰国するための船便と小型機が全くない地獄

のような状態であった。今日出海は兵士とともにマニラから撤退して山中で五ヶ月放浪生活をした後に、エチヤゲに不時着した飛行機に乗って奇跡的にフィリピンから台湾へ脱出したが、今日出海とブシラク村で別れた里村欣三は1945年2月23日バギオの前線部隊本部で受けた戦傷のために死亡した。

以上のように、第一次、第二次、第三次の徴用を受けた作家達は三木清を除きほとんど血生臭い戦地に足を踏み入れ、砲煙弾雨を浴びた経験をしたといえる（読売新聞社編 1970: 161）。そして、第二次徴用と第三次徴用の間の期間に、川上喜久子と三宅艶子は文藝春秋社の斎藤竜太郎、講談社の萱原宏二、主婦の友社の山下民城、ジャパントイムス写真部の首藤胖、写真協会の鈴木正一らとともに陸軍報道部からの囑託で占領地フィリピンに送られた。

2 女性作家の「洋服」と男性作家の「軍刀」

女性作家が視察旅行という名目で徴用された時期は男性作家より約一年遅れたものの、女性作家と男性作家の間に完全に接点がないというわけではなかった。川上喜久子と三宅艶子は12月10日に「行く雁帰る雁の出逢い場」（川上 1984: 25）であった台北でシンガポールからの帰途にいた寺崎浩、中村地平、中島健蔵、海音寺潮五郎らと出会ったほか、12月19日にマニラで火野葦平に会い、12月20日には三木清と火野葦平の送別会に出席した。川上喜久子の12月10日の日記には男性作家が女性作家の占領地の視察について不平を漏らしたことが記述されている。

どこでの話か、先に派遣されている文人たちが、女流作家が来るときいて、「おれたちがちゃんとやっているところへ、何でのこのこ出張ってくるのか」と大いに憤慨したという、その話しぶりから、中島さんのような人でもそんなふうに思うのか、とひそかに男の狭量さを考えさせられた。自分らの力量に自信があるなら、一カ所二人ずつくらいの方が来たとして、どうせ大した仕事ができるはずもないのだから、自分らの領域を脅かされるようにさわぐ必要もなかりうに……（川上 1984: 25）

川上喜久子と三宅艶子の二人がマニラを訪れたのはフィリピンで軍政が敷かれるようになった一年後であり、現地の秩序がある程度回復しており、治安に対しても過剰な心配はいらなくなった時期であった。二人

の訪問が「出張」ることだったとされるのも、何もない廃墟で治安を回復することに従事していた男性作家の功績をそのまま享受する形で、その戦果だけ手に入れるようなものと男性作家は考えていたためであろう。これに対して川上喜久子は、反語表現を用いて男性作家らに自信さえありさえすれば女性作家を自分の領域に脅威を与えるものであるかのように排斥する必要はないはずだと反発している。彼女が「大した仕事ができるはずもない」と語った女性作家の任務の内実は第一次、第二次徴用された報道班員の前線報道の任務とは異なり、占領地の「治安維持、重要国防資源の獲得と、軍の自活」(筒井 1944: 35)といった軍政の目標が達成されたか否か状況を視察して、その成果を内地に発信することであった。実際、第一次徴用の終了後に帰国して半年ほど後に再び「行政視察」の名目でフィリピンに派遣された石坂洋次郎は戦後になって、「はじめのときに比べれば、たいへん大事にされて、島から島をまわった」と語っている(読売新聞社編 1970: 149)。石坂洋次郎の話からは、視察旅行においては初めの徴用時のように乱暴に扱われることはなかったと窺われるが、その代わりに食費と交通費以外の支給はなく、滞在中の給料が支払われることもなかった。というのも、第一次徴用の男性作家たちは出発からフィリピンの目的地に至るまであらゆる場面で不便を強いられたが、軍部から一定の給料が支給されていた。軍部に正式に雇われた報道班員は階級によって給料や待遇の差があったものの、おしなべて当時の文化人にとっては厚遇であり、それで生活の改善ができると期待する作家もいた(今 1944: 10)。一方、厚遇を受ける代価として前線の視察中に命を落とす危険性があった。他方、無給の川上喜久子は現地で金銭的不自由を忍んだことがあり(川上 1984: 206)、フィリピンから帰国する前に宇都宮直賢大佐に事情を伝えて給料を支給してもらったことを記している(川上 1984: 231)。

第一次徴用作家との間に給料の差があっただけでなく、男性作家と女性作家とでは占領地へ赴く際の身支度にも違いがあった。今日出海の『比島従軍』には、自宅に徴用の白紙が届いた後、1941年11月22日に東京府本郷区役所で身体検査を受けた際、携行可能な物品について記載された注意書を受け取ったことが記されている。それは「夏服(国民服ハ特に可)夏シャツ一二着、飯盒、水筒、巻脚絆、軍刀」であった(今 1944: 13)。これらは人間の身体を軍隊の規律に適応させる

ことを企図した日常の必需品といえるだろう。特に、軍刀は軍隊に特有の階級制度における兵士としての自分を象徴するものであり、それを常に携行することは被占領者に対して暴力を振るうことを可能にした。彼は、四日後に予定されていた東部防衛司令部での集合および出発に向けて携行品を準備していた際に、文藝春秋社の送別会で菊池寛から「武士の嗜みではないか。切腹する時にだって脇差の一本は要るのだから」と言われ、短刀を譲り受けた(今 1944: 13)。しかし、東部防衛司令部でこの短刀を携帯していた彼は、「軍装に刀がないのは軍夫のよう」だと見なされ、尾崎士郎や石坂洋次郎とともに〇〇〇の久保軍刀店を訪れ、店主に軍刀へ改装するよう依頼した。改装後は外見上、軍刀のように見えるようになったものの、「革鞘の半分も中身もない」状態であったため(今 1944: 73)、今日出海はどのような状況でも「これは腹を切る刀だから」と、人前で無闇に抜き放つことを控えた(櫻本 1993: 73)。一方、石坂洋次郎はマニラへ向かう際に金モールの指揮刀を携行していたため、輸送艦の下士官に吊るすことをやめるよう求められた。その理由は、それが「軍隊ではよっぽど偉いんでなければ、つるさない刀」であったからだ(読売新聞社編 1970: 166)。これらの記述からは、彼らは携行品と軍服によって兵士と同一化されたほか、輸送艦で「軍人勅諭を奉読したり、戦陣訓を大声で斉読したり、体操、防毒面をつけたり外したりする操作」の訓練もさせられたことから(今 1944: 67)、「準兵士」だったといえる。しかし、整然さと迅速さを基準とした軍隊の中で平均年齢が40歳を超えた男性作家から成る宣伝部隊に軍事訓練をさせたとしても、最低限の基準にも達していない「不合格」の兵士に見えるため、「この連中を扱うのは、支那の捕虜を扱うより厄介だ」と文句を言われたこともあるという(読売新聞社編 1970: 165)。このように占領地への徴用という状況下では「準兵士」として訓練された文士達も規律化された生活に内在する暴力性に服従せざるを得なかったが、彼らは終始戦闘力を持たない「二流の兵士」と見なされた。ここには、人間を馴化させる軍隊における文士の不適応性が剥き出しになっているといえよう。

これに対して女性作家のほうはというと、川上喜久子と三宅艶子はもちろん、出発する前に「軍刀」の携行を要求されるようなことはなかったが、三宅艶子は毎日新聞社の人から「あんまりみっともない格好をしては行けない」と言われたという。そのため、彼女は

「当時の東京では着られないような、パーティー用の洋服とか、夏服とかを作って、戦地へ行くなんて感じじゃなく、どちらかといえば、浮き浮きした気持ちで、はなやいでさえいた」というような心持ちで出発したと述べている（読売新聞社編 1970: 175）。日本は1940年2月11日に「婦人人絹製品配給統制規則」を発表し、国民は華美な服装の着用を自制するように求められるようになった。このように、当時、日本が海外侵略の欲望を戦争の形で遂行するには、国民の消費の欲望を消滅させ物資と人心を統合する必要があり、その手段の一つとして、国民女性に均一的で素朴な格好を要求した。しかし、国家を代表し占領地を視察する女性作家には一般女性とは別個の基準を設けて、派手で華美な服装が許されていた。川上喜久子もまた、マニラに着いた後に、マニラ新聞の福本福一から「明日は早速洋服をつくるんですね」と言われたという（川上 1984: 35）。彼女の日記には、マニラの洋服屋へ寄り服を直したりあつらえたりする記録が見られる一方、自分の質朴な格好に対して引け目を感じたことも書かれている（川上 1984: 98-99）。彼女は、ともにマニラへ赴いた三宅艶子の格好に合わせるができなければ、不釣り合いに見えることを嘆いているのである。質朴な格好は日本人男性の面子を潰すことにもつながる上に、占領地における日本国家の権威の発揚にも影響を及ぼすと考えられていた。軍部にとって「女流作家」はあくまでも「女性」の代表でしかなく、彼女たちの才能よりも装いを含む容姿の良し悪しの方を重視していた。だからこそ、占領地で女性が着用した衣服は日本の国力を表現する記号と見なされ、みすばらしい格好はかえって不適切なものとなったのである。このように、占領地に赴いた女性作家は戦時中に国家が女性の私生活に対して課した規制をある程度回避できる立場にあり、その意味では全体主義を利用しながら個人主義を実現したともいえる。その一方で、彼女たちは暴力装置である国家を代表する立場にあることを前提としていたため、衣服を通じて個人の表現を実現することもまた、足枷をはめられながらの自己表現でしかなかった。暴力という手段に乗じてのみ実現可能だった個人の自由は、女性作家が国家による暴力に加担することを意味したほか、彼女たちが男性のセクシュアルなまなごしの対象になることも避けられなかった。たとえば萱原宏一は戦後のインタビューにおいて、マンカヤン鉱山で三宅艶子と川上喜久子の着ていた白い洋服が鉱山の開発に従事していた日本人に

触れられ、「黒く汚れた」ことを回想している（日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム編 1994: 353）。男性たちは女性がほとんどいない状況だった中で突如として現れた女性作家を幻想上の日本人女性と見なし、彼女たちが着ている洋服を弄ぶ行為を通して、女性に対する自らの欲望を可視化することさえためらわなかったのである。

占領地へ徴用された男性作家が携行した軍刀と女性作家が着用した洋服の記号性には明らかな相違がある。女性作家は最初から前線に立たされないことを前提として南洋各地へ出発したことがわかる。もちろん、輸送艦に乗る時には女性作家もまた男性作家と同じように魚雷や爆弾の攻撃に晒される危険性があった。しかし、たとえ三宅艶子と川上喜久子が高雄へ行く船で救命胴衣の訓練と夜警の見張りを経験していたとしても、「戦士」としては扱われなかったため、男性作家のように船で軍籍に入る宣誓式に参加させられることはなかった。女性作家の記述には、自身が兵士と文士の身分の間で揺らぐ葛藤や、日本から占領地へやって来た男性たちに女性として乱暴に扱われることに対する不満といったものは見られないが、公的領域に立つ「女性作家」であっても、私的領域である「主婦」として送る日常からは完全に切り離されていなかった様子を見てとることができる。次節では、この様子について考察してみよう。

3 「主婦」として、「作家」としての葛藤

1938年の国家総動員法の公表とともに、日本では性別役割分担である「男は仕事、女は家庭」という構図が、「男は戦場、女は銃後」という状況に変化した。これにより女性たちはそれまで通り家事労働をする「主婦」としての役割を果たすだけでなく、「日本人女性」として、「軍国の妻、母」として、献金、千人針、出征兵の歓送、防火訓練などに至るまで、国民女性として様々な役割を求められるようになったのである。このような活動への参加は、それまで台所に追いやられていた銃後女性たちにとって、「一つの〈女性解放〉であった」とも指摘されている（加納 1995: 84）。そのような中で川上喜久子と三宅艶子が国家を代表してフィリピンに徴用されたことは、当時の文脈から見るとこの上ない「名誉」であった。ただし、公的活動に参加する銃後女性には家庭の役割を全うすることも要求された。フィリピンにいた三宅艶子と川上喜久子の日記にはそうした家庭役割を果たせないことに対して

歯痒い思いを抱いていた様子が見られる。たとえば三宅艶子はマニラで、日本では自由に入手できない食材を見かけた際などに、それを購入したいという欲求に駆られて「主婦」としての役割を想起したことを日記に書いている。

ふと自分が旅先でホテル住ひをしてゐることを忘れてしまふのだ。買って来てすぐ台所に立てるやうな気がしてしまひ、そしてなんだ今トマトケチャブを買つたつて仕様がな、と気がつくとな涙が出る程悲しい。市場で感じる郷愁は、きつと男の人にはわからないだらうと思ふ。(三宅 2002: 25)

1937年に日中戦争が発生した後、日本は綿糸や石炭、鉄鋼などの不足資源をすべて軍需工業に集中させて、民間での不要不急な消費を規制するように統制を開始した。さらに1940年6月以降、日本国内では米不足が続き、同年6月から砂糖、マッチについて切符制の配給の実施に乗り出した。このように内地の食料品が不足する中で、三宅艶子はマニラの品物揃えを見て、公的な立場にあることで家庭の家事に関わることができない自分と、そうした状況に無関心な男性との間に差異が存することを意識していたことがわかる。

一方で川上喜久子は、滞在の期間が急に変更されたことに苛立っていた。

私たちは最初交渉のあった時、往復飛行機で期間は二か月、年内にはらくに帰れるというお話なので承諾したところ、いよいよ出発という時になって突然船に変えられ、しかももはや十二月に入っている。春になれば受験を控えている子供もあり、主婦としてもいろいろ困ることがある。しかも全然無給なので、滞在が長くなれば、持参のお金には制限があることだし、まことに心もとない次第である。(川上 1984: 21)

川上喜久子は、フィリピンで作家として活躍する間にも私的領域における「主婦」としての役割を果たさなければならないというように職業活動と家庭の責任の両立を課されることに苛立ちを感じていた。このように「女性作家」、「主婦」、「母」という役割に内在する期待を同時に背負わされた上、権力側が恣意的に予定を変更することや無給の待遇で長期滞在をしなければならないことが彼女の心身に一層の負担をかけ、不

自由を感じさせたことがわかる。

さらに、彼女の日記には、マニラで文藝春秋社の斎藤竜太郎や講談社の萱原宏一といった日本人男性の相手をしてしながら、現地の娯楽施設で佳肴と美酒に酔う生活に飽きたことが、以下のように記されている。

もうバーなど回るのはたくさんだ。はかない気持が胸を食い荒らしている。つくづくと仕事がしたい。(川上 1984: 46)

食事の後バーに回る所までお供させられるのは、くたびれている私にはむりであった。来た当座こそマニラを知るためにとがまんしてついて回ったが、高級バーというのか、読んだりして得たイメージとは違う上品で清潔な小店で、私の社会勉強も一二度でもう十分、早く一人になって休みたかった。

家庭を離れた彼らが、主婦であり母であり、多少は話相手もつとまる私たちを、代わる代わる誘ってくれる心情も察しられるけど、相手によってはたまに独りの自由な時間を与えることも、何よりのもてなしであろう。(川上 1984: 199)

戦争の破壊によって頽廃したダンスホールでは依然として男性のために娯楽活動が続けられ、女性が娯楽の対象とされていたことに、川上喜久子は違和感と抵抗感を覚えたのだろう。これについて、中野聡は『東南アジア占領と日本人 帝国・日本の解体』の中で「東南アジア占領をめぐる日本人の「語り・回想」のなかには「酒色に溺れ、ものを買ひあさる」という占領地で遊興にふけていた「醜い日本人」像がよく出ている」と言及している(中野 2012: 199)。さらに、今日出海は「三木清における人間の研究」において、自身が尾崎士郎と晩餐を済ませた後に「悪友と青楼に登ること度々」であったとしているほか、石坂洋次郎にとっては買い物「憂さ晴らし」だったと書いている(今 1950: 44)。戦時中の占領地における娯楽場は、まるで戦線にとっての後方であるかのように、そこへ戻ってきた戦士の戦力を補給し、占領地にいる男性の感傷性を排除させるために彼らを慰める場所となったと思われる。しかし、川上喜久子のほうは、男性のストレス発散のために、添え物としてそこで一役を買ってもらうなどはなはだなかった。先に見た川上喜久子の文章は、自身が男性間のホモソーシャルを強化するための道具として利用され男性の快楽を満たすためのものになることに抵抗していたことを示している。ただ、

わかるのは、占領地において日本人男性たちは、「主婦であり母」である日本人女性を話し相手として求めているということである。川上喜久子は自身が現地の男性たちにどのように位置付けられているのか、それによって自身と男性たちとの間にどのような関係性が展開するのかを察したために、フィリピンの視察旅行の際に男性によって求められる「主婦」「母」役を演じて彼らを引き立てることを拒否したといえるだろう。女性作家たちは、占領地へ徴用され宣伝活動を担うという公的な場においても依然として「銃後女性」としての「主婦」や「母」という役割を割り当てられており、そのことが作家としての活動にとって支障になることに抵抗感を覚えていたのである。

以上のように、三宅艶子と川上喜久子という二人の女性作家の視察日記には、その日の行動を中心にした記録が書き残されているのみならず、その行間に時折「主婦」としての立場、あるいは「主婦」としての立場が見え隠れする。彼女たちの日記からは、たとえ公的領域に出たとしても女性は家庭の母の役割を果たさなければならないという期待を向けられることによる葛藤と心労を抱えていたことがよくわかるだろう。このように、戦時中の日本は兵士になった男性の代わりとして女性の社会進出を推奨する一方で、女性には「家庭の美風を守る」役割があることをも強調し続けていたため、占領地に徴用された女性作家は国民を育て家庭を守る「主婦」と、軍政の浸透を称揚する「女性作家」という二重の相反するような役割を求められたのである。女性作家たちは内地では家事労働によって文筆の時間が削られ、フィリピンでも日本人男性の酒宴に付き添うことで書く時間が削られざるを得ないという状況に置かれていたといえよう。

4 「日本人女性」としての優位性

三宅艶子と川上喜久子の占領地への視察旅行は日本軍の最高統帥機関である大本営による派遣であったため、彼女たちは現地で比較的手厚い歓待を受けた。たとえば、マニラに到着した後、二人は将官以上の人が宿泊するマニラホテルに泊まった。川上喜久子の日記には「フィリピン人の手前女客を二流ホテルに移せるか、と誰か言ったら三宅さんにきいたことがある」と書いている（川上 1984: 142）。「フィリピン人の手前女客を二流ホテルに移せるか」という話にみられるように、このような厚遇には彼女たちが女性であるとの「特殊性」もある程度作用したことは否めない。しかし、

このほかにも二人はフィリピンの至る所で「珍客」として扱われ、注目されている。マンカヤンの鉱山を視察したとき、「日本の女の訪問は正に開闢以来最初のことだそうで、日比人共大そう珍しがったらしく、日本の男性は色が黒いのになら女はどうして色が白いのか、という質問が出たとか、これは後で聞いたことだが、坑道の中にいた人々が、今日は日本婦人が来るというので、一日楽しみにしていたところ、とうとう見られなくてがっかりしたとか、いろいろ面白い話があった」と現地人の好奇心を引いたことは、川上喜久子も触れている（川上 1984: 92）。さらに、同日の夜、現地人の結婚式に出席した折に、酔っていた日本人たちは「これがほんものの日本婦人だ、混血児ではないのだぞ」と彼女たちを「あちらこちら引回した」という（川上 1984: 94）。「混血児」より上位の秩序にいたと思われる二人の一举一動が現地人の関心をそそったであろうことは明らかである。

三宅艶子と川上喜久子がフィリピンにおいて慇懃な態度で接されたというのは、まさに戦場にいる日本女性の「特殊性」、「希少性」に由来するものであり、彼女たちが男性作家と同様の権力を獲得したことを意味するものでは決してない。たしかに、彼女たちが占領地で享受した珍味や滞在した一流ホテルは一見すると「特権」のようである。しかし、実際にはそれは軍隊におけるジェンダーの不平等性から生じたもので、女性は「男性ほど強い身体を持っていない」、「兵士にはなれない」ことを前提された存在であったがために、占領地を訪れても保護を受けなければならなかったといえる。彼女たちは戦場で砲煙弾雨を浴びながら敵と対峙したわけではないため、その日記には当然、国家のために犠牲を惜しまずといった悲壮で壮烈な心境は見られない。かといって彼女たちは、自身が選ばれて占領地へと徴用されたことに対する不満や不平を漏らしているわけでもない。実のところ、「暗くなって女ばかりで出歩けば街娼と間違えられても仕方ないと教えられた」ため、彼女たちは占領地で自由に外出することができなかった（三宅 2002: 77）。このように、占領地に赴いた女性は「弱い」「侵犯されやすい」存在として認識されていたが、三宅艶子と川上喜久子は訪問先で自身の耳に届く「日本人女性」に対する称揚が戦場における女性の「無能」と「無意味」というイメージを消去させると考えたからこそ、そうした称揚を細かく日記に書こうとしたのだろう。

V 終わりに

国家総動員法が公布された後、日本は〈帝国〉日本が西洋諸国と拮抗する場と見なした南洋に男性作家と女性作家をそれぞれ待遇を区別した上で送り出した。この決定は、男性作家には準兵士として前線で戦争を記録する役割を、女性作家には知的な日本女性として占領地を見学・記録する役割をというように、両者に別の任務を果たさせるものであった。女性作家らは占領地としての南洋において、「女性」の独特な感性を生かして国家が南洋で展開する「偉業」を日本内地で待つ銃後の女性に伝達した。彼女たちには、多くの銃後女性に夫や息子の戦争参加を後押しさせるといった戦争協力が期待されたのである。このようにして、国家の戦争物語は男性作家の占有物ではなくなったばかりか、国家はむしろ衆目を引く女性作家を積極的に利用して、占領地に対する民衆の関心を集めることを企図したものと考えられる。日本内地で「主婦」として「母」として居間や台所に閉じ込められていた女性作家は、占領地への視察旅行という形で国家の代表として公的な舞台に上がることができたが、占領地に到着した彼女たちには父権制と軍国主義を支持しなければならないという運命が待っていた。さらに、軍部の臨時徴用作家として派遣された女性作家は軍部の期待通りの行動と発言をする必要がある一方、同時に被占領者の眼差しに曝されてもいた。また、女性作家が特権的な位置に立つことは必ずしも自由自在に公的領域と私的領域の間を往来することにはならなかった。彼女たちは戦場と日本の文壇における男性と女性との非対称な関係と、文壇における女性作家同士の評価の分化という悩ましい事態の双方に直面した。その上で、家庭内での自身の義務を果たすことができないという不安を克服しなければならない立場に置かれたのである。

成田龍一は、戦時中の日本では、ジェンダー間と公私の境界線を曖昧にしていくことによって、「男性／女性、戦場／銃後の安定した、非対称的な関係がゆらぎ、男性性や女性性の自明性が消失し、性別役割分担が従来どおりに遂行し得ない局面があちこちに生じて」いたと指摘している（成田 2002: 18）。本稿で見えてきたように、男性原理が支配する戦場に入り込むことは、男性の領分に参与して男性が手に握る権威を揺るがし、男性の占領を観察し監視することにつながるため、女性作家の戦場視察には二元化されたジェン

ダーの構図を強化しつつ、その間に亀裂を入れるという二つの力学の動態の作用が見られたといえるだろう。

参考文献

- (日本語文献)
- 加納 実紀代
1995 『私たちの〈銃後〉』インパクト出版会。
- 加藤 麻子
2004 「南方徴用作家 林芙美子の足取り——馬来・蘭印行程と、『浮雲』の仏印行程」『武蔵大学人文学会雑誌』36巻3号: 249-270。
- 木村 彩子
1943 『仏印・泰・印象記』愛読社。
- 川上 喜久子
1984 『フィリピン回想』川上喜久子発行 製作: 西武百貨。
- 小山 いと子
1942.12.19 「意外だったこと／昭南にて」『読売新聞』読売新聞社。
- 1949 『椰子真珠』中央公論。
- 木村 一信・神谷 忠孝編
1996 『南方徴用作家』世界思想社。
- 黒田 秀俊
1952 『軍政』学風書院。
- 今 日出海
1944 『比島従軍』創元社。
- 1950.2 「三木清における人間の研究」『新潮』。
- 櫻本 富雄
1993 『文化人たちの大東亜戦争 PK 部隊が行く』青木書店。
- 筒井 千尋
1944 『南方軍政論』日本放送出版協会。
- 鳥木 圭太
2017 「女性作家の見た〈南方〉——林芙美子と佐多稲子のスマトラ」『論究日本文学』106: 1-16。
- 中野 聡
2012 『東南アジア占領と日本人 帝国・日本の解体』岩波書店。
- 成田 龍一
2002 『近代日本の文化史 8 感情・記憶・戦争』岩波書店。
- 日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム編
1994 『日本のフィリピン占領 インタビュー記録』龍溪書舎。
- 平子 友長
2008 「三木清と日本のフィリピン占領」『遺産としての三木清』同時代社、pp. 304-363。
- 平櫛 孝
2006 『大本営報道部』光人社。

- 三宅 艶子
2002 『比島日記』 ゆまに書房。
- 望月 雅彦
2008 『林芙美子とボルネオ島——南方従軍と『浮雲』をめぐって』 ヤシの実ブック。
- 森 三千代
1942 『晴れ渡る仏印』 室戸書房。
- 矢崎 弾
1940.6 「女流作家再論」『政界往来』 政界往来社、pp. 244-249。
- 矢野 暢
2009 『「南進」の系譜 日本の南洋史観』 千倉書房。
- 吉屋 信子
1942.1 「南方基地仏印現地報告」『主婦の友』 主婦の友社、pp. 48-57。
1942.2 「仏印泰国防軍記」『主婦の友』 主婦の友社、pp. 96-106。
- 尹小娟
2019 博士論文『南方徴用文学研究——戦後における南方表象の問題を中心に』九州大学。
ジャワ新聞社
1943.2.26 「優雅と忍耐を説く 林芙美子さんとインドネシア女性の座談会」『ジャワ新聞』、ジャワ新聞社。
読売新聞社編
1970 『昭和史の天皇11』 読売新聞社。
陸軍省報道部
1942.9.14 「新聞、雑誌記者、女流作家 南方派遣指導要領」 市川市文学プラザ所蔵。
- (英語文献)
Julz E. Riddle
2022 The Woman Question during the Japanese Occupation in Kikuko Kawakami's and Tsuyako Miyake's Philippine Diaries (1943), *Philippine Studies: Historical and Ethnographic Viewpoints*: 243-271.

The Roles of Women Writers Dispatched to Southeast Asia

ZHANG Ya*

This paper examines women writers dispatched to Southeast Asian territories during the 1940s, focusing on the roles expected of women writers based on their dispatch period, duration, and activities. In particular, it analyzes two texts by writers conscripted to the Philippines in the 1940s: *Hitō Nikki (Diary of the Philippines, Tohōsha, 1944)* by Miyake Tsuyako and *Firipin Kaisō (Recollections of the Philippines, Self-published, 1984)* by Kawakami Kikuko. The study explores how the gendered division of labor in Japanese society at the time influenced these women writers' experiences during a military inspection tour. Through this analysis, the paper highlights how women writers were transformed—either by external pressures or through their own agency—from “women writers” to “Japanese women” and ultimately to “housewives,” aligning with the dominant political and gender power structures in the occupied territories. Furthermore, it reveals that in this process, they were continuously engaged in re-evaluating their roles and reconstructing their personal identities, navigating conflicts, constraints, and resistance. By examining these dynamics, the study aims to elucidate the distinctions between these women writers in narrating war.

Keywords

Southeast Asia, Women Writers, War, the division of labor

* The University of Osaka

第三部

若者の「味」

— 潮州と深圳から見る中国都市部の若者世代の感覚と社会消費の「品味」ⁱ —張 静紅*¹張 雅*² (訳) 藤川 美代子*³ (監訳)

中国語の「品味」ⁱⁱとは味覚の審美的基準と象徴的な社会的区分の双方を指し示す言葉である。しかし、感覚と社会的消費的な「品味」について年齢の差異と関連づけて論じる先行研究はまだそれほど多くないといえるだろう。本論文では、現代中国の都市部における若者世代（すべての若者ではない）の代表的感覚と社会消費的な「品味」について、深圳と潮州における調査に基づき、茶や茶に関連するドリンクの消費の事例を通して検討する。また、若者によるこれらの「品味」の解釈や、若者の「品味」の傾向に影響を与える社会的・文化的要素について分析する。本稿は若者世代の味の好みについて考察すると同時に、感覚領域へと視点を広げ、彼らの表現方式についても掘り下げる。さらに、「生理的身体」と「社会的身体」が相互に調和する原理に言及しながら、同じ社会的・文化的文脈において見られる複数の感覚表現の間にある共通性、およびそれらに映し出される「社会的身体」の特徴について検討する。

キーワード

品味、ミルクティー、工夫茶、感覚、若者世代、深圳と潮州

目次

I はじめに	IV 雑食性
II 甘味	V 流行の中の伝統
III 背景をぼかす	VI 結論

I はじめに

「品味」という言葉には二重の意味がある。当初は感覚的な味覚と風味を指す用語として使われていたが、後に文化的・審美的な見識という意味へと発展し

た (Vercelloni 2020)。フランスの研究者ピエール・ブルデュー (Bourdieu 1984; cf. Howes 2016) の論考により、「品味 (taste)」という概念は社会科学の分野で広く知られ、社会的階層に関連する文化趣味の論述

*1 (中国) 南方科技大学

*2 大阪大学

*3 南山大学

に多く引用されるようになった¹。これまで、この概念を年齢や世代による「品味」の差異、特に若者の「品味」に適用して議論するときには、若者の音楽趣味が引き合いに出されることが多かった。音楽には幅広い消費者層があり、歴史的・時代的・社会的・個人的好みを反映する比較的明確な「界」を有すると考えられているからである (Richard and Kern 1996; Rimmer 2012; Fishman and Lizardo 2013)。これに対して本稿では、本来の「品味」の概念に最も密接に関わる味覚という感覚に注目し、茶および茶に関連するドリンクを事例として、中国の若者の感覚と社会消費に関わる「品味」について考察する。なお、「品味」という用語については、「趣味」(王寧 2017)と表記する場合もある。本稿では用語の重複を避けるために必要に応じて二つの語を使い分けるが、いずれも文化的消費という文脈における人々の判断や傾向を指している。

感覚とは単に身体的・生理的なものであるだけでなく、社会的・文化的なものでもある。この考え方は感覚人類学の重要な基礎的理論となっている (Classen 1997; Howes 2005)。これに関連する議論として、メアリー・ダグラスは、感覚人類学の視点から論述したわけではないものの、人間には「生理的な身体」(physical body)と「社会的な身体」(social body)があり、両者は相互に調和し参照し合う関係にあると指摘している (Douglas 2004)。この見解は図らずも感覚人類学の思想の基礎となるものと一致しているほか、マクロな社会的・時代的ダイナミクスがミクロな身体感覚に及ぼすであろう影響、およびある種の流行的かつ集団的な感覚と嗜好を通して社会的・時代的な兆候を探ることの持つ可能性について強調するものとなっている (Howes and Lalonde 1991: 125-135)。

上述のようなマクロな社会におけるミクロな感覚の次元のほかに、近年の感覚人類学では多元感覚(「多感官」)、クロスモーダル(「跨感官」)、交叉感覚(「交叉感官」といったものに注目する研究が進められている。いずれの研究も、すべての感覚を不可分の総合

体とみなし、知覚プロセスにおいて主要なもの副次的なものを区別するのは難しいこと、さらには人がある感覚によって別の感覚を表現する可能性があることに注目すべきであると強調する (Howes 2009: 17-28)。例えば、デビット・ハウズの言う「感覚統合」(あるいは「共感覚」、intersensoriality)は、ある感覚が刺激されると、身体の他の感覚もしばしば協調的に働くという現象を指している (Howes 2003)。また、筆者はこれまでの議論において、このような「感覚統合」は同一主体の複数の感覚間だけでなく、同じ文化的・歴史的な文脈を共有する主体間の感覚や表現の方式の間にも生じ得ることを指摘してきた (張静紅 2021: 98-106)。そのほか先行研究では、東アジアの文化的文脈と結びつけ、多様で複雑な体験が交錯しながら身体の中で内面化されるという、具体的な一つの感覚では議論しづらい「身体感覚」の概念も提唱されている。この概念は「身体が経験の主体として内外の世界を知覚する」ことで多様な感覚がより複合的な身体的経験の次元へと進化するものを意味し、「モダンさ」、「快適さ」、「かわいさ」、「清潔」、「不潔」、さらには東洋的な「気感」などの総合的な感覚が例として挙げられる (Kuriyama 1997: 127-149; 余舜徳 (編) 2008: 1-41; 余舜徳 (編) 2015: 12)。

また、先行研究では味覚研究の難しさとして、味覚(および嗅覚)を的確な言葉で表現することが難しい点が指摘されている (Kuipers 1984; Zhang 2017)。本稿において紹介する若い消費者が使用する語彙の多くは味覚を直接的に表現しているわけではないものの、「身体感覚」のアプローチから見ると間接的に「若々しさ」や「時代感覚」を反映していると考えられる。そのため、筆者は本稿において、若者が好んで用いる流行語やネット用語をも収集し、分析を行うこととする。

以上を踏まえて、本研究は茶および茶に関連するドリンクの消費を通じて現代中国の都市部における若者の代表的な感覚(若者に共通する感覚すべてを扱うわ

¹ 英語の class は、中国大陸では時に「階級」(political class)を指す語として使用される。特に、1950年代から1970年代にかけては、政治的な身分を区別するために広く使われた。例えば無産階級と資産階級の区別や、農民、労働者、地主階級の区別などが挙げられる。ところが、2000年代初頭以降、中産階級 (middle class) などに関する議論が始まると、「階級」という言葉は「階層」(social class)を表す言葉として使用されることが多くなり、社会的階層と社会階級 (social stratum)に関連する意味を持つようになった。Bourdieu が議論する「品味 (taste)」の概念は、後者の「階層」とより密接に関連している。ただし、「階層」という言葉は本誌(『中国飲食文化』)では理解されにくい可能性があり、また「階級」という用語は本文の事例研究が示す社会的・文化的文脈に適さないため、本稿では social class を「社会的階層」と表現することにした。中産階級に関するさらなる議論については、以下の文章を参照されたい。また、「階級」と「階層」(social class)の違いについては、デビッド S.G. グッドマンの *Class in Contemporary China*, 4-5 (Goodman 2014) も併せて参照されたい。

けではない)と社会消費に関わる「品味」について検討するほか、これら若者の「品味」の傾向と「伝統」との間にある関連性を分析することを試みる。さらに、若者の味覚の嗜好について調査すると同時に、視覚的イメージに対して彼らが示す表現形式についてもクロスモーダルの領域から検討を加えるほか、そこに「生理的身体」と「社会的身体」の相互作用に関する原理を結びつけながら、同じ社会的・文化的文脈において味覚と視覚という二つの感覚はいかなる共通性を見せるのか、それらが共通して呈示する「社会的身体」の特徴とはいかなるものなのかを考察していく。

さて、国連の定義にしたがうならば、「青年」とは15歳から24歳までの年齢に相当し、比較的若い年齢層を意味する。これに対して、本稿では「若年層」という相対的に年齢が若い世代に注目する。その中には十代から二十代よりやや年長で、すでに就職して社会人になった人も含むこととする。そのうち、筆者がインタビューを行ったり、より深く話を聞いたりした対象者の大半は20歳から40歳までの人々であった。これらの事情に鑑み、本稿では「青年」ではなく「若者」という表現を用いて調査対象集団を指すこととする。調査対象者は15歳から40歳にわたっていることから、Y世代とZ世代の大部分を含む。一方、本稿で言及する「年配者」とは、国際的な慣例に基づき60歳以上の人々を指す。「若者」あるいは「年配者」といった区別はしばしば、状況によって決定される相対的なものであることを押さえておきたい。

本稿において筆者は主に人類学の調査方法を用いるが、消費社会学と文化研究の分析理論も適宜参照することとする。フィールドワーク調査の拠点としたのは深圳と潮州である。両都市はいずれも広東省に位置し、前者は人口が1000万人以上の一線都市ⁱⁱⁱであり、後者は人口が約20万人の三線都市、あるいは四線都市と見なされる。なお、本稿では、両者のうち潮州により大きな比重を置いている。深圳を調査地として選定したのは、潮州の状況との間に見られる相違点と共通点を比較することで潮州の事例が示す状況をより深く検証し解釈するのに助けとなると考えたためである。また、移民都市である深圳は全国から若者が集まっており、都市の規模が大きく人口の構成も複雑であるため、人類学のフィールドワークを実施するには理想的ではないものと思われる。筆者は大規模なアンケート調査を通じた定量分析を行うつもりがなかったため、深圳では勉強・生活・仕事のために若者が多く集まるエ

リアから二か所を選び、集中的にインタビューを行うこととした。一か所は学生街の周辺で、もう一か所はハイテク企業が入るオフィスビルとショッピングモールが集中する深圳市中心地である。インタビュー対象者は15歳から40歳までの計48人である。深圳の状況に対する解釈は、筆者の6年間にわたるそこでの生活と仕事の経験で得た見解に基づくものである。一方、潮州は筆者が2010年から重点的に観察を続けてきたフィールドワークの拠点であり、2019年以降毎年、現地調査のために訪れている。本稿に関わるものとしては、2021年と2022年の2回にわたり街頭インタビューと家庭を訪問しての集中的インタビューを行い、15歳から40歳までの計106人を対象に調査を実施した。さらに、実地的なフィールドワーク以外にも、若者の消費において重要な位置を占めるソーシャルメディアやウェブサイトも本稿に関連する資料の重要な提供源となった。

喫茶に関わる景観という面で、深圳と潮州は顕著な対照を呈している。潮州は街の至る所に茶を飲む人々が溢れている。老若男女を問わず3〜5人のグループで、朝から晩まで、街角あるいは店の前に集まり、小さな急須と茶碗で茶を注ぎ分け合って何煎も味わうのである。これは「工夫茶(コンフーチャ)」と呼ばれる茶の飲み方で、明末から清初の福建や広東のあたりに起源を持ち、現代まで受け継がれた習慣である(曾楚楠・葉漢鐘(編)2021: 44)。また、近年では観光客や若者のニーズを満たすための茶館も現れており、潮州の街並みでは喫茶の景観を構成する重要な一部となっている。淹れ立ての茶に関して言うならば(ここでは、ティーバッグを用いた茶とペットボトル入りの飲料については考慮しない)、潮州の街中では茶を飲む光景が日常的にあちこちで見受けられる。それに対し深圳のほうは、「茶の不足」と言えるだろう。深圳の街で茶館に行き当たる確率はきわめて低く、茶館に行きたければその場所を検索してから計画的に出かける必要があるからだ。すなわち、深圳では茶の消費が潮州ほど顕在化していないのである。もちろん、中国全体あるいは世界全体から見れば、潮州のように「全民皆茶」というべき景観が見られることなど非常に特殊であると言える。かたや深圳は多様な移民が暮らしており、飲食の面から「深圳らしさ」を体現するものを見つけ出すのは難しい。このように本稿において、潮州の強く根を張った在地文化と、深圳の存在感の希薄な在地文化とは対照的な背景をなすものである。

本稿は深圳と潮州の両地域の比較研究というより、同時代における大都市と小都市をフィールドとすることで、現代中国の都市に暮らす若者が持つ感覚と社会消費に関わる「品味」の共通性を明らかにすることを目的とした研究であると言えよう。なお、以下の、「II 甘味」(タピオカミルクティーの消費に重点を置いた内容)、「III 背景をぼかす」(視覚的消費に関する内容)といった章では、主に深圳のデータを使用しているが、実際には潮州においても多くの類似点が現れている。その反面、ある消費の特徴は一方の都市と比べて、他方により顕著に見られることがある。そのため、「IV 雑食」と「V 流行の中の伝統」という二つの章では、主に潮州の事例に焦点を当てて議論を進めることとする。

II 甘味

茶の消費には大きな差異があるにもかかわらず、若者がミルクティーのような流行りの「品味」を好むという点では、深圳と潮州とは非常に高い一致を見せる。ここで言うミルクティーとは英国式のミルクティーではなく、台湾式の「タピオカミルクティー(「珍珠奶茶」)」と香港式の「ストッキングミルクティー(「絲襪奶茶」)」の影響を受け、1990年代以降に中国大陆で徐々に発展してきた様々なブランドの商品を指す²。深圳などの一線都市には「喜茶」、「奈雪的茶」、「Coco」といった有名なミルクティー店があるのに対し、潮州では全国的にはやや知名度が低いチェーン店「益禾堂」や潮汕文化の要素を強調した「英歌魂」のようなミルクティー店が見られる。「英歌魂」は潮州あたりで多く栽培されているユカンの果実を原料として使用したり、あるいは地元民が好きな「単叢茶^{iv}」、なかでも「鴨屎香」という名の単叢茶をベースに用いたりしている。これらのミルクティーは茶葉と乳成分だけから作られるわけではなく、果物、砂糖、その他のお菓子などを混ぜ合わせて作られ、これらは一般的に「トッピング」と呼ばれている。若者に人気の飲み物には炭酸飲料などもあるが、本稿が研究対象としてミルクティーに焦点を当てるのは、近年ミルクティーが中国で最も人気の高い「新式ドリンク」となっていること、さらに大多数のミルクティーは茶葉をベースとしており、後に

論ずるとおり、同様にカフェインを含むピュアティー(「純茶」)やコーヒーとも比較しやすいことを念頭に置いているからである。近年、このような中国式のミルクティーは海外にも広がり、中国の留学生を行列に惹きつけるのみならず、西洋の若者にも好まれる重要なドリンクとなっている(戴彼得 2023: 109-113)。

深圳と潮州での調査では、ミルクティーの消費者の年齢層は15歳から25歳に集中していた。毎日必ずミルクティーを飲むという人は少数派(潮州で1名、深圳で4名。うち1名は、自分で材料を買って適当に作るという)だったが、この年齢層ではミルクティーを受容する度合いが高いと答えた人が90%以上もいたほか、女性のほうが男性よりもその受容度が高いことがわかった。両地域の回答者の多くは、3〜5日ごと、または週に1回ほどの頻度でミルクティーを消費していた。総体的に見れば、ミルクティーの受容度と消費頻度は、同世代の人とのつきあいや友人関係と直接的かつ密接に関連しており、ミルクティーを飲む人は皆、街をぶらつく時や友人と集まる時に飲むのだと口をそろえる。また、若い男性の場合はミルクティーを飲むのは恋人と一緒にいる時であることが多いという。

若年層の回答者の中ではミルクティーに使用される茶葉の種類と等級にこだわる人はほとんどおらず、彼らが考えるミルクティーの人気の最大の理由は間違いなく「甘さ」にある。例えば、「糖分は人を喜ばせる」、「人間は甘みを求めるものだ」(インタビュー対象者の言)といった具合である。あるラジオのトーク番組にやって来た一人の若いゲストが「甘さ」について形容していた。その表現はやや大げさにも聞こえるが、そのようなちょっとした誇張、冗談、自嘲、また新たに創造された流行語といったものは、まさに現代の若者が本音を表現する際に用いる重要な方法だと言える。

例えば、×××(という店の)ミルクティーには、他の店ではまだ開発されていない「蜂蜜の分子」というトッピングがある。これがなかなかの優れたもので、表面は薄い膜で包まれていて、噛むと膜が弾けて甘い蜂蜜が出てくる。究極の蜂蜜の甘みが口の中で花開く。なんていうか、このミルクティーを飲むというのは、まるで花が咲く時の音を味わうことのような(活字文化編集部 2020)。

² 台湾の「タピオカミルクティー」と香港の「ストッキングミルクティー」に牛乳を加えるのは西洋文化の影響によるものである。

筆者の調査に応じてくれた若者は、ミルクティーの甘味を求める理由について一様の解釈を示した。彼らは生活面で非常に大きなストレスを感じているのだが、甘さは癒しをもたらしてくれ、不安を和らげてくれるというのである。やや誇張して言うならば、若者たちはミルクティーによって「命をつなぐ」ことができるのである。例えば、深圳の二十代前半の大学生は、特に期末試験や卒業制作の時期にこの「命をつなぐ」必要性が高まると説明しており、試験勉強に行き詰まったときに甘いミルクティーを一杯飲むことでエネルギーと自信が高まるのだという。他方、25歳以上のミルクティー愛飲者も同じように感じている。仕事に就いている彼らにとって、ストレスの原因は学校の試験ではなくなったものの、それは社会人になってからの目まぐるしい生活、複雑な人間関係、家賃の負担、到底手の届かない不動産価格といったものに変わっただけである。社会人となった若者の中には、コーヒーのほうがミルクティーよりも目を覚ます効果があるからと言ってコーヒーに切り替えるという人もいる。これは職場に入った若者にとってはさらに切実な問題である³。

甘いものを食べすぎると体に良くないことを、ミルクティーの消費者はよく認識している。ある女性の回答者は糖質の過度の摂取が心配でミルクティーの消費を減らさざるを得なかったと語った。しかし、全体としては年齢が若ければ若いほどミルクティーの糖質がもたらす悪影響を心配しない傾向にある。例えば、19歳の深圳の女性は「ミルクティーを飲むときに健康の問題などまったく考えていない。楽しむために飲んでいるので、後先のことなど考えたくない」と述べている。また、20歳の深圳在住の男性は「糖質には依存性があるが、どうせ週に一杯ぐらいしか飲まない。一杯ぐらいでは健康にも不健康にもならない」と語ってくれた。さらに、インタビューを受けてくれた若者の中には、ネット上の流行語を引用し、ミルクティーの甘さが「小確幸」をもたらすと語った人もいる。「小確幸」とは「小さいけれど確実な幸せ」という意味で、そもそもは村上春樹の作品に由来する言葉だが、後に中国語圏の若者の間で広く使われるようになった。調査の中では、複数の20代前半の若者が類似した表現を聞かせてくれた。小さいけれど確実な幸せは、毎日

の生活のなかで最も簡単でありながら最も得がたい願望である。そのため、ミルクティーにまつわる「小確幸」は、たとえミルクティーの甘さのようにほんの短いひと時しか享受できないとしても、過去にこだわらず、未来のことも考えずに目の前のことだけを掴み取ろうとする若者たちの心理を表していると言えよう。

今を楽しむことは、ミルクティーの種類（甘さの程度も含む）を選ぶことに対する消費者自身の説明にも現れている。多くのミルクティー店は、消費者に対して複数の選択肢を設けている。最初に紅茶・緑茶・ウーロン茶・ジャスミン茶などベースとなる茶葉の種類を選び、次に全糖・半糖・少糖・無糖といった甘さの程度を選ぶ。少糖あるいは無糖は、糖質の過度の摂取が自身の体型と健康に影響することを心配する消費者の罪悪感を軽減させるための新たなトレンドになっている。しかし、多くの消費者は、甘くないミルクティーなど魂を失ったも同然であるとも感じている。氷の量にも氷なし・少なめ・多めなどの選択肢がある。さらに、ミルクティーの「真骨頂（神来之筆）」と言うべきは、トッピングの有無と多寡を選ぶことができる点である。例えば、果物の種類、チーズミルクフォーム、芋圓^v、亀苓膏^{vi}といったものから、赤餅米、ナッツ、クッキーなどを追加することまで可能である。消費者は上述のような手順でミルクティーをカスタマイズする。彼らはそれによってある種の自由を感じることができるのである。「ミルクティーを一杯買うと、まるで世界を所有したような感覚になる」と述べる人もいる（活字文化編集部 2020）。カスタマイズ可能なミルクティーは、消費者の個性を表現する手段ともなっているのである。この楽しみ方はミルクティーのマーケティング戦略にも反映されており、トッピングのオプションが増えれば増えるほど、最終的には「一杯のミルクティーの半分はトッピング」というようなことになる（熱力雪 2023）。このことは、ミルクティーの中に含まれる本当の茶の成分と風味がそがれてしまうことを意味している。しかし、数名のミルクティー店の経営者は筆者に対して、ミルクティーの成功こそが多くの若者を「喫茶」という行為へと惹きつけているのだと語ってくれた。

3 このような需要は、19世紀後半のイギリスで労働者階級が砂糖入りの紅茶を消費してエネルギーを得ていた状況と興味深い対応をなしている。これについては、シンディー・ミンツの論考（西敏司 (Sidney Mintz) 2010: 146-150）を参照されたい。

III 背景をぼかす

若い消費者がミルクティーを通じて「小確幸」を獲得するもう一つの方法は、消費の場所で写真や動画を撮影し、それを WeChat（「微信」）、RedNote（「小紅書」）、TikTok（「抖音」）などの SNS にアップロードして友人や一部のユーザーとシェアすることである。有名なミルクティー店は若者が頻繁に訪れる場所となり、消費トレンドにおける「SNS 映えする写真をアップする（「網紅打卡）」ためのスポットとして選ばれている。「網紅」とはそもそもネット上のインフルエンサーや有名人を指す言葉だが、後にインターネットの広がりとともに有名なスポットや商品を指すまでに、その意味を拡張させた（Craig 2021: 2-3）。「打卡」すなわち「チェックイン」とは、写真や動画のアップロードのために「ある場所を訪問する」ことが必須条件であることを強調する言葉だと言える。つまり、若者たちは人気のあるブランド、スポット、人物を追いかけることで自身の「品味」やアイデンティティを示し、特定の時空間のなかで、「小確幸」を得るのである。このような若者の心理を熟知するミルクティー店は、店内に写真撮影に適した照明や映えスポットを設けており、それによって消費者は写真を撮った後に画像を修正する時間を省くことができる（佚名 2018）。

筆者の深圳における調査では、廃墟となった工場と事務棟を改築したエリアが若者に人気のスポットとなっていることがわかった。そこでは多くのミルクティー店、カフェ、レストランなどが、元の工業的な空間に新たな要素を加えてリフォームを行うことで、特別な視覚世界を形成している。多くの若者がこの室内や屋外で写真を撮影することに魅せられており、ここは「チェックイン」スポットにもなっている。さらに若者の中にはスマートフォンの自撮りでは飽き足らず、撮影が得意な友人と一緒に訪れたり、プロの写真家に頼んで、解像度の高いカメラを用いて至る所で写真や「ショート動画（「短視頻」）」を撮影したりする人も多くいる⁴。写真を撮られるのが好きなのは大抵若い女性で、服装とメイクにもこだわりを見せる。一方、写真を撮るほうは基本的に若い男性である。筆者が写真を撮影する若者にインタビューしたところ、彼らが撮った写真は個人的なコレクションとして保存される

か、一定範囲のグループ内でシェアするのに用いられるといい、彼らが撮影時に追究するのは「美しさ」であることがわかった。

ミルクティーに甘さが必要であるのに対して、写真では「美しさ」が重要視されている。それでは、消費者はどのような写真やショート動画を美しいと感じるのだろうか。何組かの撮影者は、撮影した写真を自ら積極的に筆者に見せてくれた。これらの写真と若者が SNS やインターネットにアップロードしたがる写真やショート動画を合わせて分析すると、その画像にはいくつかの特徴が認められることがわかる。第一は、色調に対するこだわりである。全体的に見ると、トレンドの色調は二種類ある。一つは簡潔さと爽やかな印象を表現する、白やベージュを基調とした日本・韓国スタイルである。もう一つは優雅と落ち着きを醸し出すインディゴグレー系の欧米スタイルである。色調は撮影する際に完璧に表現することは難しいため、撮影後に専門的な方法で色彩を調整する必要がある。第二は、背景をぼかすことによって被写体の美しさを際立たせることである。被写体（ここでは、女性モデル、あるいは一杯のミルクティーのような対象物が含まれる）はできるだけ美しく撮る必要がある。若者たちの流行語で言うならば、写真は人物と事物の最高の「顔面偏差値（「顔値」）」を反映するものでなければならないからである。また、「高級」な写真とは写真の画質がよいことだけでなく、撮影に用いたカメラの機能が高いことをも意味する。多くの人々は意図的にファッションとインダストリアル・スタイルが融合したエリアのような特殊な地点を選んで写真を撮るが、実際には背景がぼかされるため、本物の背景を完全に再現する必要はない。また、写真のみならず「ショート動画」も非常に人気がある。後者の「美しさ」の基準は、前者の「美しさ」に流行の音楽を付け加えて、実際の環境音を消去するというものである。背景がぼかされた写真と同様、ショート動画もまた聴覚上の背景音、すなわち周囲の音を削除し、若者の消費者が認めた「美」の要素だけを残すものとなる。

前述したような交叉感覚やクロスモーダルといった概念における「共感覚」に注目する研究アプローチをとることで、筆者は、若者が好む視覚・聴覚の傾向と、同じく若者が好むミルクティーの味覚の傾向との間に

4 「短視頻」は、中国大陸で広く使われている用語で、数十秒から十数分までの短い動画を指す。

共通点があることを発見した。それは、甘さと自由の追求、ストレス解消、束の間だとしてもリラックスと癒しを得るといったことである。また、ミルクティーでは「甘さ」と「トッピング」が強調される一方で、ベースとなる「茶の」風味が徐々に薄まり曖昧な存在になっているように見えるが、これは写真や動画でぼかされる背景や消去可能な環境音になぞらえることができるだろう。

もちろん、何が良い甘味で、どのようなものが美しいのかといった基準に関しては、消費者内部では若者がよく話題にする「軽蔑の下降的連鎖」の基準があるので、一概に論ずることは難しい。例えば、写真では「糖水片^{vii}」という批判的な言葉が生まれている。これは「甘美」なだけで全体的に中身のない画像を指す。つまり、そのような写真は砂糖水のように甘くておいしいが、栄養素がほとんどないということを意味する。「糖水片」のような写真が好きな人々は、専門家からはまだ撮影の初級段階にあると見なされている(趙鋼 2023)。もう一つの例として茶の純度という点に目を向けると、ピュアティーを好む若者は自分たちの方が優れていると感じ、ハーブティー(実際には茶葉の成分は含まれていない)を飲む人々を軽蔑する。一方、ハーブティーを好む人々は各種トッピングを加えるタピオカミルクティーを飲む人々を見下すというように、若い消費者の間では「趣味」の界が形成されているのである。これらの界に影響を与える要因には、ブルデューが議論する「文化資本」や「経済資本」といった要素が含まれるはずだが、中国社会の特殊性を考えると、ブルデューが特に強調した「趣味」の界に影響を与える社会的階層の要素をそのまま対応させることは難しい(Bourdieu 1984: 113-142)。しかし、上流階級から下層階級に対する「軽蔑の連鎖」を打ち崩すような、もう一つの消費の「趣味」が存在する。それによって個人は複数の選択肢を同時に消費することを楽しみ、階層の高低に依らない新たな消費の「趣味」とアイデンティティを形成しているのである。それは、次章で詳しく述べる「雑食性」である。

IV 雑食性

社会学の分野において、「雑食性」(オムニボア、omnivore)という概念が初めて取り上げられたのは、アメリカの社会学者リチャード・A. ピーターソンとロジャー・M. カーンが20世紀のアメリカにおける新

たな消費の傾向を議論した際であった。二人は音楽の鑑賞を事例として議論する中で、調査対象者の音楽の好みは、ブルデューの議論したフランスの事例とは異なり、社会的階層による影響をそれほど強く受けていないことを明らかにした。二人が出した結論は、むしろ、社会的に高い階級の出身者ほど音楽の好みに「雑食性」が見られるというものだった。つまり、上流階級の出身者はクラシック音楽やロック、ポップスなど幅広いジャンルの音楽を聴く傾向にあるのに対し、より低い階級の出身者は元から好んでいた単一の「趣味」を保ちつづける傾向が強いことがわかったのである。ピーターソンとカーンは、この「雑食性」という概念をブルデューの「ディスタクシオン」(差異化、distinction)という概念と対比させ、社会階層の別が消費の「趣味」に対応するはずだという従来の「ディスタクシオン」の概念は、もはやアメリカ社会における新興の消費の「趣味」を説明するには不十分であると指摘した(Peterson and Kern 1996: 900-907)。とはいえ、ピーターソンとカーンやそれ以降の研究者による研究も多かれ少なかれ、「雑食性」の出現は「ディスタクシオン」の消失を意味するわけではなく、むしろ「雑食性」によって新たな形の「ディスタクシオン」が生み出されること、すなわち新しいアイデンティティが出現することを示唆している(Peterson and Kern 1996: 900-907; Warde 2007: 1-27; 朱迪 2017: 35-43)。その意味で、アラン・ウォードが指摘するように、「雑食性」は「ディスタクシオン」を再編成するための「新たな装い」(a new garb for distinction)であるとも言えよう(Warde 2015: 117-134)。

文化消費に関わる「品味」と社会的階層が共通の起源を持つと考えるか否かにかかわらず、ブルデューの言う「ディスタクシオン」とピーターソンとカーンが「雑食性」を論じる際に言及した「ディスタクシオン」とはいずれも明確な社会的階層を示しているのだが、この点に関しては必ずしも中国社会の文脈に当てはめることができるとは限らない。例えば、「中産階級」(「中産」)という言葉は中国では曖昧な意味を持つばかりか誤用されることもあり、西洋社会で定義される中産階級概念と完全に一致するものではないと指摘する研究者もいる(Goodman 2016: 1-13; Osburg 2013: 117-121)。また、中国の研究者である王寧は中国の若者の音楽消費について、社会と文化の両面で急速な変動が進行している中国のような国では社会がまさに「再編成」の途上にあり、世代間の文化の

継承にも断絶が生じていると述べる。さらに、その帰結として、同世代間における「水平的共有」の影響力が世代間の伝承を上回る場合が多いことを指摘している（王寧：2017：5-15）。

これらの事情に鑑み、本稿の事例でも、若者の消費に関わる「品味」を考える際に社会的階層を変数として取り扱うことは難しいと言えるだろう。「雑食性」を持つ若者は世代間および同世代間の影響を受けるほか、グローバルおよびローカルな「趣味」をも受容するからである。注目すべきは、筆者は深圳ではなく潮州での調査を通して、若者世代が見せる「雑食性」の傾向をより迅速かつ明確に観察することができたという点である。その背景には、深圳は都市として規模が大き過ぎるため、ピュアティーの消費がそれほど目立たないことがある。他方の潮州は規模の比較的小さな都市であり、工夫茶という大伝統を根強く残す一方で、外来のミルクティーやコーヒーの影響も受けている。だからと言って、筆者は深圳に「雑食性」の傾向の人が存在しないと主張しているわけではない。そうではなく、潮州ならではの特徴的な状況のために、より短期間のうちにそのような傾向を捉えることができるということである。さらに、「雑食」の性質を持つ人々が多様なものを消費しようとするのは、世界各地からの多様なものや情報に触れることができる環境があるからだと言えるだろう。国際性という観点から見ると、深圳のような大都市に暮らす若者はより豊かな国際感覚を持っていると考えられるが、だからと言ってそのために「雑食性」の傾向を強く持つとは限らない。ロバート・マートンが「コスモポリタン」と「ローカル」（cosmopolitan and local）を比較した際に指摘したように、国際的な経験が豊富な人が最も開放的であると一括りにすることはできないからである。例えば、そのような人々の中には、事物や友人を選ぶ際に激しく選り好みするという人もいる（Merton 1957: 451）。すなわち、国際性と「雑食性」は必ずしも正比例するわけではないのである⁵。

潮州では工夫茶が強い影響力を持つ。だからこそ、潮州の若者の「雑食」的な食生活を見ると、それが外来の国際色豊かなものから影響を受けた要素のほか、地元の伝統に由来する要素から構成されることは明ら

かである。他方、深圳の場合、このような地元の伝統という要素は相対的に欠けていると言ってよい。「雑食性」の傾向を持つ潮州出身の若者は、たとえ特定の年齢層にある時にはどれか一つだけを特に好むということがあったとしても、工夫茶・ミルクティー・コーヒーのいずれに対しても抵抗を示すことはない。工夫茶は幼い頃から慣れ親しんだものであり、家庭の年長者が茶を淹れる時には必ず呼ばれて喫茶の場と一緒に参加するよう促される。このような喫茶の場への参加は、しばしば多少の強制力が伴うと考えられている。このような場面において、茶を淹れる年長者は、サービスを提供するというよりも、ある種の命令を伝達するという意味合いを強く持つ。そのため、たとえ子どもが生まれつき苦味を好まず茶をさほど飲まなかったとしても、彼らは否応なしに少しずつ工夫茶の味と飲み方を習得していくことになる。インタビューで出会った30歳の男性が語るように、まさに「工夫茶は潮州人の骨髄にまで染み込んでいる」のである。

甘いミルクティーが外部から潮州に入ってきたとき、若者たち、特に25歳以下の人々はこの流行のドリンクを大いに歓迎し、それに対する興味を隠そうとはしなかった。潮州の街中にあるミルクティー店に並ぶ（15歳前後の）女子中学生たちは、家では工夫茶を飲むがそれは大人に飲まされているからであり、自分たちが本当に好きなのは甘いミルクティーなのだと言った。現在、潮州ではミルクティーの店がますます増えており、約200メートルの商店街だけでも大小合わせて20軒近くが立ち並ぶ。潮州の親たちは子どもたちが外でミルクティーを買っていることを知っているにもかかわらず、それは子どもたちの一時的な楽しみに過ぎないと考えていて特に心配などしてはいない様子である。なぜなら、家庭では工夫茶の伝統が受け継がれているからである。

一方で、潮州市内にはすでに約30軒のカフェがあり、その数はさらに増え続けている。カフェの利用者は25歳以上の者が多く、そのほとんどは大都市で生活したことがある人々である。彼らのコーヒーに対する依存は、ミルクティー愛好者のミルクティーに対する依存よりも強い。後者が一週間に一回あるいは「街に出た時に飲む」程度であるのに対し、前者は「一日

⁵ 国際性は個人に広い視野と多くの知識を持たせる。しかし「雑食」はその人がいくつかの内容あるいは形式が大きく異なる物事を同時に受け入れる能力を強調している。例えば、ある人は肉食と菜食の両方を食べ、クラシックやジャズだけでなくロックも聴き、ピュアティーだけでなくコーヒーやミルクティーも好きである、というように。

一杯は飲まない」と落ち着かない。少なくとも一日一杯は必要」だからである。つまり、大都市での国際的な経験が一部の潮州の若者にコーヒーを飲むという嗜好をもたらし、彼らがそれを地元を持ち帰ることで同世代の他の人々にも影響を与えている。とはいえ、彼らの多くは工夫茶を完全にやめたわけではない。29歳のとあるコーヒー好きな女性が語るように、「どちらも飲むし、どちらも大切」なのである。彼らは一日のうちの時間帯や状況に応じてコーヒーと工夫茶を飲み分けているだけである。また、30歳前後の若者の多くは、特に暑い夏にアイスミルクティーをよく購入すると話してくれた。

この事例を見る限り、「雑食性」は明確に数値化できる概念ではないが、「雑食」の「盛り合わせ」の内容に含まれるものの中にはやはり優先順位が存在すると思われる。ただし、「雑食性」と名付けるからには、それはある個人がいくつかの並列的な事物を拒否することなく、かつそれらを能動的に消費していることを意味するはずである。例えば、ある26歳の男性はインタビューの際、当初は毎日コーヒーのほうを多く飲んでいると話していたが、インタビューが進むにつれて、実際には量としては工夫茶のほうを多く飲んでいることが判明した。彼自身の分析によると、最初にコーヒーと答えたのは、コーヒーを飲むというのは毎日特定のカフェに行き意図的に行う行為であり、反対に工夫茶のほうは自宅の手の届く範囲内でごく自然に飲むものだからだという。その結果、コーヒーと工夫茶のどちらをよく飲むかと聞かれた時、消費の過程により多くの主体性が伴うコーヒーのほうが出たという。

もちろん、ミルクティーやコーヒーの愛飲者が工夫茶を飲むことを完全にやめたとは言えないが、彼らの中には伝統に対する抵抗感を持つ人も少なくない。前述の女子中学生が語るように、工夫茶は大人に無理強いされて飲むものである。また、ある30歳の若者は、都会で講座に参加してコーヒーの淹れ方を体系的に学び、その後は潮州に戻ってカフェで働いている。彼は、コーヒーは自由とモダンを象徴するものだと認識しているが、それに対して工夫茶には「古い雰囲気」や「人を束縛するような感覚」を見出しており、いずれは実

家の茶業を継ぐことになるにもかかわらず、外へと逃げ出してコーヒーを学ぶ道を選んだ。それでも日常生活の中では、時々ではあるものの工夫茶を飲むこともあるという。このように潮州において最も強い「雑食性」の「趣味」を示すのは、ミルクティー・コーヒー・工夫茶の3種類すべてを受容する30～40代の年齢層の人々である。一方で、現在の40歳以上の人々では「偏食的」(ユニボア、univore)な傾向が多く見られる。彼らは工夫茶だけを飲み続け、ミルクティーやコーヒー、その他の添加物を含むドリンクを拒絶している。

このほか、深圳の事例と比較して潮州の事例を際立たせているもう一つの興味深い点は、潮州の若者たちが「今のところミルクティーやコーヒーを多く飲んでいるものの、年齢を重ねるにつれて将来的には工夫茶を飲むようになるだろう」と自ら語ることである。この現象は、一種の伝統への回帰と言えよう。ある30歳未満の女性は筆者に対して、「私より年上の人たちも皆同じように過ごしてきた。若い頃はミルクティーや冷たいドリンクを飲むが、年齢が上がるにつれて工夫茶を飲むようになるのだ」と説明してくれた。無論、現在の「雑食」者がこの「雑食」のスタイルを一生維持するかどうか、あるいは他の変化が起こるのかについては、今後も調査を継続する必要があるだろう⁶。一方、深圳の事例ではこのような将来への言及や伝統への回帰の予測についての語りが出ていない。深圳には根強いローカル文化がないことに加え、仕事の流動性や手の届かない住宅価格といった要因が相まって、多くの若者がこの先もこの都市に留まりつづけるのか、それとも他のところに移るのかを予測することすらできないと感じているからである。

V 流行の中の伝統

本章では、年齢の差によるピュアティーの消費の「趣味」の差異について検討する。潮州では多くの若者が茶を飲んでいるが、彼らの茶の飲み方には上の世代とは異なる「趣味」が見られる。つまり、若者が好む伝統と上の世代が言う伝統は完全には一致していないのである。二つの側面から例を挙げれば、一つは好まれる茶の種類が異なること、もう一つは淹れ方や飲み方

⁶ 本研究では、主に世代別分析の視点を用い、異なる世代間で見られる差違に焦点を当てている。しかし、人生の各段階において同世代間でどのように消費行動の変化が起こり得るのかを探るために、今後の研究ではライフサイクルの視点を取り入れる必要があるだろう。

が異なることである。

工夫茶とは茶の淹れ方と飲み方の一つの種類であり、特定の茶の種類を指す言葉ではない。潮州では、工夫茶の方法で飲まれる茶の種類多くは「単叢茶」である。「単叢茶」の有名な産地は潮州市内から約40キロ離れた場所に位置する鳳凰山であり、半発酵させたウーロン茶の一種である。調査中、この地域の若者にどのような「単叢茶」が好きか尋ねたところ、最も多かった回答は「清香型」というものであった。市場では一般的に香りによって「単叢茶」を分類するが、ごく簡単な分類としては「清香型」と「濃香型」の2種類がある。これをより細かく分類するならば、「蜜蘭香」・「芝蘭香」・「玉蘭香」・「桂花香」などがある。その中でも「鴨屎香」^{vii}と呼ばれる単叢茶は、その奇妙な名前と強い香りで近年、外部の人に最も知られるようになったものである。筆者は潮州の街で多くの店が「話題の単叢茶」を売のを目にしたが、そのほとんどがこの清香型の鴨屎香であった。

どのような香りが生成されるかには茶樹の品種が深く関係するほか、生産と加工の方法も影響している。福建や台湾の各種の半発酵茶と同様に、「単叢茶」の風味や香りを左右するのは製茶工程の中でも発酵と焙煎という二つプロセスである。同じ茶葉でも、発酵と焙煎の度合いが異なれば最終的な風味と香りには違いが現れる。すなわち、同じ種類、同じ産地の茶葉であっても、製造方法によって最終的な香りが「清香」になるのか「濃香」になるのか、華やかなものになるのか奥深いものになるのか、短時間で消えるのか長持ちするのかといった結果が変わってくるのである。「清香型」の「単叢茶」は香りが立ちやすく、発酵と焙煎の程度が低めで茶湯は淡い黄色になる。一方、「濃香型」は発酵と焙煎の程度が高く、香りが控えめで、茶湯は金色あるいは深い赤褐色になる。また、筆者は鳳凰山の茶葉の製造者に対するインタビューを通じて、特に焙煎が茶を淹れた後の茶湯の風味と香りを形成する上で重要な役割を果たしていることを知った。総じて言えば、焙煎は諸刃の剣のようなもので、十分な焙煎時間と巧妙な加減で行われれば茶湯の口当たりと安定性を高めることができるが、一方で焙煎が強すぎたり長すぎたりすると茶の香りが抑制される場合がある。よい焙煎は、茶湯の口当たりを高めるだけでなく香りもできる限り維持するように働くものであるが、両方を同時に兼ね備えることは難題となる。年長者や長年茶を愛好してきた人々は茶湯の口当たりをより重視する

ため、香りを犠牲にしても濃い味わい、すなわち「濃香型」を好む傾向にある。一方、香りが引き立つ「清香型」の単叢茶はしばしば、白湯の口当たりが十分に重厚でないと見なされる。そのような茶は、茶に詳しい玄人の客からは、身体に優しくなく、茶の性質も不安定で、長期保存にも向かないと見なされるのである。

それでは、若者はなぜ「清香型」を好むのだろうか。若者の好みは「清香型」の茶を生み出すことになったのだろうか。それとも市場と時代が若者に「清香型」を好ませるに至ったのだろうか。メアリー・ダグラスの言葉を借りれば、両者は相互に作用し合っているとと言えるだろう (Douglas 1970: 72-91)。まず、潮州における「単叢茶」が清香化した背景に外部からの影響があったことは疑いない。余舜徳は「清香風味」誕生の歴史を研究し、1970年代と1980年代に台湾のウーロン茶が輸出から国内販売へと転じる過程を辿り、その中で農政当局の主導の下、ウーロン茶の風味には人為的に計画・デザインされた変化が生じたことを明らかにした。その過程において、多くの茶葉の産地では、伝統的な重発酵・重焙煎のウーロン茶が軽発酵・軽焙煎のタイプに取って代われ、「高山茶」を代表とする「清香型」のウーロン茶が誕生したという (Yu 2019: 123-158)。この傾向は1990年代以降、中国福建省の安溪などにも影響を及ぼし、清香化された鉄観音が登場した (Tan and Ding 2010: 121-144)。潮州の「単叢茶」の製法は長い間にわたって福建省の影響を受けてきた。その清香化が台湾から直接もたらされたのか、福建省を経由してもたらされたのかを断定することはできないが、現在地元の人々が伝統的な「濃香型」と現代的な「清香型」を区別していることから察するに、それが台湾産ウーロン茶の「清香化」と密接な関係があることだけは確かである。茶業に携わる潮州の地元の人も単叢茶の製法について、1990年代に「重做青」から「軽做青」、つまり重発酵から軽発酵へと変化したと記録している (葉漢鐘 2009: 14)。

次に、若者が年長者と比べて「清香型」を好む理由は、その生理的および社会的特徴から説明できるだろう。関連する先行研究では、若者の感覚はより敏感で、特に香りに対する感受性が高いことが論証されている。年齢を重ねるにつれ人間の味覚や嗅覚は低下していくが、なかでも嗅覚の衰えはより顕著である。そのため、香りに対する感度は弱まる傾向にあり、求める香りも変化する (Tepper and Genillard-Stoerr 1991: 244-246)。また、「清香型」の茶葉は発酵や焙煎が軽

めであるため胃腸の弱い高齢者はそれを受け入れがたく感じるが、盛年期にある若者は、軽発酵で軽焙煎の茶のほうを受け入れやすく感じるが多い。さらには、ミルクティーを好む人々と同様、若ければ若いほど甘さによる悪影響を心配することも少ない。加えて、発酵と焙煎が軽めの茶葉は価格が比較的低いため、経済的に余裕のない若者でも手頃な価格で楽しむことができる。さらに、筆者は若者の言葉から、「濃香型」の茶は上の世代が好むものであり、不変の伝統、一種の古い風味と雰囲気象徴するものと見なされていることに気づいた。つまり、若者は反抗心から、(たとえその心理が軽いものであったとしても)上の世代とは異なる「趣味」を求めようになるのである。

工夫茶の作法において、若い世代と上の世代が関わっているものは同じではない。潮州の工夫茶は、火を起こしてお湯を沸かすことに始まり、小さな急須で茶を淹れ、「関公巡城」「韓信点兵」といった方法で茶湯を小さな茶碗に均等に注ぐに至るまで、その入念な過程と使用する器具の細部にこだわることで知られている。電気ケトルの発明によりお湯を沸かす作業は簡略化されたが、淹れ方や飲み方に関しては依然として細やかさが追求されている。潮州の工夫茶は2000年代初頭に中国の無形文化遺産の一つに認定され(中国国務院 2008)、2022年には中国のほかの多様な茶に関連する慣習とともにユネスコの無形文化遺産リストに登録された(UNESCO 2022)。現在の潮州で見られる工夫茶には、庶民の日常の暮らしに密着したものと、茶道や茶芸の実演という二つの形がある(d'Abbs 2019: 213-231; 肖坤冰・李経來 2020: 223-266)。前者は実用的かつカジュアルなもので、器具も茶の淹れ方もシンプルなため、潮州の人々の日常生活に溶け込んでいる。後者は無形文化遺産の演出や茶芸の講座、競技会といった特別な場面で見られるが、伝統の復興や文化遺産の保護を提唱する現代中国社会の風潮の下で、過度に複雑化、洗練化する傾向を示している。

潮州の若者たちの工夫茶の飲み方は、日常生活、文化遺産をめぐる言説、トレンドなど、様々なものによる影響を複雑な形で受けているため、現時点では若者が好む工夫茶のスタイルを明確に定義するのは困難である。専門的な茶芸教室に通って茶道を学んだことが

あるかどうかによって、淹れる人と飲む人の工夫茶に対する嗜好は異なり得る。また、地元の多くの若者は無形文化遺産の発展という時流に乗り、工夫茶やほかの地域のフォーククラフトといったものを起業の契機と捉え、新たなSNSや技術プラットフォームを活用してビジネスを展開し、自身のブランドの持つ影響力を高めようとしている。

まとめよう。再びクロスモーダルという観点に立ち戻り見てみると、筆者の観察したところでは(すべてではないとしても)多くの現地の若者が崇拜する工夫茶には、味覚よりも視覚のほうに心を砕いて作られるという傾向があると言える。この視覚的な要素を優先する「趣味」の傾向は、無形文化遺産としての工夫茶の演出と多くの共通点を持っている。上の世代、特に年配の人々の日常生活においては、工夫茶は何よりも飲むためのものであり、湯の温度は熱く、茶の味は濃くなければならない。工夫茶の淹れ方は、仲間たちとの会話を楽しみながら絶え間なく淹れ直し、注ぎ足し、分かち合うというものであり、茶の味が薄くなるとすぐに新しい茶葉に取り替えられる。つまりそれは、人間関係が希薄にならないようにすることと同じなのである。しかし、若者化された工夫茶において茶の風味は二の次で、茶葉はSNS映えする「清香型」で十分であるのに対して、工夫茶に用いる器具の美しさが最も重視される。若者にとっては、テーブルの上に置かれた茶器の配置や組み合わせの美しさを写真に収め、SNSに投稿できることが何よりも重要だからである。また、若者が「美しい」と感じる茶器は、潮州の赤土を用いて手作りされた旧式の急須やシンプルで小さな陶磁器の茶碗などではなく、伝統のスタイルを元に新たなデザインを加えたものである⁷。また、現地の若者は自宅や職場で茶を飲むだけでなく、仲間同士で新しく開業した公共の茶館に集まって飲むなど、斬新でおしゃれな環境を求めている。これらの公共の茶館では年配の客の姿はほとんど見られない。この点において、若者向けの工夫茶とミルクティーには、基本となる茶の風味は二の次で「トッピング」がより重視されるというトレンドを追求する共通の傾向が見られる。ただし、工夫茶の消費は潮州の根強いローカル文化と文化遺産の言説に強く影響されるため、若者が流行を追求

⁷ これらの新しい工夫茶の形式は、現在の中国の茶文化ブームと、過去二、三十年の間に台湾の茶芸がもたらした影響を反映している。台湾茶芸の影響という文脈については、ほかの著者がすでに数多くの論文で取り上げているため、ここでは詳述しない。例として、ユ・シュン・ダの“Sense-making in Taiwan's Tea Art Ritual” (Yu 2022: 229-235)を参照されたい。

する実践は伝統の文脈で行われていると言える。

深圳では茶をそのまま飲む文化が潮州ほど顕著ではない。工夫茶のスタイル茶を飲むことも一般的でないと言えるが、若者がよく訪れる「清茶館」では工夫茶と似た方向性の「趣味」が見られる。茶館の内装は、前述したような若者が好むベージュや白などの色調でシンプルかつ爽やかな視覚的イメージを作り出している。筆者はある商業ビル内の「清茶館」で数人の若者と出会ったが、そのうちの一人は、茶を飲むのは好きだが「骨董品を並べたような古風な茶館で茶を飲むのは受け入れられない」と語ってくれた。潮州や深圳に新たに登場している新式の茶館は、若者主導でデザインされ、運営されている。現代の新たなメディアとテクノロジーの浸透により、このような若者の「品味」は中国各地で同時多発的に展開され、どれも類似した特徴を呈している。

VI 結論

本稿では、深圳と潮州におけるミルクティーと工夫茶の消費に関する調査研究に基づき、現代中国の都市部の若者の感覚および社会消費に見られる「品味」について考察した。全体的には、若者の感覚と社会消費に関わる「品味」は、日常生活、文化遺産の言説、流行、ローカルとグローバルといった多方面からの影響を同時に受けていると言える。こうした「品味」からは、若者の様々な生理的・心理的な欲求と、彼らが社会や文化との間で相互に呼応している様をうかがうことができる。ミルクティーの「甘味」や SNS 映えする「美しさ」には、若者が癒しを求めたり、ストレスを解消したり、自己表現をしたりするといった欲求が込められている。このような「小さいけれど確かな幸せ」という刹那的な自己満足は、若者の将来に対する不明瞭な感覚を反映したものである。本稿では多元感覚やクロスモーダルといった視点に立ち、味覚と視覚の関連性と対照性に限定する形で考察を進めてきたが、今後はその他のさらに多くの感覚をも研究に取り入れる必要があるだろう。おそらく、聴覚や触覚などからも、若者たちが将来に対して抱いている不確実な感覚を見出すことが可能だと考えられる。

深圳と潮州という二つのフィールドを比較すると、伝統的かつローカルな文化が目立たない深圳では、こうした不確実性がより顕著に観察される。一方、根強い伝統文化を残す潮州では、工夫茶をはじめとする伝統への回帰という若者の思いが表われやすい。このことは、若者たちが「雑食性」の傾向を見せつつ伝統的な工夫茶を拒否しないということからも見て取れる。両地域とも、人付き合いと集団のあり方が個人の消費の嗜好に大きな影響を与えている。ただし、ミルクティーの消費では同世代からの、工夫茶の消費では年長者や家庭からの影響が大きいというように差異が見られる。本研究では、30歳から40歳の若者が最も強い「雑食性」を示していることもわかった。ローカルとグローバルの間を行き来する経験が彼らの消費に見られる「品味」の形成に影響を与えているのである。潮州ではこの年齢層の若者の多くは、なかでも工夫茶とコーヒーについて「どちらも重要だ」と答えた。近い将来、彼らの消費はどのようなものになるだろうか。「雑食性」の傾向が維持されるのだろうか、それとも「雑食」の内容の割合が変わるのだろうか。あるいは人々は「偏食」に転じるのだろうか。消費の「品味」の変化と社会や文化の変化の間にあるダイナミクスを考察するためには、これらを継続的に注視していく必要があるだろう。

本稿はまた、現在の若者「伝統」に対して見せる複雑な態度や行動をも明らかにした。若者は確かに、多くの面で旧式のものとも共鳴できず、それらに反抗する側面を持っているが、だからと言って流行のみに心を奪われ伝統から遠ざかっているわけでもない⁸。無形文化遺産に関する言説の登場と新たなメディアの力によって、彼らは起業する道や独自のスタイルを表現する機会を見出すことができている。しかし、若者が評価し楽しむ伝統は、年配の世代の「趣味」とは異なっている。彼らは旧式の伝統に回帰するというよりもむしろ、新たな時代のトレンドを伴った伝統を創り出しているのだと言える。

そのような意味で、若者の伝統に対する反抗は軽度なものである。反抗は若者に生まれつき備わった性分であると言えるが、ロバート・L. ムーアが1990年代における中国の若者の「酷（クール）」文化を分析し

⁸ 21世紀初頭の先行研究によると、当時の若者の趣味による出来上がったコミュニティ（1990年代以降生まれの若者）では伝統との関係性が消失しつつあるとされている。これについては、ジン・ワンの *Bourgeois Bohemians in China* (Wang 2008: 204) を参照されたい。

た際に指摘したように、それは「穏やかな反抗」(mildly rebellious)とも呼ぶべきものである。なぜなら、若者は伝統からすっかり遠ざかってしまったのではないからである (Moore 2005: 357-376)。潮州の若者にとっては、工夫茶の伝統は自然に「骨の髄まで染み込んだ」ものであるため、伝統に完全に反抗するよりも伝統の慣習を保持しつつ「雑食」するぐらいのほうがよいということだろう。すなわち、「雑食性」も穏やかな反抗の一種の方法と見なすことができるのである。これは、「雑食性」もまた新たな「品味」のディスタクシオンを形成する方法の一つとなり得るという前述の論を裏付けるものである。

さて、いくつかの論点については、筆者は本稿で十分に掘り下げることができなかった。本稿で議論した「甘味」や「背景をぼかす」、「清香」といったものは、現代中国の都市部の若者が有する多くの「趣味」の中の典型的な特徴に過ぎず、若者の「趣味」の全体像を代表するものではない。また本稿では、グローバルな若者文化 (global youth) が生まれる歴史的な文脈や、世界各地の若者文化の間で見られる相互の影響、あるいは東アジアにおける若者文化の融合といった問題については議論が及んでいない。インターネットが発達した現代において、こうした異なる地域・国家・文化圏の若者の間で相互に作用し合う影響力は、非常に大きなものとなっているはずである。ほかにも、本稿ではジェンダーによる消費の選択の差異について簡単に触れはしたものの、ジェンダーの観点からの詳細な分析はできていない。これらは、今後の課題としたい。

謝辞

本研究は、蔣経国国際学術交流基金会のプロジェクト“*What is Chadao, or ‘The Way of Tea’, in Contemporary China and Beyond*”と中国南方科技大学の科研支援費 (プロジェクト番号 Y01356203) の助成を受けた成果である。研究調査および本稿の執筆に当たっては、林峰、黄寰、石中堅、石恩宇、周培柔、謝鴻洲、林曉勝、鄭丹蓉、王超、謝潔怡、張家林、馮宇、鄧伯超、陳柏麒、陳堅杭、陳惠雲、崔穎、劉麗淳、賴思含、雷兩生、程龍泉 (敬称略) といった方々がデータ収集および情報の検索に力を貸して下さった。心より深く感謝の意を申し上げる。

訳注

- i 本稿は、「年輕之味：從潮州和深圳看中國都市年輕世代的感官及社會消費品味」『中國飲食文化』20(1)(2024: 7-38)を筆者および『中國飲食文化』の編集委員会より了承を得て、日本語に翻訳したものである。

- ii ここでも説明されるとおり、中国語における「品味」とは、「味わう、賞味する、味をきく」という意味と、「センス」という意味を持ち合わせた語である。また、はじめにでも示されるように、筆者は本稿においてピエール・ブルデューの“*taste*”(日本語では多く、「趣味」と訳される)という概念を援用する形で「品味」という語を用いている。さらに、原文では文脈に応じて「品味」と「趣味」という語が併用されている。これらの状況に鑑みて、翻訳論文である本稿では、「品味」と「趣味」という語についてはあえて日本語に訳すことはせず、「」を付して原文の表現をそのまま用いることとする。
- iii 一線都市 (一級都市とも) および三線都市 (三級都市とも)、四線都市 (四級都市とも) とは、中国で都市のランクを示す用語である。ビジネス情報を発信する「第一財經」が毎年発表するもので、一般に、魅力度の高い都市から順に一線、新一線、二線から五線まで六つのレベルに分けられる。
- iv 単叢茶とは、潮州市内の鳳凰連山で作られる烏龍茶の総称である。
- v 蒸して潰したタロイモと、サツマイモ粉などのデンプンを混ぜて丸く成形し、茹でたものを指す。
- vi カメの腹甲やドブクリョウなどの生薬から作られる薬膳の性格を持つデザート。日本では「亀ゼリー」の名でも知られる。
- vii 「糖水片」の「片」とは、中国語で写真を意味する「照片」に由来するものである。
- viii 直訳すると、「アヒルの糞の香り」となる。

参考文献

(中国語文献)

戴 彼得 (Peter d'Abbs)

- 2023 「茶、文化、実践：中国文化対澳大利亜布里斯班当代茶飲的影響」『文化遺産』侯瑩坤 (訳)、2: 109-113。

王 寧

- 2017 「音楽消費趣味的横向分享型擴散機制：基於85後大學(畢業)生的外國流行音樂消費的質性研究」『山東社會科學』10: 5-15。

朱 迪

- 2017 「高雅品味還是雜食？：特大城市居民文化區分實證研究」『山東社會科學』10: 35-43。

西 敏司 (Sidney Mintz)

- 2010 『甜與權力：糖在近代歷史上的地位』王超・朱健剛 (訳)、商務印書館 (Sidney Mintz 1986 *Sweetness and Power: The Place of Sugar in Modern History*. Penguin Books.)。

余 舜德 (編)

- 2008 『體物入微：物與身體感的研究』國立清華大學出版社。
- 2015 『身體感的轉向』國立臺灣大學出版中心。

- 肖 坤冰·李 經來
2020 「從技到藝：潮州工夫茶的現代性」『中華飲食文化』16(2): 223–66。
- 張 靜紅
2021 「茶氣和茶韻：中國式的「味感」表述」『文化遺產』6: 98–106。
- 曾 楚楠·葉 漢鐘（編著）
2011 『潮州工夫茶話』暨南大學出版社。
- 葉 漢鐘·黃 柏梓（編著）
2009 『鳳凰單叢』上海文化出版社。
- （英語文獻）
- Bourdieu, Pierre
1984 *Distinction: A Social Critique of the Judgement of Taste*, translated by Richard Nice. London: Routledge & Kegan Paul.
- Classen, Constance.
1997 Foundations for An Anthropology of the Senses. *International Social Science Journal* 49: 401–412.
- Craig, David, Jian Lin and Stuart Cunningham.
2021 *Wanghong as Social Media Entertainment in China*. Switzerland: Palgrave Macmillan
- d’Abbs, Peter.
2019 Tea Art as Everyday Practice: *Gongfu* Tea in Chaoshan, Guangdong, today. *The Asia Pacific Journal of Anthropology* 20: 213–231. DOI: 10.1080/14442213.019.1611908.
- Douglas, Mary
1996 *Natural Symbols: Explorations in Cosmology*. New York and London: Routledge.
- Fishman, Robert M. and Omar Lizardo
2013 How Macro-Historical Change Shapes Cultural Taste: Legacies of Democratization in Spain and Portugal. *American Sociological Review* 78: 213–239.
- Goodman, David S. G
2014 *Class in Contemporary China*. Cambridge: Polity.
2015 Locating China’s Middle Classes: Social Intermediaries and the Party-state. *Journal of Contemporary China* 25.97: 1–13.
- Howes, David
2003 *Sensual Relations: Engaging the Senses in Culture and Social Theory*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press.
2005 *Empire of the Senses: The Sensual Culture Reader*. Oxford and New York: Berg.
2016 Preface: Accounting for Taste. In *The Invention of Taste: A Cultural Account of Desire, Delight and Disgust in Fashion, Food and Art*, Luca Vercelloni (ed.), pp. vii–xiv. London and New York: Bloomsbury.
2019 Multisensory Anthropology. *Annual Review of Anthropology* 48: 17–28.
- Howes, David and Marc Lalonde
1991 The History of Sensibilities of the Standard of Taste in Mid-eighteenth Century England and the Circulation of Smells in Post-revolutionary France. *Dialectical Anthropology* 16: 125–135.
- Kuipers, Joel C
1991 Matters of Taste in Weyewa. In *The Varieties of Sensory Experience: A Sourcebook in the Anthropology of the Senses*, David Howes (ed.), pp. 111–127. Toronto, Buffalo and London: University of Toronto Press.
- Kuriyama, Shigehisa
1997 The historical origins of katakori. *Japan Review* 9: 127–149.
- Merton, Robert
1968 *Social Theory and Social Structure*. London and New York: The Free Press.
- Moore, Robert L
2005 Individualism and China’s Millennial Youth. *Ethnology* 44: 357–376.
- Osburg, John
2013 *Anxious Wealth: Money and Morality Among China’s New Rich*. Chicago, IL: Stanford University Press.
- Peterson, Richard A. and Roger M. Kern
1996 Changing Highbrow Taste: From Snob to Omnivore. *American Sociological Review* 61: 900–907. DOI: <https://doi.org/10.2307/2096460>
- Rimmer, Mark
2012 Beyond Omnivores and Univores: The Promise of a Concept of Musical Habitus. *Cultural Sociology* 6: 299–318. DOI: <https://doi.org/10.1177/1749975511401278>
- Tan, Chee-beng and Yu-lin Ding
2010 The Promotion of Tea in South China: Re-Inventing Tradition in an Old Industry. *Food and Foodways* 18: 121–144.
- Tepper, Beverly J. and Agnes Genillard-Stoerr
1991 Chemosensory Changes with Aging. *Trends in Food Science & Technology* 2: 244–246.
- Vercelloni, Luca
2016 *The Invention of Taste: A Cultural Account of Desire, Delight, and Disgust in Fashion, Food and Art*, translated by Kate Singleton. London and New York: Bloomsbury Academic.
- Warde, Alan
2007 Does Taste Still Serve Power? The Fate of Distinction in Britain. *Sociologica* 3: 1–27. DOI: 10.2383/25945.
2015 The Sociology of Consumption: Its Recent Development. *Annual Review of Sociology* 41: 117–134.
- Wang, Jing
2008 *Brand New China*. Cambridge MA: Harvard University Press.

Yu, Shuenn-Der

2019 Qingxiang: A Taste Changing the Landscape of Taiwan's High Mountains. *Journal of Chinese Dietary Culture* 15: 123–158.

2022 Sense-making in Taiwan's Tea Art Ritual. *Asian Journal of Social Science* 50: 229–235.

Zhang, Jinghong

2017 Tasting Tea and Filming Tea: The Engaged Sensory Experience of the Filmmaker. *Visual Anthropology Review* 33: 142–152. DOI: 10.1111/var.12132

(インターネット記事)

中國國務院

2008 「國務院關於公布第二批國家級非物質文化遺產名錄和第一批國家級非物質文化遺產擴展項目名錄的通知」。http://www.gov.cn/zwgk/200806/14/content_1016331.htm、引用日：2023/10/25。

佚名

2018 「Talk Her 奈雪的茶創始人彭心：一次相親邂逅顛覆了整個茶飲業」《TOP HER》、6月2日。http://topherglobal.com/?p=5896、引用日：2023/10/09。

活字文化編輯部

2020 「【青年調頻】我喝的是奶茶嗎？我喝的是甜蜜與自由」《聽喜瑪拉雅》、9月5日。https://www.ximalaya.com/sound/333832782、引用日：2023/10/25。

趙 鋼

2023 「論「糖水片」【趙鋼講攝影】」Bilibili、2月9日。https://www.bilibili.com/video/BV1ud4y1J7kP/?spm_id_from=333.337.search-card.all.click、引用日：2023/10/28。

熱力雪

2023 「流行「奶茶加料」？小料對茶飲品牌都有哪些重要的作用？」。搜狐網、1月30日。https://www.sohu.com/a/635504856_121246005、引用日：2023/10/25。

UNESCO

2022 “Traditional tea processing techniques and associated social practices in China.” https://ich.unesco.org/en/RL/traditional-tea-processing-techniques-and-associated-social-practices-in-china-01884, accessed 2023/10/25.

Taste of Young:

Sensorial and Social Consumption of the Chinese Youth

ZHANG Jinghong*

Taste has been popularly explored in two directions, one as a gustatory sensation, and the other as an aesthetic standard and a symbolic social marker. Less has been said about the preferences of taste in terms of differences in age. This paper explores the correlation between young people's preferences in gustatory sensation and the social realities they are confronting in contemporary China. Research is based on ethnographic fieldwork in two southern Chinese cities: Shenzhen, one of the first-tier.

Cities in China that promotes fast-speed work and life, and Chaozhou, a third or fourth-tier city that is well-known for its slower life pace and traditional culture. Drawing on case studies about youth consumption in milk bubble tea, coffee and pure tea, I ask why a certain kind of taste is claimed to belong to the younger generation, and how young people interpret their consumption choices. Inspired by Mary Douglas' concepts of "physical body" versus "social body", I aim to find out the embedded.

Social meanings behind the taste among the young, in particular the Chinese young generation's concern with health, lifestyle, happiness, and worries.

Keywords

taste, milk tea, gongfu tea, senses, youth, Shenzhen and Chaozhou

* Southern University of Science and Technology

清末民国初における普洱茶生産について

西川 和孝*

清末民国初、雲南では海関の設置や交通通信インフラの整備が進み、世界経済との結びつきが強化され、海外との自由貿易が促進された。このような状況の中で、普洱茶の栽培地域は六大茶山から雲南西南地域一帯にまで急速な広がりを見せる。本論文では、当該時期に生じた普洱茶の生産と消費の拡大に焦点を当て、その要因を考察する。

そこで、普洱茶栽培の発展に貢献した政府関係者の史料をもとに、拡大した栽培地域と生産量から説き起こし、消費市場およびその消費量を明らかにしたうえで、この背景にある両地域を結ぶ物流の変革と茶の品質向上の実態解明を図る。

本稿の分析を通じて、①世界経済との一体化のもと拡大する市場に対し、近代的な交通機関の導入により物流の迅速化と輸送コストの削減が実現され、生産地と消費地の時間的・経済的距離が短縮されることで、規則的な輸送が可能となり、大量消費を支えたこと、②市場のニーズに応えるために、清代半ばから培われてきた栽培加工技術が各地域に移転され、高品質な普洱茶の生産に注力することで、茶の需要がより一層喚起されたことを指摘する。

最後に、英領インド帝国経由でチベットに輸出された普洱茶の事例を踏まえ、当時の雲南省が世界経済に組み込まれていく過程について、滇越鉄道を介した香港を中心とした枠組みだけでなく、雲南の西側との経済的結びつきをも視野に入れる必要があることを強調する。

キーワード

普洱茶、物流、技術移転

目次

I はじめに	1 消費地拡大と消費量増加について
II 普洱茶の概要	2 消費地と生産地をつなぐ物流
1 普洱茶とは？	V 普洱茶の品質の向上と技術移転
2 明清期の普洱茶生産	1 猛海における加工技術移転
III 清末民国初における普洱茶生産について	2 元江における栽培加工技術移転
1 新たな栽培地域	3 大理における加工技術移転
2 年間生産量の増加	VI おわりに
IV 普洱茶消費の伸長と物流の変革	

* 明治大学

I はじめに

現在、観光業が盛んな雲南省は、一見すれば、地理的に内陸の奥深くに鎮座し、孤立した世界というイメージを抱かせる。しかし、雲南省の歴史を紐解いていくと、古来より外界とつながりを持ち、経済を通じて周辺地域に重要な影響を与えてきたことが明らかになる。特に、明清交代期の呉氏統治時代に始まり¹、清代中期以降には銅銭の鑄造に必要な原料供給地として銅山の開発が進められ、雲南と全国各地を結ぶ銅の輸送ルートが整備され、清朝の貨幣政策を支える経済基盤となっていた（西川 2015: 137-150）。

清末民国初になると、世界市場との結びつきが強まっていく。錫などの豊かな鉱山資源が眠る雲南省に対して、西方からは1886年にビルマを英領インド帝国に併合したイギリスが、南方からは1887年にトンキンを植民地化したフランスが、それぞれ雲南省の経済的権益を狙い、激しい角逐を繰り広げることとなる。まず、1887年に清朝との間で「統議界務・商務専条」の締結を通じ、蒙自に海関設置を約束させたフランスは、1895年の「統議界務・商務専条附章」によって思茅にも海関を開くことを認めさせた。ついで、トンキン雲南間の鉄道敷設権や雲南省内の鉱山採掘権を獲得し、清朝に対して輸入税3割、輸出税4割それぞれ関税の引き下げを承諾させた。一方、イギリスは、1897年の「滇緬界務・商務統議附款」によって騰越および思茅に領事の設置を受け入れさせる。国際貿易を管理する海関が、上記のような経過を経て1889年に仏領インドシナ連邦に隣接する蒙自県に、1897年に普洱茶の集散地である思茅庁に、そして、1900年に英領インド帝国の一部となっていたビルマに通じる滇西地区の交通の要衝である騰越庁に設置され、それぞれ貿易都市として開放されることとなった（栗原 1991；石島 2004: 19-20）。これら海関設置に先立ち、1885年に雲貴総督岑毓英による電信建設の提議を契機として、1911年までに商業利用も見据えた電信工事が進められた。これにより、雲南省は国内のみならず、仏領インドシナ連邦との間でも電線が接続され、情報伝達の速度が飛躍的に向上した（白鳥 2022）。加えて、1910年には安価でスピーディな長距離大量輸送を可能にする昆明とハノイを結ぶ滇越鉄道

がフランスによって敷設されたことで、雲南省と外界を結ぶ通信および交通インフラの整備が進展した（篠永 1992；久保 2019: 38-41）。

また、こうした変化は、近代的な金融システムの構築にも及んだ。海関が置かれた蒙自に1912年に富滇銀行が、1914年にインドシナ銀行が相継いで支店を開設したことで、安定的な取引を支える役割を果たした。とりわけ豊富な資金力を誇るインドシナ銀行は、仏領インドシナ連邦植民地の中央銀行としてアジアに多くの支店を有しており、大型の融資が可能となったことで、金融面でも規模の小さい事業主がビジネスを展開するうえで環境が整いつつあった（権上 1985: 159-170）。

さらに、19世紀末から20世紀の初頭にかけて、インド・日本・中国・東南アジアを中心とするアジアは、欧米から導入した交通・通信・金融などのインフラを基盤として、綿業を機軸とする国際分業体制を発展させ、欧米向け輸出に依存しながら、域内でもその需要を急激に拡大させた。そして、広大なネットワークを持つインド人や中国人の商人が、アジア間貿易を地域レベルで支え、アジア域内の貿易額は欧米間のそれに肩を並べるほどに成長した（杉原 1985）。

アジア域内の貿易が世界市場において存在感を高めつつある中、雲南省では各種インフラ条件が整うことで、ヨーロッパ諸国の進出による自由貿易がスムーズに促されることとなり、交易品の大量買いつけによって国内を上回る需要をもたらした。雲南の社会経済に地殻変動を引き起こすこととなった。さらに、これにともなう鉄道敷設や自動車道路の整備は、物資の流通量の増加をより一層後押しした（増田・加藤・小島 2008: 55-80）。

19世紀末から欧米列強の影響が広がる変革の時代において、多様な天然資源を誇る雲南省は、アヘン・錫・普洱茶などの主要な輸出品を通して、世界市場と経済的結びつきを強めていく。雲南省の広い地域で栽培されたアヘンは、海外に比べて安価でかつ高品質という特徴を備えており、19世紀後半期より仏領インドシナ連邦経由で海外市場に向けて盛んに輸出され、清末民国初にアヘン禁止の国際的機運が高まって以降も、密輸出によって雲南経済を下支えした（秦 1998: 60-91；西川 2017・2021）。また、民国期雲南におけ

¹ 呉氏統治時代に、雲南で鑄造された銭貨が、ベトナム側に輸出された。ベトナムでは、これを模倣した銭貨が鑄造され、これら銭貨はインドネシアのバリ島でも出土している（西川 2024: 289-293）。

る輸出の大宗を占めた箇旧産の錫は、当初広西省を経由して陸路で運搬されていた。しかし、滇越鉄道の開通により大量輸送の時代が始まり、缶詰の原料などの世界的な需要の高まりを背景に、輸出量は急増した(武内 2003; 楊・楊 2010)。そして、本稿の主題となる普洱茶は、19世紀末に仏領インドシナ連邦を経て一部の茶が香港に出荷されたことを契機として、その後の滇越鉄道や海運を利用した海外輸出につながっていくこととなる(西川 2015: 227)。

ただし、従来の研究では、近代化の象徴である滇越鉄道敷設にともなう飛躍的な貿易拡大というインパクトも手伝い、いずれの輸出品も仏領インドシナ連邦のハノイ経由で香港に輸出された点に主眼が置かれ、雲南経済はアジアのハブ港である香港を中心とした国際的枠組みの中で論じられるにとどまってきた(石島 2004: 57-62; 楊 2009: 159-169; 西川 2015: 209-231)。その結果、雲南の西側に隣接するビルマを含む英領インド帝国との経済交流に関する議論は、依然として不十分である。雲南経済と世界市場との関連性を考察するためには、英領インド帝国などの西方との国際的な関係を考慮に入れた、より包括的な議論が求められるであろう。

そこで、本稿では、上記の命題に対して、香港を中心とする国際的枠組みの中だけでなく、英領インド帝国との間でも取引があり、清末民国初の関連史料が比較的豊富に残る普洱茶に注目する。

さて、かくの如く清末以降に、主要輸出品となった普洱茶の歴史については、これまで多くの先行研究がある。雍正年間のシブソンパンナー王国を対象とし、その直轄地化を論じたクリスチャン・ダニエルスは、清朝による介入を許した原因として、茶山が生み出す利益を巡って漢人商人と山地民との対立、さらにはこれに対する地元土司の無策があったことを指摘している(ダニエルス 2004)。

乾隆年間に入ると、漢人が地元社会に徐々に浸透し、土地を買って茶園を経営するようになった。そして、ついにはシブソンパンナー王国側も、茶交易からもたらされる利益の確保という思惑も重なり、宮廷献上用の貢茶の栽培の負担を求める代わりに、無断で入植した雲南南部の石屏出身の漢人に対して入植を迫認することになった。武内房司は、こうした茶山への漢人移住の原因として、商業移民による積極的な経済的利益の獲得があったと指摘している(武内 2010)。また、

筆者は、石屏漢人が茶山において普洱茶の栽培技術や土木技術、さらに同郷のネットワークを駆使して、徐々に地元の土司を凌駕していく過程を素描した(西川 2015: 170-179)。

本稿の対象時期となる清末民国初に関しては楊志玲による詳細な研究がある。楊は当該時期の生産地域拡大や生産量増加に関して整理をおこない、消費地との関係性について分析したうえで、その全体像や歴史的な位置づけをおこなっている。楊は、民国期以降の普洱茶生産拡大について、西洋から導入した加工工程の機械化に加え、交通、通信、金融および世界経済との一体化など同時代的要素との関連性を指摘する(楊 2009)。

また、内陸の奥地で生産される普洱茶に焦点を当てた場合、茶の生産地と国内外の消費地を結びつける物流、つまりこれを支える交易路や輸送手段が重要な鍵となってくる。北から南に向かって流れる紅河・瀾滄江・怒江を代表とする急流で水運に適さない大小河川によって東西に分断される雲南省では、急峻な山地が交通の妨げとなっており、荷馬を利用したキャラバンである「馬幫」と人が荷を担ぐ「荷夫」が伝統的な運輸手段として活躍していた(石島 2004: 21)。これに関連する雲南から東南アジアにいたる交易路の全体像については、栗原悟が、雲南における回族反乱後の光緒年間初頭から英仏勢力の進出という時代的背景を踏まえつつ、馬幫に焦点を当て、回族の馬幫の活躍による交易路の拡大とその後の交易路沿いに出現した各地の商人勢力の成長を概観する(栗原 1991)。また、Ann Maxwell Hill が、19世紀末から1940年代までの六大茶山と新興の猛海茶山に焦点を当て、隣接する英領インド帝国や仏領インドシナ連邦に続く普洱茶の国際的な交易路の変化を時間軸に沿って明らかにしている(Ann 1998: 73-75)。このほか、チベットを巡るイギリスと清朝の政治的関係性の視角から、英領インド帝国経由で雲南からチベットに向かう交易路の開発とチベットにおける普洱茶の浸透を論じた劉志揚による精緻な研究がある(劉 2017・2021)。

本稿では、これら先行研究の成果と課題を踏まえ、民国期に普洱茶の発展に寄与した政府関係者が残した史料をもとに、清末から民国初、具体的には日中戦争の影響が雲南に及ぶ1940年前後までに焦点をあて、明清代から受け継がれてきた栽培加工技術との歴史的連続性を踏まえつつ、普洱茶生産拡大の実態を論じて

いく²。具体的には、Iで普洱茶の名前が史料上に現れる明代後半期から19世紀前半までの草創期の茶山開発を検討し、明代後期から清代半ばまでに起きた普洱茶の品質の向上と栽培加工技術の変化を指摘する。つづいて、IIからIIIで、清末民国初の普洱茶の栽培地域拡大や生産量増加、さらには国内外を含む消費地との関係性および物流について系統的整理をおこない、IVで、市場において普洱茶需要が増えた根本的要因を栽培加工の技術移転の角度から探っていく。そして、これら課題点を考慮しつつ、清末民国初に起きた普洱茶生産拡大の実態解明を通して、仏領インドシナ連邦を経由する香港や、英領インド帝国を通じてチベットにいたる東西に渡っておこなわれた普洱茶の移輸出が雲南経済に与えた歴史的意義という命題にも解答を導き出していく。

II 普洱茶の概要

本章では、普洱茶に関する基本的知識を確認したうえで、史料上にその名が現れる明代後半期から、栽培加工技術の向上が起こり、普洱茶生産が本格化する19世紀半ばまでの普洱茶の歴史について論じていく。

1 普洱茶とは？

私たちの周囲に存在する緑茶や紅茶などの多様な茶は、元々同じ茶葉を原料としており、加工の過程で生じた違いによって分類されている。茶葉の分類は、新鮮な茶葉を加工する過程において、茶に含まれる茶のポリフェノールの酸化具合、即ち発酵程度の相違によって形成される。発酵の程度が低い順から列記すると、緑茶（非発酵茶）、白茶（微発酵茶）、黄茶（軽い発酵茶）、烏龍茶（半発酵茶）、紅茶（全発酵茶）、黒茶（後発酵茶）の6種類に大別される。例えば、日本でもポピュラーな緑茶は、酸化程度が10%であるのに対して、普洱茶は、一般的に黒茶に分類され、酸化程度は80-95%にも達する（姚 2007: 29-30）。

実のところ、普洱茶には、普洱茶緑茶や普洱茶紅茶もあるが、日本で通常「プーアル茶」と称される茶は、黒茶（後発酵茶）のことを指す

（松下 1986: 85）。黒茶（後発酵茶）としての普洱茶の製造工程は、一次加工として、①茶摘み②釜炒り（加熱）③揉捻（茶葉を揉むこと）④干す（乾燥）の四工程に大きく分類される（松下 1998: 12-13）。②釜炒りは、発酵を止める工程であり、熱を加えることによっておこなわれる。この工程には「蒸す」ことで加熱する方法もあり、後述するように清代半ばまでの普洱茶は、この「蒸す」方法を採用している。また、③揉捻には、茶葉の形を整えることと、茶葉の細胞に傷をつけることで成分の抽出を進める目的がある（工藤 2007: 311、328）。

つづいて、これら作業を経て完成した荒茶に、さらに二次加工である発酵を加えたものが、一般にいうところの黒茶（後発酵茶）に相当する普洱茶となる。昔は時間をかけて徐々に発酵させた、これを「生茶」と呼ぶ。その一方で、熟成を早めるために、「渥堆」といわれる一連の工程、つまり荒茶を高温多湿な場所に置き、付着した菌類による発酵、同時にカテキン類の酸化をおこなったものを「熟茶」という（工藤 2007: 45、299-300、322）。

さて、日本で広く親しまれている「プーアル茶」は、明清時代において、現在の雲南省西双版纳タイ族自治州勐臘県の北部、メコン川の東岸地域で生産されていた（図1）。この地域には、後に述べる六大茶山（攸楽・革登・倚邦・莽芝・蛮崙（蛮磚）・漫撒〔後に易武〕）



図1 六大茶山

² 民国期の普洱茶の発展に寄与した人物と記録に関しては、（曹・劉 2024）を参照されたい。

が存在し、古くから茶の産地として広く知られていた³。

2 明清期の普洱茶生産

普洱茶の概要の解説につづいて、本節では六大茶山を中心として明清期の普洱茶の歴史を辿っていくこととする。六大茶山を含む雲南省西双版纳タイ族自治州は、もともと盆地と周辺の山地を一つの単位（ムン）としたタイ系土司のシプソンパンナー王国に属していた。シプソンパンナー王国は、国王（ツァオファー）をリーダーとしてそれぞれのムンを管轄する首長（ツァオムン）が従属する形で成り立っており、盆地連合王国を形成していた。元王朝が中華王朝において、王国を土司制度に組み込む先駆けとなり、官職を与えたうえで、行政機関として徹里軍民総管府を設立した。つづいて、明王朝は車里軍民府に改め、洪武17 (1384)年には車里軍民宣慰司使とし、ついで清朝政府もシプソンパンナー国王に車里軍民宣慰司使の称号を与えることで慰撫を図った。

また、王国の経済基盤は、平野部で水田耕作を営むタイ系民族によって支えられていた一方で、山地で焼畑耕作を中心に生活をする山地民によって生み出される山貨も重要な収入源であった。その中でも普洱茶は主要な山貨の一つであり、現在のプーラン族やハニ族にあたる山地民がその栽培を担っていた（ダニエルス 2004）。

さて、当該地域において普洱茶の存在が史料上明確に確認できるのは、万暦年間 (1573-1620年) の『雲南通志』が初めてであり、該書には「車里の普耳に至るに、ここで茶を産す」とある⁴。ただし、具体的な記述は、同時期に書かれたと推測される謝肇淛が著した『滇略』が初見となる。該当箇所の内容を示すと以下の通りである⁵。

雲南省が良いお茶を生産していないのではなく、現地の人々がお茶の摘み方、正しいお茶の淹れ方を知らないのであり、お茶自体の品質が良くても、本当の「茗」（良いお茶）とはいえない。昆明の泰華

茶は、雷鳴が初めて響く（春）頃に収穫されるものであり、色や香りは松蘿茶に劣らない。しかし、手揉みするとムラが生じる。（大理盆地の洱海の西方に位置する）點蒼山の麓にある感通寺の茶は、これに勝っているものの、価格は高めである。多様な人々が嗜むのは、同じく普洱茶である。この茶は蒸して固められたものであり、お湯に浸すことで香りが引き出され、水を飲むよりはやや風味が良い程度である。

この一節から、雲南産の茶は良質ではあるものの、技術的な面で未熟であったことが読み取れる。また、一見したところ、普洱茶が雲南全域で一般の人々の間で飲まれているような印象を与えるものの、ここは慎重に考える必要がある。著者の謝肇淛は、万暦年間に雲南布政使右参政に任じられ、滇西に駐留した経歴を持ち⁶、昆明の泰華茶、いわゆる太華茶や大理の感通茶を紹介している。著者の滞在歴を考慮すると、飲茶文化が一定程度根付いていた昆明と大理という限られた地域において、「土庶」とされる多様な階層の人々が、風味がやや水より良い程度の安価な普洱茶を嗜んでいたと考えるのが妥当であろう。

『滇略』の内容と普洱茶に関して記録された史料自体が極少である点などから推測すると、明代後期の16世紀末から17世紀初頭の段階では、普洱茶は、雲南省の昆明や大理一带の人々に飲まれていたに過ぎず、その風味も到底洗練されたものではなかった。

明代のこれら散見せられる記述につづいて、普洱茶の名称が史料に登場するのは、明清の交代と呉三桂による三藩の乱を経て、雲南省の情勢が安定する18世紀初頭まで待たなければならない。

この頃になると、普洱茶が生み出す利益を求めて省内外から多数の漢人が当地を訪れるようになる。いわゆる攸楽・革登・倚邦・奔枝・蛮崑・漫撒の六大茶山において、18世紀初頭の雍正年間には、漢人商人が茶山を訪れ、茶を集め、買い付けをおこなうようになる。これに先立ち、清初より哀牢山脈一带に巣くう山地民によって繰り返される騒擾に悩まされていた清朝

3 六大茶山の中で攸楽茶山のみ、行政区としては西双版纳タイ族自治州景洪市基諾郷に属しており、猛臘県の西側に隣接している地域に位置している。

4 万暦『雲南通志』巻16には、「至車里之普耳，此处産茶」とあり、ここでは、「洱」ではなく、「耳」という字が当てられている。

5 『滇略』巻3には「滇苦無茗，非其地不産也，土人不得採取製造之方，即成而不知烹瀹之節，猶無茗也。昆明之泰華，其雷声初動者，色香不下松蘿，但揉不勻細耳。點蒼感通寺之産過之，值亦不廉。土庶所用，皆普茶也，蒸而成团，瀹作草氣，差勝飲水耳」とある。

6 康熙『雲南通志』巻20には、「謝肇淛，福建長樂人，万暦中任右参政。博洽多才，彈压迤西，郡邑士民德之」とある。

は、彼らの避難先となっていた隣接するシブソンパンナー王国に神経を尖らせていた。折しも中国の全国市場で販売できる商品を捜し求めていた漢人商人が茶山に入り込み、高利貸しなどを通して暴利をむさぼる中、地元山地民との間に衝突を引き起こした。反乱鎮圧後、雲貴総督鄂爾泰は、シブソンパンナー国王がこの地域の統治能力に欠けていると判断し、治安維持を目的としてメコン川東岸地域の六大茶山を含む地域を直轄地として管理する方針を固めた（ダニエルス 2004）。

清朝政府は、山地民と漢人との間の摩擦を懸念し、漢人商人による茶山への直接的な買い付けを禁止した。ついで雍正7（1729）年に設置された思茅通判の管轄下にある官設の茶の交易場である総茶店においてのみ、取引が許可されることとなった。さらに清朝はシブソンパンナー国王に隷属する13のツァオムンに土司の官職を与え、王国を構成する各ムンと直接的な関係性を結んだ。この措置にともない、茶山に関しては、地元の土司が管理を担うこととなり、倚邦土把総曹氏が、六大茶山のうち、攸楽・革登・倚邦・莽芝・蛮崙（蛮磚）の五茶山を、易武土把総伍氏が、磨者河東岸の漫撒茶山を、それぞれ管轄した。ついで、両土司は、清朝宮廷用の茶である貢茶の任務も課せられ、これよりのち、大きな負担を強いられた。

当初の清朝の意図とは異なり、地元で茶を集めるだけであった漢人は、次第に地域社会に溶け込み、土地の購入を通して茶園の経営に直接関与するようになった。そして、乾隆年間末期にいたり、漢人移民による積極的な経済的利益の獲得に加え、シブソンパンナー王国側の茶交易からもたらされる利益の確保、さらには高い品質が求められる皇室献納用の貢茶栽培を漢人に肩代わりさせたいという地元土司の思惑も重なり、清朝はついに漢人の入植を正式に許可することとなった（武内 2010；西川 2015: 173-175）。

この頃から普洱府とは元江（＝紅河）を挟んで北東部に位置する石屏県出身の漢人が存在感を発揮するようになり、茶山管理の責務を担う倚邦土把総曹氏と易武土把総伍氏の協力のもと、漫撒に石屏会館が建設された。同時に、漫撒の南に隣接する易武でも当地を管轄する易武土把総伍氏が石屏県出身の漢人を招聘したことを契機に、茶園経営が開始された（西川 2015: 172-175）。

石屏漢人の故郷である現在の石屏県の中央に位置する石屏盆地は、中央に二つの湖を抱え、水資源には恵まれているものの、比較的狭小な土地であった。明初

に屯田が設置され、山裾の緩やかな傾斜地において盆地の耕地開発が開始され、後に大規模水利事業をとまなう耕地開発や商品作物の栽培により土地資源の効率化を目指した。しかし、明代後半期には、耕地不足と人口増加によって石屏盆地は早々に構造的飽和状態に陥った。結果的に清代以降、石屏の人々は、新たな生活空間を求めて元江以南地域に広がるフロンティアに飛び出し、各地で生活地盤の構築を模索していくこととなる。このとき、移住活動の原動力となったのが盆地開発の過程で獲得した土木技術や栽培技術など各種技術であった（西川 2015: 45-95）。

茶山入植の正式許可を得た石屏漢人は、経験から培った各種技術を活用し、貢茶を担った茶栽培はいうまでもなく、茶の収集地である思茅に向かう道路の建設や架橋工事を実施するなど交通インフラ整備も積極的におこない、普洱茶の発展に尽力した。易武における普洱茶の栽培と物流を掌握し、徐々に実力を蓄えつつあった石屏漢人は、19世紀半ばには地域社会においても発言力を強め、その勢いは易武土把総伍氏をも凌駕していくこととなる（西川 2015: 175-179）。



写真1：易武の茶葉を使用して作られた緊壓茶の一形態である茶餅。直径約19cm、高さ約2cmである。円盤状の形で、包装紙に「易武古茶七子餅」の文字が見える。運搬や貯蔵のために7個の茶餅を竹の葉で一つに束ねたことから、「七子餅」という名称が付けられた。

如上のように普洱の茶山だけでなく、フロンティアを中心に雲南各地に独自のネットワークを有する石屏漢人は、易武を中心として普洱茶市場において存在感を発揮し、これにともない普洱茶自体も商品として洗練されていくことになる。同時期の史料からも普洱茶に関する変化が垣間見える。例えば、道光15（1835）年に雲貴総督を務めた阮元らによって編纂された『雲南通志稿』には次のような普洱茶に関する記載があ

る⁷。

思茅庁の調査によると、茶の産地には、倚邦・架布・嶧崆・蛮磚・革登・易武という六山がある。土壌の性質によって風味が異なるが、赤土や土中に雑石があるものが最も良いとされ、消化を助け、寒邪を取り除き、(体の正常な生理機能を阻害する)毒素の排出に優れている。2月に摘み取ると、蕊が極めて細かく白いので、「毛尖」と呼ばれる。摘み取り、蒸したうえで揉捻し(円盤状の)茶餅の形にする。葉は少なく柔らかで、「芽茶」と名付けられている。3、4月に摘み取られた茶葉は、「小満茶」という。6、7月に摘み取られた茶葉は、「穀花茶」と呼ばれる。大きくて丸い形のは、「緊団茶」と呼ばれ、小さくて丸い形のは「女兒茶」といわれる。商人の手を経て、外側はきめ細かく、内側が粗いものは、「改造茶」と呼ばれる。茶を揉捻する際、あらかじめ黄色く、かつ丸まっていない茶葉を選択したものは、「金月天」と呼ぶ。強く固まり、ほぐれないものは、「挖搭茶」(いわゆる疙瘩茶)と呼ばれ、風味は極めて濃厚でなかなか手に入らない。茶を栽培する農家は、常に草刈りに備えており、茶樹の脇に草が生えると、味が劣化して売れなくなる。また、茶葉を他のものと同じ器に入れて使うと、その匂いに染まり、飲むことができなくなる。

ここには、明代までの簡単な記述とは異なり、普洱茶栽培に適した土壌、茶摘みの時期にもとづく分類、そして、茶の栽培加工管理に関する様々な注意点が記載されている。茶の製造工程では、茶摘みの後に「蒸す」という加熱作業を経て、揉捻をおこなっていることから、風味の点でも明代のものとは異なり、濃厚な味へと変化している。現在の製茶工程と照らし合わせても、基本的な手順は踏んでいるといえよう。また、運搬に適した、茶葉を圧縮成形して固めた「茶餅」などの緊圧茶が紹介されており、形状の大小によって「緊団茶」や「女兒茶」と別々の名称が付されていた。そ

して、特筆すべき点として、商人が故意に内側の粗い茶葉を隠すために表面をきめ細かい茶葉で覆ったと推測される「改造茶」という一種の緊圧茶のフェイク商品が、市場に流布していたことである。裏を返せば、この時期には、「緊団茶」や「女兒茶」が一定の信頼を得た商品としてブランド化されていたことの証左ともいえよう。

清代半ばの史料の特徴として、明代と比すると、生産地・栽培方法・加工方法に対する意識が強く反映されており、普洱茶の商品的価値に関心が向くようになっていたことが読み取れる。清代末期には、加熱方法において「釜炒り」が採用されているという記述もあるが、基本的な製造工程という点では19世紀前半頃と大きな変化は見えない⁸。

明代後半期において普洱茶は、主に昆明や大理を中心とする地域において飲まれ、その風味もやや水より良い程度であった。しかし、清代に入り、省内の情勢が落ち着くと、全国市場で販売できる商品を捜し求めていた漢人が茶山に入り込むようになった。特に、乾隆年間後半以降、商売に長け、栽培技術にも卓越した石屏出身の漢人が入植し、栽培を開始して以降、普洱茶は一定の品質を保証できる商品としての価値を持つようになった。そして、茶の風味も「やや水より良い程度」から「極めて濃厚」へと評価は一変した。石屏漢人は自らが持ちうる広いネットワークを通して得た知識をもとに市場の需要に適した商品を供給するべく、必要に応じて様々な形状の緊圧茶を製造していったのであろう。

III 清末民国初における普洱茶生産について

宮廷献上用の貢茶でもあり、確かな技術に裏打ちされた商品として、その価値を着実に高めつつあった普洱茶に関して、本章では、清末民国初、周辺地域に向けて急速に拡大する生産地域と、年間生産量の変化について検討していく。

かつて六大茶山を中心に生産されていた普洱茶は、

7 道光『雲南通志稿』巻70には、「思茅庁採訪：茶有六山，倚邦、架布、嶧崆、蛮磚、革登、易武，氣味隨土性而異，生於赤土或土中雜石者最佳，消食散寒解毒。二月間開採，蕊極細而白，謂之毛尖。採而蒸之，揉為茶餅，其葉少放而猶嫩者，名芽茶。採於三、四月者，名小満茶。採於六、七月者，名穀花茶，大而円者，名緊団茶，小而円者，名女兒茶。其入商販之手，而外細内麤者，名改造茶。將採時，預挾其内之勁黃而不捲者，名金月天。其固結而不解者，名挖搭茶，味極厚難得。種茶之家，芟鋤備至，旁生草木，則味劣難售，或與他物同器，即染其氣，而不堪飲」とある。

8 『海関十年報告1892-1901』には、「葉はまず手で揉まれ、次に大きな鉄鍋で20分ほど強火で焼かれる。その後、竹製のマットのうゑに広げて日干しにし、ときどき裏返したり揺すったりして、十分に乾燥したところで女性に渡され、茎や花と葉を分けて選別される」とある (China Imperial Maritime Customs, *Decennial Reports*, 1892-1901, Vol. 2. Szemao, 490)。

清末以降、その栽培範囲が隣接する景谷や順寧府南部の瀾滄を超え、順寧府中部の双江や雲県、さらにはその北に位置する順寧府順寧県にまで広がりを見せる⁹。同時に、生産地域の拡大は、産地ごとに、鳳山茶（順寧県産）・猛庫茶（双江緬寧等県産）・景谷茶（景東景谷県産）・三宋茶（車里県産）・大山茶（鎮越江城等県産）・壩子茶（仏海南嶠等県産）などの様々な普洱茶ブランドを生み出していく¹⁰。

1 新たな栽培地域

はじめに、雲南省西南部に新たに栽培が開始された地域について、時系列に沿って考察していく。清末民国初において新たな普洱茶の栽培が最初に明確に確認できるのが、順寧府双江県である。双江県はもともと土地が肥沃で物産も豊富であり、茶の栽培には適していた。そこに1899年から1900年にかけて、彭耀という人物の提案により、仏海（猛海）から茶の種が持ち込まれた¹¹。

次に、普洱府に隣接する元江直隸州の事例を紹介する。民国『元江志稿』巻5には普洱茶の栽培および生産にいたるまでの経緯が具体的に記されているので、以下に引用しておく¹²。

光緒年間半ば、元江の人々の生活は悲惨な窮状にあり、生きていくには困難であったので、気力を奮い起こし荒れ果てた土地に挑み、日々開墾と耕作に励み、懸命に努力した。（元江の）中郷の人々のよ

うに、五大茶山に向かい、単純労働者として生計を立てようとしたものもあり、見聞きしているうちに、茶の栽培と製茶の方法を習得したので、茶の種をたくさん購入して、（元江の）猪街と大小羊街一帯の未使用の土地に戻り、マニュアル通りに植えて、（土を株もとによせる）土寄せもおこなった。数年後ついに山々は緑で溢れるようになり、マニュアル通りに製茶すると、品質・風味・色合いともに（六大茶山の）倚邦や攸楽の茶に劣らないものとなった。売行きは日々好調で、利益もますます拡大し、茶の改良にも努めており、正にその勢いはとどまることを知らない。これが光緒の終わりから現在にいたる状況である。

光緒年間半ば、つまり1890年頃、生活に困窮した元江の中郷出身の人々が、六大茶山に出稼ぎにいった。この出来事が契機となり、茶の栽培や製茶に関する技術を習得し、茶の種を持ち帰って栽培生産を始めたところ、六大茶山に劣らない品質の茶葉の生産に成功した。数年で事業が軌道に乗り、20世紀初頭の光緒年間末には多くの利益を上げるようになった。

最後に、順寧府順寧県の茶栽培の事例を検討する。順寧県の場合は、光緒末年（1908）に順寧府知府の琦麟と紳士の陳維寅が互いに50両を出し合い、茶の栽培を提案したのを端緒とする¹³。この地における茶栽培が成功した経緯については、当地で茶業に従事した李少庵が著した「順寧茶業概況」に詳細に記述されて

9 『統雲南通志長編』巻72には、「滇茶主要産地、大部偏于西南一隅。発源于六大茶山、延及瀾滄江左右之哀牢、蒙楽、怒山間高地。換言之、其發展趨勢、大抵由思茅迤南之江城、鎮越、車里、仏海、五福、六順等県、漸移向西北之瀾滄、景東、双江、緬寧、雲県、而迄于順寧」とある（雲南省志編纂委員会辦公室 1985: 下冊、606）。

10 『雲南經濟』第12章には、「雲南所産之茶、以産地別、有鳳山茶（順寧県産）、猛庫茶（双江緬寧等県産）、景谷茶（景東景谷県産）、三宋茶（車里県産）、大山茶（鎮越、江城等県産）、壩子茶（仏海南嶠等県産）、十里茶（昆明県属十里鋪産）、感通茶（大理県産）、太和茶（保山県産）、宝洪茶（宜良路南等県産）等之名称…惟外省人士、則概名之曰普洱茶。然就現下之行政区域論、普洱即今之寧洱県、並不産茶…普洱茶得名之由、当由於往昔著名産茶之六大茶山（所謂六大茶山或謂攸楽、革登、倚邦、莽芝、蛮磚、漫撒；或謂倚邦、架衣、嶧崆、蛮磚、革登、易武；或謂倚邦、易武、蛮磚、莽芝、革登、布架、未知孰是）、為隸思茅庁、思茅庁属普洱府、且当时所産之茶、多数以思茅為集散地、故以是名耳。今則情勢不同、大凡順寧、雲県、双江、緬寧所産、什九以下関昆明為集散地。景東景谷所産、則以昆明為市場。而仏海、南嶠、車里所産、則以仏海為中心」とある（張 1942: L1）。

11 『雲南經濟』第12章には、「双江県…土質肥沃、物産豊富、其主要農産、除稻、米、綿花、甘蔗、紫梗外、以茶最著、即所謂猛庫茶也。該県植茶、始於光緒二十五年、由於彭耀氏之提倡。茶種来自仏海、係大山茶…全県年産約一万担、其中十之八九運雲県、下関、銷四川及本省、十之一二運磨栗壩、銷緬甸；而以極少数銷猛定、耿馬、施甸、保山一帶」とある（張 1942: L3）。

12 民国『元江志稿』巻5には「光緒中葉、元人生計日窘、幾有不能生存之勢、於是涖勸憤發荒蕪之田園、日事開墾農林種植、皆竭力講求。如中郷之人、往五大茶山、傭工謀生、日擊耳濡、尽得種茶製茶之法、多購茶種、以歸於猪街及大小羊街一帶隙地、如法種植、而培壅之。三數年間遂蓬蓬勃勃綠徧山原、依法製成、其質、其味、其色、蓋与倚邦、攸楽之茶相埒。銷路日広、獲利日豊、力図改良發達、正未有艾、是則自光緒末葉以迄於今」とある。

13 民国『順寧県志初稿』巻14には「（光緒）三十四年戊申…是年秋知府琦麟、城紳陳維寅各捐銀五十兩、開闢鳳山森林、倡始植茶」とある。

いるので、以下に引用する¹⁴。

鳳山茶の栽培は、清朝末期に種子を選び、種をまき、苗木を育てることから始まり、茶畑を形成するまで5年のときを要した。護国軍が挙兵し、本省から四川や貴州に出兵した軍隊に順寧人が多数含まれており、従軍の際に茶葉を携えていき、各地で宣伝した。これが評判を呼び、茶荘を開いて、茶を買い付け、四川省に運んで販売する人も出てきたため、売上げが大幅に伸びた。現在、鳳山には約5万本の茶樹があり、1本あたり年間1斤の茶葉を収穫することができ、茶葉の総量は5万斤以上になる。地元で消費されるだけでなく、茶葉のほとんどは騰越幫や喜洲幫、南防一帯の商幫に売られている。民国20(1931)年頃、鳳山で茶葉が成功しているのを見て、地元の名士や一般の人々が、競って茶葉を植え、東鳳山や盤陀石周辺では栽培に成功し、宣伝に努めている。

順寧県では、1908年に知府自らの呼びかけにより始まった茶栽培が、5年の歳月を経て実を結んだ。おりしも、この時期、袁世凱の帝政に反対する唐繼堯・蔡鍔・李烈鈞らが1915年12月に雲南省で独立を宣言、護国軍と命名した袁世凱討伐の兵を起し、護国戦争を開始した(石島 2004: 69-72)。護国軍が四川や貴州に遠征軍を派遣した際、順寧出身の兵士たちが持参していた茶葉を各地で宣伝した結果、順寧産の茶が広く知られるようになり、その後の茶栽培の拡大に寄与した。

これら3つの事例より、いずれの地域でも光緒年間半ば以降、茶栽培が開始されたことが知られる。元江の例に見えるように、清朝末期、周辺地域の労働力を吸収するほど六大茶山における普洱茶の栽培が盛んであり、各地で同様の試みがおこなわれたのであろう。

次節では、普洱茶の栽培地域の広がりにもなう清末民国初の年間生産量の変化について検討していく。

2 年間生産量の増加

清末民国初にかけて普洱茶の生産地域は、六大茶山を中心に滇西南部を覆いつつあった。これにともない、年間生産量も増加の一途を辿る。清末から1910年代までは、辛亥革命後の混乱と治安悪化にともなう地方間の商取引停滞の影響もあり、茶の年間生産量の数値は、おおよそ35,000担から40,000担までの間で推移していた¹⁵。しかし、1920年以降は、著しい上昇傾向を示すようになる。例えば、『海関十年報告 1922-1931年』によると、1921年以前は年間生産量が9,000担であった景東と緬寧は14,000担に増加した。また、以前は茶山としてほぼ無名であった瀾滄は、茶の年間生産量が1,000担を誇るほどにまで成長した¹⁶。

つづいて、1930年前後以降の年間生産量の変化を知るべく、1934年出版の「雲南之茶業」と1942年出版の『雲南経済』に記載されている普洱茶の年間生産量を整理したうえで、表1「民国期普洱茶年間生産量一覧表」として次ページに示す。

おむね「雲南之茶業」は『海関十年報告 1922-1931年』の数値と比較すると、やや少なく、1920年代後半頃のデータと考えられ、一方の『雲南経済』は1940年頃の年間生産量を示していると推測される。ただし、一部の地域に関してはデータ不足のため、両者の比較可能な生産地域に絞って表1の分析を進めていく。まずは、先述した瀾滄は854担から3倍の3,000担に増えており、引き続き増加傾向にあることが確認できる。次に、光緒年間から栽培が開始された順寧は3,200担から2倍以上の8,000担に増加し、六大茶山に隣接する江城や仏海も各々、600担から2,000担、5,000担から15,000担と、年間生産量において3倍の伸びを示している。このほか、滇東北部に位置する大関一帯において僅か30担余りであった年間生産量は、周辺地域を含めて1,600担にまで増加している。

普洱茶の年間生産量においても、1910年代にはせいぜい4万担程度であったのに対して、1920年以降、顕著な増加を示し、1940年頃には約8万担近くに達

14 民国『順寧県志初稿』(巻7、「順寧茶業概況」)には「鳳山茶之栽植始於清末自選種播苗，以迄成林需時五年。迨至護国軍興，本省出師川黔，順寧人服役軍中者甚夥，隨軍攜帶茶葉，到處宣傳。因之受人賞識後，復有人設莊收購，運川銷售，因之銷路大增。目前鳳山茶樹約計五万余株，每株年可採茶葉一斤，總計可得茶葉五万余斤。除供当地消費外，大部均售于騰越及喜洲幫以及南防一帯商幫。民二十年前後，一般紳民人等，見鳳山的茶業成功，競相栽植，附郭之東鳳山及盤陀石一帯均已栽植成功，甚而推廣」とある。

15 普洱茶の年間生産量の概数については、『海関十年報告 1912-21年』(China the Maritime Customs, *Decennial Reports* [以下 *Decennial Reports* と略称], 1912-21, Vol. 2. Szemao, 372-373) および『海関十年報告 1922-1931年』(*Decennial Reports*, 1922-1931, Vol. 2. Szemao, 364-365)を参照。また、1担は約60kgである。

16 *Decennial Reports*, 1922-1931, Vol. 2. Szemao, 364-365。

表1 民国期普洱茶年間生産量一覧表

生産地	「雲南之茶業」(1934年出版)	『雲南經濟』(1942年出版)
生産地	生産量	生産量
瀾滄	854担	3,000担
仏海(猛海)	500,000余斤(5,000余担)	15,000担
順寧 ^{※1}	3,200担	8,000担
鎮越(易武) ^{※2}	2,600担	4,000担
五福	35,000斤(350担)	—
双江	10,000担	11,000担
鎮康	800余担	800担
江城(猛烈)	紅茶600担	2,000担
雲県	紅茶120担・緑茶480担	600担
大関	30余担	1,600担
彝良、綏江、鎮雄、塩津	—	
昌寧	—	300担
景谷	2,000担	12,000担 (景東 70-80%; 景谷 10-20%)
景東	11,350担	
鎮沅	—	2,400担
墨江	—	
元江	2,000担	
緬寧	—	4,000担
思茅(倚邦)	4,000余担	—
車里	—	8,000担
南嶠(猛遮)	—	6,000担
寧江(猛往)	—	8,000担
合計	43,384担	86,700担

史料典拠：褚 1934: 182-183；張 1942: 第12章 L2-L3。

※1：1940年には7,000担に到達。

※2：1920年代後半、出境する者が相次ぎ、茶樹が放棄され、産出量が激減した。

していた¹⁷。

本章では、清末民国初における普洱茶の生産地域および年間生産量の変化を確認してきた。如上のごとく、全体の傾向としては20世紀前半を通して、普洱茶の生産地域の拡大にともない、年間生産量も右肩上がりに伸びていた。史料上で確認できる光緒年間以降に新たに栽培された双江・元江・順寧の3地域に限っただけで、1940年頃の年間生産量は合計で20,000担以上に及んでおり、普洱茶生産の増加に貢献したことは明白である。ただし、民国期に普洱茶の生産量が伸びた要因を、上記3か所に代表される新たな栽培地域の出現のみ求めるのは早急であろう。例えば、民国期に

代表的な茶生産地となった瀾滄・仏海・景谷・景東・鎮沅には、いずれも樹高15メートルを超える大茶樹が自生している¹⁸。このことから、これらの地域では新たに茶樹を栽培するのではなく、むしろ自生している茶樹に手を加えたり、摘採した茶葉に加工を施したりすることで品質を向上させ、商業的に成功を取めたと考えるのが妥当であろう(表1)。したがって、民国期の普洱茶の生産量増加は、新たな栽培地域だけではなく、茶の自生地が存在も深く関係しているといえよう。

そもそも生産量を伸ばすために必要となる茶業の利益化には、茶栽培に必要な自然環境というまでもなく、消費地との距離、運搬手段の確保、さらには栽培および製茶などの加工に関する技術的な問題など様々な課題が立ちだかる。

そこで、次のIIIでは、普洱茶の消費地から説き起こし、生産と消費を結ぶ物流にも注意を払いつつ、茶業の利益化における課題を明らかにし、如何にして解決に導いたかを考察していく。

IV 普洱茶消費の伸長と物流の変革

清末民国初において普洱茶の栽培地域が六大茶山から西北方面に延びていくにともない、生産量も増加した。雲南の西南地域は、茶樹が自生するなど、元来茶樹の生育に適した自然環境が備わっており、栽培地域として成立可能な下地が存在した。清末以降の普洱茶に対する需要の増加が、この地域の栽培拡大と茶の生産量の向上を促進する要因となる。本章では、普洱茶の消費量が増加した消費地を特定し、さらに生産地と消費地を結ぶ物流の重要性に焦点を当てながら、普洱

17 表1「民国期普洱茶年間生産量一覧表」の統計では、計算上で年間生産量が8万担を超えるものの、『雲南經濟』第12章には「上述各地産額、除宜良、順寧、双江、緬寧、仏海、南嶠、車里等比較可靠外、餘均因未經調查、無統計足資依拠、然大約当不出八万担之数也」とあり、8万担未満と推計している(張 1942: L3)。

18 中国を代表する自生茶樹については、松下智が現地調査の成果も踏まえ、詳しく紹介している(松下 2012: 42)。

茶の生産拡大を促進した要因について考察する。

1 消費地拡大と消費量増加について

一般的に消費地における普洱茶の需要が増大することで、供給の必要性が生じ、その結果として商品としての普洱茶の生産量が拡大する。

普洱茶の生産地が急速に拡大する以前、19世紀末における普洱茶の主な消費地は、四川省・チベット・雲南省内であり、思茅経由で移出された約16,000担の内訳は、それぞれ四川省7,200担・チベット4,400担・雲南省内4,000担であり、そのほか貴州省240担、広西および広東は160担であった¹⁹。一方、前章で述べてきたように、1940年頃において雲南産の茶の消費地は、雲南の周辺部を含む東南アジアから中国沿岸部に及んだものの、雲南省内を除けば、依然として四川やチベットがその大宗を占めており、これら地域の需要は依然として旺盛で、高水準を維持していた²⁰。

ここで、普洱茶の消費地と消費量に関する詳細を知るべく、茶の生産地ごとの供給先について検討していく。民国期の普洱茶の供給先については、「雲南之茶業」と『雲南経済』に生産地ごとの消費地と消費量に関する詳細な記録が残されており、これをまとめたのが、次ページに示す表2である。

表2を考察すると、普洱茶の主要な供給先として、清朝以来の二大消費地である四川とチベットに加え、香港や仏領インドシナ連邦、さらには省内の地域が際立っていることがわかる。

はじめに新たな消費地として20世紀以降に台頭してきた、香港などの中国沿岸部、そして、その経由地となる仏領インドシナ連邦について説明していく。19世紀末、現在のベトナムである仏領インドシナ連邦において普洱茶が、その香り高い風味で高評価を受け、輸出されていた。しかし、1896年の北ベトナムにおける米の不作と関税の引上げにより嗜好品である茶を

購入する経済的余裕が失われた。この結果として、香港に出荷された一部の普洱茶が、思いのほか好評を得たことで、その後の大量輸出につながっていくこととなる(西川 2015: 227-228)。仏領インドシナ連邦を含む香港や中国沿岸部向けの生産地は、メコン川西岸の仏海、六大茶山の一つである鎮越(易武)、そして、その北部に位置する江城と元江である(表2)。いずれの地域も仏領インドシナ連邦に隣接し、交通の便に優れていた。

次に、19世紀末において重要な移出先であった四川省について検討していく。四川は清代から重要な普洱茶の消費地であり、四川向けの生産地の歴史の変遷については、『統雲南通志長編』に「四川省での茶葉販売の伸びについていえば、宋園茶(すなわち大山茶)から始まり、景谷茶(景東に属する景谷街)が続き、今ではそのほとんどが双江と順寧から採取されており、雲南茶の発展の趨勢を明確に示している」という一文が見え²¹、四川向けの普洱茶の供給地は、元は宋園茶の産地である六大茶山であったが、時間の経過とともに北方の景東、さらにその西方に位置する双江と順寧に移動していった。この記述を裏付けるように、表2にも双江と順寧を筆頭として、景東の名も確認でき、さらには量的には少ないものの、雲県や昌寧などの新興茶山が挙げられている。

また、これら地域から四川に移出される普洱茶は、表2から推計すると、少なく見積もっても1.5万担以上にのぼり、清末の年間移出量7,200担と比較すると、2倍以上に増加している。

つづいて、チベット向けの普洱茶であるが、その生産地は、瀾滄・仏海・五福・思茅などメコン川西岸地域に集中している。1910年代、辛亥革命の余波にともなう雲南省内の治安悪化の影響により取引量は伸び悩んだ。しかし、後述するように英領インド帝国経由のルートを開発したことで、1920代以降は急速に増

19 19世紀末にリヨン商工会議所が組織した調査団の報告によると、1897年に思茅経由で移出された普洱茶40,000挑(約16,000担)の内訳は、四川省18,000挑(約7,200担)、チベット約11,000挑(約4,400担)、雲南省10,000挑(約4,000担)、貴州省600挑(約240担)、広西および広東はわずかに400挑(約160担)であった(Chambre de Commerce de Lyon 1898: 139)。

20 『海関十年報告 1912-1921年』には、情報源を普洱道の行政事務を掌る道尹であると記したうえで、普洱茶の年間生産量は35,000担に達し、ここから英領インド帝国のシャン州(British Shan States)向け4,500担、仏領インドシナ連邦のラオス(Laos frontier)向け1,000担、さらに地元消費分2,000担を差し引いた27,500担のうち、60~70%が四川に運ばれ、約10%がチベットに向かい、残りは雲南で消費されていたとある(Decennial Reports, 1912-21, Vol. 2. Szemao, 372-373)。また、『雲南経済』第12章には、「滇省所産之茶、除銷本省外、以銷四川西藏為大宗、開銷安南、暹羅、緬甸及南洋以及沿海沿江各省」とあり(張 1942: L5)、依然として四川、チベット向けが多くを占めている。

21 『統雲南通志長編』巻72には、「以川銷茶之消長言：初為宋園茶(即大山茶)、繼為景谷茶(景東屬之景谷街)、今則大部取之于双江、順寧、是皆滇茶發展趨向之明征也」とある(雲南省志編纂委員会辦公室 1985: 下冊、606)。

表2 民国期普洱茶の消費地と消費量一覧表

産地名	『雲南之茶業』(1934年出版)		『雲南經濟』(1942年出版)		注記
	主要な消費地と移輸出量	取引額	主要な消費地と移輸出量	生産量	
瀾滄	昆明、緬甸、チベット (854担)	滇幣10,560元	—	3,000担	
仏海 (猛海)	省内(2,000担)；チベット、緬甸、インド、仏領越南、暹羅(3,000担)	滇幣5、6万元	—	15,000担	
順寧	四川 (3,200担)	—	省内、四川	8,000担	
鎮越 (易武)	省内、緬甸、暹羅、英領整海、仏領越南、香港(2,600担)	—	思茅 (一部)、越南 (一部)	4,000担	
五福	省内 (100余担)；チベット、上海 (70-80担)	—		—	
双江	四川叙府 (10,000担の大部分)；緬甸、臘戍 (Lashio)、中甸、維西 (少量)	—	四川、省内 (80~90%)；緬甸 (10~20%)；猛定、耿馬、施甸、保山一帯 (極少)	11,000担	
鎮康	—	滇幣1万余元	—	800担	
江城 (猛烈)	仏領萊州 (600担)	滇洋1千余元	越南 (大部分)	2,000担	水運による輸出が可能。
雲県	四川叙瀘一帯、チベット (600担)	—	—	600担	
大関	昭通、塩津 (30担)	—	多くは地元で消費	1,600余担	
彝良、綏江、鎮雄、塩津	—	—			
昌寧	—	—	省内、四川	300担	順寧に隣接する新興茶区
景谷	昆明 (2,000担の大部分)	滇幣4万元	四川、省内	12,000担	
景東	昆明、大理など (11,350担)	—			
鎮沅	—	—	大半が香港と広州各地	2,000担	
元江	省内、香港 (2,000担)	—			
緬寧	—	—	大半が雲県と下関を経て四川	4,000担	
思茅 (倚邦)	省内、チベット、西康、インド、緬甸、シンガポール(4,000余担)	滇幣50万元	—	—	
車里	—	—	—	8,000担	
南嶠 (猛遮)	—	—	—	6,000担	
寧江 (猛往)	—	—	—	8,000担	

史料典拠：褚 1934: 182-183; 張 1942: 第12章 L2-L5。

加傾向を示すようになる。英領インド帝国を經由した輸出货量に関しては、譚方之著の「滇茶蔵銷」に「仏海商会主席報告」を引用した記録が残されており、これをまとめたのが次ページに見える表3である。

1928年に5,000担に過ぎなかった輸出货量は、1932年に飛躍的な増加を示して以降も、年々増加の一途を辿り、1938年には18,000担に達した(表3)。これを裏付けるように、1939年に民国政府のコルカタ総領事が、英領インド帝国を經由して毎年3.5万から4万包の普

洱茶がチベットに運ばれていたと報告している²²。

最後に、雲南省内の消費量について検討していく。19世紀末に4,000担であった雲南省内の消費量は、民国期には四川やチベットなどと同様に増加傾向を示すこととなる(表2)。残念ながら、史料上に消費量の正確な数字は記載されていない。しかし、普洱茶の年間総生産量を8万担と仮定し(表1)、四川省向けの約1.5万担、チベット向けの約1.8万担、仏領インドシナ連邦および香港向けの約0.3万担をそれぞれ差し引

22 1940年5月9日「外交部為駐加総領事館與印交涉免抽過境茶稅事致蒙藏委員會公函」添付の「領事館布告」には「查雲南仏海茶磚仮道緬印運銷西藏者、毎年統計約在三万五千包至四万包之間」とある(劉 2005: 294-295)。

表3 仏海県のチベット向け普洱茶取引量と価格単価表

年代	数量(担)	産地毎担価格 (元:半開銀元)
民国17(1928)年	5,000	8
民国18(1929)年	5,600	10.5
民国19(1930)年	6,000	8
民国20(1931)年	6,500	9
民国21(1932)年	10,000	9.5
民国22(1933)年	11,000	9
民国23(1934)年	12,000	9
民国24(1935)年	13,000	11
民国25(1936)年	15,000	12.3
民国26(1937)年	15,500	12.6
民国27(1938)年	18,000	14.6
10年平均数量	11,700	13.2

典拠:「仏海商会主席報告」(譯 1944: 54-55)より抜粋。

けば、省内の消費量は約4万担であったと推計される²³。

民国期の雲南省では、茶は唯一の飲物として親しまれ、来客があればお茶でもてなした。また、茶を嗜みながら、様々な趣向を凝らした娯楽を提供する茶舗が一般民衆の間で人気を博し、飲茶の習慣が日常生活に溶け込んでいた²⁴。茶が広く飲まれるようになったことで、消費量が増大したのである。

雲南省における普洱茶の消費拡大の背景には、海関設置にともなう対外貿易の拡大と馬幫による物資輸送の活発化がある。蒙自・思茅・騰衝に海関が開設された後、雲南各地に中継市場が形成され、省都昆明がこれらの交易路の結節点となった。昆明には、生み出される経済的利益に魅かれて湖南省や四川省から多くの商人が移り住み、店を構えた。昆明の発展は都市人口の増加にも現れており、清末には9,754戸で95,235人だった人口が1932年にはそれぞれ31,029戸、143,700人に達した。このような省内外の交易拡大と商業活動の活性化が、滇西の大理や滇南の建水などにおける商人グループの形成を促し、人々の往来や交流を一層進めたことで、昆明を中心とする雲南省内の茶の消費を下支えしたのであろう(石島 2004: 21-22、130-131)。

如上的ように民国期の普洱茶生産拡大の背景には、清末から続く四川とチベットという二大消費地に加え、雲南省内や中国沿岸地域での消費の増加が寄与したことが挙げられる。

2 消費地と生産地をつなぐ物流

本節では、消費地を中心に、各地の生産地との間を結ぶ物流について検討していく。具体的な事例を取り上げ、論じていく前に、物流と交通機関に関して説明を加えておく。

(1) 物流と交通機関の定義

物流とは、一般的に生産者から消費者にいたるまでの商品の流れのことを指しており、輸送・保管・荷役・在庫管理・情報管理などが含まれている。このうち輸送活動が線部分で遂行される以外は、すべて結節部分で処理される(山本・奥野・石井・手塚 1997: 392)。起伏の激しい内陸に位置する雲南省では、この線部分に相当する輸送という関数が平地に比して物流全体をより大きく左右する要素となる。貨物を目的地に迅速かつ安全に届けることを目的とする輸送活動には、人や財貨の空間移動を可能にする手段方法が整備体系化された交通機関の存在が前提となる。

交通機関には、通路(道路・航路・鉄道路・航空路など)、運搬具(人・家畜・馬車や荷車などの車輛・自動車・筏・舟・船舶・汽車・電車・航空機など)、動力(人力や畜力・風力・水力・蒸気力・石油燃料爆発力・電力・原子力など)の3要素がある(青野・保柳 1951: 212-213)。

清末民国初の雲南では、交通機関を構成する各要素が変化する過渡期を迎えていた²⁵。通路は、茶馬古道の一部が、鉄道路や自動車道路に取って代わられた。同様に、通路を利用する運搬具も、牛馬などの荷役動物や人足から蒸気機関車や自動車に転換しつつあった。これにともない、動力においても人力や畜力、風力などの自然的動力から蒸気力や石油燃焼爆発力などの人工的動力に移行する傾向にあった。とりわけ、蒸

23 楊志玲氏は、1930年8月の中国茶業公司雲南辦事処の電報に基づき、省内の消費量は3万担余りであったとしている(楊 2009: 103)。

24 「雲南之茶業」五 茶之消費情形には、雲南の飲茶の習慣について「茶為本省人民唯一之飲料，不論公私団体住宅，莫不置茶，客至即以茶餉客。茶之濃淡，因嗜好而不同，但無換糖者。茶舗為本省一般民衆娯楽場所之一，其在鄉村，則有「公茶舗」者，且負有一村會議事項集合場所之使命焉。普通茶舗有「閑茶舗」與「困鼓茶舗」之分，後者乃集合芸伶唱戲娛客，唯不化裝，前者則茶舗主人不設零外娯楽，聽客暢談者。此外尚有備留声機或請人演述說部以娛客者」とある(褚 1934)。

25 『雲南經濟』第12章には、「滇茶運輸路線，大別為南北兩途，什九類乎駝馬，間資水道、火車、汽車者」とある(張 1942: L5)。

気力や石油燃焼爆発力という人工的動力の導入は、運搬具と動力源を分化することで自然的制約から解放することとなった。これは、それまで運搬具と動力源が一体化していた「背夫」や「馬幫」などの人足や牛馬に依存せざるを得なかった雲南の交通事情に、長足の進歩をもたらすこととなった。

この中で、蒸気機関車を導入した滇越鉄道の全面開通による輸送条件の改善は、冒頭で述べた通り、大量輸送の実現によって雲南の貿易に極めて大きな影響を及ぼした。

また、蒸気力の活用は、陸の世界にとどまらず、海の世界にも及んだ。19世紀半ば以降、東アジア海域に欧米の汽船が進出し、中国帆船を主体として構築されてきたアジア海域の物流の輸送形態に大きな変革をもたらした（松浦 2014: 3-18）。人工的動力を持つ汽船は、自然的動力である風力任せの帆船に比して、天候に左右されることが少なく、輸送の定時性が飛躍的に高まった。

滇越鉄道を通して仏領インドシナ連邦経由で香港に通じる交易路を持つ雲南省にとって航路における運搬具の動力の変化は無関係ではなかった。従来の陸路では、昆明から内陸水運の中心である長江流域に位置する四川省叙州まで商品を運ぶだけでも20日以上要していた。しかし、滇越鉄道を利用し、ハイフォンから汽船を使うことで、香港まで6、7日、上海までも9日で到着することが可能となり、運搬量も大幅に増加した（石島 2004: 57）。

如上のように蒸気機関という人工的動力を活用した汽車や汽船は、人力や畜力と異なり病気や天候の影響を受けにくいため、予定通りに大量かつ安全に人や財貨を目的地に移動させることを可能にした。清末民国初の交通機関の発達は、雲南省の物流における輸送に革新的な変化をもたらした。

(2) 新たな交通機関の登場と物流ルート

ここでは、清末民国初における普洱茶の需要が高まった消費地に注目し、生産地との連携を強化するための新たな交通手段が重要な役割を果たした物流ル

トについて考察し、消費の拡大との関連性を検討していく。

A 仏領インドシナ連邦と香港

最初に、滇越鉄道によって世界市場との経済的つながりを深めつつあった仏領インドシナ連邦および香港などの巨大な人口を誇る中国沿岸部の消費地を取り上げる。清末民国初から新たな消費地として急速に台頭した当該地域には、六大茶山である鎮越（易武）を中心として仏海・江城・元江など周辺部の茶山からも供給された（表2）。

物流ルートとしては主に二つあり、一つが易武や倚邦などの六大茶山から、黒河を下り、北ラオスおよび北ベトナム萊州経由で輸出されるルートと、もう一つが蒙自海関を通過し、トンキン（北ベトナム）、さらには船舶で香港に輸出されるルートがあった（西川 2015: 224）。江城からも「江城（昔の猛烈）は年間約2,400担の茶を生産し、そのほとんどはベトナムに輸出されていた」とあり、仏領インドシナ連邦には水運でもって運ばれた²⁶。

地理的にはいずれの地域も仏領インドシナ連邦に隣接しており、物流のコスト面を鑑みれば、普洱茶の輸出には適していたといえよう。

また、1910年に滇越鉄道が開通して以降、安価で迅速な大量輸送が可能となった。次ページに見えるグラフ1は、蒙自の海関史料に基づき1889年から1928年までの普洱茶の輸出量と輸出額を示している。

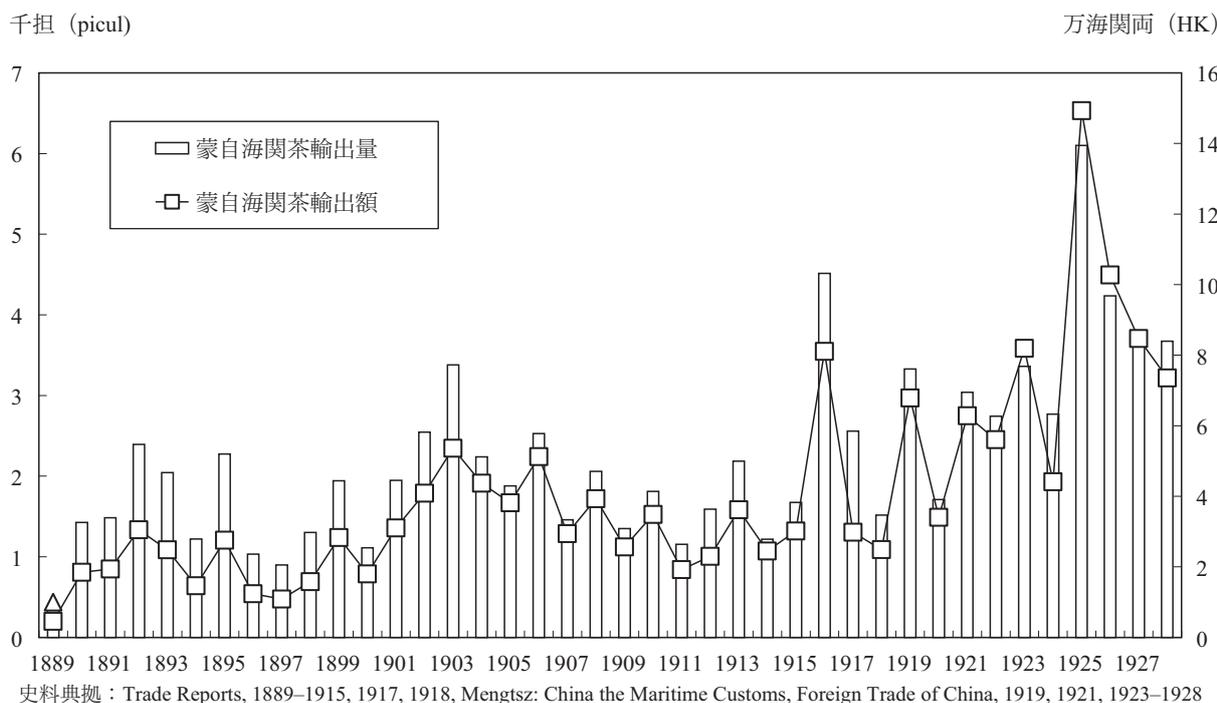
グラフ1から、滇越鉄道の開通により仏領インドシナ連邦と接続され、1916年以降、輸出量はしばしば3,000担を超え、1925年には6,000担を上回る記録を達成したことがわかる²⁷。加えて、購買力のある香港などの中国沿岸部には、易武などから単価の高い高級茶が輸出されており、利益を生み出しやすい構造があった²⁸。

仏領インドシナ連邦や香港を含む中国沿岸地域向けの普洱茶は、鉄道敷設により従来の家畜や人足による輸送手段から脱却し、大規模な輸送が可能となった。その結果、世界市場に向けて安定的に普洱茶を輸出することが実現した。

26 『統雲南通志長編』巻72には、「江城（即旧時之猛烈），年産約二千四百担，大部運銷越南。滇茶運輸之可資水道者，惟江城一泉耳」とある（雲南省志編纂委員会辦公室 1985: 下冊、607）。

27 グラフ1に見える当該時期の蒙自海関の普洱茶の輸出の増減に関する詳細については、拙著（西川 2015: 226-228）を参照されたい。

28 『雲南省事情』其一には、昆明における普洱茶の各種市場価格が紹介されており、百斤あたり、上倚邦75元・中倚邦70元・上易武66元・中易武55元・寶紅（紅茶）40元・上攸楽62元・中攸楽55元・元江茶（上猪街茶）37元・景谷茶（景谷春茶）48元とあり、倚邦や易武の茶の価格の高さが際立っている（台湾総督府官房調査課編 1924: 143-144）。



グラフ1 蒙自海関の茶輸出力と輸出額 (1889-1928)

B 四川省と昆明

次に四川省および省都昆明向けの普洱茶の物流について説明していく。前述したとおり、四川省に供給する普洱茶の生産地は、古くは六大茶山に始まり、時間の経過とともに景東、双江、順寧と移動を繰り返した。これに加えて、雲県や昌寧からも四川に移出されている(表2)。

順寧・雲県・緬寧・双江県で収穫された茶葉は、荷馬で下関(大理)や昆明に運ばれ、沱茶に加工された後、四川省やチベット地域に輸送され、販売された(図2)²⁹。また、景東と景谷産の四川向けの茶葉は、昆明まで運ばれて販売されるか、あるいはそこから四川に向かう。前述の通り、省都昆明は、海関設置以来、外国貿易を中心として雲南経済が活性化する中で交易路の結節点の役割を果たしており、普洱茶の大消費地でもあったため(表2)、ここで一度販売された後、四川に運ばれたのであろう。

また、ここで注目すべきは、両ルートにおいて、荷馬を用いて下関または祥雲まで運搬された後、昆明まで自動車を利用され、その後、自動車道路が四川省叙府まで延伸されていることである。雲南における自動

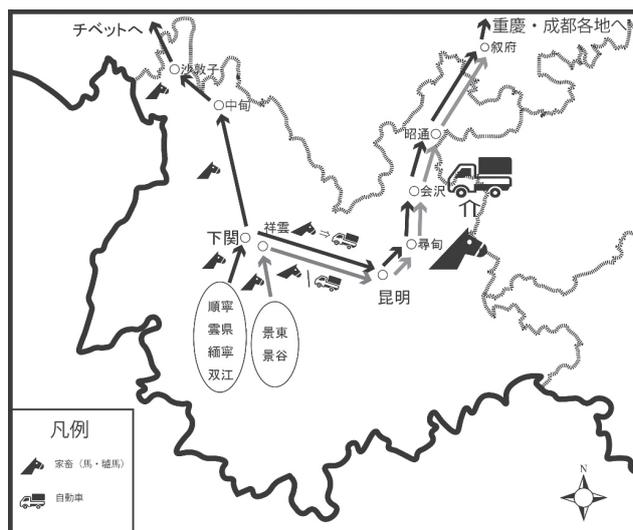


図2 チベットおよび四川向けの普洱茶の移出ルート

車道路建設は、1929年に公路局が設立されたことを契機に本格化した。省都昆明から滇西の中心である下関までの工事は1924年に着手され、1935年12月に全線が開通した(陸 1997: 405-406)。この開通により、2日間で昆明と下関間の移動が可能となった(支那省別全誌刊行会 1942: 323-326)。その後、昆明を起点に

²⁹ これら生産地に普洱茶を運ぶ物流ルートに関しては『雲南経済』第12章に「凡順寧、雲県、緬寧、双江等県所産、大抵由産地駄運至下関昆明、(下関至昆明近間以車運)両地。除銷本省之散茶外、多数製成緊茶、名曰沱茶、運至四川之叙府(即宜賓県)、分銷重慶成都各地;或由中甸維西經沙敦子以入康藏。其產自景東景谷者、或以駝馬運昆明、或至祥雲改装汽車、至省銷流、川銷向由昆明駝運至叙府、自叙昆路通車後、亦有汽車者」とある(張 1942: L5)。

各方面への自動車道路整備が進められ、省外へと延びる道路が次々に建設された。1937年に昆明から曲靖を経て東方の貴州を結ぶ滇黔公路が開通し、1938年に昆明から霑益まで滇黔公路を進み、宣威、貴州省威寧および畢節を通り、四川省の瀘州にいたる川滇東公路が完成を見た。また、同年には下関から西方のミャンマーのラショー（Lashio）へと延びる滇緬公路、1940年に昆明から南下し蒙自を経由してベトナムにいたる滇南公路がそれぞれ開通した（増田・加藤・小島 2008；東亜同文会支那省別全誌刊行会 1942: 323-330）。さらに、昆明から滇黔公路を進み、途中の楊林で分岐して北上し、尋甸、会沢、昭通、塩津を経て四川省叙府にいたる川滇中公路は、1940年2月に全線が開通した（東亜同文会支那省別全誌刊行会 1942: 328）。一連の工事により、下関と昆明間は1935年末に、昆明と四川省叙府間は1940年2月に、それぞれ自動車による輸送が可能となった（図2）。

交通インフラの整備により、人工的動力を用いた自動車の利用が実現したことは、物流において革新的な変化をもたらした。ただし、家畜や人足とは異なり、運搬具と動力源を分化した自動車を動かすには、燃料の安定的供給が不可欠であった。この点における環境整備は容易ではなく、燃料不足が原因で自動車による輸送が制限されることもあった³⁰。

四川向けの普洱茶の輸送の手段は、1930年代半ば以降本格化した交通インフラの整備にともない、燃料不足という制約を受けながらも、従来の荷馬から自動車へと移行していった。

C チベット

最後に伝統的な普洱茶の消費地であるチベットについて取り上げる。最初に、生産地である雲南省南部とチベットを結ぶ物流ルートの変化を明らかにしたうえで、これにともない生じた問題についても検討していく。

a 物流ルートの変化

民国期にチベット向けの普洱茶の供給地となったのは、六大茶山の一つである倚邦や仏海を中心に、雲県、瀾滄などのメコン川流域であった。

明代においては、チベットでは、四川省雅安や灌県で栽培された茶が消費されていた。しかし、明末清初の四川を巻き込んだ混乱と戦争の時期を境に雲南省が新たな茶の供給先として台頭してくる（劉 2017）。

さて、チベットに普洱茶が運ばれるルートは、1920年以前は大理から北上して徳欽を経てチベットに入る北ルートが主流であった（図2）。しかし、民国初期の治安悪化を契機に新たに現在のミャンマー、インドを経由する南ルートが開発され、北ルートは徐々に衰退に向かう（図3）。このときの詳細な事情については、1930年代に仏海にて教育局長を務め、自らも茶荘を経営していた李弘一が（黄 2009）、次のように記している³¹。

中華民国の建国以降、内紛が頻発し、四川省と雲南省の間で絶えず戦争をしていたため、交通が遮断され、道路も安全でなくなり、普洱茶の売行きも大きな打撃を受けた。年に2回、チベット人が思茅で買いつける緊茶の量も激減した。ここ10年、洪盛祥・

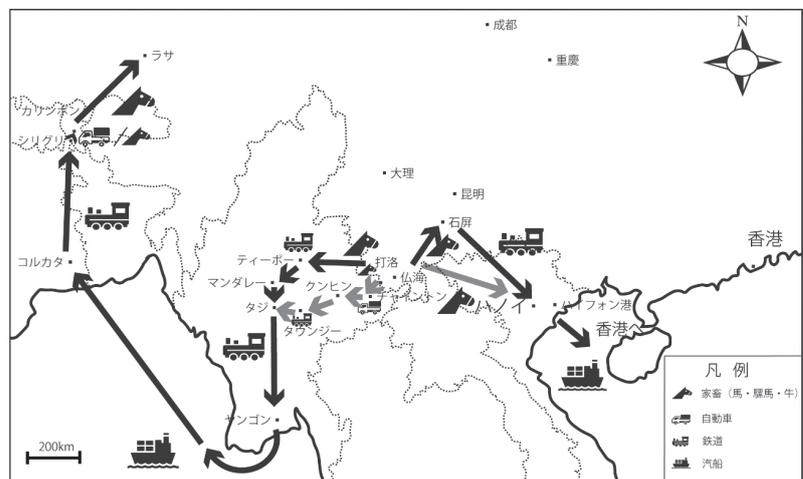


図3 チベットおよび香港向けの普洱茶の輸出ルート

30 とりわけ1940年代は、戦争の影響もあり、燃料の供給は十分ではなく、自動車の使用はかなり制限されていたようであり、1944年刊行『中農月刊』に掲載の「雲南之沱茶」には「由下関至昆明駄運十二天…惟近年来以汽車燃料限制車運甚少。由昆明經曲靖入四川畢節叙府駄運時日十八天…惜以汽車限制，多数未能用汽車載運，而以長途駄運為主，其影響品質殊大」とある（唐 1944）。

31 1931年刊行『新亞細亞』に掲載の「西藏與車里之茶業貿易」には、「光復以来，内乱頻仍，川滇両省，不時發生戰過，交通梗阻，道途不靖，普茶銷路，不免大受打撃。就是藏人一年兩度到思茅購買之緊茶，亦復大為減色。近十年來，如洪盛祥，義和祥，恒盛公，可以興等茶莊，因鑑于内地道途之不便，運輸之困難；先後到猛海（即今仏海縣治）方面成立工廠，將土人粗製品就地改為藏莊，假道緬甸，印度，由加爾各打經大吉嶺，加倫埠直達後藏拉薩一帶銷售；或即在印度售與藏商，移銷入内」とある（李 1931）。

義和祥・恒盛公・可以興などの茶荘は、内陸の道路の不便さと輸送の困難さを鑑み、相継いで猛海（＝現在の仏海県）に工場を設け、土着民の粗製品をその場でチベット茶荘のものに改め、ビルマ、インドを経て、コルカタからダージリン、カリンポンを経由して直接チベットに入り、後蔵（チベット西南部）やラサー帯で販売する、あるいは、インドでチベット商人に販売して、輸入されるかのどちらかである。

辛亥革命以降につづいた護国戦争などの政治的不安の影響を受け、北ルートが遮断されたために、複数の茶荘が猛海（仏海）に工場を建設し、思茅を経由することなく、直接南に向かい英領インド帝国に属するミャンマーやインド経由でチベットに輸送するようになった。

この南ルートに関する具体的な経路については、『雲南経済』に1940年頃の次のような記録が残されている³²。

仏海・南嶠・車里などで産出される茶は、阿敦子（徳欽県）からの道が塞がって以降、最初は、瀾滄の孟蓮土司の地から、ミャンマー西北部に出て、到着した北部の中心である錫箔（ティーポー Hsipaw）において鉄道に積み込まれ、西南方向に運ばれ、瓦城（マンダレー Mandalay）を経て、大市（タジ Thazi）から仰光（ヤンゴン Yangon）に達する。船に積み替えられた後、3、4日で加爾各答（コルカタ Kolkata）に到着し、鉄道で西哩咕里（シリグリ Siliguri）に移動、そこで牛車あるいは自動車に乗り換える。到着した加麟崩（カリンポン Kalimpong）で、再度驛馬に積み替えられチベットに向かう。これがかつての仏海から西藏へ向かう唯一のルートであった。ついで、滇緬公路が公信（クンヒン Kunhing）まで開通した後、この西北ルートは放棄された。そして、改めて、仏海から荷馬で国内の打洛、さらにミャンマーの景東（チャイントン Kyaingtong）まで運び、自動車に積み替え、クンヒン（Kunhing）に向かい、（タウンジー Taunggyi の）瑞仰に到着後、

鉄道に乗り換えてタジにいたる。タジからヤンゴンに到着後、コルカタを通して、チベットに向かうことになる。

この説明によると、雲南南部の茶山地域に近いクンヒンに滇緬公路がつながったことを契機として、南ルートは前期と後期の二つのルートに分けられる。前期ルートは、雲南省瀾滄から、ミャンマー西北部のティーポーに向かい、そこから鉄道に積み込まれ、マンダレー、タジを経由してヤンゴンまで運ばれた。クンヒンまで道路が開通した後期ルートは、打洛からチャイントンまで荷馬で運んだ後、自動車に積み替えてクンヒンを経て、タウンジーに赴く。そこで、再度鉄道に積み直してタジを経由してヤンゴンに向かう。

ヤンゴン到着後は、両ルートともに、船で英領インド帝国のコルカタに移動し、鉄道に積み替えてシリグリに赴く。そして、牛車や自動車に乗り換えカリンポンに向かい、再び驛馬に積み替えてチベットに入る（図3）。

ヤンゴンとコルカタを結ぶ航路では、1863年にブリティッシュ・インディア汽船会社による直通の定期航路がすでに運航を開始していた（澤 1985）。南ルートが開発された当時、ミャンマーとインドはいずれも英領インド帝国に属しており、領内の往来は容易なうえ、鉄道や航路など交通インフラの面でも恵まれていた³³。したがって、南ルートは、雲南からミャンマー西部に運び出す路程と最後のヒマラヤ越えを除き、いずれも人工的動力を備えた自動車、鉄道および汽船を駆使して、輸送されていたことになる。畜力や人力による北ルートから、路程の大部分を人工的動力に依拠する南ルートに移行したことは、輸送の速度や効率性において格段の差を生み出した。

民国政府の官員で民国27（1938）年3月から翌年2月まで重慶から雲南に派遣され、雲南省政府主席の龍雲のバックアップのもと経済調査を実施した郭垣は（郭 1940: 1）、畜力と人力による北ルートと南ルートで実際に費やされる日数に関して詳細な記録を残しており、これを整理したのが以下に示す表4である。

南ルートは、北部シャン経由が46日、クンヒン経

32 『雲南経済』第12章には、「凡仏海、南嶠、車里等地所産之茶；自阿敦子一途阻塞後，初由瀾滄之孟蓮土司地，出緬甸西北，至緬屬北部中心之錫箔，載上火車，西南經瓦城，由大市（Thazi）而達仰光，換船約三四日至加爾各答，由火車至西哩咕里，換牛車或汽車至加麟崩，又改用驛馬入蔵，此過去仏海蔵銷唯一之出路也。嗣以滇緬公路通至公信（亦作貴興），遂捨西北一線，改由仏海駢運出打洛（屬我國），至緬甸之景棟口（即猛良），換汽車至公信，達瑞仰，換火車至大市，達仰光，循加爾各答入蔵」とある（張 1942: L5）。

33 ビルマの鉄道輸送については、（柿崎 2022）を参照されたい。

由が51日とそれぞれ移動日数が必要となる（表4）。ただし、郭垣が調査した当時は、滇緬公路がクンヒンまで延伸されておらず、移動手段は依然として家畜によっていた。『雲南経済』に見えるように、南ルートの後期ルートにおいて、クンヒンから自動車を利用してシャン南部を横断し、タウンジーの瑞仰で鉄道に積替えが可能となったことにより、クンヒンから鉄道沿線までの移動日数は、従来の16日からさらに数日間に短縮されたと考えられる。一方、思茅から大理、麗江を經由して、チベットにつづく茶馬古道を進む北ルートは、移動日数には単純計算で79日間必要であり、往復の日程を加味すれば、半年近くかかることとなる³⁴。加えて、家畜と人足に依存していたため、病

気や天候などの不確定要素も大きかった。

以上のように南北両ルートと比較すれば、輸送手段を家畜に頼った北ルートは、往復で半年要した。これに対して、南ルートでは鉄道と汽船を軸として、後には自動車加わる形で、路程の大部分を、人工的動力を持つ運搬具に依拠することにより、安価でスピーディな長距離大量輸送が実現し、規則性をもった物流ルートを確保することができた。

大量輸送によるコストの抑制に加えて、南ルートには、関税の面でも大きなメリットがあった。1894年3月1日に清朝とイギリスの間で「統議滇緬界・商務條款」が締結されたことによって陸路でミャンマーに運搬される貨物は、塩を除いて税金の徴収は免除された³⁵。

表4 チベットルートの路程と移動日数

南ルート				北ルート			
前期ルート		後期ルート		移動手段と距離	地名	移動日数	
地名	移動日数	地名	移動日数				
仏海	23日	仏海	9日	家畜	ラサ	40日	
↓		↓			景東（孟良）		↓
猛阿		↓	3日	家畜	↓		12日
↓		クンヒン	16日	家畜	中甸		
↓	↓	ティーポー			↓	維西	
↓	3日	↓	3日	鉄道（501キロ）	↓	15日	
ヤンゴン		ヤンゴン		船（723カイリ）	麗江		
↓		↓			景東		
↓	8日	↓	8日	鉄道（335マイル）	↓	12日	
↓		シリグリ		牛車（約10マイル）	思茅		
↓		↓					家畜
カリンボン		↓		カリンボン	家畜		
↓	亜東県帕里鎮（Pagri）	亜東県帕里鎮（Pagri）	家畜				
↓	12日	↓		12日	ラサ	計79日	
ラサ		ラサ					
	計46日		計51日				

史料典拠：郭 1940: 212-214。

34 チベット人が雲南を往復する路程については、『雲南省之自然富源』第7章に「藏人先由阿墩子、中甸、維西、麗江等処、南来思茅輸運、藏人分春冬兩季；春至思茅、冬則直趨仏海。拉薩至阿墩子計馬程四十日；由阿墩子至麗江十二日、再至景東十五日、至思茅十二日。跋涉万里、往返数月、交通之困難、於此可見」とあり、万里を歩くため、往復には数か月を要する（郭 1940: 214）。

35 「統議滇緬界・商務條款」の第八条には「英国極欲振興中、緬陸路商務、答允自条約批准之日起、以六年為期、中国所出之貨及製造之物、由早道運入緬甸、除塩之外、概不取税」（王 1957: 578）とあるものの、実際には、「滇茶蔵銷」（五）緊茶蔵銷に「依拠滇緬通商条約、凡陸路進緬之貨物、概可免税…但于三十年四五月間、印度海関頒布進口抽稅法令之後、茶葉須抽稅五安、每包緊茶須納稅十九羅比」とあるように免税処置が1941年まで継続された（譚 1944）。

南ルート開発にともなう人工的動力を活用した物流ルートの獲得は、時間的に年2回に買い付けが制限されていた北ルートに比して、定期的輸送が可能となり、取引量の飛躍的増加につながった(表3)。

b イギリスの対チベット政策とインド商人

普洱茶の消費量が増加した原因は、物流コストの抑制や物流の効率化だけではなく、イギリスの対チベット政策も関係していた。

巨大な茶の需要を誇るチベットの茶市場には、イギリスも注目していた。中国からの茶の輸入による銀の流出に苦しんでいたイギリスは、19世紀半ばアッサムにおいて茶の栽培に成功、1860年代にはネパールやスリランカにまで茶園を拡大し、イギリス本国向けに輸出を開始した。しかし、まもなくイギリス本国の茶市場は飽和状態となり、新たな市場の開拓が必要となった。そこで、目を付けたのがチベットであった。19世紀末頃からチベットに対する軍事的圧力を強めていったイギリスは、最終的に1908年にインド茶の輸入を認めさせた(劉 2017)。

しかし、イギリスが当初企図したようなインド茶によるチベット市場の独占は容易ではなかった。交通インフラの整備により、廉価なインド茶が流入したことは、従来チベット向けに茶を供給していた四川茶の移出に大きな影響を及ぼし、辛亥革命以降、四川茶は、交通状況の悪化や価格の高騰が重なり、チベットでの消費量が減少した。その結果、予想に反して普洱茶の消費量が増加することとなった。南ルートを通じて輸出される普洱茶は、英領インド帝国内の交通インフラを活用することで物流コストを抑え、関税が免税であったことも相まって、四川茶に代わりインド茶とともにチベット市場で台頭することとなった(劉 2017；

2021)。これには、普洱茶がバターと相性が良く、チベット人に好まれたことも関係していた。チベット人が好むバター茶には普洱茶の茶葉が適しており、その体を温める効果は寒冷地において非常に有用であった³⁶。普洱茶は、イギリスの対チベット政策と整備された交通インフラに乗じてチベットにおける普洱茶市場の拡大に成功したのである。

ただし、雲南西北部を通ってチベットに向かう北ルートから、ミャンマーとインドを経由する南ルートへの変更は、普洱茶取引においてインド商人の干渉を許すという副次的な影響をもたらした。

そもそも仏海では、茶の生産から販売までの流通について、大きく分けて茶販・茶号・茶行の三種の業者が担っていた。まず茶の農家から茶葉を買い集めるのが茶販であり、茶号が、茶販から茶葉の買い付けをおこなった。ただし、季節によっては茶号自ら茶山に茶葉を買いに行くこともあった。茶号は、収集した茶葉を加工したうえで、下関や昆明まで運び、茶行を通してあるいは自分で販売をおこなった。さらに資金の面でも茶号の役割は大きく、茶農家から茶葉を受け取るために、茶山の村々の顔役に手付金を支払う責任を負っていた³⁷。したがって、茶号は、物流から資金の流れまで流通経路の大部分に深く関与していた。

南ルートの開発は、1918年にこの地で緊茶の生産を始めた茶号である雲和祥に由来し、まもなくして新たな参入者が相継いだことで、熾烈な競争が展開されることとなった³⁸。この頃の状況と影響については、譚方之著の「滇茶藏銷」に次のように記している³⁹。

雲南の茶がインド経由でチベットに持ち込まれるようになるのは、民国7(1918)年であり、一部の

36 李弘一は、「西藏與車里之茶業貿易」の中で「我記得有人這樣說過『西藏所需茶葉，自來都是由川輸入，近來被印度茶將銷場奪去了。』其實這種茶就是由車里猛海運去之普洱茶，真正印度產之茶葉，藏人是不歡迎的。拋他們說來，普洱茶葉（即指一般人所稱之爛茶）能夠與酥油融和，可以增加體溫，能令冬天不怕寒冷」と記している(李 1931)。

37 仏海における流通の詳細については、「滇茶藏銷」(四)緊茶販売の中で「緊茶原料之毛茶，在生產地收購者，大都由茶販茶客茶行經手，茶販多為一種販客性質之馬幫任之，彼等每屆茶季，自數百里或數千里外，購辦大宗日用品，攜帶武器，結隊趨赴茶葉產地，購茶售貨，或行易貨，以運至製茶地出售，此種茶販，約占茶葉販賣商中之百分之二十五……茶客與茶號收購馬幫之茶，或在茶季時，入山採辦，運至滇西下関，滇中昆明，經茶行或直接售出，茶行居中得百分之三之手續費，但須負貨款及墊款之責，茶客與茶號在製茶一二月前，以現款向近處產茶各村寨頭人土司定買，付定銀後，可自由向茶農取茶，而漫無限制，故每有茶號，負茶農茶款之責。茶號占有百分之八十，其在產地收購毛茶之外，兼行自製」とある(譚 1944)。

38 1938年に仏海を訪れた姚荷生は、仏海の茶号について「從前十二版納出產的茶葉先運到思茅普洱，製成緊茶，所以稱為普洱茶。西藏人由西康阿登子經大理來普洱購買。民國七年雲和祥在仏海開始製造緊茶，經緬甸印度直接運到西藏邊界葛倫舖賣給藏人，賺到很大的利益。商人聞風而來，許多茶莊先後成立。現在仏海約有大小茶号十餘家」と記録している(姚 1948: 144)。

39 「滇茶藏銷」(五)緊茶藏銷には、「滇茶之經印入藏，在民國七年，始有商人經營，獲利甚厚，民國十四五年後，商人之繼起經營者頗多，惟多少資本經營，運費甚巨，抵仰後，多因資本欠乏，運輸困難，加以語言文字之隔閡，推銷為難，□□除洪記号及恒盛公茶号外，餘均轉售印商，經銷印藏，惟以價格受印人操縱，營業時有虧損」と詳細に記しており、價格の決定についても「至滇茶運出銷售價格，以在加爾各答為標準」とある(譚 1944)。

商人がこの事業を始め、多くの利益を得ていた。民国14、5（1925-26）年以降、この事業に参入する商人が相継いだ。ただ多くは少ない資本で経営しており、輸送費が非常に高額であったため、ヤンゴンに到着した後、資本不足により輸送が困難で、加えて言葉と文字が障壁となり、販売が容易ではなかった。洪記号と恒盛公以外のその他の茶号は、みなインド商人に転売し、インドやチベットでの販売をおこなった。もっぱら価格は、インド人によってコントロールされ、ビジネスは時に損失を被っている。

同業者間の競争が激化する中で、小規模茶号は高額な輸送費に苦しみ、言語の壁も影響し、多くがインド商人に茶を転売せざるを得なくなった。この状況は、普洱茶の取引において地理的な優位性を有するインド商人の関与を招き、販売価格がコルカタで決定されるようになった。その結果、普洱茶の価格決定権がインド商人に移行し、地元の仏海にある茶号の経営に深刻な影響を与えることとなった。

さらに、インド商人の影響は、販路のみにとどまらず、普洱茶の産地でもある仏海にも及んだ。以下に見える表5は、1930年代後半頃の仏海の茶号を分類したものである。

仏海の茶号は、資本規模から順番にインド・ミャンマー系茶号、仏海系茶号、それから零細茶号の3つに分類される。インド・ミャンマー系茶号は、インド商人との協力関係のもとで、加工から輸送、そして販売までを一手に担う。一方、仏海系茶号は、緊茶に加工はするものの、輸送はインド・ミャンマー系茶号に依

存しており、零細茶号にいたっては茶葉を買い集める以外の工程は、その他の茶号に任せている。

仏海では、インド商人の大規模な資本を基盤とするインド・ミャンマー系の茶業者のみが、茶葉の加工・輸送・販売にいたるまでの流通全体を把握している。そのため、地元の仏海を含むほかの茶業者は言語の障壁も影響し、輸送や販売においてインド・ミャンマー系の茶業者に依存せざるを得ない状況にあった。

また、チベットにおける普洱茶の人気を目の当たりにしたインド商人の中には、その名声を不正に利用しようとするものも現れた。譚方之の「滇茶蔵銷」には、これに関連して以下のような記載が見える⁴⁰。

近年、シリグリではインド茶商が密かに仏海の緊圧茶を模倣して製造している。これらの茶商が生産する茶葉は、外見が仏海の緊圧茶に似ているものの、茶葉の中心部にはカビが生え腐っており、チベット人が好んで飲まないため、仏海の小規模茶号の商標を詐称し、カリンボンまで輸送して混ぜて売っている。また、ダーズリン近郊では仏海の何がしという茶号の経理と結託したインドの茶商が工場を設立し、偽ブランドを製造しており、すでに成功を取め、年間生産量は1,000担を超えている。

仏海産の緊圧茶の模倣品を製造し、混合販売や偽商標の作成を通じて、インド茶を普洱茶としてチベット市場に流通させ、一定の成果を上げていたことが示唆されている。実際、1944年に康蔵貿易会社の総経理である格桑悦希がインド国境を調査した際に作成した

表5 仏海「茶号」の分類

	種類	事業主に関する情報	資本規模	具体的活動
1	インド・ミャンマー系茶号	インド・ミャンマー系移民とインド商人の合作。	巨大	仏海において設立された茶号で、購入した原料を緊茶に加工し、直接インドとチベットに輸送、販売をおこなう。
2	仏海系茶号	仏海の漢人と土司らによる合資。	脆弱	資本が不十分であるため、緊茶に加工することしかできず、輸送をおこなう能力が不足している。その結果、仏海でインド・ミャンマー系の茶号に売り渡すか、あるいは無理にヤンゴンやコルカタまで輸送しても、結局はインド・ミャンマー系の茶号に売却するにとどまる。
3	零細茶号	事業規模は極めて小さく、そのほとんどが1年限定で臨時的に設立される。	極小	周辺の茶山から茶葉を買い集め、インド・ミャンマー系や仏海系茶号に売却する。

史料典拠：譚方之 1944「滇茶蔵銷」（四）緊茶販売。

40 「滇茶蔵銷」（六）緊茶蔵銷之先決には、「近年来印度茶商、在西里古里（Siliguri）秘密仿製仏海緊茶、所出之茶、在外表觀之、雖與仏海産者相彷彿、但其中心多霉爛、且因藏人不喜飲用、乃假冒仏海中、小茶号之招牌、運至迦林崩混售、又在大吉嶺附近、印度茶商、勾結仏海某茶号經理、設廠仿製、已有成效、年産有千担以上」とある（譚 1944）。

「印茶銷蔵概況」では、主な商人として、インド商人が雲南沱茶700担を、イギリス商人が仏海沱茶2,000包をそれぞれ模倣製造しているとの報告がなされている⁴¹。チベットの茶市場では、インド商人との間で激しい競争が展開された。雲南の仏海の商人は、普洱茶の利益を巡って、国際的なネットワークを駆使し、商業に精通したインドの商人と直接対峙することとなったのである。

イギリスの対チベット政策と英領インド帝国内の交通インフラの整備に乗じた南ルートの開発は、物流業務の効率化を促し、取引量が増大するなど普洱茶生産に恩恵をもたらした反面、チベット向けの普洱茶市場に対する第三者の介入を招いた。具体的には、普洱茶がもたらす富は商才に優れたインド商人たちを魅了し、輸送と販売が彼らの手に委ねられた結果、価格決定権がインド商人に移行し、さらには普洱茶の模倣品であるインド茶の流通といった大きな副作用を引き起こすこととなった。

如上のように本章では、清末民国初の普洱茶の主要市場であった仏領インドシナ連邦と香港、四川省と昆明、チベットを事例として取り上げ、人工的動力を備えた運搬具の登場と影響について論じてきた。新たな運搬具は、遠隔地にも安全かつ迅速、そして、規則性をもって貨物を送り届けることを可能にしたことで、大量の生産かつ消費に適した効率的な物流が展開され、民国期の普洱茶市場の拡大に寄与した。だが、その一方で、英領インド帝国の交通インフラを基にした物流ルートの確立の事例が示すように、第三者の介入を引き起こす可能性があり、これが普洱茶取引に不安定性をもたらす要因ともなった。

このように人工的動力を内蔵した運搬具の導入は、生産地と消費地を機能的に結びつけ、普洱茶の消費拡大に寄与したことは間違いない。しかしながら、人工的動力を備えた交通機関の導入と物流の革新だけでは、清末民国初における新たな消費の掘り起こしや新規顧客の獲得に決定的な役割を果たしたとまではいえない。これらはあくまで潜在的な需要が存在する地域に対して、普洱茶の効率的な輸送を支援したに過ぎない。輸送手段の改善は、安価で安定した貨物輸送を実現するものであり、商品そのものの魅力を生み出すも

のではない。もし普洱茶の品質が低ければ、消費は依然として低迷していたであろう。

そこで、次章では、清末民国初の新たな消費の掘り起こしや新規顧客の獲得を促進した普洱茶の品質の向上について、技術の点から論じていく。

V 普洱茶の品質の向上と技術移転

清末民国初、普洱茶の需要増加にともない、茶の生産地域は、六大茶山から周辺地域に向けて拡大した。ただ根本的な問題として、新たな生産地で産出された普洱茶が、消費者を満足させるだけの品質を保証できなければ、市場での需要を維持することはできず、新規の消費者を獲得することも難しい。

そこで、本章では清末民国初における普洱茶の消費量拡大の背景にある茶の品質に着目する。普洱茶の品質の向上は、18世紀末頃から、貢茶の任を担うようになった石屏漢人による栽培加工技術が関係していたことはすでに述べた。ここでは、清末民国初において、石屏漢人が培ってきた茶の栽培加工技術が、技術移転を通じて各地で生産されるようになった普洱茶の品質の向上と維持に重要な役割を果たしていく過程を明らかにしていく。

具体例をあげて検討していく前に、技術移転について若干の説明を加えておく。ここでいう技術移転とは、技術自体と、その技術を使いこなす技能、両方を他地域へ移植する行為を指す。これは、時間軸で見れば、移転・定着・普及というプロセスを辿る。ただし、技術の移転と定着・普及は、本来異なった二つのプロセスであり、技術・技能が移転されたからといって、すぐに定着・普及するわけではなく、移転先でそれを支えるための技術・技能を有する職能集団が育成され、再生産されていく必要がある（ダニエルズ 1991）。

1 猛海における加工技術移転

最初にメコン川をはさんで六大茶山の西側に位置するシブソンパンナーの猛海（仏海）について検討していく。元来、猛海では粗放的な方法でタイ族やアカ族（現代中国の分類ではハニ族）の人々が茶栽培をしていた。彼らは、摘み取った茶を、天日干しのみの状態

41 1944年7月4日「格桑悦希為印茶銷蔵事致吳忠信函」添付の「印茶銷蔵概況」には、「経営商号共有数家、其較著者、一為西日讓、印度人、設号地点在当生噶瑪（距亜東甚近）、製有磚茶、沱茶兩種。磚茶產量年約一百五十担、沱茶產量計七百担…二為茶商邦卡巴尼、英籍人、地点在卡相（大吉嶺山脚）、產量最初為一千包、現已達二千包。完全仿造仏沱茶、已有十年歷史」とある（劉 2005: 336）。

で定期市に持込み、それを漢人商人が買い集めて思茅に運び、そこで分類や混合をおこない、圧縮して様々な形に整えていた。これは、メコン川東岸の易武や倚邦ではその場で加工し、商人と取引をおこなったのは対照的である（西川 2015: 264）。



写真2：勐海の茶葉を使用して作られた緊圧茶の一形態である茶餅。直径約19cm、高さ約2cmである。円盤状の形で、包装紙に「勐海大葉七子餅」の文字が見える。

そこで、1909年に張堂階という人物が当地に恒春茶荘を開設し、茶の加工を開始した。張堂階の茶荘については、1958年8月におこなわれた、恒春茶荘の従業員に対する聞き取り調査の中で次のように述べている⁴²。

74歳のタイ族資本家刀喃温とうなんおんの話によると、24歳で刀氏が勐海に来た1、2年後に張堂階が揉茶（揉捻のこと）を始めた。これが勐海で最も早い揉茶である。これ以前勐海では茶葉の散茶を思茅に運んでから揉製（揉茶により分別した茶をそれぞれ一定の形に整える作業）し、チベット族が毎年3月と10月の2回思茅まで茶を買いに来た。張堂階が茶号を設立し、思茅から漢族の揉茶技術者を呼び寄せ、揉茶と製緊（茶に圧力を加え固める作業）を開始して

以降、チベットに運ぶ茶葉は勐海から輸出されるようになり、チャイントン、ヤンゴン、コルカタ、そしてカリンボンを経由してチベットに運ばれた。これ以後、漢族技術者の指導の下、多くのタイ族やその他民族の揉茶技術者が養成され、勐海では茶の加工技術を持つ茶荘が次々と現れた。

このようにして揉茶や揉製といった技術と技能を有する漢人技術者が勐海に招聘されたことで、現地の人々の中にも茶の加工技術を彼らから習得しようとするものが現れた。ここにいたり、技術移転のプロセスとしての移転段階から、漢人技術者から技術・技能を学び、それを支える職能集団が地元社会において育成されるという、定着・普及という次の段階に移行したといえよう。加えて1928～29年にかけて地元勐海のタイ族土把総刀宗漢が新民茶荘を設立した。この茶荘は漢人との合弁であり、資本が不足していたものの、茶の加工を自らおこなった。さらに、茶荘で雇われていた労働者には、易武・倚邦・石屏・思茅などの茶の加工技術と技能を持った出身地のものが含まれており、経験者として一役買ったと推測される⁴³。

これ以降、前章で詳述したように当地には次々と茶荘が設立され、チベット向けに盛んに普洱茶が生産された。加工技術の移転とミャンマー経由の新たなチベットへの交易路の開発により、豊富な産出量を誇る勐海地域の茶山を外部の市場と結びつけ、より活況を呈すようになった。民国期普洱茶の大消費地となったチベットであるが、この背景には、勐海において技術移転により加工が地元でおこなわれるようになったという事情が存在していた。

2 元江における栽培加工技術移転

つづいて元江の事例について分析していく。元江における普洱茶生産は、前述したように1890年頃に生活にいき詰った人々が六大茶山に出稼ぎに訪れたのを

42 『雲南省傣族社会歴史調査材料—西双版纳地区—』(9)「勐海工商業資本家対各族労働人民的剝削」には、「拋74歲的傣族資本家刀喃温談，他24歲到勐海，1-2年後，始有張堂階揉茶，這是勐海揉茶最早的一家。在此以前，勐海茶葉散茶運至思茅揉製，藏族在每年三月和十月，兩次到思茅買茶。張堂階設立了茶号，由思茅請來了漢族揉茶師，開始揉茶製緊茶以後，運往西藏的茶葉便由勐海出口，經由景棟、仰光、加爾各答噶倫堡而進入西藏。此後，包括傣族和其它兄弟民族的大批揉茶技術人員，在漢族師傅的培養下成長起來，而勐海地區揉製茶葉的商号也如雨後春筍，紛紛出現」とある（中国科学院民族研究所雲南民族調查組雲南省歴史研究所民族研究室 1964: 53）。

43 『雲南省傣族社会歴史調査材料—西双版纳地区—』(9)「勐海工商業資本家対各族労働人民的剝削」には、「1928-1929年又有以下幾個茶莊開業：土司組織的“新民茶莊”，2盤電…受雇工人主要是漢族、傣族，此外有拉祜、哈尼等族。工人除少数來自瀾滄、易武、倚邦、磨沙、石屏、思茅等地外，多數是勐海人…當每年六月開始揉製茶葉的時候，他們即受雇幫工」とある（中国科学院民族研究所雲南民族調查組雲南省歴史研究所民族研究室 1964: 53、57）。

契機とする。

栽培から加工までの経緯は、民国『元江志稿』に詳述されているように、見聞きしているうちに、茶の栽培と製茶の方法を習得したので、茶の種をたくさん購入して、元江に帰郷後、学んだ通りに栽培し、製茶したところ、品質・風味・色合いともに倚邦や攸楽の茶に劣らないものとなった。さらに、20世紀初頭には売行きが好調となり、さらなる茶の改良にも努めていることから、将来的な発展が期待されるほどに成長を遂げた⁴⁴。

元江の事例では、出稼ぎ労働者が、六大茶山で栽培と加工の技術と技能を習得したうえで普洱茶の生産をおこなった。つまり、元江では出稼ぎ帰りの人々が「如法種植」でき、マニュアルどおりに栽培「依法製成」するだけの技術と技能を身に付け、六大茶山に匹敵するほどの高品質な茶の生産に成功しており、技術と技能の移転がおこなわれていることが確認できる。

加えて、1942年出版の『雲南経済』には、元江の普洱茶生産について「元江県と鎮沅県で生産される茶は、猪羊街茶が有名であり、そのほとんどが香港と広州に輸出される。七弓茶の主要原料であり、年間生産量は約2,000担である」とあり⁴⁵、高級茶の消費地である中国沿岸部を主要な輸出先として、時間的にも栽培開始から半世紀近く経ている。元江が六大茶山に地理的に近いこともあり、技術移転が、技術・技能を習得した職能集団が育成される定着・普及の段階に達していた可能性が高い。

新たな茶山として清末から台頭してきた元江は、高い購買力を誇る中国沿岸地域向けに栽培と加工の技術・技能の移転を経て、高品質な普洱茶を供給するという重要な一役を担うようになった。

3 大理における加工技術移転

最後に、大理において生産された沱茶について分析する。沱茶は、現在の四川省宜賓市にあたる沱江叙府一帯向けに販売され、原料の産地と成分により、順寧・双江・緬寧で生産される関茶と、順寧・景東・景谷で

生産される景関茶に分類される⁴⁶。



写真3：緊圧茶の一形態である沱茶。直径約8cm、高さ約5cmでお椀のような特徴的な形をしており、包装紙に「下関沱茶」の文字が見える。

さて、沱茶については、猛海茶工場の工場長を務めた唐慶陽が、1944年刊行『中農月刊』に掲載の「雲南之沱茶」の中で次のように述べている⁴⁷。

光緒20 (1894) 年、雲南省大理出身の楊は、思茅や普洱に赴き、様々な蒸茶の製法を学び、故郷に帰って模造の沱茶を作り、昆明や四川省の沱江叙府 (宜賓) 一帯で売ろうとしたが、毎年売れる量は限られていた。宣統年間になり、四川人の潘徳順がこのお茶が四川での販売に適していることを見抜き、楊と一緒に毎年数百担のお茶を作り、製法に改良を加えた。その後、市場は年々拡大され、沱江叙府一帯で盛んに売れたことから、「沱茶」の名が知られるようになった。

つまり、1894年、大理出身の楊という人物が思茅や普洱に赴き、「蒸す」ことで加熱をする「蒸茶」による加工技術を習得した後、大理での製造を開始した。その後、宣統年間 (1908-11年) になって、四川出身の潘徳順が楊に協力し、改良を加えた結果、四川省の沱江叙府地域での販売に成功し、商業的な基盤を築くことができた。楊が、思茅や普洱で習得した加工の技術・技能を大理に移転し、協力者とともに四川向けに

44 註12参照。

45 『雲南経済』第12章の原文には、「元江、鎮沅両県所産之茶、以猪羊街茶著名、大半運銷香港、広州各地。為七弓茶之主要原料、毎年産量約二千担」とある (張 1942: L4)。

46 沱茶の原料に関して、『雲南経済』第12章には「以銷路別、有銷四川之沱茶 (此中又因原料産地與成分配合關係、復有以順寧、双江、緬寧所産為原料之関茶、與以順寧、景東、景谷所産為原料之景関茶之別)」とある (張 1942: L1)。

47 「雲南之沱茶」には「光緒二十年間、雲南大理人楊某、前往思茅、普洱、習製各種蒸茶之製造後、返籍遂仿製沱茶、試銷昆明及四川沱江叙府 (宜賓) 一帯、其時每年銷量甚少。迨宣統年間、有川人潘徳順見於川銷頗為適合、商與楊某年製數百担、對於製造上、並有所改進。及後銷路擴大、逐年增加、因暢銷沱江叙府一帯、「沱茶」之名斯出矣」とある (唐 1944)。

これをブラッシュアップしたことで売上げの向上を実現したといえる。中国医学で名を馳せ、四川に滞在歴のある陳邦賢は、沱茶について『自勉齋隨筆』の中で「四川では茶文化が盛んで、沱茶、花入り茶、菊花茶があり、沱茶を飲む人が最も多い。下関の沱茶を最高級品とする。このお茶は風味が強く、色は黄金色で、何度もお茶を淹れることに耐えうる」と記しており、その人気の高さがうかがえる⁴⁸。

大理は、滇西の交通の要衝であるため、順寧・双江・緬寧・景東・景谷などの各茶山から茶葉を集めるのに適していた。また、その地形的な特性により風が強く、茶葉の乾燥に理想的であったため、民国以降、多くの茶号が誕生し、雲南沱茶の製造の中心地となった⁴⁹。

沱茶の事例では、栽培から加工までの一連の工程を完結させる元江や猛海とは異なり、各地の新興茶山で生産された普洱茶を滇西の中心地である大理に集約し、技術移転された加工技術にさらなる改良を施し、一括して加工をおこない、「沱茶」ブランドとして四川市場に販売した。このように、多数の茶号が絶えず出現し、大量の沱茶が生産されていることから、技術移転の過程は移転段階から安定した職能集団を形成する定着・普及の段階へと進展していると判断できよう。

以上のように、民国以降、普洱茶の需要が増加する中で、思茅を含む六大茶山を中心とした地域から栽培や加工の技術・技能の移転がおこなわれた。猛海では、加工の技術・技能の移転により、地元茶号が設立され、チベット向け普洱茶の輸出量の増加に貢献した。また、元江では、栽培と加工の技術・技能の移転がおこなわれ、仏領インドシナ連邦や中国沿岸部向けの高品質な普洱茶が生産された。一方、滇西の交通の要所であった大理では、地勢的優位性も手伝い、茶の加工技術・技能が移転され、滇西南の各茶山から集められた茶に加工を施し、沱茶として大消費地の四川を中心に盛んに移出された。

清末民国初における各地の普洱茶需要の急激な増加は、栽培や加工の技術・技能の移転とさらなる改良によって、各地域の消費者の要求に応えるだけの品質が

生み出されたことが主な要因であった。さらに、高品質な茶生産を維持するための職能集団が育成されたことで、市場への安定的な供給が可能となった。この背景には、清代半ば以来、六大茶山において貢茶の任を担ってくるなかで長い時間をかけて培ってきた石屏漢人の栽培加工技術の存在があったことはいままでのない。

VI おわりに

清末民国初の普洱茶の生産拡大の主な要因については、これまで欧米列強の進出にともなう、加工工程の機械化や交通通信インフラの整備、世界経済との結びつきなど同時代的要素との関連性が強調されてきた(楊 2009)。

これに対し、本稿では、普洱茶に関する通史的な分析を通じて、清末民国初の普洱茶生産増加の背景には、物流と交通機関の革新に加え、乾隆年間以来培われてきた普洱茶の栽培や加工の技術・技能が各地に移転され、高品質な普洱茶の生産に注力することで市場のニーズに応え、茶の需要を喚起したことを指摘した。これまでの議論を整理すると、以下の4点に要約できる。

- ① 清代の乾隆年間を契機に、茶の栽培と加工の技術・技能が向上したことにより、市場のニーズに応じた商品が提供されるようになり、茶の品質に対する評価も高まった。
- ② 清末民国初、新たな運搬具の導入によって、遠距離地域への安全で迅速かつ定期的な貨物輸送が可能となり、大量生産と消費に対応した効率的な物流システムが構築された。この変革は、拡大する市場における普洱茶の供給を支える重要な要素となった。
- ③ 英領インド帝国の交通インフラを基にした物流ルートの確立は、第三者の介入を可能にし、普洱茶取引の不安定性を引き起こす原因となった。
- ④ 清末民国初に普洱茶の生産が拡大した要因は、清代以来の栽培と加工の技術・技能の移転と改良に

48 『自勉齋隨筆』の「下関の沱茶」には「在四川一帶，茶風很盛，有沱茶、有香片、有菊花，以喫沱茶的最多。沱茶要以下関の沱茶為最上品。茶味頗濃，顏色呈金黄色，並且可以耐泡」とある(陳 1997: 146)。

49 「雲南之沱茶」には「滇西大理與鳳儀兩縣所屬之下関鎮，前臨洱海，後背蒼山，風力浩大，景口優美。製造沱茶，利用風乾，極其適宜。民二三年紛紛成立茶号，始有德和祥復義和兩号，年各製數百担。民十五六年，相繼停閉。民四五年有永昌祥，茂恒宝元通等号，年各製四五百担，今年出千餘担。近年來又有雲南中茶公司復興茶廠年製千担，復春和振昌兩号年各製三四百担。此外尚有三四茶号，年共製五六百担，專售於水客。因此，下関則為雲南沱茶之製造地矣」とある(唐 1944)。

よる高品質な茶の生産、さらに安定的な供給を実現するための職能集団の育成があった。

清代から綿々と続く栽培と加工の技術・技能の向上と移転の繰り返しが、各地で求められる様々な条件を満たす多様な普洱茶ブランドを生み出し、消費市場の拡大と新たな消費者の獲得を支えてきた。近代的な交通手段が機能したのは、消費者の期待に応えるために高品質な茶を供給できたからに過ぎない。従来指摘されてきた共時的要素だけでは、清末民国初における普洱茶の需要の急激な増加を十分に説明することはできない。この現象を理解するためには、清代から受け継がれてきた普洱茶の栽培および加工に関する技術や技能の移転による品質の向上という通時的な視点が必要である。

また、20世紀における雲南経済と世界市場との関係性を議論する際、往々にして昆明を起点として滇越鉄道を介して繋がった香港、さらにその先に広がる世界市場との結びつきに軸足が置かれてきた。しかし、本稿で論じたチベット向けの普洱茶取引の事例は、近代的な交通手段を有する英領インド帝国を介して新たな輸送経路が開発されることによって、輸送効率が向上し、大規模な輸出が可能になったことを示している。しかも、この過程で、インド商人が関与するようになり、普洱茶の取引価格の決定権がコルカタに移行するなど、取引の主導権に重大な影響を与えた。したがって、雲南と世界市場との関係は、東の香港だけでなく、西のコルカタにも及んでいることは明らかである。

シブソンパンナーの茶山を基点に東南アジアを俯瞰すると、滇越鉄道と汽船によって結ばれた香港と、英領インド国内のビルマ鉄道と汽船を介して接続されるコルカタは、地理的に左右対称で扇形の配置を示している(図3)。普洱茶取引に象徴されるように、清末民国初に雲南で進展した世界経済との一体化を論じるうえにおいて、近代的な交通機関を備えた英領インド帝国との経済的結びつきも視野に入れる必要がある。

参考文献

(日本語文献)

青野 寿郎・保柳 睦美(監修)

1951 『人文地理事典』古今書院。

石島 紀之

2004 『雲南と近代中国—“周辺”の視点から—』青木書店。

柿崎 一郎

2022 「戦前期ビルマ鉄道の米輸送—1930年代の米流通ルートの推計—」『横浜市立大学論叢, 人文科学系列』73(1): 1-46。

工藤 佳治(主編)

2007 『中国茶事典』勉誠出版。

ダニエルス、クリスチャン

1991 「十七、八世紀東・東南アジア域内貿易と生産技術移転—製糖技術を例として—」『アジア交易圏と日本工業化1500-1900』浜下武志・川勝平太編、69-102、リポート。

2004 「雍正七年清朝によるシブソンパンナー王国の直轄地化について—タイ系民族王国を揺るがす山地民に関する一考察—」『東洋史研究』62(4): 94-128。

栗原 悟

1991 「清末民国期の雲南における交易圏と輸送網—馬帮のはたした役割について—」『東洋史研究』50(1): 126-149。

久保 亨

2019 『日本で生まれた中国国歌—「義勇軍行進曲」の時代—』岩波書店。

権上 康男

1985 『フランス帝国主義とアジア—インドシナ銀行史研究—』東京大学出版会。

篠永 宣孝

1992 「雲南鉄道とフランス帝国主義—フランス外交文書に依拠して—」『土地制度史学』34(4): 37-50。

白鳥 翔子

2022 「清末期の電信事業—雲南省における電信建設とその運用を中心に—」『お茶の水史学』65: 73-89。

澤 喜司郎

1985 「ブリティッシュ・インディア汽船会社の成立と発展—東洋航路への蒸気船の進出と定期航路の開設(2)』『東亜経済研究』49(3・4): 77-98。

杉原 薫

1985 「アジア間貿易の形成と構造」『社会経済史学』51(1): 17-53。

台湾総督府官房調査課(編)(糠谷 廉二著)

1924 『雲南省事情』台湾総督府。

武内 房司

2003 「近代雲南錫業の展開とインドシナ」『東洋文化研究』5: 1-33。

2010 「一九世紀前半、雲南南部地域における漢族移住の展開と山地民社会の変容」『中国国境地域の移動と交流—近現代中国の南と北—』塚田誠之(編)、117-143、有志舎。

支那省別全誌刊行会

1942 『新修支那省別全誌』第3巻、雲南省、東亜同文会支那省別全誌刊行会。

西川 和孝

- 2015 『雲南中華世界の膨張—プーアル茶と鉦山開発にみる移住戦略—』慶友社。
- 2017 「清末雲南産アヘンの輸出ルートに関する一考察」『淑徳大学人文学部研究論集』2: 43-54。
- 2021 「雲南産アヘンの輸出と歴史的意義について—1912年から1935年まで—」『明治大学教養論集』559: 45-79。
- 2024 「雲南を巡る銭貨の旅」『野生の教養II—一人に一つカオスがある—』丸川哲史・岩野卓司(編)、289-293、法政大学出版局。

増田 厚之・加藤 久美子・小島 摩文

- 2008 「茶と塩の交易史—十九世紀以降の雲南南部から東南アジアにかけて—」ダニエルス、クリスチャン(編)『論集モンスーンアジアの生態史—地域と地球をつなぐ—第2巻地域の生態史』、55-80、弘文堂。

松浦 章

- 2014 『近代東アジア海域の人と船—経済交流と文化交渉—』関西大学出版部。

松下 智

- 1986 『中国の茶—その種類と特性—』河原書店。
- 1998 『茶の民族誌—製茶文化の源流—』雄山閣出版。
- 2012 『茶の原産地を探る』大河書房。

山本 正三・奥野 隆史・石井 英也・手塚 章

- 1997 『人文地理学辞典』朝倉書店。

姚国坤

- 2007 「中国茶の分類と区分」(訳: 龍愁麗)『中国茶事典』工藤佳治(編)、29-34、勉誠出版。

(欧文文献)

Ann Maxwell Hill

- 1998 *Merchants and Migrants: Ethnicity and Trade among Yunnanese Chinese in Southeast Asia*: Yale University Southeast Asia Studies.

China Imperial Maritime Customs

- 1906 *Decennial Reports, on the Trade, Navigation, Industries, etc., of the Ports Open to Foreign Commerce in China, and on the Condition and Development of the Treaty Port Provinces, 1892-1901, with Maps, Diagrams, and Plans, Southern Ports, with Appendices*, Published by Order of the Inspector General of Customs, Shanghai, Vol. 2.

China the Maritime Customs

- 1924 *Decennial Reports, on the Trade, Industries, etc., of the Ports Open to Foreign Commerce, and on the Condition and Development of the Treaty Port Provinces, 1912-1921, Southern and Frontier Ports, with Appendix*, Published by Order of the Inspector General of Customs, Shanghai, Vol. 2.

- 1933 *Decennial Reports, on the Trade, Industries, etc., of*

the Ports Open to Foreign Commerce, and on Conditions and Development of the Treaty Port Provinces; preceded by "A History of the External Trade of China, 1834-81," together with a "Synopsis of the External Trade of China, 1882-1931" 1922-1931, Southern and Frontier Ports, Published by Order of the Inspector General of Customs, Shanghai, Vol. 2.

(中国語文献)

曹 茂・劉 晨宇

- 2024 「近代雲南茶文献研究(1840-1949)」『農業考古』2: 139-147。

陳 邦賢

- 1997 『自勉斋随笔』(民国史料筆記叢刊)上海書店出版社。

郭 垣

- 1940 『雲南省之自然富源』正中書局。

黄 桂枢

- 2009 「“茶寿”茶人倭学專家李弘一」『農業考古』5: 209-210。

李 弘一

- 1931 「西藏與車里之茶業貿易」『新亜細亞』2(6): 69-70。

劉 麗楣(主編)

- 2005 『民国時期西藏及藏区經濟開發建設檔案選編』中国蔵学出版社。

劉 志揚

- 2017 「滇茶銷藏陸海通道的興起及其背景」『中山大学学报(社会科学版)』57(05): 116-123。

- 2021 「19世紀末到20世紀中葉印度茶葉在西藏的銷售及其影響」『民族研究』03: 121-133。

陸 朝

- 1997 『雲南对外交通史』雲南民族出版社。

秦 和平

- 1998 『雲南鴉片問題興禁煙運動: 1840-1940』四川民族出版社。

譚 方之

- 1944 「滇茶藏銷」『辺政公論』03(11): 48-60。

唐 慶陽

- 1944 「雲南之沱茶」『中農月刊』05(03): 65-68。

王 鉄崖

- 1957 『中外旧約章匯編』第1冊、生活・読書・新知三聯書店。

楊 斌・楊 偉兵

- 2010 「近代雲南箇旧錫鉞の對外運銷(1884-1943)」(楊偉兵主編2010『明清以来雲貴高原の環境与社会』、83-111、東方出版中心)。

楊 志玲

- 2009 『近代雲南茶業經濟研究』人民出版社。

姚 荷生

- 1948 『水擺夷風土記』大東書局(『民俗、民間文学影印資料』、上海文芸出版社、1990)。

雲南省志編纂委員會辦公室

1985 『統雲南通志長編』雲南省志編纂委員會辦公室。

張 肖梅

1942 『雲南經濟』中国国民經濟研究所(古佚小説会重印、2007年)。

中国科学院民族研究所雲南民族調查組雲南省歷史研究所民族研究室編

1964 『雲南省傣族社会歷史調查材料—西双版纳地区—』
(9)「猛海工商業資本家对各族勞動人民的剝削」
53-61。

褚 守莊

1934 「雲南之茶業」『國際貿易導報』6(7): 181-186。

(漢文史料)

李 元陽撰

民国23 (1944) 年刊本 万曆『雲南通志』。

謝 肇淛

(明) 刊本 『滇略』。

范 承勳等修·丁 焯等纂

康熙30 (1691) 年刻本 康熙『雲南通志』。

阮 元等修·王 崧等纂

道光15 (1835) 年刊本 道光『雲南通志稿』。

黃 元直修·劉 達式等纂

民国11 (1922) 年鉛印本 民国『元江志稿』。

張 間德修·楊 香池纂

民国 鈔本 民国『順寧県志初稿』。

Production of Puerh Tea in the Late Qing and Early Min-Kuo Periods

Kazutaka NISHIKAWA*

In the Late Qing and Early Min-Kuo Periods, Yunnan's establishment of the Haiguan 海関 and the development of transportation and communication infrastructure strengthened its ties with the world economy and promoted free trade with foreign countries. Under these circumstances, Puerh tea cultivation rapidly expanded from the six major tea mountains to the southwestern region of Yunnan. This paper focuses on the expansion of Puerh tea production and consumption that occurred during that period, and examines the factors that contributed to it.

Based on the historical records of the government officials who contributed to the development of Puerh tea cultivation, this paper will explain the expanded cultivation areas and production volume, clarify the consumption market and its consumption volume, and in relation to this, clarify the actual situation of the logistics reform between the two regions and tea quality improvement.

Through the analysis of this paper, it is pointed out that (1) the introduction of modern transportation systems made it possible to speed up logistics and reduce transportation costs in response to the expanding market under the integration with the global economy, shortening the time and economic distance between production and consumption areas and enabling regular transportation, thereby supporting mass consumption, and (2) in order to meet market needs, the cultivation and processing techniques that had been cultivated since the mid-Qing dynasty were transferred to various regions, and the focus on the production of high-quality Puerh tea further stimulated the demand for tea.

Finally, based on the case of Puerh tea exported to Tibet via the British Indian Empire, this paper emphasizes that the process of Yunnan's integration into the world economy at that time should not only be viewed within the framework of Hong Kong via the Yunnan-Vietnam Railway 滇越鐵路, but also Yunnan's economic ties to the west.

Keywords

Puerh Tea, Logistics, Technology Transfer

* Meiji University

「人類学研究所 研究論集 第13号」

執筆者紹介

張 雅	大阪大学・特任助教
李 瑞雪	法政大学・教授
王 亦菲	(中国) 西南交通大学・客員研究員
藤野 陽平	北海道大学大学院・教授
川島 淳	沖縄国際大学・非常勤講師
宮沢 千尋	南山大学・教授
張 靜紅	(中国) 南方科技大学・准教授
藤川美代子	南山大学・准教授
西川 和孝	明治大学・准教授

人類学研究所 研究論集 第13号

ISSN 2434-9577

2025年3月31日 発行

編集者 張 雅、宮脇 千絵、張 玉玲、藤川 美代子

南山大学人類学研究所

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18 電話 (052)832-3111 (代表)

代表者 石原美奈子

E-mail: apai-nu@ic.nanzan-u.ac.jp

印刷 株式会社あるむ 電話 (052)332-0861

人類学研究所
研究論集 第13号